令和７年度
学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業に関する調査研究
報告書

令和８年３月

株式会社 NTT データ経営研究所

目次

第１章　背景・目的 4
１．目的 4
２．調査の構成や対象者 4
（１）学校向けアンケート調査 4
（２）児童・生徒向けアンケート調査 5
（３）自治体向けアンケート調査 6
（４）事例ヒアリング調査 6
３．調査期間 7
４．その他調査上の留意点 7
第２章　学校向けアンケート調査 8
１．実施概要 8
（１）実施目的 8
（２）調査方法 8
２．調査結果のサマリー 10
（１）学校教育内での文化芸術活動の実施状況 10
（２）学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向 11
（３）学校教育内での文化芸術活動の質向上のための工夫 12
（４）文化庁　巡回公演について 14
（５）学校教育内での文化芸術活動の享受状況の試算 16
（６）学校教育内での文化芸術活動の費用負担推計 18
３．調査結果からの考察 21
（１）調査結果から読み取れる現状と課題 21
（２）政策への示唆 23
４．調査結果 24
（１）回答団体の属性 24
（２）学校教育内での文化芸術活動の実施状況 27
（３）学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向 51
（４）学校教育内での文化芸術活動の質向上のための工夫 55
（５）文化庁　巡回公演について 80
第３章　児童・生徒向けアンケート調査 96
１．実施概要 96
（１）実施目的 96
（２）調査方法 96
２．調査結果のサマリー 98

（１）文化芸術に関する普段の意識や行動 98
（２）学校教育内での文化芸術活動に関する意識や行動の変化 100
（３）学校教育内での文化芸術活動への参加意向 102
３．調査結果からの考察 102
（１）調査結果から読み取れる現状と課題 102
（２）政策への示唆 103
４．調査結果 105
（１）回答者基本情報 105
（２）文化芸術に関する普段の意識や行動 107
（３）学校教育内での文化芸術活動に関する意識や行動の変化 120
（４）学校教育内での文化芸術活動への参加意向 140
第４章　自治体向けアンケート調査 142
１．実施概要 142
（１）実施目的 142
（２）調査方法 142
２．調査結果のサマリー 145
（１）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の取組概要 145
（２）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の実績と評価 146
（３）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる資金 147
（４）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向と課題 148
（５）文化庁への期待・要望 148
３．調査結果からの考察 149
（１）調査結果から読み取れる現状と課題 149
（２）政策への示唆 150
４．調査結果 152
（１）回答団体の属性 152
（２）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の取組概要 155
（３）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の実績と評価 183
（４）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる資金 193
（５）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向と課題 203
（６）文化庁への期待・要望 206
第５章　事例ヒアリング調査 213
１．実施概要 213
（１）実施目的 213
（２）調査方法 213
２．調査結果のサマリー 214

３．調査結果からの考察 215
４．調査結果 216
（１）いすみ市立太東小学校 216
（２）栄町立竜角寺台小学校 218
（３）知多市立旭東小学校 220
（４）南九州市立九玉小学校 222
（５）四日市市立羽津中学校 224
（６）群馬県立館林特別支援学校 226
（７）伊賀市立緑ヶ丘中学校 228
（８）茨城県立結城特別支援学校 230
（９）出水市立上場小学校 232
（10）佐那河内村立佐那河内中学校 234
第６章　総括及び今後の取組に向けた示唆 236
１．本調査から明らかになった主なポイント 236
２．調査結果の総括 237
（１）学校教育内での文化芸術活動の実施主体と費用構造 237
（２）学校における実施状況 237
（３）自治体の役割と地域差 237
（４）国の役割 238
（５）文化芸術活動の教育的効果 238
３．今後の取組に向けた示唆 239
（１）文化芸術活動の役割分担の整理 239
（２）学校における実施環境の整備 239
（３）地域における文化芸術活動機会の確保 239
（４）学校教育における文化芸術活動の位置付け 240
（５）好事例の共有 240
（６）本調査の意義 241

第１章　背景・目的

１．目的

文化芸術は、豊かな人間性を涵養し、創造性と感性、コミュニケーション能力等、人間にとって重要な資質を形成する。とりわけ、子供たちが文化芸術を鑑賞・体験することは、豊かな「創造力・想像力」の育成に大きな効果があることから、文化庁は、義務教育期間中に、子供たちが文化芸術を鑑賞・体験できるような環境を整えることを目指している。

本調査研究では、過年度調査（令和６年度「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業に関する調査研究」等）を踏まえつつ、全国の小学校・中学校における子供の文化芸術の鑑賞・体験機会の状況について継続的に把握する。

また、学校における芸術教育の今後の方向性を検討するにあたり、学校の芸術教育カリキュラム内で実施する芸術団体・アーティスト等による文化芸術の鑑賞・体験機会の実施概要（実施内容、実施方法・体制、実施にあたっての工夫等）を把握する。さらにその中で得られた好事例を広く他の小・中学校等の参考になるよう取りまとめる。

２．調査の構成や対象者

上記の背景を踏まえて、本調査研究においては以下の調査を実施した。

（１）学校向けアンケート調査

１）実施概要

全国の小・中学校における学校教育内での文化芸術活動の実態について、地方公共団体や小中学校等の事業主催団体ごとに、その実施状況を把握するとともに自治体同士の実施状況を比較することで、自治体間（特に過疎地域とそれ以外）の学校教育内での文化芸術活動の確保状況の違いや傾向を把握する。

また、量的な充足状況に加えて、提供される文化芸術事業の質的な側面も検証するため、学校教育内での文化芸術活動の具体的な内容や乗り越えるべき課題の整理、その解決に向けた取組の方向性を検討する際の情報を整理・把握する。

２）調査対象

全国 6,964 校を対象にアンケート調査を実施した。小学校：1,257 校（52.6%）、中学校：1,063 校（44.5%）、義務教育学校（前期課程）：30 校（1.3%）、義務教育学校（後期課程）：

30 校（1.3%）、特別支援学校（小学部）：２校（0.1%）、特別支援学校（中学部）：２校（0.1%）、その他４校（0.1%）の合計 2,388 校から回答を得た。[1]

３）調査時点について

本調査では本文中において調査時点（例：令和６年度等）を記している。各年度と調査報告書の対応関係は以下のとおりである。

図 1-1　調査時点と調査報告書の対応関係

調査時点	調査報告書
令和６年度	（本調査）令和７年度　学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業に関する調査研究
令和５年度	令和６年度　学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業に関する調査研究
令和４年度	令和５年度　文化芸術による子供育成推進事業に関する調査研究
令和３年度	令和４年度　文化芸術による子供育成推進事業に関する調査研究
令和２年度	令和３年度　文化芸術による子供育成総合事業に関する調査研究
令和元年度（平成 31 年度）	令和２年度　文化芸術による子供育成総合事業に関する調査研究

（２）児童・生徒向けアンケート調査

１）実施概要

全国の小・中学校における学校教育内での文化芸術活動の効果について児童・生徒本人の実感を把握するため、文化庁「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業（学校巡回公演）（以下「巡回公演」という）」を利用した学校の児童・生徒を対象とし、意識の変容や、事業への評価について把握する。

また、巡回公演を実施したことのある学校の生徒と、巡回公演を実施したことがない学校の生徒のアンケート結果を比較することで、巡回公演を実施したことによる効果について把握する。

２）調査対象

アンケートの対象者は、令和４～６年度（過去３年間）に巡回公演を利用した学校（以降、「実施校」）、及び、令和４～６年度（過去３年間）に巡回公演を利用しなかった学校（以降、「未実施校」）のそれぞれ児童・生徒とした。実施校は 22 校（小学校 10 校、中学校 10 校、

[1]　（）内の%は、学校分類毎の有効回答数/全体の有効回答数（2,388 校）×100 を指す。

特別支援学校２校)、未実施校は 20 校（小学校 10 校、中学校 10 校、特別支援学校２校）の合計 44 校（小学校 20 校、中学校 20 校、特別支援学校４校）を対象とした。また、有効回答数は実施校で 766 名（小学生 209 名、中学生 550 名、特別支援学校生７名)、未実施校で 1,062 名（小学生 78 名、中学生 983 名、特別支援学校生１名）の合計 1,828 名（小学生 287 名、中学生 1,533 名、特別支援学校：８名）であった。

（３）自治体向けアンケート調査

１）実施概要

各都道府県、各市区町村（以下「各自治体」という）が独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる事業の実施状況を把握するため、各自治体の担当者を対象とし、事業概要や実施件数、実施種目等の情報を収集する。

また、各自治体での実践状況を踏まえ、国と各自治体での実施状況の分析や日本全体としての文化芸術活動状況を分析し、地域的バランスやその傾向を把握する。

２）調査対象

全国の 1,794 の自治体（47 都道府県、1,747 市区町村）を対象にアンケート調査を実施した。都道府県：26 件（3.7%)、政令指定都市：14 件（2.0%)、特別区：６件（0.8%)、市：327 件（46.2%)、町：289 件（40.8%)、村：46 件（6.5%）の合計 708 件から回答を得た。[2]

（４）事例ヒアリング調査

１）実施概要

令和６年度の巡回公演または令和５年度の巡回公演参加校について、教員に対して事例ヒアリング調査を実施した。公演団体と学校との連携や、教科との接続における創意工夫、事業により得られた成果、今後の接続的な発展に向けた課題等を把握し、巡回公演の更なる発展に向けた論点を抽出することを目的とする。

２）調査対象

実施にあたっては、令和５年度巡回公演または令和６年度巡回公演参加校を対象とし、学校向けアンケートの回答結果をふまえて調査対象 10 校を抽出し実施した。

調査はオンライン会議によるヒアリング調査で実施した。

---

[2] （）内の%は自治体分類毎の有効回答数/全体の有効回答数（708 自治体）×100 を指す。

３．調査期間

調査は令和７年 10 月 20 日（月）から令和８年３月 31 日（火）まで実施した。

４．その他調査上の留意点

調査にあたっては巡回公演を調査対象としたが、本調査では過去の状況についても尋ねている。令和元年度～令和３年度「文化芸術による子供育成総合事業」、令和４～５年度「文化芸術による子供育成推進事業」、令和６年度「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業（学校巡回公演）」を対象に調査を実施した。

第２章　学校向けアンケート調査

１．実施概要

（１）実施目的

全国の小・中学校における教育内での文化芸術活動について、その実施状況を把握する。

また、量的な充足状況に加えて、提供される文化芸術事業の質的な側面も検証するため、児童・生徒の学校教育内での文化芸術活動の具体的な内容や乗り越えるべき課題の整理、その解決に向けた取組の方向性を検討する際の情報を整理・把握する。

（２）調査方法

調査方法は以下のとおりである。

表 2-1　調査方法

項目	内容
調査対象数	全体：6,964 校 〔内訳〕小学校：3,482 校　中学校：3,482 校
有効回答数 ※回答率＝分類毎の有効回答数(b)/全体の有効回答数（a）×100	全体：2,388 校（a） 〔内訳〕小学校：1,257 校（b）（52.6%） 義務教育学校（前期課程）：30 校（b）（1.3%） 特別支援学校（小学部）：２校（b）（0.1%） 中学校：1,063 校（b）（44.5%） 義務教育学校（後期課程）：30 校（b）（1.3%） 特別支援学校（中学部）：２校（b）（0.1%） ※その他：４校（b）（0.1%）
調査方法	インターネットアンケートを用いて実施した。
調査票の配布方法	・調査票は、事務局から都道府県に対して送付し、市区町村に対しては都道府県を通じて送付した。なお、政令指定都市に対しては、事務局から直接送付した。 ・学校に対しては、管轄している市区町村から送付した。
調査対象校の選定方法	・各市区町村が管轄内の小学校・中学校２校ずつ（文化庁事業を実施したことがある小学校・中学校１校ずつ、実施したことがない小学校・中学校１校ずつ。ただし、小学校・中学校が１校しか置かれていない自治体については１校のみ）を選出した。

調査期間	令和７年 12 月 24 日(水)～令和８年１月 30 日(金)
調査項目	**１．回答団体の属性** ・　学校種別 ・　所在自治体の人口規模 ・　巡回公演の実施有無／巡回公演で鑑賞・体験した芸術分野 **２．学校教育内での文化芸術活動の実施状況** ・　令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の提供有無 ・　提供した事業数／提供した事業の具体的な内容 ・　事業を実施しなかった理由 **３．学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向** ・　学校教育内での文化芸術活動の継続意向 ・　文化庁に対する要望 **４．文化芸術活動の質向上のための工夫** ・　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上のために取り組んでいること／質向上にあたっての課題 ・　文化芸術活動の効果の可視化の具体的な指標と成果 ・　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業における ICT の活用状況 ・　前後学習における工夫や「教科横断的な学び」の取組状況 ・　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業を通じた児童・生徒への効果 **５．文化庁　巡回公演について** ・　巡回公演の応募・利用実績／応募理由／応募しなかった理由 ・　巡回公演により得られる効果／効果の具体事例 ・　巡回公演と学習指導要領との関連付けによる効果
調査結果を見る上での注意事項	・　本文、表、グラフ等に使われる「ｎ」は、各設問に対する回答者数を指す。 ・　百分率（%）の計算は、小数第２位を四捨五入し、小数第１位まで表示している。したがって、四捨五入の影響で、%を足し合わせて 100%にならない場合がある。 ・　本文中の%の小計は、各項目の値を四捨五入した上で足し合わせている。 ・　本文、表、グラフは、表示の都合上、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。 ・　属性別の傾向をみるためにクロス集計を行っている。クロス集計の属性のうち、「合計」は単純集計の値と一致する。

２．調査結果のサマリー

（１）学校教育内での文化芸術活動の実施状況

令和６年度における児童・生徒を対象とした学校教育内での文化芸術活動の実施状況をみると、実施率は 65.9%で、前年度の 65.4%からほぼ横ばいの推移であった。実施された事業数別にみると、約 80%が１事業のみの実施であった。内容としては「鑑賞」が過半数を占めるものの、鑑賞と体験を組み合わせた事業も約 40%に達していた。芸術分野では「オーケストラ等」が約 30%と最も多く、次いで「演劇」や「ミュージカル」が選ばれていた。

実施主体及び費用負担については、いずれも市区町村や学校が中心となっており、都道府県の割合は 40%に満たなかった。また、小学校と中学校では実施状況に違いがみられた。小学校では学年が上がるほど実施規模が拡大するとともに音楽の時間が活用されていた。他方、中学校では学年が上がるほど実施割合が低下し、総合的な学習の時間が活用されていた。

なお、事業を実施できなかった理由としては、予算や実施体制の不足が上位を占めていた。

調査項目ごとのサマリー

■　学校教育内での文化芸術活動の提供の有無

令和６年度に文化芸術鑑賞機会と体験機会のいずれかが実施されていた割合は 65.9%であった。令和５年度の 65.4%とほぼ同様の結果であった。

■　学校教育内での文化芸術活動提供の実施数

全体の約 80%が１事業のみの実施であった。２事業は 15.2%、３事業以上は約５%であった。

■　学校教育内での文化芸術活動提供の具体的な内容

＜実施概要＞

文化芸術を鑑賞する事業を実施した割合が最も大きく、55.2%であった。次いで、文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業の割合が約 40%に達していた。

＜実施主体＞

「学校」による実施が全体の約 40%を占めていた。次いで、「市区町村」による実施が約 30%に達していた。「都道府県」による実施が最も割合が小さく、7.6%であった。

＜費用分担＞

「市区町村」による負担が最も割合が大きく、全体の約 40%を占めていた。次いで、「国」負担と「保護者」負担が約 20%を占めていた。都道府県による負担が最も割合が小さく、8.3%であった。

＜芸術分野種目＞

「オーケストラ等」の割合が 30.8%と最も大きく、「演劇」が 18.6%、「ミュージカル」が 8.5%、「邦楽」と「合唱」が 7.9%と続いていた。

＜実施学年＞

「小学校」では学年が上がるにつれ実施した割合が大きくなる傾向がみられた。他方、「中学校」では学年が上がるにつれ実施割合が低くなる傾向がみられた。

＜実施学年の児童数＞

「実施した学年」同様、「小学校」では学年が上がるにつれ参加児童が増える傾向がみられた。他方、「中学校」では学年が上がるにつれ参加生徒が減る傾向がみられた。

＜事業に用いた授業時間＞

小学校では音楽の割合が 40%を超えて最も高く、特別活動が 23.9%、総合的な学習の時間が 15.6%と続いていた。他方、中学校では総合的な学習の時間の割合が約 30%で最も大きく、音楽が 28.6%、特別活動が 24.3%と続いていた

■　学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由

「実施にあたっての十分な予算が得られない」の割合が約 40%と最も高く、次に「実施にあたっての十分な体制が得られない」が約 30%であった。

（２）学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向

学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向については、「実施・継続したい」とする回答が約 70%と大半を占めていた。他方、約 20%が「現状のままでは継続が難しい」と回答していた。

文化庁への要望としては、「大規模な助成事業の充実（37.7%）」や「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」(35.8%)が上位を占めていた。主催事業の「回数の増加」を望む声が約 30%に達する一方で、「質の向上」や「周知」を求める声は約 10%に留まっていた。

調査項目ごとのサマリー

■　学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向

「実施・継続したい」の割合が 73.4%と最も高く、「実施・継続したいが、このままでは難しい」が 20.6%、「実施・継続したいと思わない」が 3.5%と続いていた。

■　学校教育内での文化芸術活動に関する文化庁への要望

「大きな助成がある補助事業の充実」の割合が 37.7%と最も大きく、「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」が 35.8%、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」が 30.9%と続いた。他方、「文化庁主催の文化芸術事業の質の向上」や「文化庁主催の

文化芸術事業のより一層の周知」は約 10%と割合が小さかった。

（３）学校教育内での文化芸術活動の質向上のための工夫

事業や授業の質を向上させるための工夫としては、国や自治体の補助金への応募による予算確保が約 30%と最も多く、次いで近隣校や地域住民・団体との連携が重視されていた。また、ICT 機器の活用率は 60.3%と前年度から上昇しており、主に鑑賞教材の調査や制作過程の記録、作品の相互鑑賞等に活用されていた。

教科横断的な学びについては「実施していない、また実施する予定はない」との回答が 65.5%に達していた。実施校では音楽や国語、総合的な学習の時間等を通じて歴史的背景や異文化理解に繋げる工夫がみられた。

学校教育内での文化芸術活動の効果を高める工夫としては、事前学習による知識習得や意欲喚起、事後の振り返りによる学びの定着に関する回答が多かった。これらの効果は数値化されたアンケート等で可視化されており、児童・生徒の興味関心の拡大といった成果があった。

具体的な教育効果については、80%以上の層で「文化芸術への親しみ」や「豊かな感性の育成」が実感されていた。また、非認知能力や幸福度（Well-being）の向上を認める回答も 66.7%に達していた。

調査項目ごとのサマリー

■　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上のため取り組んでいること

「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」の割合が 28.4%と最も高く、「周辺地域の学校との連携を図っている」が 25.5%、「文化芸術活動を行う際に、地域住民や地域の団体と連携している」が 24.0%と続いていた。

■　学校教育内での文化芸術活動の効果の可視化の具体的な指標と成果

指標については、アンケートによる意識・関心度の数値化が最も多かった。成果については、児童・生徒の意欲向上と興味・関心の拡大に関する成果があったとの回答が最も多かった。

■　学校教育内での文化芸術活動の効果を高めるために前後の学習で工夫したこと

事前学習による知識の習得と意欲喚起が最も多くみられた。それ以外では、事後の振り返りと感想の共有による学びの定着、実技指導・ワークショップと主体的な参加、各教科・学校行事との有機的な連携、地域・外部機関との連携と環境づくりといった回答がみられた。

■　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業における ICT の活用有無

文化芸術活動（学校教育内での文化芸術活動及び芸術教科の授業）行う際、タブレット等の ICT 機器を「活用している」と回答した割合は 60.3%であり、昨年度の 56.3%よりも上昇していた。

■　ICT の具体的な使用方法や取組内容

芸術科目における具体的な使用方法や取組内容については、鑑賞教材や関連情報の調査・検索に関する回答が最も多くみられた。それ以外では、演奏や制作過程の記録と客観的な振り返り、作品の共有と相互鑑賞・意見交流、創作活動といった回答が見受けられた。

■　文化芸術活動と芸術以外の教科における「教科横断的な学び」の取組有無

「実施していない、また実施する予定はない」の割合が 65.5%と最も高く、昨年度の 62.8%より上昇した。「実施している」の割合は 21.6%、「実施する予定である」の割合は 12.9%であった。

■　「教科横断的な学び」の具体的な取組内容

小学校における教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科をみると、「国語」と「音楽」が 30%を超え、最も割合が大きかった。中学校では、「音楽」と「総合的な学習の時間」が約 20%に達し、最も割合が大きかった。具体的な内容としては、歴史的背景や社会状況との関連付け、言語や表現活動への展開、総合的な学習の時間や地域学習との連携、音楽・図工・体育館の相互連携、異文化理解と国際交流に関する回答がみられた。

■　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上にあたっての課題

全体でみると、「実施にあたっての十分な予算がない」が 54.1%と最も割合が大きかった。それ以外では、「実施にあたっての十分な体制の整備（対応教員の確保等）ができない」が 39.5%を占めていた。

■　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業による児童・生徒への効果

文化芸術への関心については、「文化芸術への親しみが醸成される」、「より豊かな創造性や感性が育まれる」が共に 80%を超えていた。それ以外では、「芸術科目への理解が深まる」が約 60%に達していた。

非認知能力や QOL、Well-being については、「幸福感、生活満足度（Well-being）が向上する」が 66.7%と最も割合が大きかった。それ以外では、「自己肯定感が向上する」、「コミュニケーション能力が高まる」、「社会性・協調性が育まれる」、「生活の質、心身の健康（QOL）が向上する」がいずれも約 40%に達していた。

（４）文化庁　巡回公演について

過去５年間における巡回公演の利用実績については、「本事業を知っているが応募したことはない」が 52.5%と半数を超えていた。一方で、応募する学校の応募理由としては、学校単独では難しい「高品質な公演」の提供や、自主経費が不足していてもプロを招へいできるといった、質の担保とコスト面でのメリットに関する回答が共に 60%以上を占めていた。

事業による効果としては、約 90%が「文化芸術への親しみの醸成」を実感していた。また、約半数の現場が授業と連動した事前・事後学習を取り入れて工夫しており、学習指導要領と関連付けることで、児童・生徒の学習意欲向上だけでなく、校内全体で文化芸術教育への理解が広がるという波及効果も生まれていた。

他方、応募を断念する要因としては、申請や経理に伴う事務的な面の負担に関する懸念が約 40%と最も多く、次いで教員の確保といった実施体制の不備や、募集時期と学校行事の調整の難しさに関する回答が多かった。

調査項目ごとのサマリー

■　巡回公演の応募・利用実績

巡回公演の過去５年間（令和２年度～令和６年度）における利用実績については、「本事業を知っているが応募したことはない」が 52.5%と最も高く、昨年度の 52.6%とほぼ同程度であった。

■　巡回公演に応募した理由

「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い後援団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができるため」、「文化芸術事業に係る自主経費が十分でなくても、公演団体・アーティストを招へいすることができるため」が共に 60%を超えていた。

■　巡回公演に参加することで得られる効果

「文化芸術への親しみが醸成される」が約 90%に達していた。それ以外では、「より豊かな創造性や感性が育まれる」が 65.3%、「日本の文化を知り、国や地域に対する愛着を持つようになる」が 20.9%と続いていた。具体的な事例としては、「本物への接触と五感への刺激」、「芸術への関心や意欲の向上」、「地理的・経済的環境による機会格差の解消」、「創造性・表現力への波及効果」、「伝統文化・多様なジャンルへの理解と親近感」といった内容が挙げられた。

■　巡回公演を効果的・効率的に実施するために工夫したこと

「文化芸術を鑑賞・体験する前後に、該当教科の授業等で事前・事後学習を実施している」が 47.2%と突出して多かった。

■　巡回公演を学習指導要領と関連させたことで生まれた効果

「校内で文化芸術教育への理解や関心が広がった」が 61.7%と最も割合が大きかった。「児童・生徒の教科に対する学習意欲や関心が高まった」が 45.4%、「児童・生徒が鑑賞・体験の内容を教科の学びと結びつけて考えられるようになった」が 33.5%、「児童・生徒の教科の学習内容に対する理解が深まった」が 32.3%と続いていた。

■　巡回公演に応募しなかった理由

「申請や経理に係る事務的な負担が大きい。または事務的な負担がどの程度かかるのかわからない」が 39.2%と最も割合が大きく、「実施にあたっての十分な体制の整備（対応教員の確保等）ができない」が 35.6%、「事業の募集が開始される時点で、既に予定が決まっており実施の予定が組めない」が 28.9%と続いていた。

（５）学校教育内での文化芸術活動の享受状況の試算

表 2-2「令和６年度の学校教育内での文化芸術活動享受状況の試算結果」をみると、全国では中学生全体では約 183 万人が、小学生全体では約 478 万人が享受できたと推察される。なお、試算方法が令和６年度報告書とは異なる点に留意されたい[3]。

表 2-2　令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の享受状況の試算結果

学年	学年ごと普及率	全国の児童・生徒数[4]	享受できた児童・生徒の推計数
中学生総数	57.1%	3,202,473	1,827,896
中学校３年	47.4%	1,075,594	509,802
中学校２年	50.7%	1,072,918	543,808
中学校１年	51.6%	1,054,418	544,060
小学校総数	79.0%	6,047,545	4,776,106
小学校６年	75.1%	1,044,722	784,555
小学校５年	73.2%	1,033,371	756,790
小学校４年	70.0%	1,023,134	715,956
小学校３年	65.0%	1,014,937	659,827
小学校２年	63.8%	979,475	624,615
小学校１年	63.0%	951,906	599,649

[3] 令和６年度報告書では回答校における事業実施率×学年ごとの事業実施率×全国児童・生徒数で算出しているが、今年度は学年ごと普及率×全国児童・生徒数によって算出した。詳細は次ページ「参考」を参照されたい。
[4] 文部科学省「令和６年度学校基本調査」より算出。

参考：学年ごと普及率の算出方法

回答校のうち、学校種別を「その他」と回答した学校を除くと、中学校は計 1,095 校が、小学校は計 1,289 校が回答していた。なお、義務教育学校後期課程と特別支援学校中学部は中学校に、義務教育学校前期課程と特別支援学校小学部は小学校にそれぞれ振り分けている。

中学校及び小学校それぞれについて、各学年で１回でも事業を実施した回答校の数を算出し、分母を中学校及び小学校の回答校数として学年ごと普及率を算出した。

表 2-3　学年ごと普及率

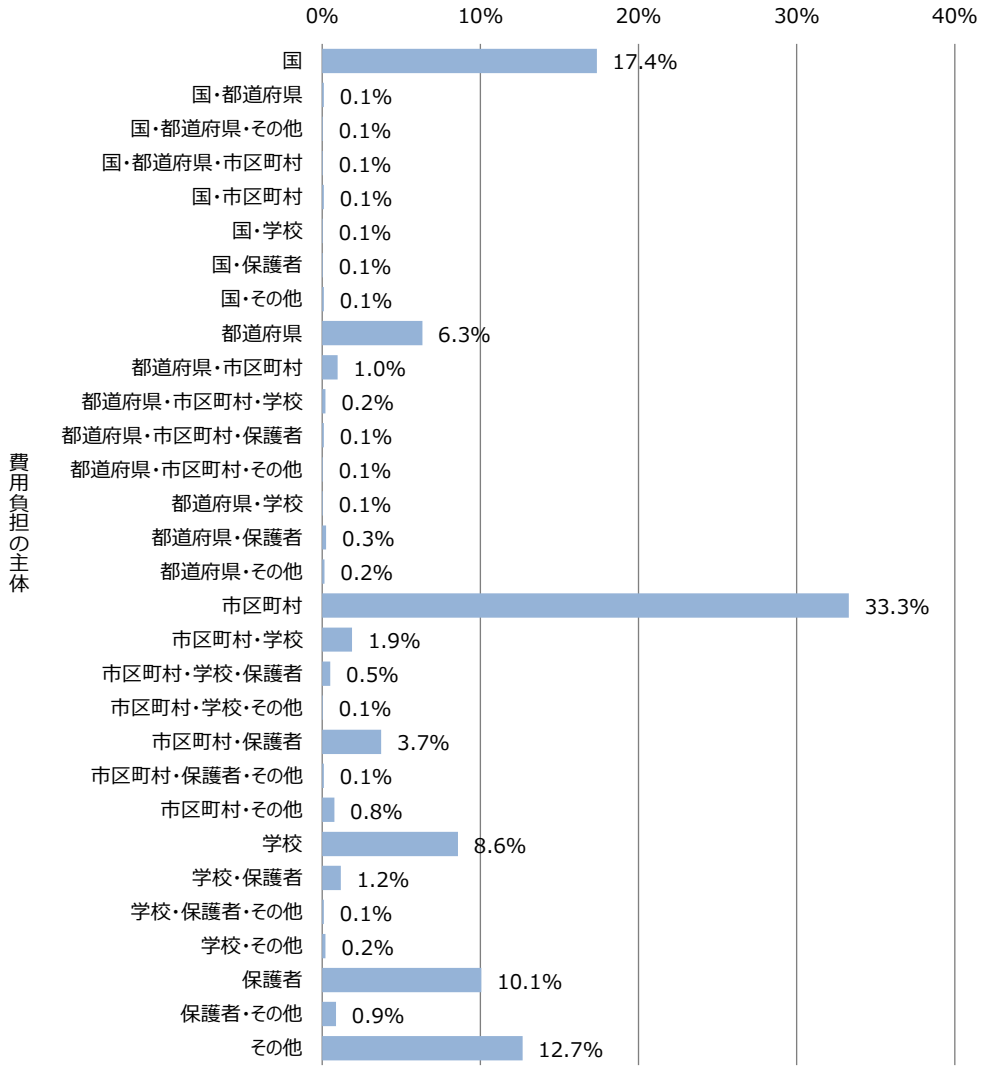
学年	その学年で１回でも事業を実施した回答校の数	学年ごと普及率
中学生総数	625	57.1%
中学校３年	519	47.4%
中学校２年	555	50.7%
中学校１年	565	51.6%
小学校総数	1,018	79.0%
小学校６年	968	75.1%
小学校５年	944	73.2%
小学校４年	902	70.0%
小学校３年	838	65.0%
小学校２年	822	63.8%
小学校１年	812	63.0%

（６）学校教育内での文化芸術活動の費用負担推計

図 2-1 の学校教育内での文化芸術活動の費用負担推計[5]結果をみると、「学校」、「市区町村」、「都道府県」、「国」、「保護者」、「その他」に限らず、複数の主体による負担パターンがあることがわかる。

パターンは多岐に渡るものの、それぞれのパターンごとの割合は小さく、大きいものでも「市区町村・保護者」が 3.7%、「学校・保護者」が 1.2%であった。　他方、単体の主体による負担は、「市区町村」による負担が 33.3%と最も大きく、「国」が 17.4%、「保護者」が 10.1%、「学校」が 8.6%、「都道府県」が 6.3%の順に続いていた。

図 2-1　学校教育内での文化芸術活動の費用負担者ごとの割合



[5] 推計方法については、次ページを参照のこと。

参考：費用負担の推計方法

費用負担の推計は、事業数をベースとして実施した。まず、回答における負担パターンごとの件数をカウントし、回答校で実施された事業数に占める各負担パターンの構成比を算出した。

次に、回答校で実施された事業数と回答校数から１校当たりの平均事業数を算出したところ、0.82[6]であった。この値と全国の学校数[7]を乗じて全国の総事業数を推計したところ、24,707 件であった。

表 2-4　負担パターンごとの全国の事業数推計

負担パターン・大分類	負担パターン・小分類	構成比（%）	全国の事業数推計
国が負担に関与しているもの	国	17.4	4,290
	国・都道府県	0.1	25
	国・都道府県・その他	0.1	13
	国・都道府県・市区町村	0.1	13
	国・市区町村	0.1	25
	国・学校	0.1	13
	国・保護者	0.1	13
	国・その他	0.1	25
都道府県が負担に関与しているもの	都道府県	6.3	1,565
	都道府県・市区町村	1.0	240
	都道府県・市区町村・学校	0.2	50
	都道府県・市区町村・保護者	0.1	25
	都道府県・市区町村・その他	0.1	13
	都道府県・学校	0.1	13
	都道府県・保護者	0.3	63
	都道府県・その他	0.2	38
市区町村が負担に関与しているもの	市区町村	33.3	8,227
	市区町村・学校	1.9	467
	市区町村・学校・保護者	0.5	126
	市区町村・学校・その他	0.1	13
	市区町村・保護者	3.7	921
	市区町村・保護者・その他	0.1	25

[6] 小数点以下第３位を四捨五入。

[7] 文部科学省「令和６年度学校基本調査」から算出。

負担パターン・大分類	負担パターン・小分類	構成比（%）	全国の事業数推計
	市区町村・その他	0.8	189
学校が負担に関与しているもの	学校	8.6	2,120
	学校・保護者	1.2	290
	学校・保護者・その他	0.1	25
	学校・その他	0.2	50
その他	保護者	10.1	2,486
	保護者・その他	0.9	215
	その他	12.7	3,129

３．調査結果からの考察

（１）調査結果から読み取れる現状と課題

１）現状

調査結果から、学校教育内での文化芸術活動が定着しつつあり、学校側も高い継続意欲を有していることが読み取れる。令和６年度の実施率は 65.9%で前年度から微増しており、子供たちに安定して学校教育内での文化芸術活動が提供されていると言える。また、70%以上の学校が事業「実施・継続したい」と回答していること、80%以上の学校において「文化芸術への親しみ」や「豊かな感性の育成」等の効果が実感されていることから、多くの学校において学校教育内での文化芸術活動による効果や必要性が認識されていることが読み取れる。

学校教育内での文化芸術活動を実施している学校では、オーケストラをはじめ、演劇、ミュージカル、邦楽、合唱等、多様なジャンルが扱われていた。また、音楽や国語、総合的な学習の時間等と関連させ、教科横断的な学びも実践されていた。

巡回公演は、地理的・経済的要因による機会格差を解消する役割を果たしている可能性が高いと考えられる。巡回公演の応募理由として、学校単独では難しい「高品質な公演」や「コスト面でのメリット」が 60%以上を占めていた。また、巡回公演実施校では、47.2%が事前・事後の学習により教育効果の最大化を狙っており、単発のイベントに終わらせず、学びを定着する動きが広がっていると言える。

２）課題

調査結果から、学校教育内での文化芸術活動において、次の４つの課題があると考えられる。第１に、学校教育内での文化芸術活動に割ける予算が不足していることである。第２に、人手が不足しており、十分な体制を構築できないことである。第３に、教科横断的な学びの取組が少ないことである。第４に、芸術系科目への ICT の活用が、「情報収集」、「振り返り」、「鑑賞」に偏っており、「創作」への活用が比較的少ないことである。

第１の課題について考察する。令和６年度「地方教育費調査」[8]によると、学校教育費[9]は減少傾向にある。また、その中の消費的支出[10]が全体として減少傾向にあり、特別活動や学校行事等に配分される予算が縮小されている可能性が高いと言える。そのため、調査結果に表れているように、予算を確保するために国や地方自治体の事業に応募している学校が多くなっていると考えられる。

---

[8] 文部科学省「地方教育費調査」https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index05.htm

[9] 地方公共団体が公立の学校教育（大学・短期大学を除く）のために支出した経費。

[10] 人件費、教育活動費、管理費等、経常的に支出される経費。

第２の課題について考察する。令和６年度「学校基本調査」[11]によると、教員総数や新規採用（本務者）は減少傾向にある。小学校においては 35 人学級の導入等により微減に留まっているが、中学校では生徒数の減少に伴い教員数も明確に減少している。小・中学校において、教員不足が進展していると考えられる。

また、文化芸術鑑賞・体験を実施するには、通常の授業準備ではなく、出演団体との交渉・調整や、国・地方自治体による事業への申請等、事務作業が必要である。近年、教員の働き方改革の一環で、従来以上に事務作業を教員以外の人員へ割り振る動きが進んでいる。令和７年度「教育委員会における学校の働き方改革のための「見える化」調査」によると、従来は教員が行っていた「調査回答」、「ICT 管理」等の業務を事務職員の業務とすることが推進されている。教員の事務作業時間は微減傾向にあり[12]一定の効果は出ているものの、義務標準法に基づく事務職員の配置基準（定数）は更新されておらず、事務職員の人数が増加しないまま業務が増加していると言える。

以上より、そもそも教員は減少傾向にあり、かつ、事務職員による教員の負担減についてもまだ充足しているとは言えない。結果として、学校教育内での文化芸術活動を実施するための体制を構築できない状況が発生していると考えられる。

第３の課題について考察する。教科横断的な取組を実施するには、具体的にどのように横断させるか構想を練る他、横断させる教科における授業の進度を調整する等の工夫が必要になると想定される。第２の課題に関する考察で触れた通り、教員数は減少傾向にある。加えて、小学校の場合、ほぼすべての教科の授業を担任が１人で担うため、構想を練ったり、教材を開発したりするための空きコマを確保することが難しいと考えられる。中学校の場合、教科担任制であることから、構想に関する合意形成をしたり、教員間で授業の進度を調整したりするといった調整コストが高くなっていると考えられる。

また、教科横断的な取組は文部科学省が提示する「カリキュラム・マネジメント」の一環として行われるが、「カリキュラム・マネジメント」の方針や概念については説明されているものの、具体的な進め方について方針が提示されていない。いくつかの教育委員会による手引きは文部科学省のサイトにて公表されているが、すべての自治体・学校に対して適用可能な内容ではない可能性がある。

以上より、教科横断的な取組を実施するために必要なリソースが不足しており、教科横断的な取組の必要性を認識しながらも、具体的な進め方が提示されていないと言える。結果として教科横断的な取組の実施割合が低くなっていると考えられる。

第４の課題について考察する。令和３年度「GIGA スクール構想に関する各種調査の結果」をみると、都道府県及び市区町村等を対象とした調査において、義務教育段階においては、

[11] 文部科学省「学校基本調査」https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm
[12] 令和５年度「公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究」より

「学校の学習指導での活用」と「教員の ICT 活用指導力」が１番目と２番目の課題だという調査結果が出ている。教員が ICT を授業に活用することや、ICT の活用方法について指導することが課題になっていると言える。

ICT に関する指導をサポートする外部人材として、ICT 支援員（情報通信技術支援員）の配置が進んでいる。しかし、令和５年度「ICT 支援員（情報通信技術支援員）の配置状況」をみると、令和５年度末時点で約 4.5 校に１人の配置率である。１人の支援員が巡回型で複数の学校を担当していることが多いと考えられる。

以上から、ICT を教育に活用するにあたり、教員だけでの対応が難しい側面があり、かつ、ICT 支援員の配置も充足していないことから、「情報収集」等の比較的難易度の低い活用に留まっており、「創作」等の高度な活用が進まないと考えられる。

（２）政策への示唆

１）巡回公演の意義

人口減少に伴い、更なる学校予算の縮小が予想される中、文化庁の支援によって文化芸術鑑賞・体験を提供する本事業は、質の高い文化芸術鑑賞・体験をより多くの子供たちに提供するという意味で意義深いものであると言える。本事業を継続・拡大することで、今後より多くの子供たちに機会を提供できると考えられる。

２）申請に係る負担減のための対応

本事業により、申請に係る負担を新しく生んでいる側面もある。教員の働き方改革や事務員の拡充を前提としつつ、申請フロー・システムの簡素化や、事務作業のサポート窓口を設置する等、心理的・物理的なハードルを下げるための施策が有効であると考えられる。

３）教科横断的な取組の普及に向けた支援

教科横断的な取組の普及に関しては、教員の働き方改革による余剰時間の創出を続けつつ、全国統一的なわかりやすい手引き・事例集を整備することで、教員にとって実行に移しやすくなると考えられる。教科横断的な取組を、本事業の事前・事後の学習においても導入することで、単発の行事に留まらず、教育効果を最大化させることができるのではないか。

４）ICT のより効果的な活用に向けた支援

ICT の活用に関しては、ICT 支援の拡充を推進するとともに、「創作」等の高度な活用を行った事例を普及させる、教員向けに研修を実施する等の取組が有効であると考えられる。教員自身が高度な活用の指導方法を習得することで、ICT 支援員が不在であっても子供たちに指導することができるようになると考えられる。

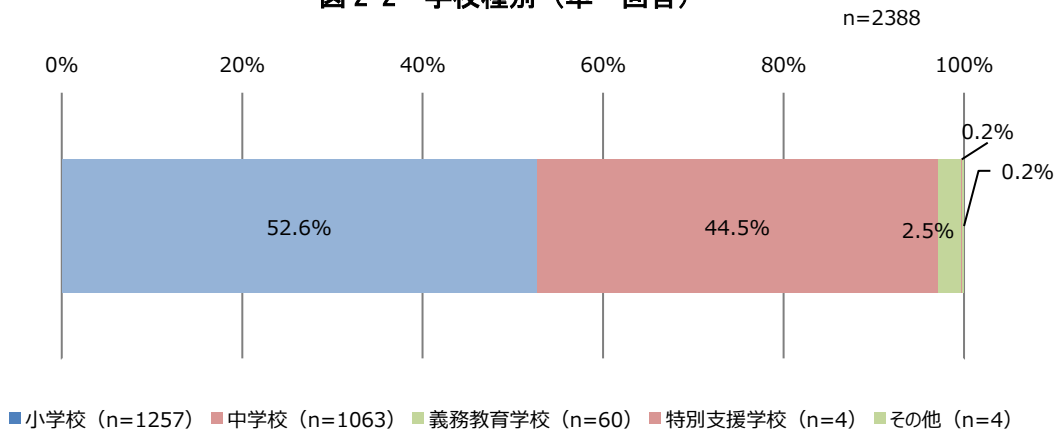
４．調査結果

（１）回答団体の属性

１）団体（学校）種別

全 2,388 校のうち、回答者の団体（学校）種別は、「小学校」の割合が 52.6%、「中学校」の割合が 44.5%であり、合計で全体の約 90%以上を占めていた。それ以外では「義務教育学校」が 2.5%、「特別支援学校」が 0.2%、「その他」が 0.2%であった。

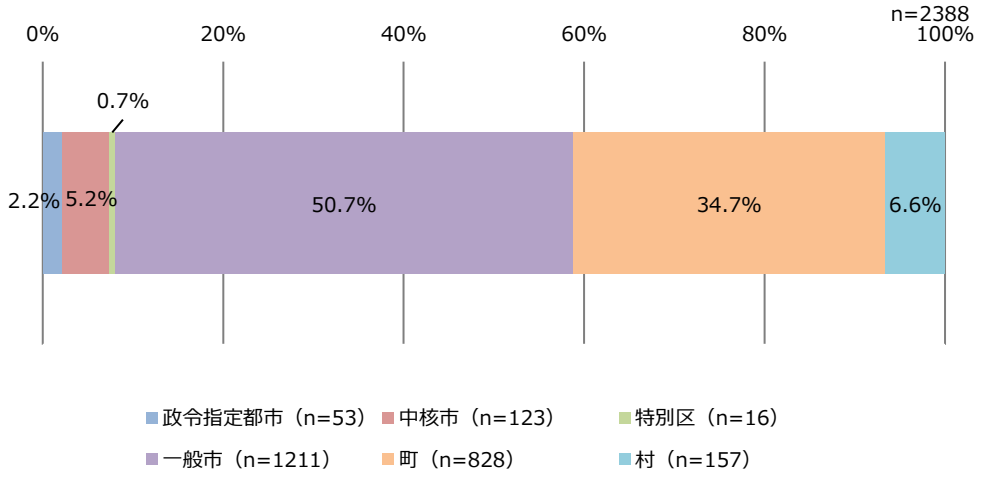
図 2-2　学校種別（単一回答）



２）所属する自治体の団体種別

「一般市」の割合が 50.7%と最も高く、ついで「町」が 34.7%、「村」が 6.6%、「中核市」が 5.2%、「政令指定都市」が 2.2%、「特別区」が 0.7%であった。

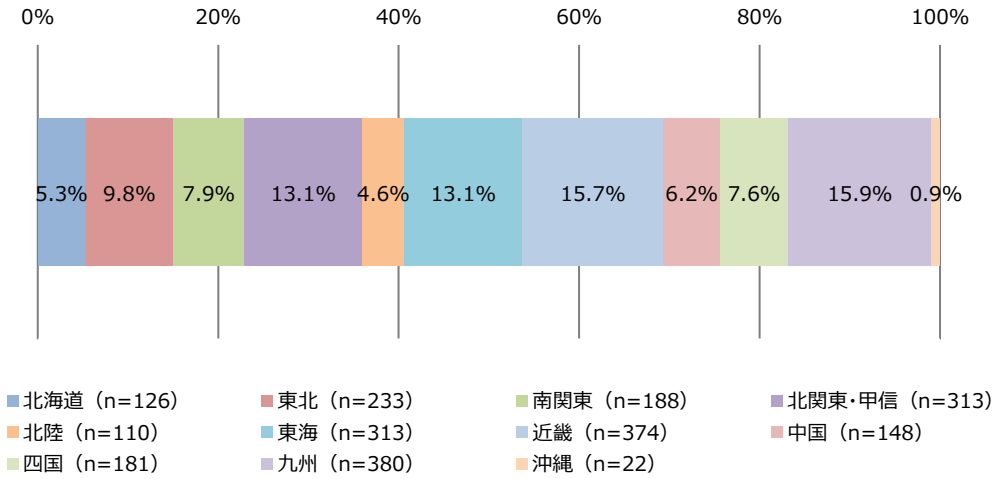
図 2-3　自治体の団体種別（単一回答）



３）所在地の広域ブロック

「九州」の割合が 15.9%と最も高く、「近畿」が 15.7%、「東海」と「北関東・甲信」が 13.1%と続いている。

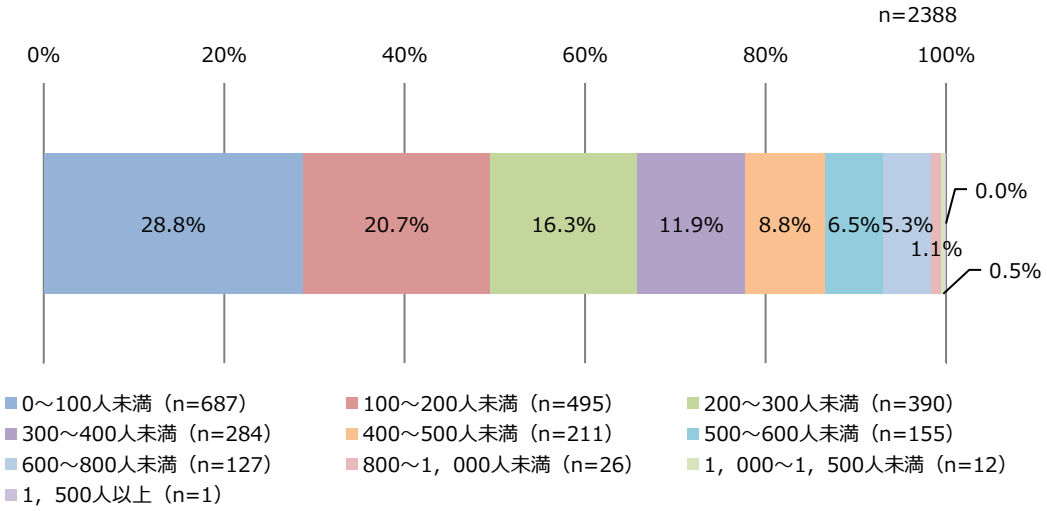
図 2-4　所在地の広域ブロック（単一回答）



４）令和６年度時点の全児童・生徒数

令和６年度時点の全児童・生徒数は、「0～100 人未満」の割合が 28.8%と最も高く、「100～200 人未満」が 20.7%、「200～300 人未満」が 16.3%と続いている。

図 2-5　昨年度（令和６年度）時点の全児童・生徒数　（単一回答）



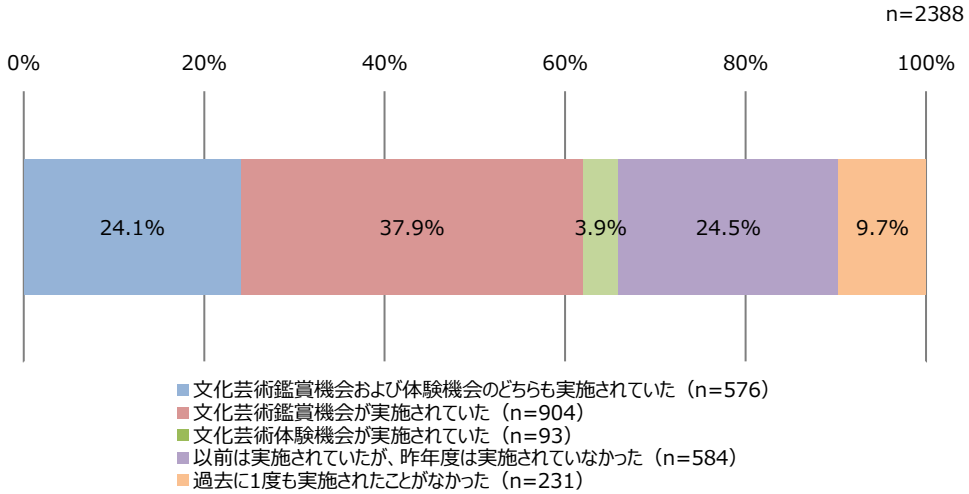
（２）学校教育内での文化芸術活動の実施状況

１）令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況

①　全体

令和６年度における児童・生徒を対象とした学校教育内での文化芸術活動の実施状況をみると、文化芸術鑑賞機会と体験機会のいずれかが実施されていた割合[13]は 65.9%であった。なお、「過去に１度も実施されたことがなかった」と回答した割合は 9.7%であった。

図 2-6　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　（単一回答）



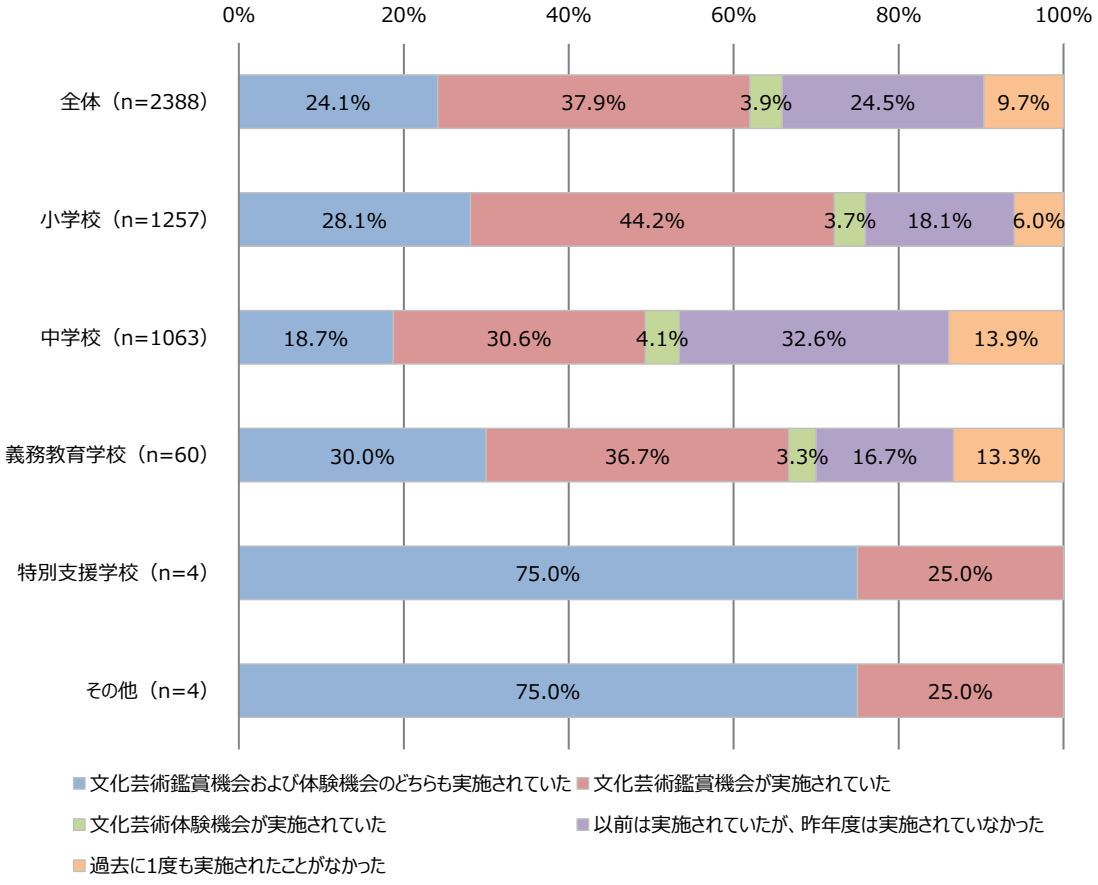
[13] 選択肢「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」、「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答した割合の合算値

② 学校種別

学校種別にみると、文化芸術鑑賞機会と体験機会のいずれかが実施されていた割合[14]は「小学校」で 76.0%、「中学校」で 53.4%、「義務教育学校」で 70.0%、「特別支援学校」で 100%、「その他」で 100%であった。

なお、「過去に 1 度も実施されたことがなかった」と回答した割合は「小学校」で 6.0%、「中学校」で 13.9%、「義務教育学校」で 13.3%、「特別支援学校」で 0.0%、「その他」で 0.0%であった。

図 2-7　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　学校種別（単一回答）

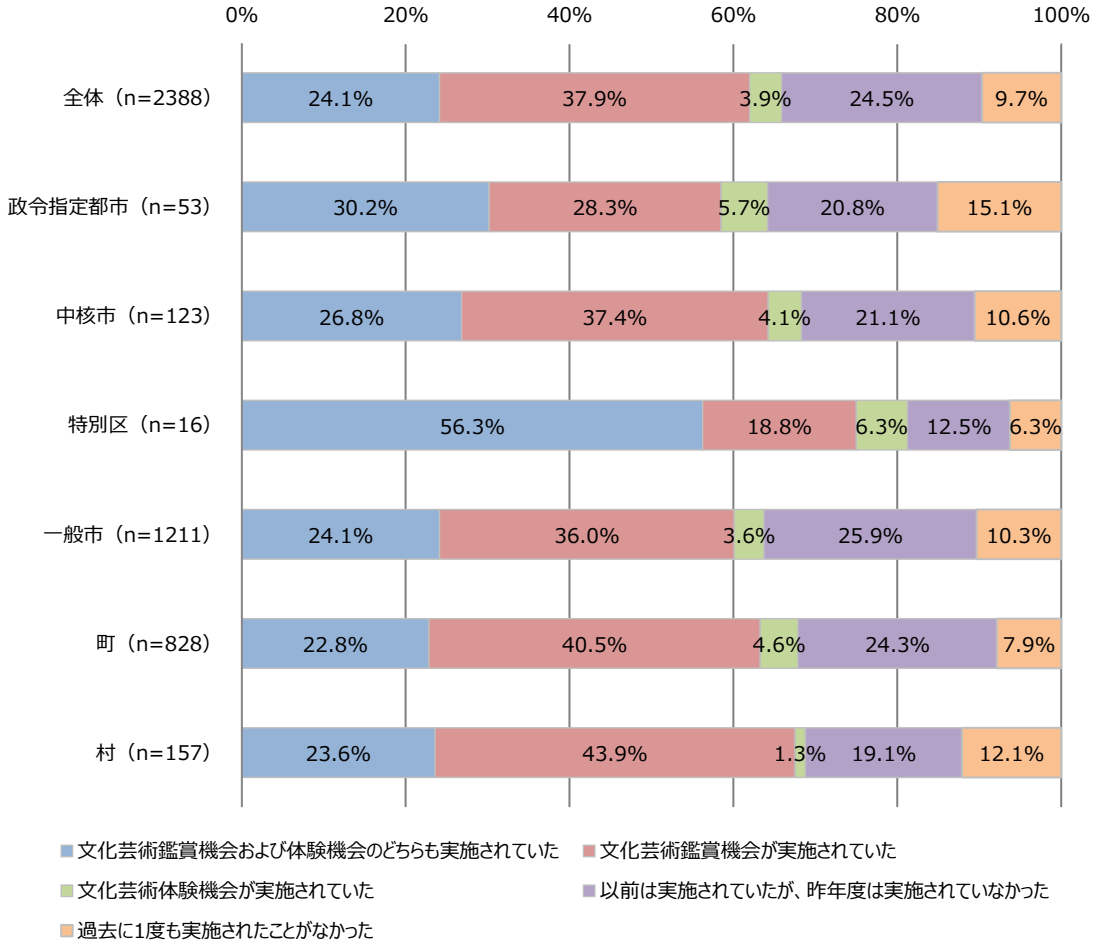


[14] 選択肢「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」、「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答した割合の合算値。

③　自治体種別

自治体種別でみると、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」の割合は「特別区」と「政令指定都市」で他と比較して高くなっている。他方、「以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった」の割合は「特別区」が特に低く、それ以外の種別においてはいずれも 20%前後となっている。

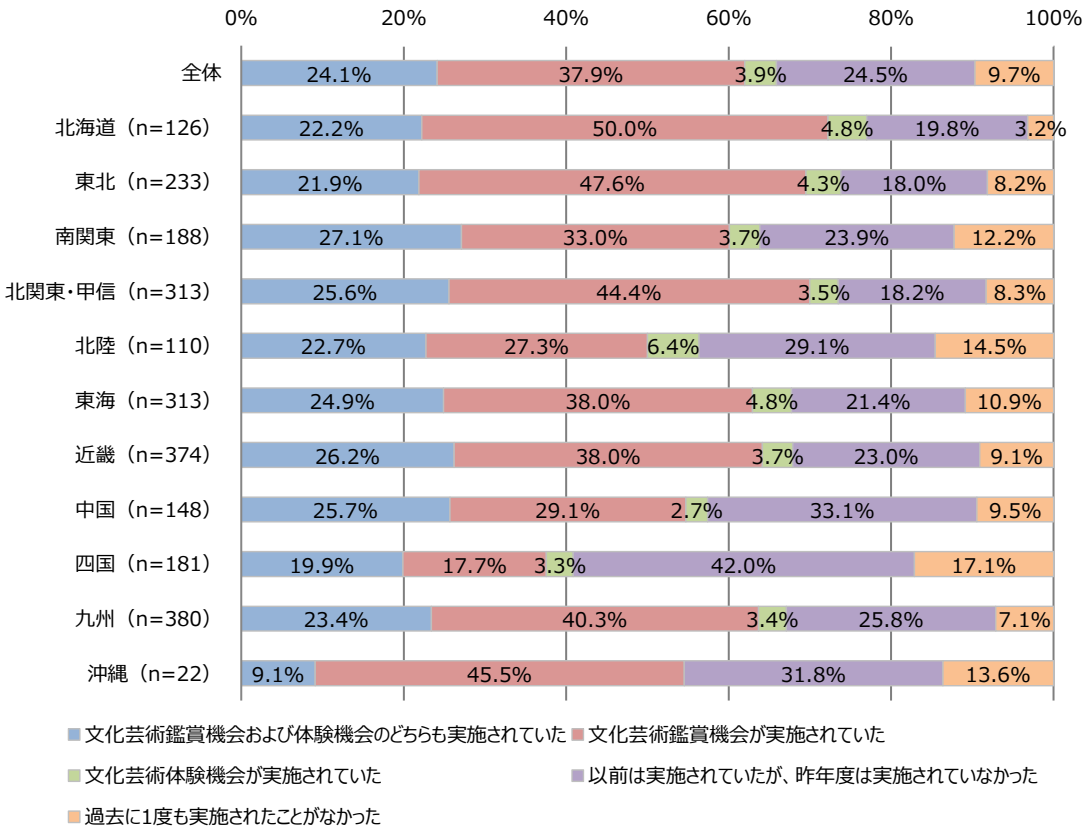
図 2-8　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　自治体種別（単一回答）



④　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」の割合は「南関東」で他と比較して高くなっている。他方、「沖縄」で他ブロックの半分程度の割合になっている。また、「以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった」の割合は「四国」が特に高い。

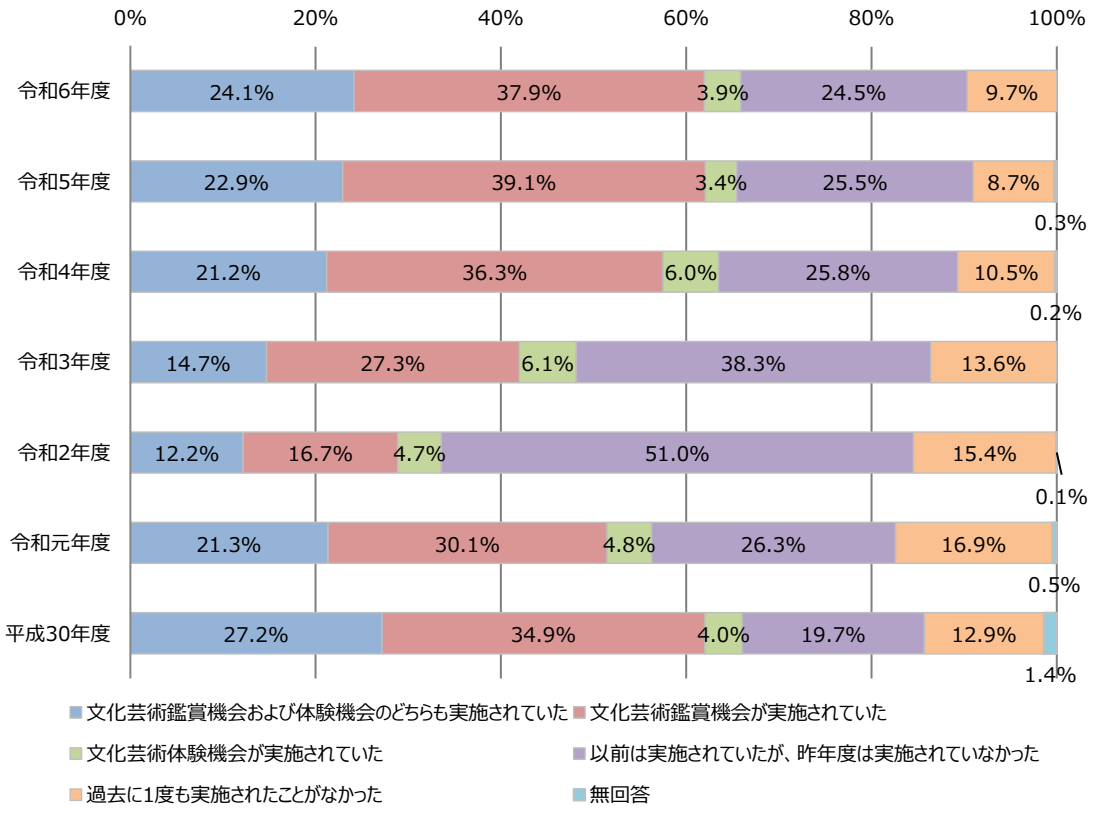
図 2-9　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　広域ブロック別（単一回答）



⑤　過年度比較

令和６年度は概ね令和５年度と同等の結果となった。「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」の割合は 22.9%から 24.1%と微増し、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」の割合は 39.1%から 37.9%と微減した。全体で、実施されていた割合[15]に大きな変化はみられなかった。他方、「過去に１度も実施されたことがなかった」の割合は 8.7%から 9.7%と微増した。

図 2-10　過年度比較



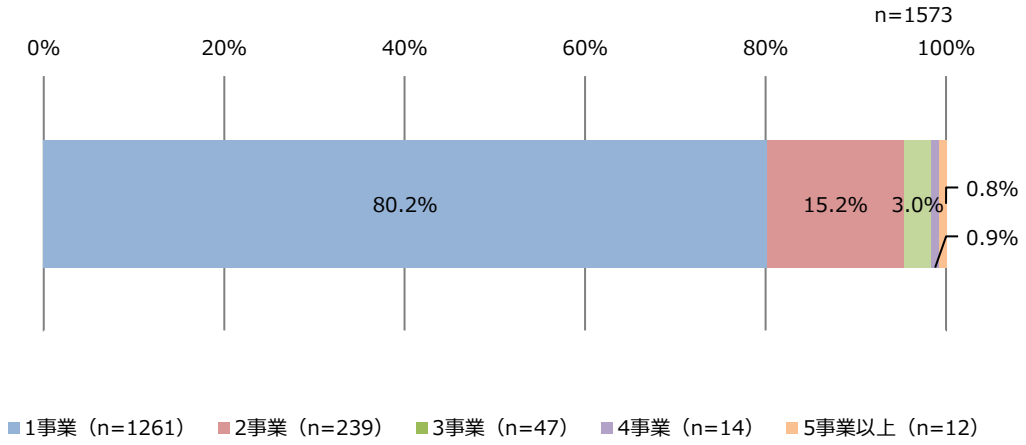
[15] 選択肢「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」、「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答した割合の合算値。

２）令和６年度に実施した事業数

①　全体

「令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況」において、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」、「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答した学校に実施した事業数を確認したところ、約 80%の学校が１事業実施していた。

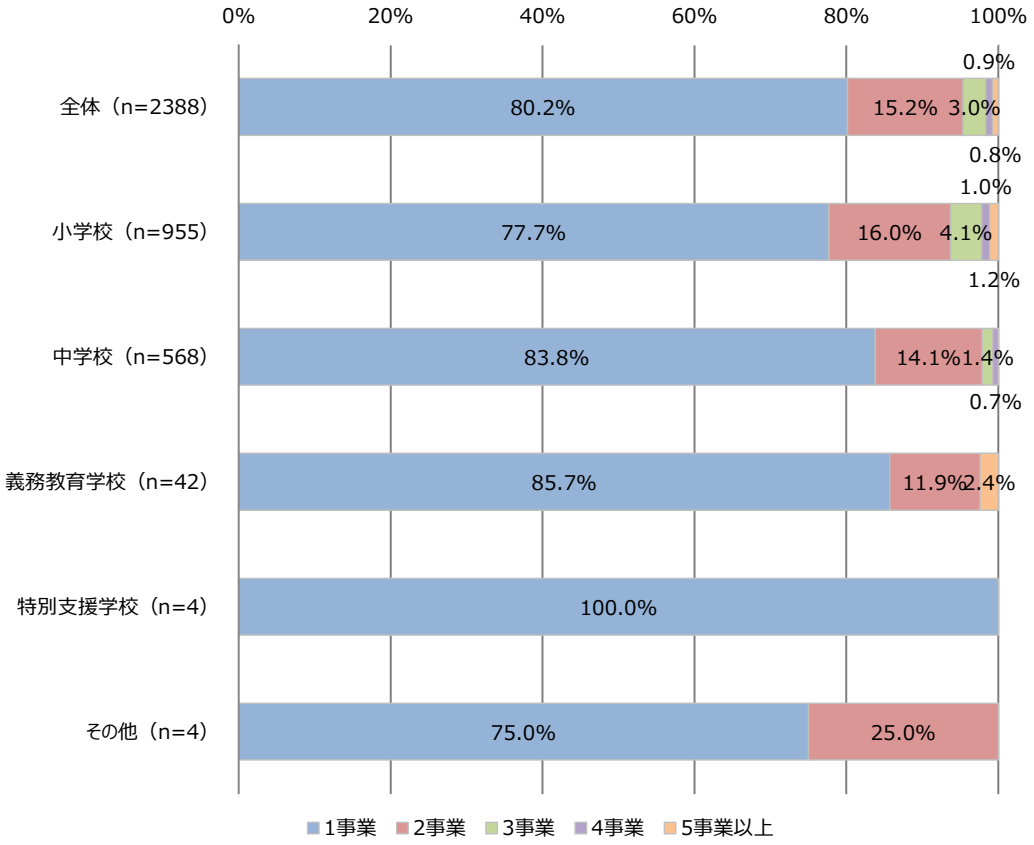
図 2-11　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　（単一回答）



② 学校種別

学校種別でみると、「特別支援学校」はすべての学校が１事業実施していた。それ以外の種別では、概ね 80%前後が１事業を実施していた。

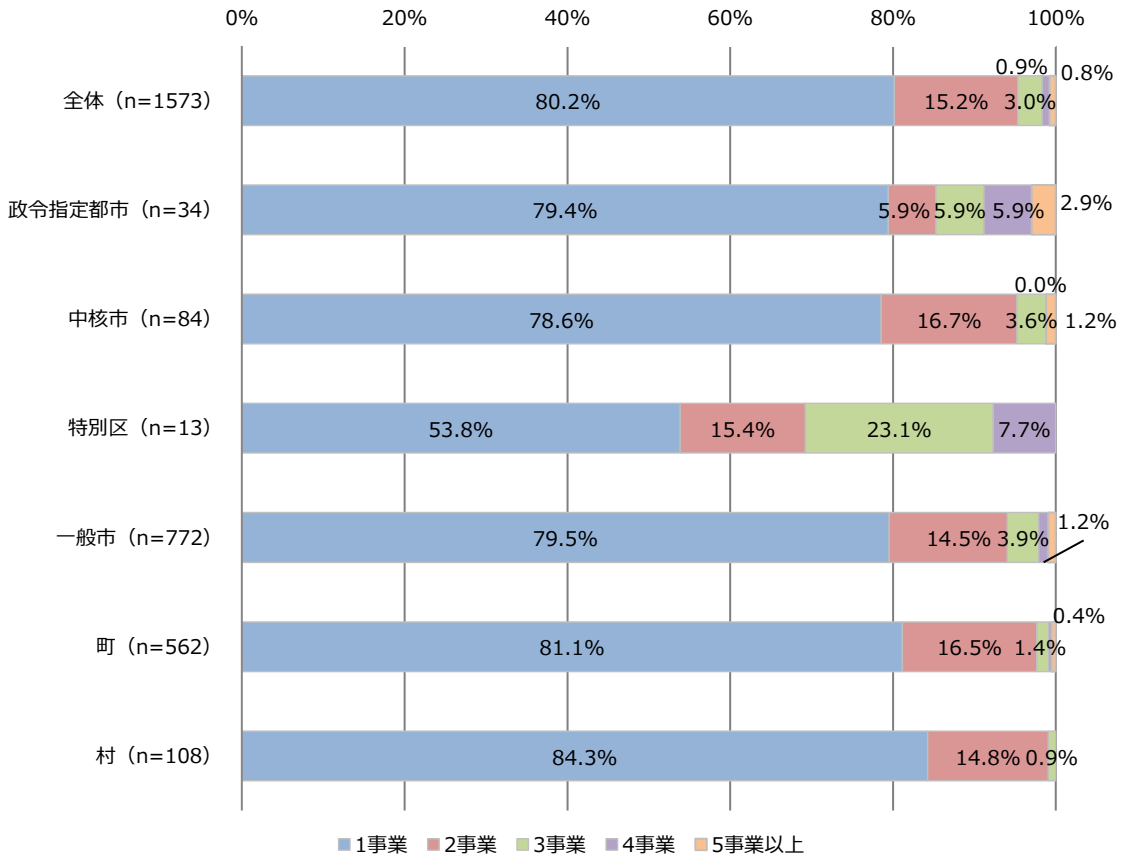
図 2-12　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況 学校種別（単一回答）



③　自治体種別

自治体種別でみると、「特別区」において、他と比較して２事業以上実施している学校の割合が大きくなっている。

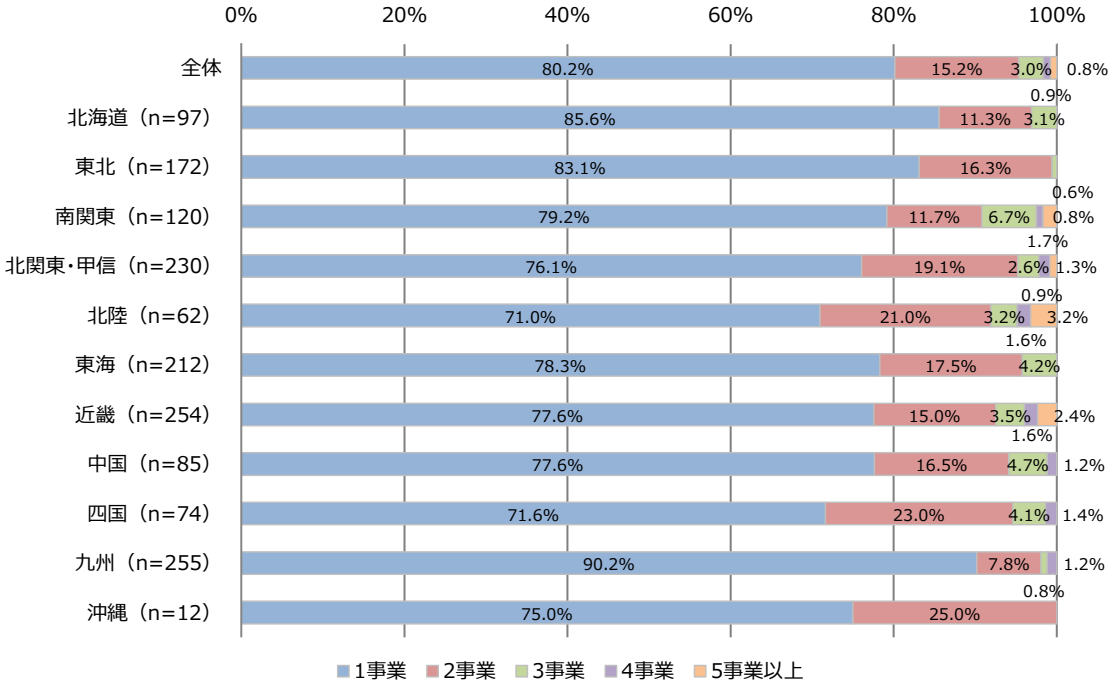
図 2-13　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　自治体種別（単一回答）



④　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、「九州」では１事業の割合が約 90%と、最も大きくなっている。他方２事業以上実施している学校の割合は、「北陸」で最も大きい。

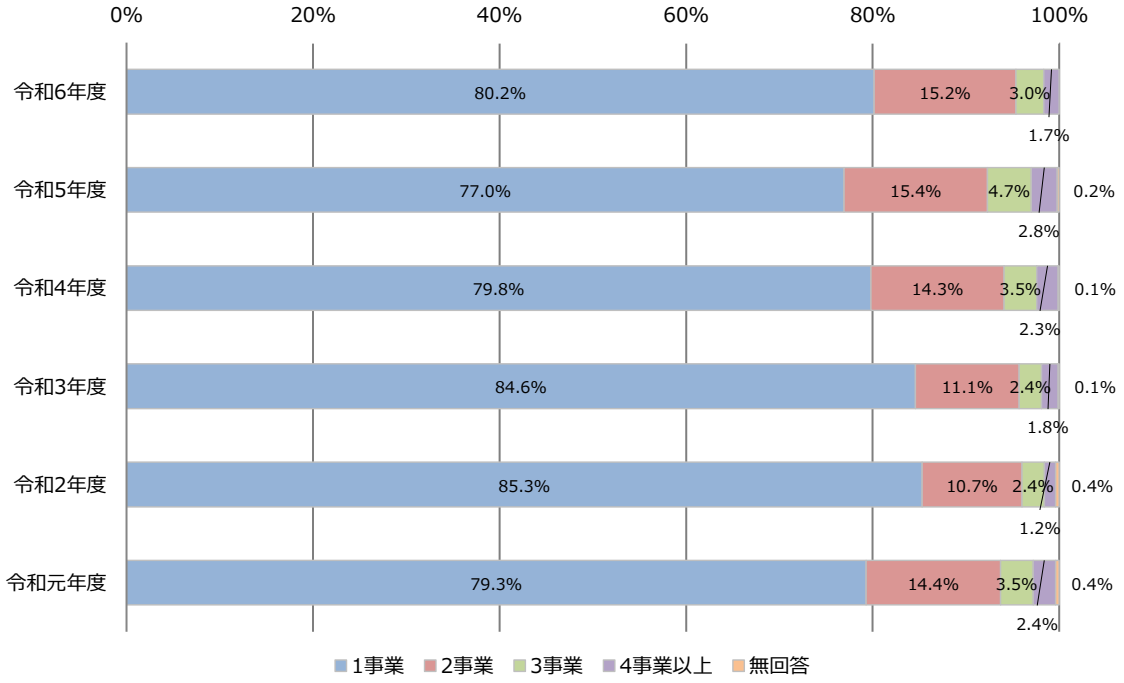
図 2-14　令和６年度における学校教育内での文化芸術活動の実施状況　広域ブロック別（単一回答）



⑤　過年度比較

令和６年度は概ね令和５年度と同等の結果となった。１事業実施した割合は 77.0%から 80.2%に上昇した。

図 2-15　過年度比較



３） 令和６年度に実施した事業の具体的な内容

①　具体的な内容

事業を実施している学校を対象に、学校教育内での文化芸術活動について、最大３つまで事業内容の回答を得た。集計は事業単位で行い、対象となる事業数は 1,573 件であった。

実施した事業は、大きく５つに分類された。以下、自由記述の回答サマリーを記載する。

■　音楽鑑賞・器楽演奏

オーケストラやジャズ、合唱等、プロの音楽家による演奏鑑賞が最も多かった。生の音に触れることで感性を育むだけでなく、楽器体験や指揮者体験、校歌の合同演奏といった参加型の工夫も多く見受けられた。

- 本物の文化芸術団体の公演を通して豊かな感性を育む目的で、プロの交響楽団を招いてワークショップと本公演を行った。
- ジャズ音楽の魅力や歴史的背景に触れることで音楽への感受性を深めた。卒業生のプロ演奏家との共演もあり、将来の夢を育てる機会となった。
- 打楽器グループによる生演奏を鑑賞し、迫力あるハーモニーを体感した。代表生徒が奏者の輪に入り、一緒に音楽を奏でる体験も実施した。
- ハープの歴史を学び、その音色に親しんだ。曲の合間に実際に楽器に触れる機会があり、児童は興味津々で音を鳴らして楽しんでいた。
- 合唱コンクールを前にプロの歌声を聴くことで、合唱の素晴らしさを理解し、自分たちの表現への意欲を高めることができた。

■　演劇・ミュージカル

劇団四季等の本格的な演劇やミュージカルを鑑賞する活動が多かった。事前ワークショップで演技指導を受け、児童・生徒が劇中の一部に出演する事例もあった。

- 劇団四季のミュージカルを鑑賞し、生の演劇の良さを味わわせることで、豊かな心や芸術を愛好する心を培った。
- 環境問題を題材とした参加型ミュージカルを鑑賞した。４年生の環境学習と連動しており、深い学びにつながった。
- 劇団員によるワークショップで発声やパントマイムの指導を受けた後、本番のステージに代表児童が子役として出演した。
- 戦争の残酷さと命の大切さを伝える演劇『子象物語』を鑑賞し、道徳的価値観を醸成する有意義な機会となった。
- セリフのないパントマイム演劇を鑑賞した。想像力や表現力を高め、他者の思いを想像することで障害への理解を深めることができた。

■　伝統芸能・郷土文化

落語、狂言、能、和太鼓、琴、人形浄瑠璃等、日本の伝統的な芸術に触れる活動があった。所作の体験や楽器の演奏体験を通じて、自国の文化に対する理解を深める意図で実施されていた。

- 能や狂言を鑑賞し、型や所作から感情を察する楽しみ方を学んだ。ワークショップでの実演指導を通して伝統技能への関心を深めた。
- 地域に伝わる人形浄瑠璃の歴史を学び、実際の演目を鑑賞した。受け継がれる伝統や技のすごさを実感する機会となった。
- 落語家を招き、古典落語の鑑賞と体験を実施した。笑いを通して日本の伝統芸能を身近に感じ、その仕組みを楽しく理解できた。
- 和太鼓の歴史や基礎打法を学び、力強い演奏を鑑賞した。日常生活では触れる機会の少ない音を体感し、新たな感動を味わった。
- 地域の伝統文化である神楽やお囃子を鑑賞・体験した。地域の文化に触れることで、郷土に対する誇りを持つことにつなげた。

■　ワークショップ・体験型活動

鑑賞にとどまらず、自ら手を動かしたり体を動かしたりする体験型のプログラムがあった。華道や陶芸、ダンス、絵画制作等、専門家の指導を受けながら創造性を発揮する活動が挙げられた。

- 華道の講師から指導を受け、生徒一人一人が生け花を体験した。本物の文化に触れることで、道具を大切にする心や作法を学んだ。
- 地元美術家との特別授業で、全校児童が土偶や縄文服を制作して空間アートを創り上げるインスタレーションを実施した。
- ヒップホップダンスのワークショップを行い、トップダンサーの表現に触れながら、自分たちも楽しく身体表現を経験した。
- 地元の職人が講師となり、ランプシェード制作を行った。地元の産業に触れるとともに、ものづくりの楽しさを実感した。
- 美術館と連携して作品鑑賞と模写の授業を行った。学芸員の解説を聞きながら、郷土が生んだ画家の歩みについて理解を深めた。

■　多様性・国際理解・特殊技能

サーカスやマジック、影絵、海外の民族音楽、SDGs をテーマにしたパフォーマンス等、幅広いジャンルの芸術に触れる活動があった。多様な価値観や国際的な視点を養うことを目的としていた。

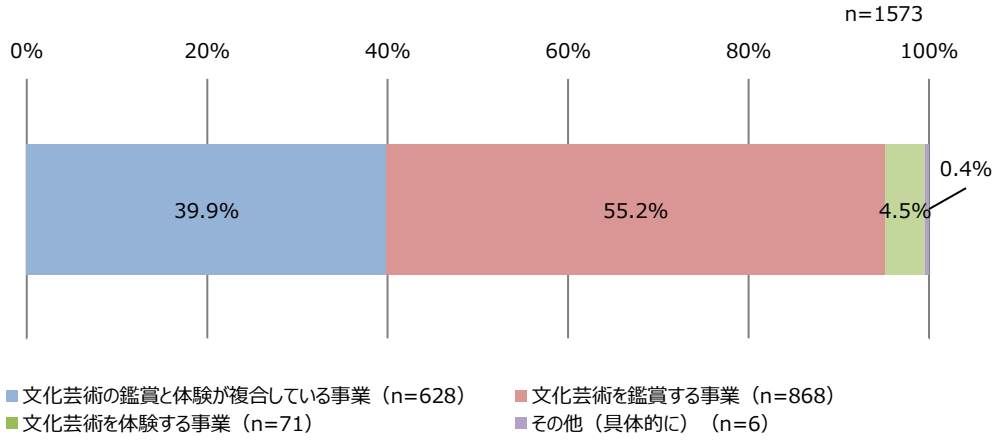
- アフリカ音楽の演奏を通してアフリカの文化を紹介してもらい、国際交流や多文化理解を深める機会となった。
- サーカスとマジックが融合した演目を見学した。人間業とは思えない妙技の連続に、

	子供たちは驚きと感動を味わった。
・	中国式の影絵を鑑賞し、ワークショップでは実際に人形を作成した。当日は代表生徒が自作人形で影絵を披露する場面もあった。
・	SDGs をテーマにしたパフォーマンスを鑑賞し、低学年の児童も環境問題について知るきっかけを楽しく得ることができた。
・	在日韓国人のパフォーマーによるジャグリング鑑賞と体験談を通じ、多様なルーツを持つ人の生き方や、あきらめない心を学んだ。

② 実施概要

実施概要をみると、「文化芸術を鑑賞する事業」の割合が 55.2%と最も高く、「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業」が 39.9%、「文化芸術を体験する事業」が 4.5%と続いていた。昨年度に比べ、「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業」と「文化芸術を鑑賞する事業」の割合が上昇し、「文化芸術を体験する事業」の割合が低下した。

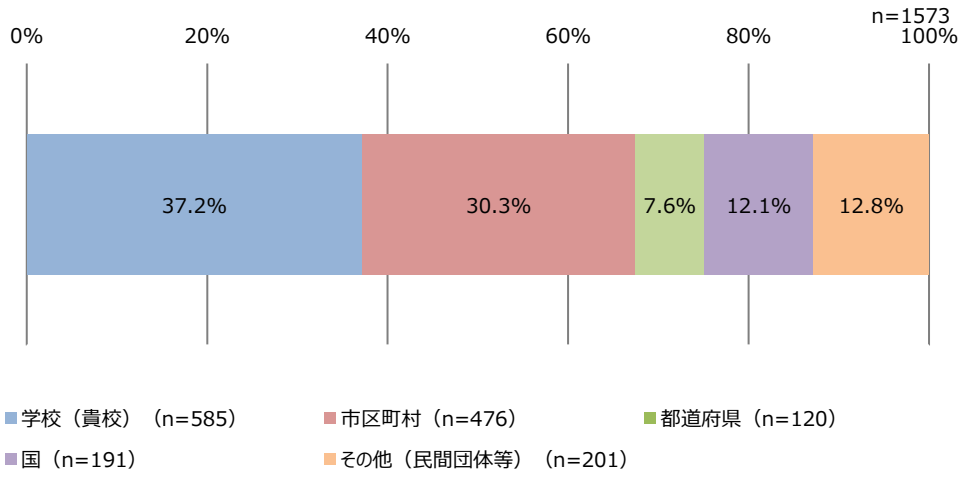
図 2-16　事業の実施概要（単一回答）



③ 実施主体

実施主体をみると、「学校」の割合が 37.2%と最も高く、「市区町村」が 30.3%、「国」が 12.1%と続いていた。昨年度に比べ、「学校」の割合が低下し、「国」及び「その他（民間団体等）」の割合が上昇した。

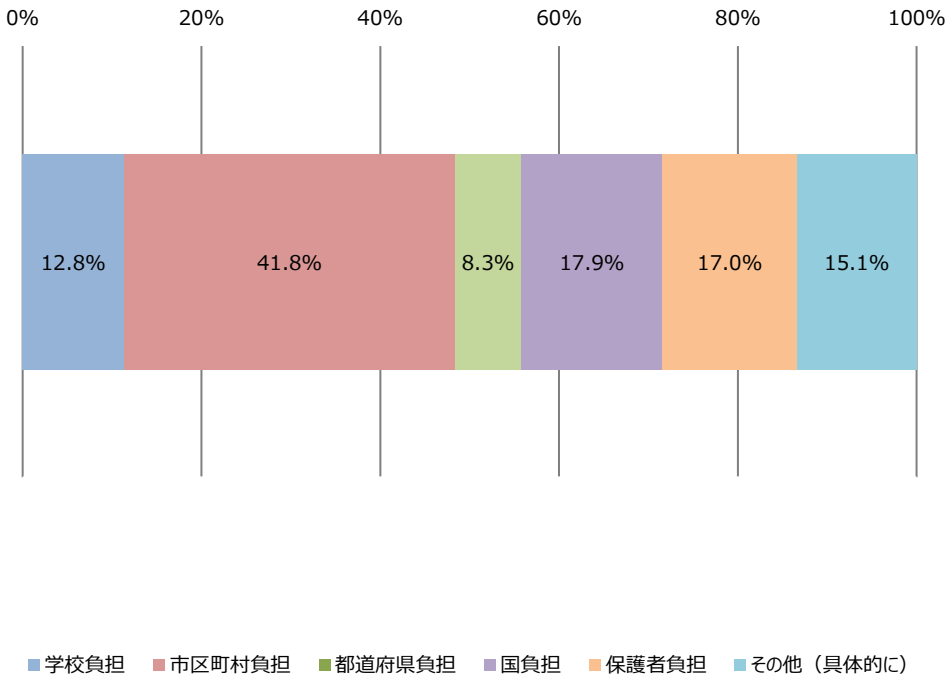
図 2-17　事業の実施主体（単一回答）



④　費用負担

「市区町村負担」の割合が 41.8%と最も大きく、「国負担」が 17.9%、「保護者負担」が 17.0%と同程度であった。なお、「その他」の内容は、自治体の補助金、PTA や教職互助会等の組織による負担のほか、無償との回答も多くみられた。

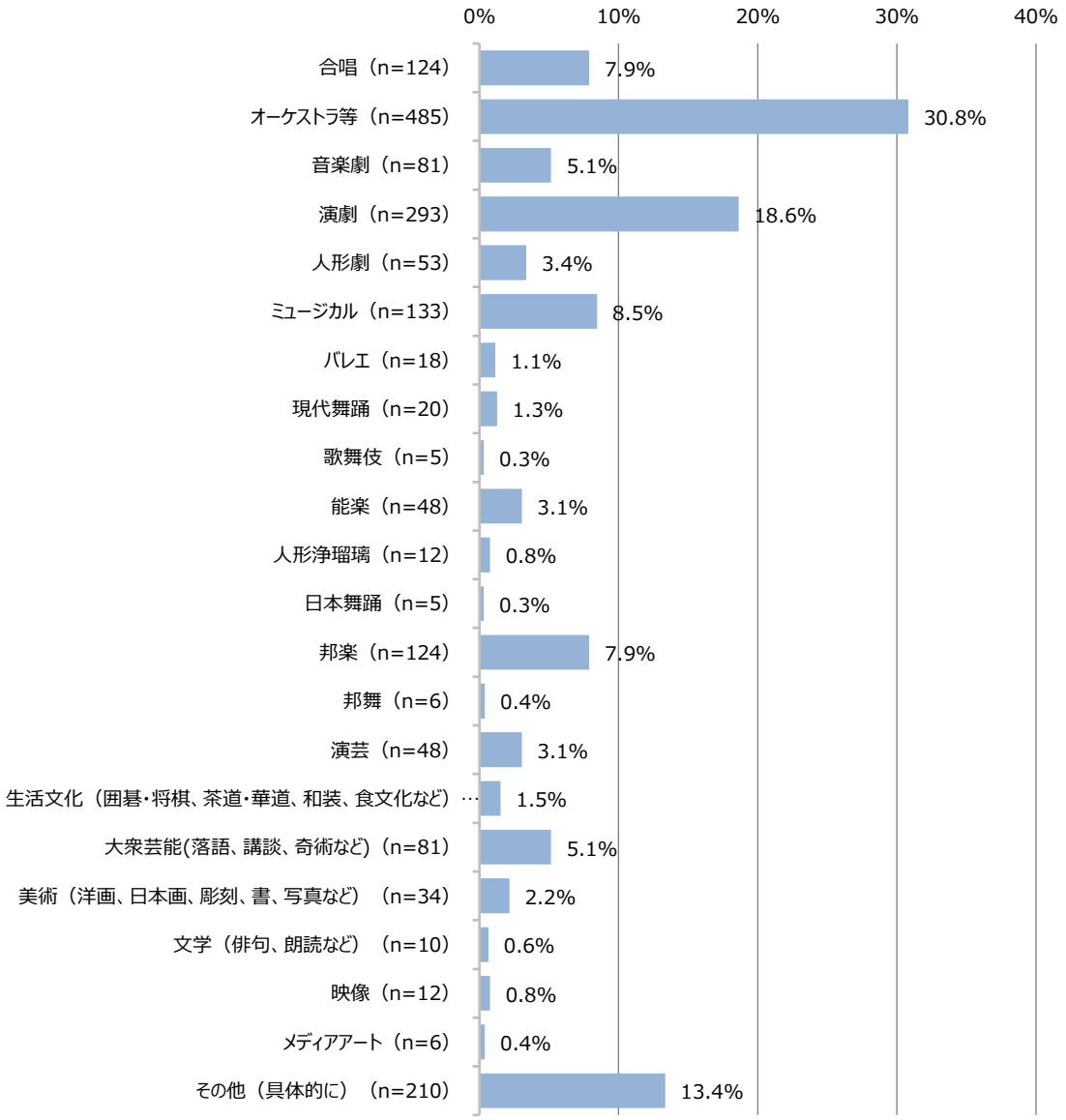
図 2-18　事業の費用負担（単一回答）



⑤　芸術分野種目

芸術分野種目は、「オーケストラ等」の割合が 30.8%と最も大きく、「演劇」が 18.6%、「ミュージカル」が 8.5%、「邦楽」と「合唱」が 7.9%と続いていた。なお、「その他」の内容は、「サーカス」、「ダンス」、「パントマイム」等、身体を使ったパフォーマンスの他、「器楽・管弦楽演奏（アンサンブル、ジャズ、バンド演奏等）」、「和楽器演奏（和太鼓、民謡等）」、「民族音楽」等があった。

図 2-19　事業１の芸術分野・種目（単一回答）



⑥　実施した学年

「小学校」では学年が上がるにつれ実施した割合が大きくなる傾向がみられた。他方、「中学校」では学年が上がるにつれ実施割合が小さくなる傾向がみられた。

図 2-20　参加した学年（小学校）（複数回答）

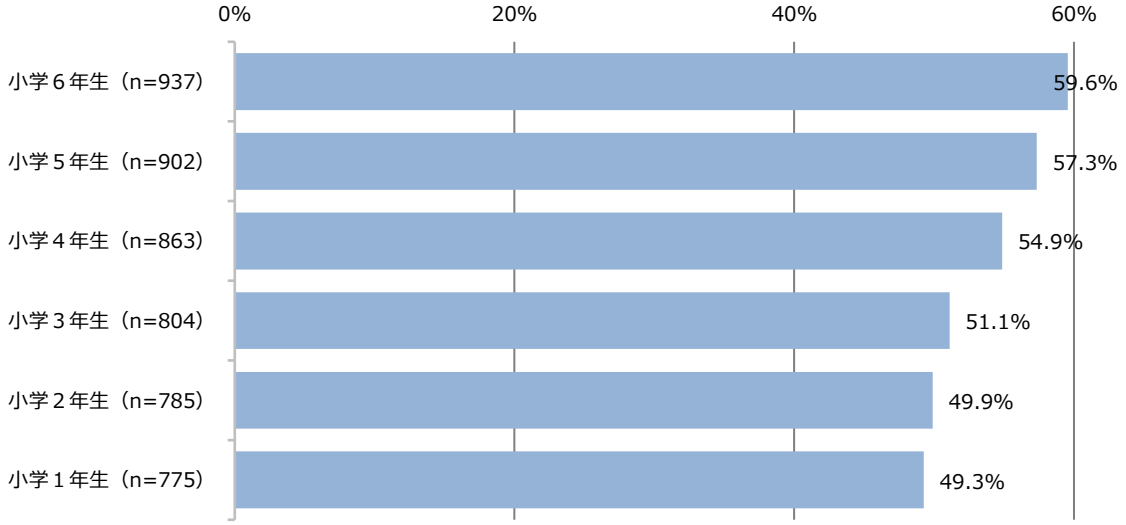
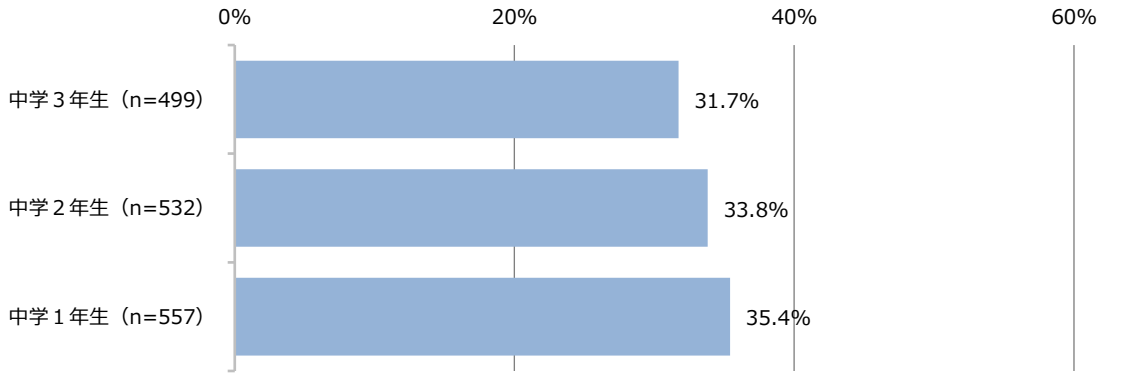


図 2-21　参加した学年（中学校）（複数回答）



⑦　当該学年の児童・生徒数

「実施した学年」同様、「小学校」では学年が上がるにつれ参加児童の人数が多くなる傾向がみられた。他方、「中学校」では学年が上がるにつれ参加生徒の人数が少なくなる傾向がみられた。

図 2-22　当該学年の全児童数（小学校）

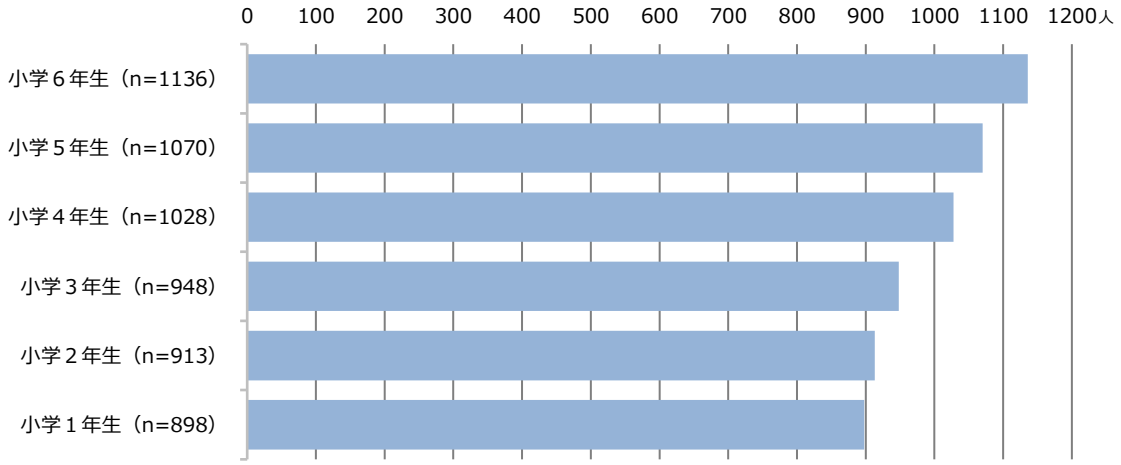
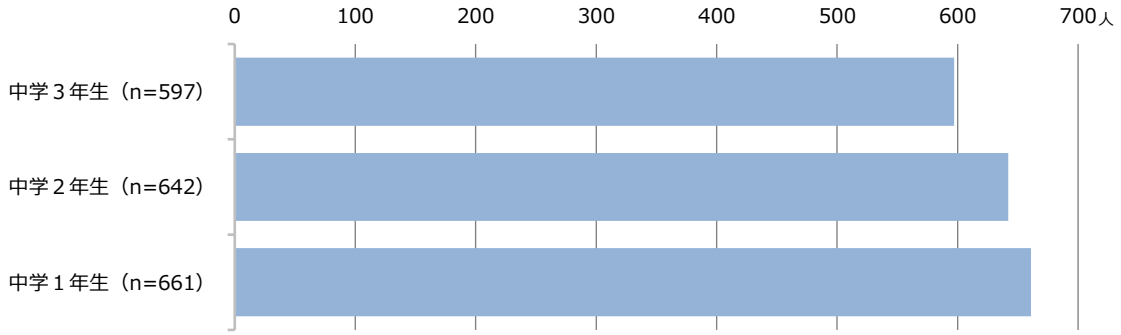


図 2-23　当該学年の全生徒数（中学校）

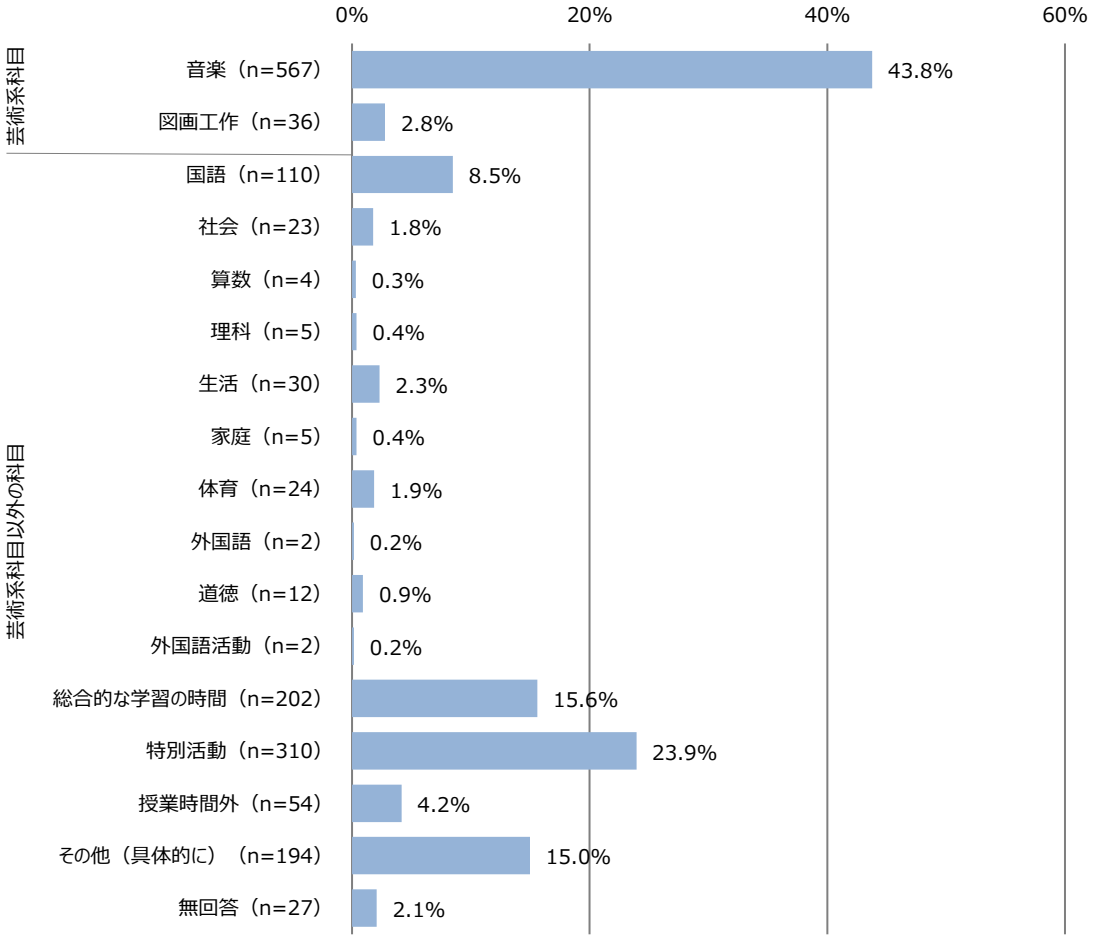


⑨　事業に用いた授業時間

【小学校】

「音楽」の割合が 43.8%と最も高く、「特別活動」が 23.9%、「総合的な学習の時間」が 15.6%と続いていた。なお、「授業時間外」と「その他」の詳細はほぼすべてがが「学校行事」や「文化行事」であった。

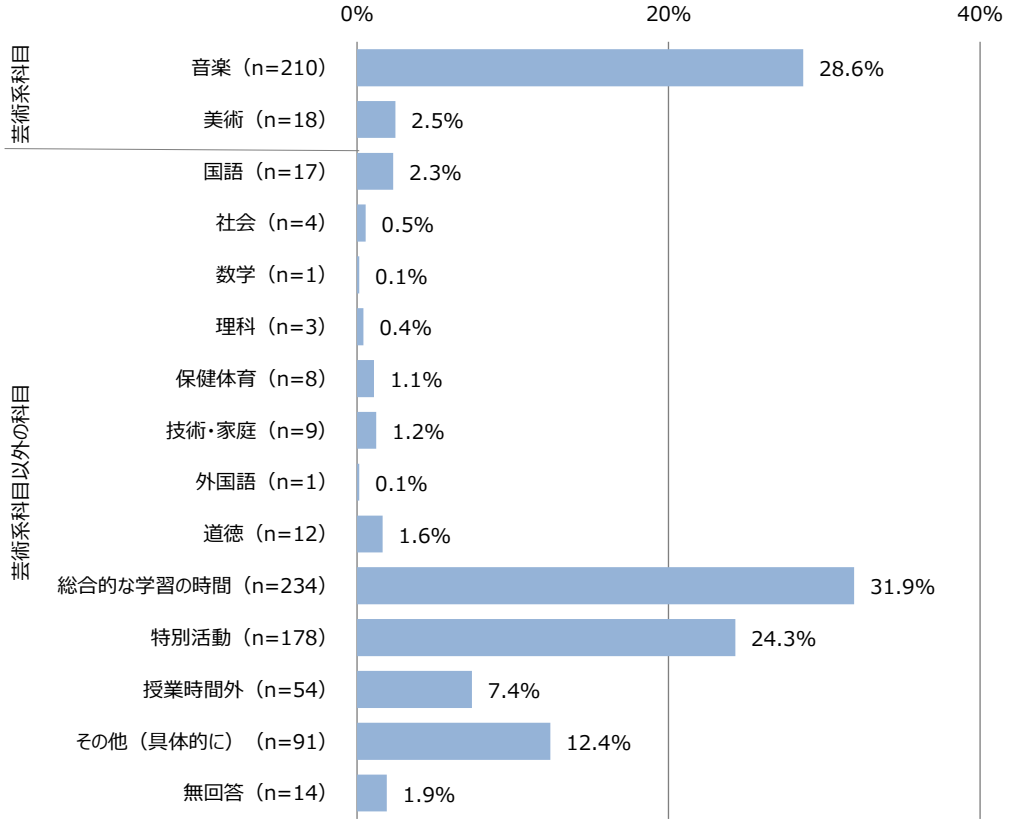
図 2-24　事業に用いた授業時間（小学校）（複数回答／あてはまるものすべて）



【中学校】

「総合的な学習の時間」の割合が 31.9%と最も大きく、「音楽」が 28.6%、「特別活動」が 24.3%と続いていた。なお、「授業時間外」や「その他」の詳細はほぼすべてが「学校行事」や「文化行事」であった。

図 2-25　事業に用いた授業時間（中学校）（複数回答／あてはまるものすべて）

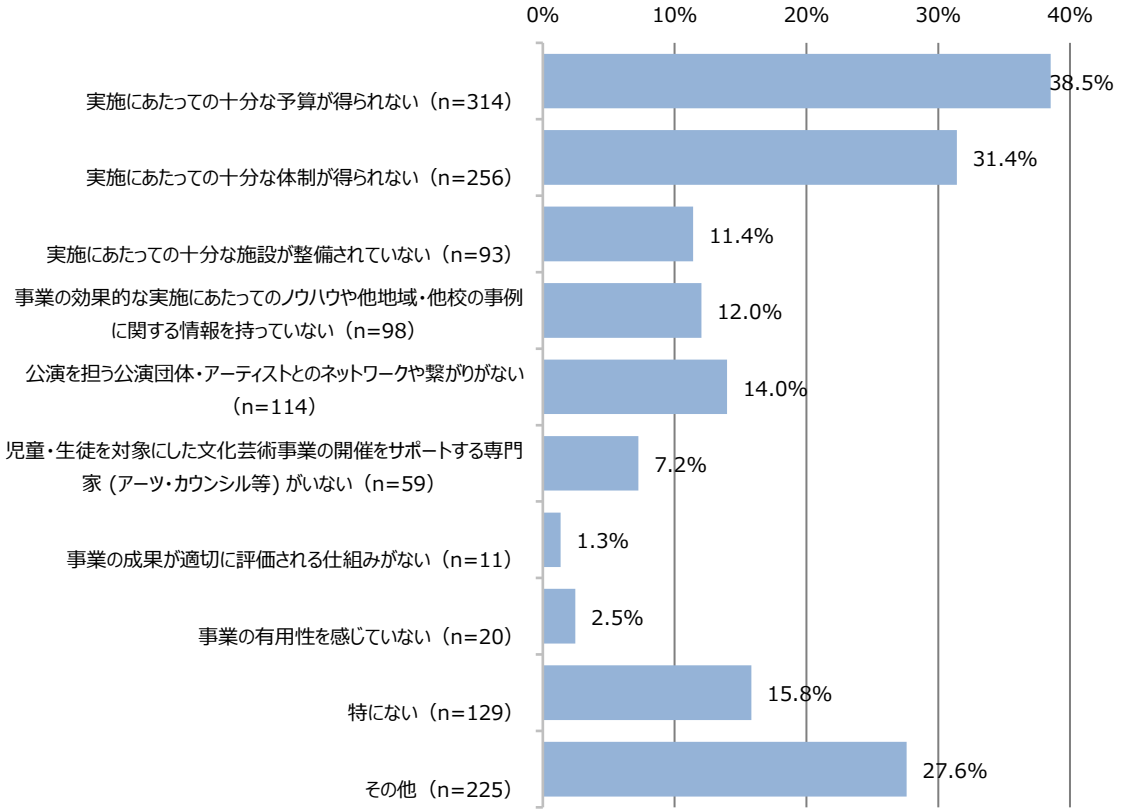


４）令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由

①　全体

全体でみると、「実施にあたっての十分な予算が得られない」の割合が 38.5%と最も高く、次に「実施にあたっての十分な体制が得られない」が 31.4%であった。なお、「その他」は 27.6%であり、詳細は「２、３年に一度の実施としているため」、「行事を精選しているため」、「時間的余裕がないため」、「日程上、行事を組み込むことが難しいため」といった理由が挙げられていた。

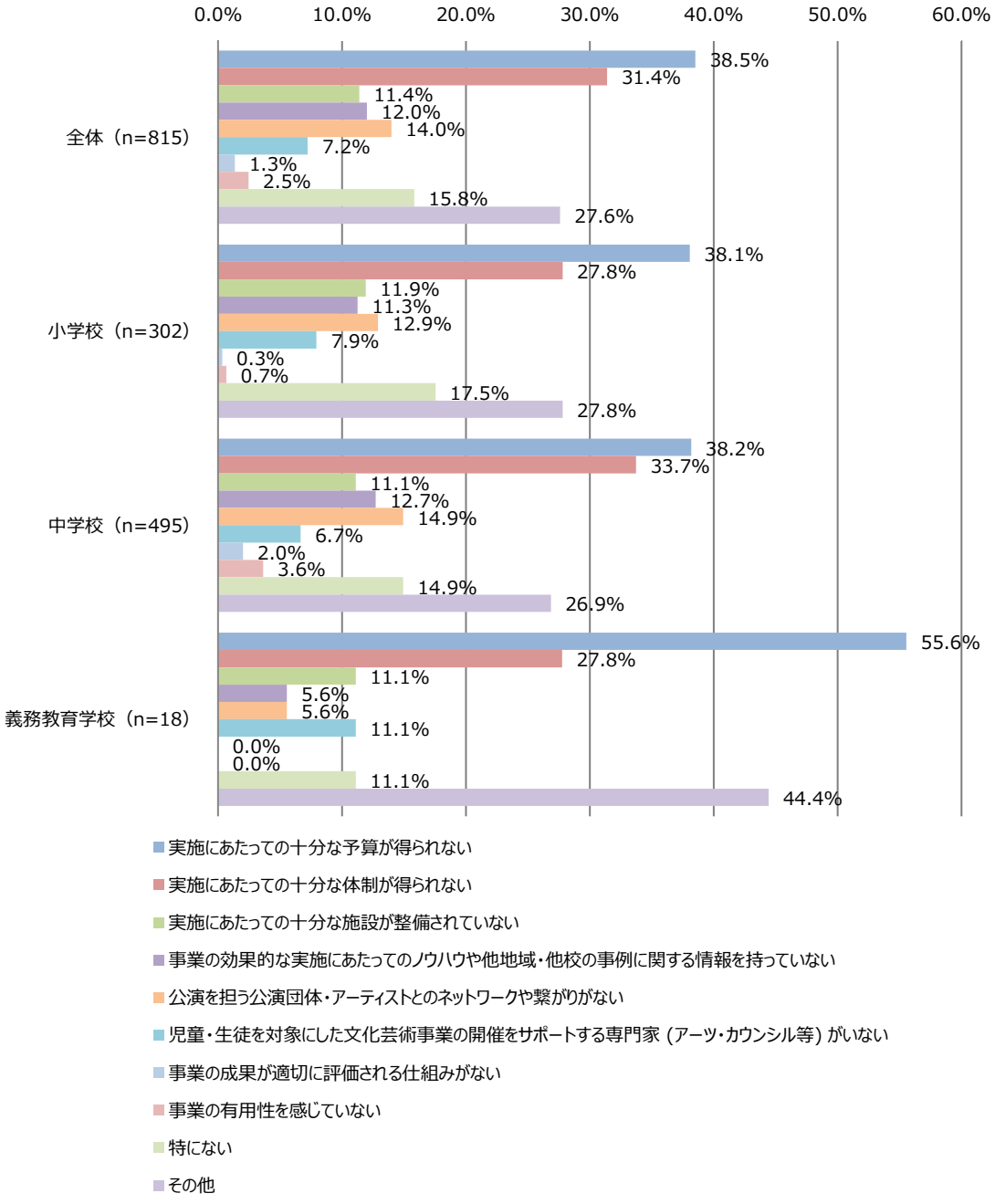
図 2-26　令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由
（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」は「全体」と概ね同様の分布であった。「義務教育学校」では「実施にあたっての十分な予算が得られない」が 50%を超えていた。なお、「特別支援学校」と「その他」においては令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった学校が無かったため、グラフからも省略している。

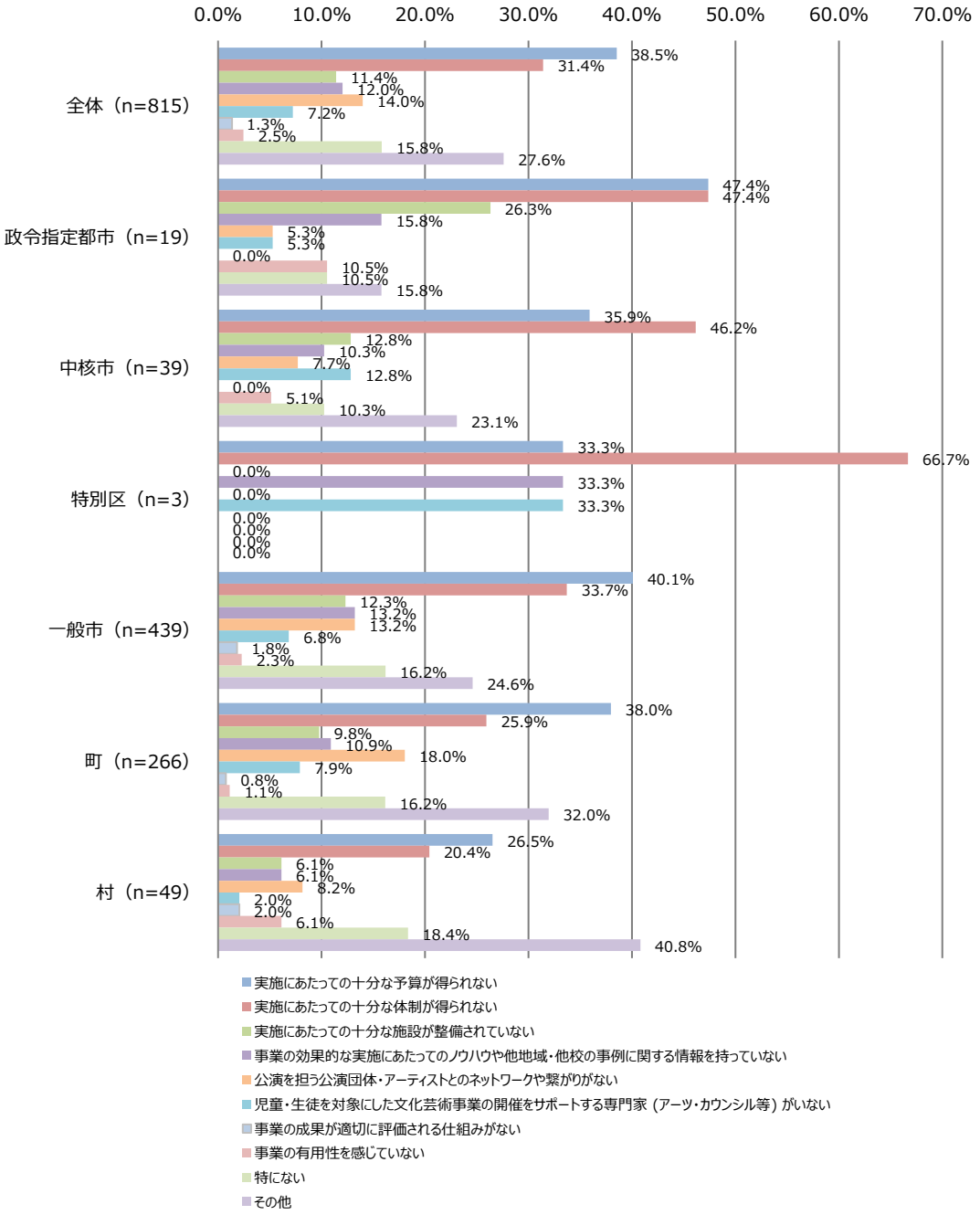
図 2-27　令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由　学校種別（複数回答／３つまで）



③　自治体種別

自治体種別でみると、「中核市」と「特別区」において、「実施にあたっての十分な体制が得られない」と回答した割合が突出して高い。それ以外の種別においては、「実施にあたっての十分な予算が得られない」や「その他」を回答する割合が高い。

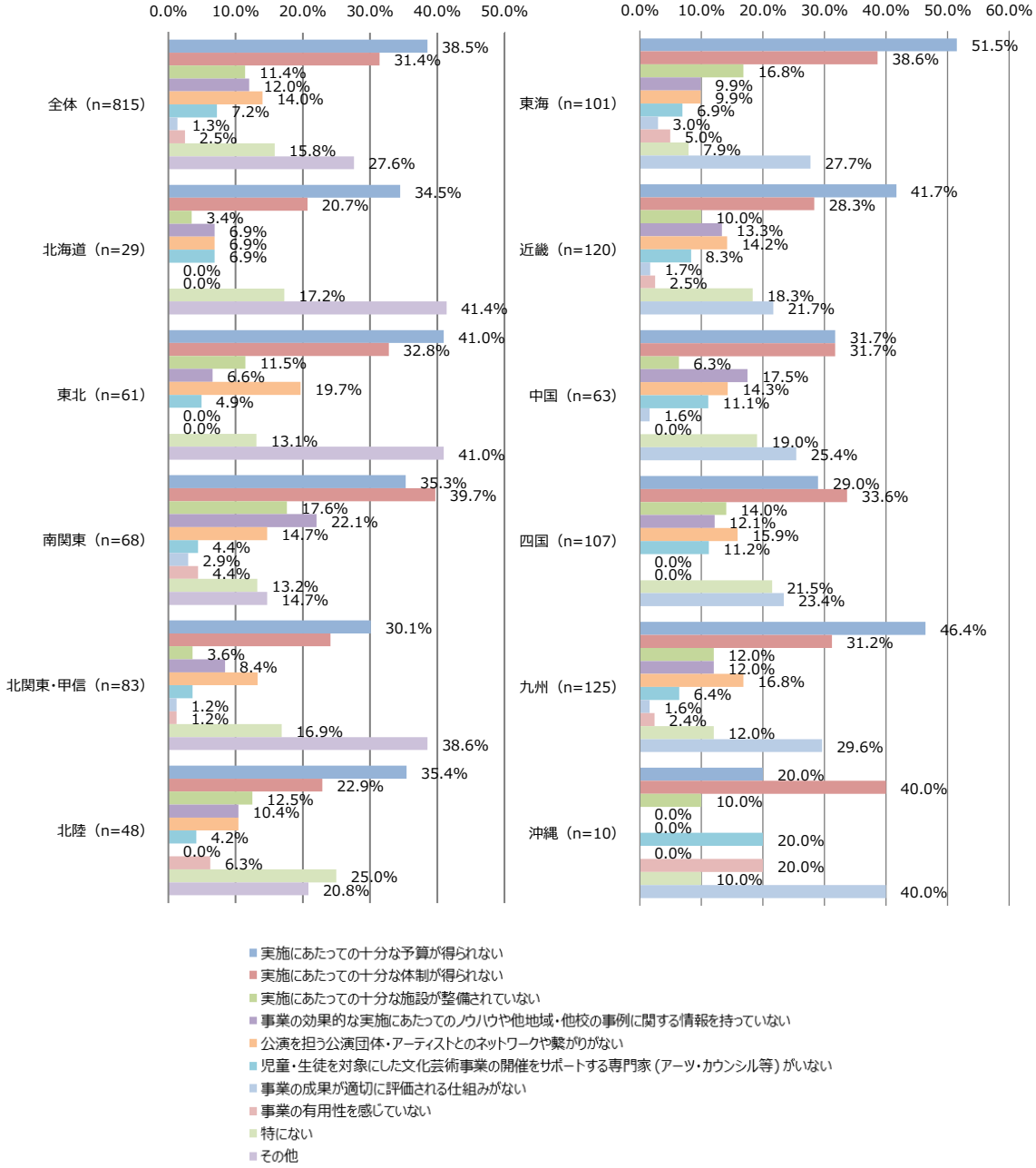
図 2-28　令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由　自治体種別（複数回答／３つまで）



④　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、いずれのブロックでも「実施にあたっての十分な予算が得られない」、「実施にあたっての十分な体制が得られない」を回答する割合が大きい。「東海」及び「九州」において、「実施にあたっての十分な予算が得られない」を回答した割合が突出して大きい。また、沖縄では「実施にあたっての十分な体制が得られない」を回答した割合が大きかった。

図 2-29　令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を実施しなかった理由　広域ブロック別（複数回答／３つまで）



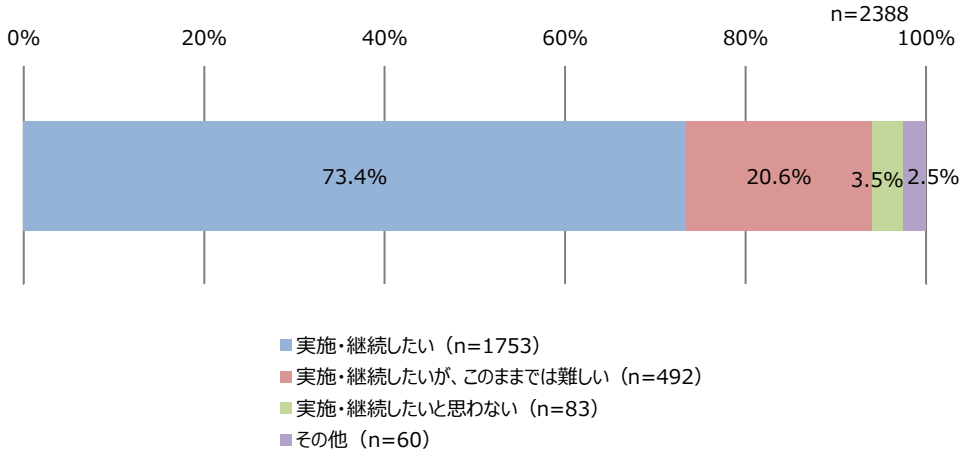
（３）学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向

１）学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向

①　全体

「実施・継続したい」の割合が 73.4%と最も高く、「実施・継続したいが、このままでは難しい」が 20.6%、「実施・継続したいと思わない」が 3.5%と続いていた。

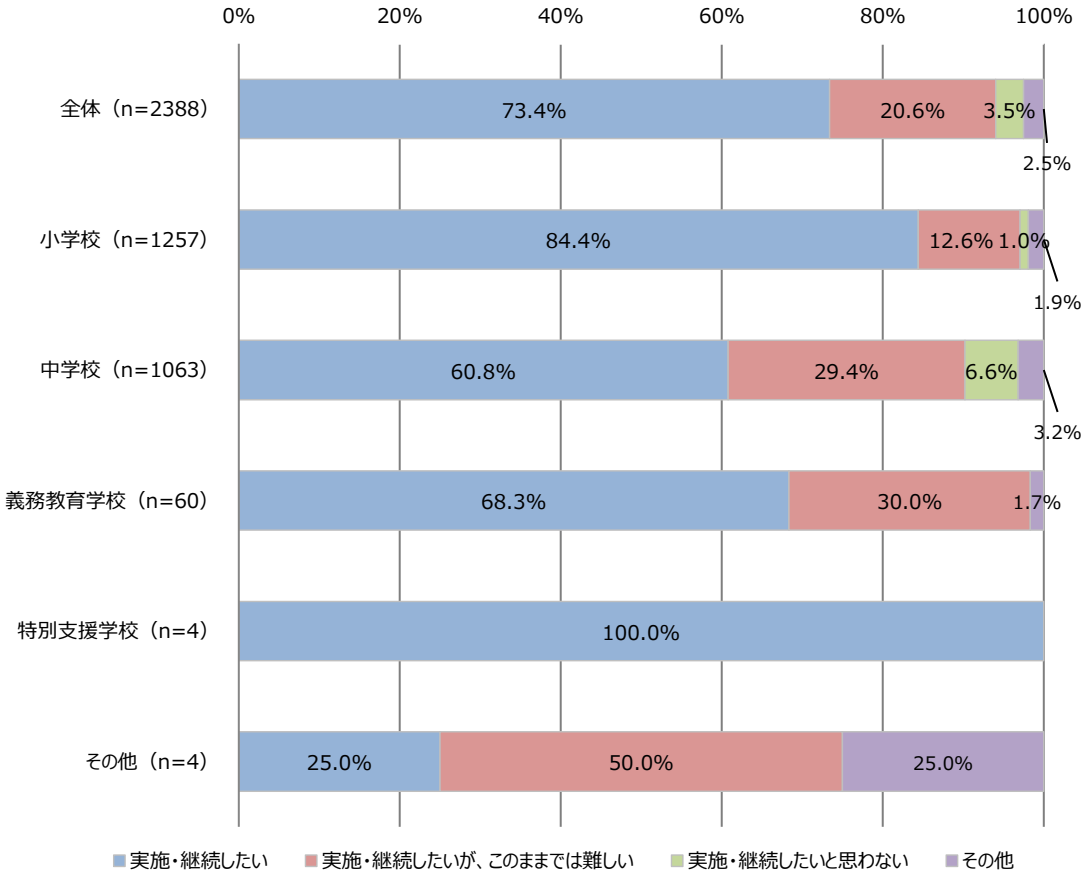
図 2-30　学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向（単一回答）



② 学校種別

学校種別でみると、「特別支援学校」は 100%が「実施・継続したい」と回答していた。また、「小学校」では「実施・継続したい」が 84.4%に達しているのに対し、「中学校」では 60.8%、「義務教育学校」では「68.3%」だった。「中学校」、「義務教育学校」において、「実施・継続したいがこのままでは難しい」の割合が約 30%に達していた。

図 2-31　学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向　学校種別（単一回答）

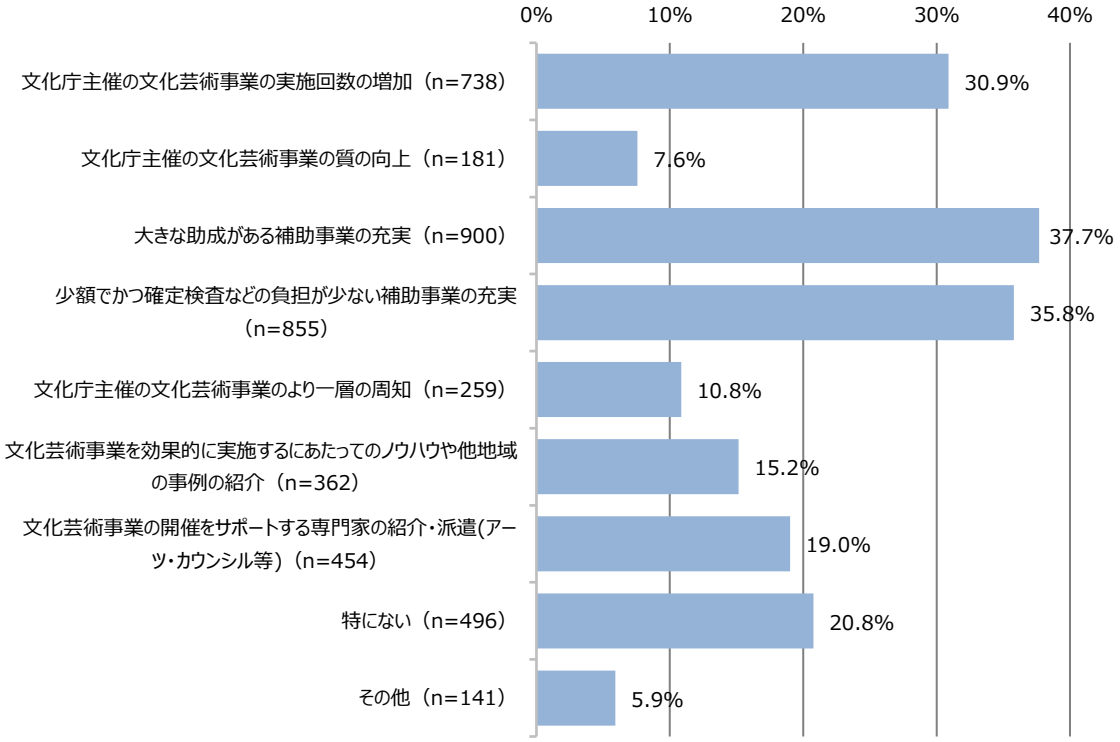


２）学校教育内での文化芸術活動を実施する上での文化庁に対する要望

①　全体

全体では、「大きな助成がある補助事業の充実」の割合が 37.7%と最も大きく、「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」が 35.8%、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」が 30.9%と続いた。他方、「文化庁主催の文化芸術事業の質の向上」や「文化庁主催の文化芸術事業のより一層の周知」は約 10%と割合が小さかった。

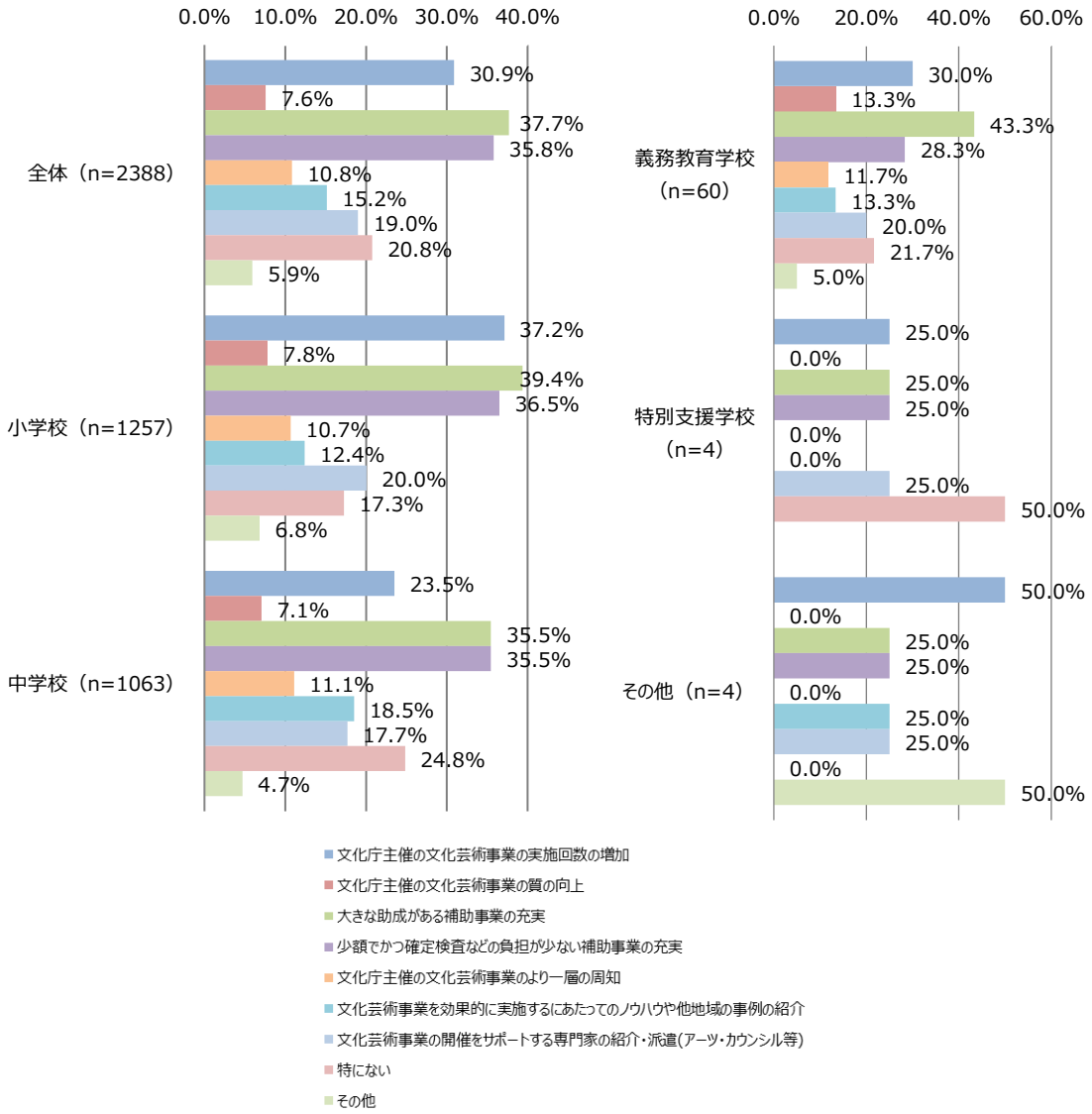
図 2-32　学校教育内での文化芸術活動を実施する上での文化庁に対する要望
（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」においては、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」、「大きな助成がある補助事業の充実」、「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」の割合が約 40%と同程度であった。「中学校」においては、「大きな助成がある補助事業の充実」、「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」が 35.5%と同程度であった。「義務教育学校」においては、「大きな助成がある補助事業の充実」が 43.3%と最も大きかった。「特別支援学校」においては、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」、「大きな助成がある補助事業の充実」、「少額でかつ確定検査等の負担が少ない補助事業の充実」、「文化芸術事業の開催をサポートする専門家の紹介・派遣（アーツ・カウンシル等）」が 25.0%と同程度であった。

図 2-33　学校教育内での文化芸術活動を実施する上での文化庁に対する要望　学校種別（複数回答／３つまで）



（４）学校教育内での文化芸術活動の質向上のための工夫

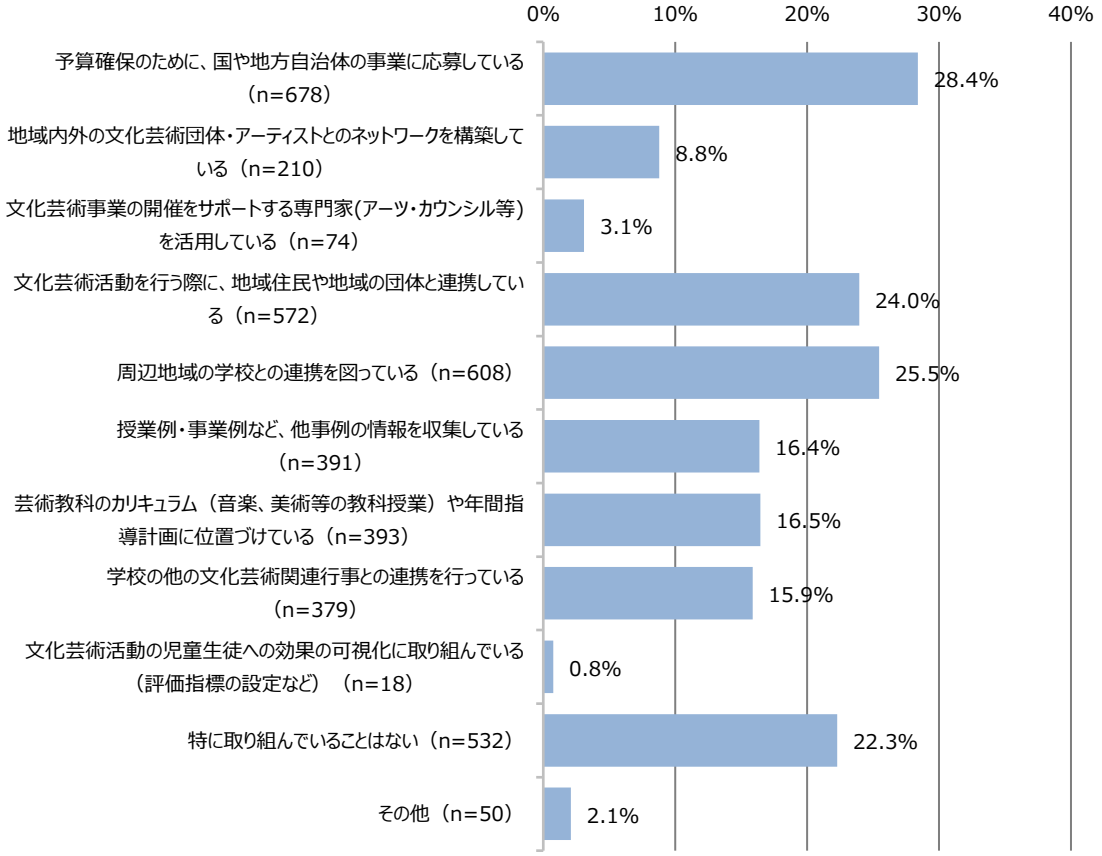
１）学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上のために取り組んでいること

①　全体

全体では、「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」の割合が 28.4%と最も高く、「周辺地域の学校との連携を図っている」が 25.5%、「文化芸術活動を行う際に、地域住民や地域の団体と連携している」が 24.0%と続いていた。

他方、「特に取り組んでいることはない」と回答した学校の割合は 22.3%であり、昨年度の 36.0%よりも低下した。

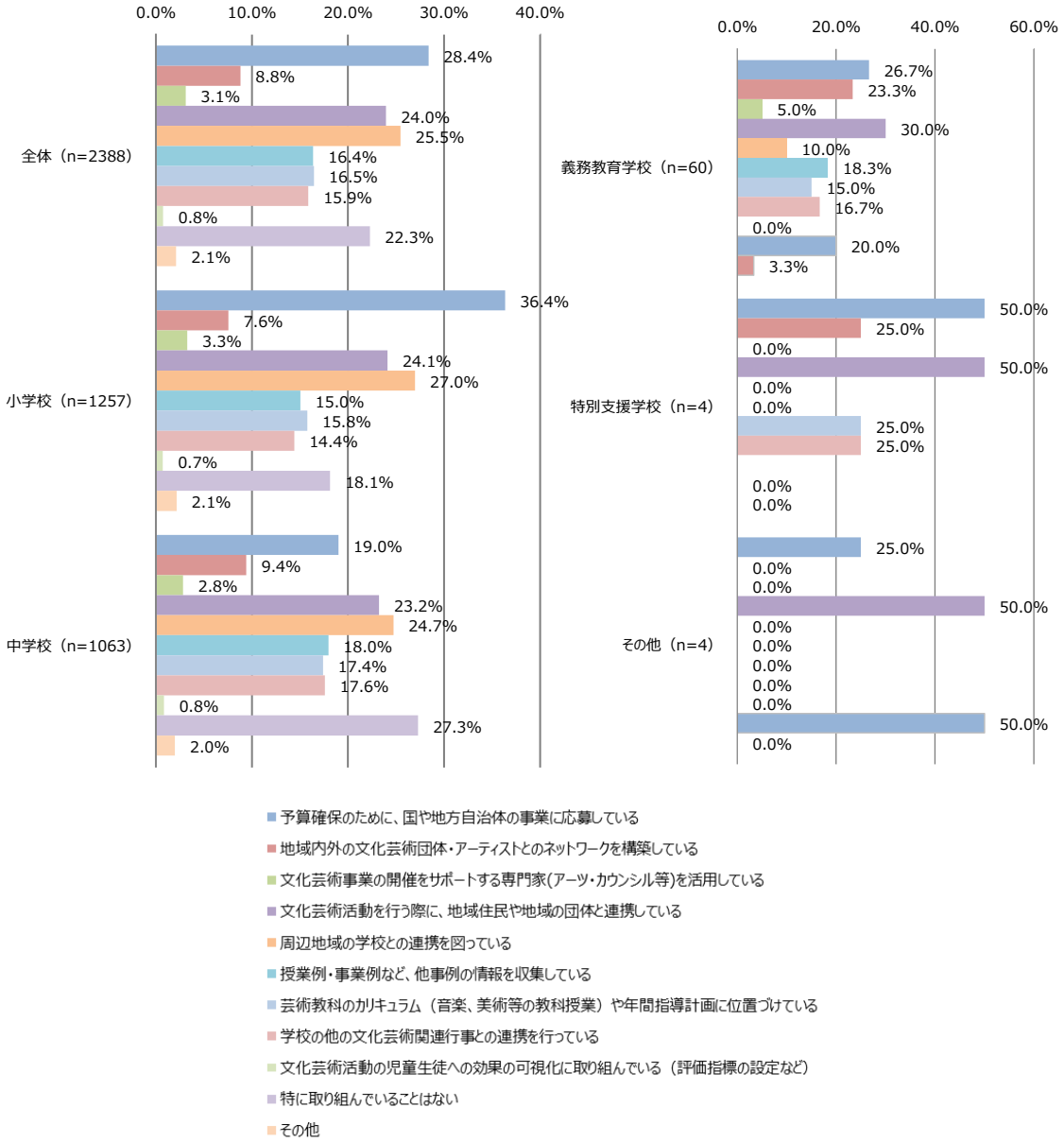
図 2-34　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上のために取り組んでいること（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」では「予算確保のために、国や自治体の事業に応募している」の割合が最も高い。「中学校」では、「周辺地域の学校との連携を図っている」、「文化芸術活動を行う際に、地域住民や地域の団体と連携している」の割合が大きい。「義務教育学校」では、「文化芸術活動を行う際に、地域住民や地域の団体と連携している」の割合が最も大きい。「特別支援学校」では、「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」、「文化芸術活動を行う際に、地域住民や地域の団体と連携している」の割合が同程度であった。

図 2-35　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上のために取り組んでいること（複数回答／あてはまるものすべて）



２）文化芸術活動の効果可視化のための具体的な指標と成果

指標については、アンケートによる意識・関心度の数値化が最も多かった。それ以外には、振り返りシートや記述による変容の可視化、教育課程内での評価といった指標や測定方法が見られた。

自由記述のサマリー

■　アンケートによる意識・関心度の数値化

児童・生徒の興味・関心や満足度を客観的に把握するため、アンケートを活用した数値化に関する意見が最も多く見られた。

- 生徒の文化芸術への興味・関心をアンケートにより数値化し、客観的な把握に努めている
- 文化祭後のアンケートに文化芸術活動に関する項目を設け、生徒の学びや満足度を測定している
- 演劇ワークショップにおいて、非認知能力に関する項目を含めた事前・事後の比較アンケートを継続している
- 文化芸術活動の鑑賞や体験後、その内容への関心度や満足度を調査している
- 児童の文化芸術活動に対する興味・関心の度合いを把握するための調査を実施した

■　振り返りシートや記述による変容の可視化

感想文や振り返りシート等の記述を通じ、生徒の内面的な変化や思考・判断のプロセスを可視化する取り組みが挙げられた。

- 実施団体へのお礼の手紙を書くプロセスを通じ、児童の意識の変化を可視化することに取り組んだ
- 鑑賞した内容や、それに対する自分の考えを文章として書き留めさせている
- 生徒を対象に、活動を通じて学んだことについての振り返り（リフレクション）を実施している
- 鑑賞を通じた心の動きや、鑑賞後の意識・心境の変化を記述から捉えるようにしている
- 行事を含む特別活動において、資質・能力の設定と振り返りを行い、一つ一つの活動を深めている

■　教育課程内での評価

学校独自のカリキュラムや各教科の評価指標に基づき、組織的に資質・能力（知識・技能、思考・判断・表現、主体性）を評価する姿勢が見られた。

- 学校独自の文化カリキュラムを定め、全教科・領域との関連の中で各教科等の指標に基づき評価を行っている

- 知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の 3 観点に基づいた評価を検討している
- 芸術鑑賞を、豊かな感性と感動する心、人間性を育む教育機会として位置づけている
- 和太鼓の学習において、八小節ごとの課題をクリアしていくスモールステップ形式の授業を構築した
- 特別活動で身に付けるべき資質・能力を明確に設定し、可視化と振り返りを行っている

成果については、児童・生徒の意欲向上と興味・関心の拡大に関する成果があったとの回答が最も多かった。それ以外では、本物の体験による感動と感性の育成、自己の生活や将来への還元・自己形成といった児童・生徒への好影響の他、指導体制の整備と教員の指導力向上、外部団体との連携と双方向の交流等、児童・生徒を取り巻く環境に対する好影響についても回答がみられた。

自由記述のサマリー

■　児童・生徒の意欲向上と興味・関心の拡大

本物の文化芸術に触れることで、児童・生徒の学習意欲や特定の分野への興味が大きく高まったという回答が最も多くみられた。

- 文化財鑑賞を通じ、文化財への関心や「守っていきたい」という意欲が数値として向上した。
- 和太鼓への興味が強まり、地元の太鼓経験者も異なる打ち方に挑戦する等、向上心を持って取り組む姿が見られた。
- 事前提示によって児童が意欲的に取り組むようになり、中には自分で興味を持って深掘りして学習する子も現れた。
- 鑑賞後のアンケートでは、70%以上の生徒が「また鑑賞したい」「自分でも楽器に親しみたい」と回答した。
- 文化芸術を身近に感じることで、同じカテゴリーの演目をさらに見たいという要望が多く上がった。

■　本物の体験による感動と感性の育成

プロの表現を間近で体感することで、日常では味わえない感動や新たな発見、心の動きがあったという回答がみられた。

- 普段触れる機会のない本物の演劇の迫力や表現技法について、多くの児童が新たな発見をしていた。
- 約 90%の子供たちが、鑑賞によって「興奮」や「歓喜」といった心の動きを経験し、

体験を心に刻んでいる。

- 全国レベルのダンスを間近で見たことが「最高の思い出」となり、苦手意識があった子も楽しむことができた。
- 合唱団の歌声に感動し、その経験を自分たちの卒業式の合唱に生かそうとする等、感銘が行動につながった。
- 伝統文化に直接触れる体験そのものが、児童にとって非常に有意義な学びとなった。

■　自己の生活や将来への還元・自己形成

鑑賞や体験を通じて、自分のアイデンティティを見つめ直したり、将来の目標を見出したりする効果が見られた。

- 児童のアイデンティティ形成に必要な「物語性」を重視することで、地域への愛着を深めることができた。
- 鑑賞した演劇や演奏の素晴らしさに触れ、それを自身の生活や将来に生かそうという気持ちを持つ児童が見られた。
- 「見る」だけでなく「自ら体験する」過程を通じて、満足感の高い学びを得ることができた。
- 実施団体との手紙のやり取り等の相互交流により、児童がより一層の充実感を得ることができた。
- 評価指標を教育課程と連携させることで、児童の成長を自然な形で促している。

■　指導体制の整備と教員の指導力向上

文化芸術活動の実施をきっかけに、学校側の指導体制や教員の資質向上に繋げている事例が挙げられた。

- 児童に身に付き始めている力を日頃の関わりや授業に活用し、教師自身の指導・支援力の向上に役立てている。
- 特別活動における資質・能力について今年度中に整理・検証を行い、次年度から本格的に推進する体制を整えた。
- 評価指標を独立させず教育課程内に組み込むことで、教員の負担を増やさずに継続的な実施を可能にしている。
- 鑑賞後の文章表現を通じて成果を判断し、その後の教育活動に活かす仕組みを構築している。
- 実施した取り組みが好評を博し、次年度以降の成果とりまとめに向けた見通しが立っている。

■　外部団体との連携と双方向の交流

実施団体とのやり取りやプロからの直接指導が、教育効果をより高めているという回

答が見受けられた。

- 実施団体へ感想の手紙を送り、返事をもらうという双方向のやり取りが、児童の満足度を高める要因となった。
- プロから直接ダンスを教えてもらいながら一緒に踊ることで、技術的な向上だけでなく楽しさを共有できた。
- 外部の専門的な視点を取り入れることで、生徒の実際の意見や反応を客観的に把握することが可能になった。
- 本物の芸術に触れる場を設定したことで、学校単独では難しい「質の高い体験」を提供でき、好評を得た。
- 地域や外部団体との連携を深めることが、結果として児童の意欲的な参加につながっている。

３）学校教育内での文化芸術活動の効果を高めるために前後の学習で工夫したこと

前後の学習における工夫に関しては、事前学習による知識の習得と意欲喚起が最も多くみられた。それ以外では、事後の振り返りと感想の共有による学びの定着、実技指導・ワークショップと主体的な参加、各教科・学校行事との有機的な連携、地域・外部機関との連携と環境づくりといった回答がみられた。

自由記述のサマリー

■　事前学習による知識の習得と意欲喚起

事前に関連知識を学ぶことで、児童・生徒の興味・関心を高め、当日の理解を深める取り組みが最も多く見られた。

- 音楽の授業や給食時の放送を通じ、事前に演奏曲や楽器、作曲家について予習を行っている。
- 劇団のリーフレットやチラシ、動画等を活用し、視覚的に当日のイメージを持たせている。
- 「スーホの白い馬」や「走れメロス」等、国語の教科書教材や図書室と連携した調べ学習を実施している。
- 鑑賞のマナーや心構えを事前に指導し、学ぶ姿勢を整えた上で臨めるようにしている。
- アーティストや演者の経歴を調べ、自分たちとの接点を見出すことで親近感を高めている。

■　振り返りと感想の共有による学びの定着

実施後に感じたことを言語化し、他者と共有することで、体験を一過性に終わらせない工夫が広く行われていた。

・　鑑賞直後に振り返りシートやアンケートを記入し、自分の心の動きを言語化させている。
・　感想文を校内に掲示したり、学級だよりで紹介したりすることで、児童・生徒同士の感動を共有している。
・　演者や劇団に対し、感謝の気持ちを込めたお礼の手紙を書く活動を取り入れている。
・　タブレット端末を活用して感想を集約し、教師がコメントを返すことで学びを価値付けている。
・　体験した内容を日記や新聞にまとめ、アウトプットを通じて自己の変容を自覚させている。

■　実技指導・ワークショップと主体的な参加

プロから直接指導を受けるワークショップを設け、共演や練習を通じて主体性を引き出す取り組みがみられた。

・　事前ワークショップで習った劇中歌やダンスを、本公演までの期間に学級で練習している。
・　当日のプログラムの中で、プロの演奏家や俳優と児童・生徒が共演できる機会を設けている。
・　指揮者体験や楽器体験等、見るだけでなく実際に身体を動かす参加型の内容を取り入れている。
・　ワークショップの様子を動画に記録し、繰り返し視聴することで技術の習得や意欲向上に繋げている。
・　「太鼓の達人」のようなゲーム感覚やクイズを取り入れ、楽しく参加できる環境を作っている。

■　各教科・学校行事との有機的な連携

・　単発のイベントとしてではなく、年間のカリキュラムや学校行事の中に位置づける工夫が見られる。
・　芸術鑑賞を学習発表会や文化祭の直前に設定し、プロの表現を自分たちの演技や合唱の模範にしている。
・　音楽科のオーケストラ学習や、社会科・道徳科の伝統文化学習等、授業単元に合わせて実施時期を調整している。
・　体育の「表現運動（ダンス）」と連携し、体験した動きを授業に取り入れている。
・　総合的な学習の時間において、地域の伝統芸能を継承する活動の一環として位置付けている。
・　美術科において、地域の工芸職人を招聘する等、専門性の高い外部講師と連携している。

■　**地域・外部機関との連携と環境づくり**

学校内だけでなく、地域住民や保護者を巻き込んだり、外部の専門機関を活用したりして効果を高めていた。

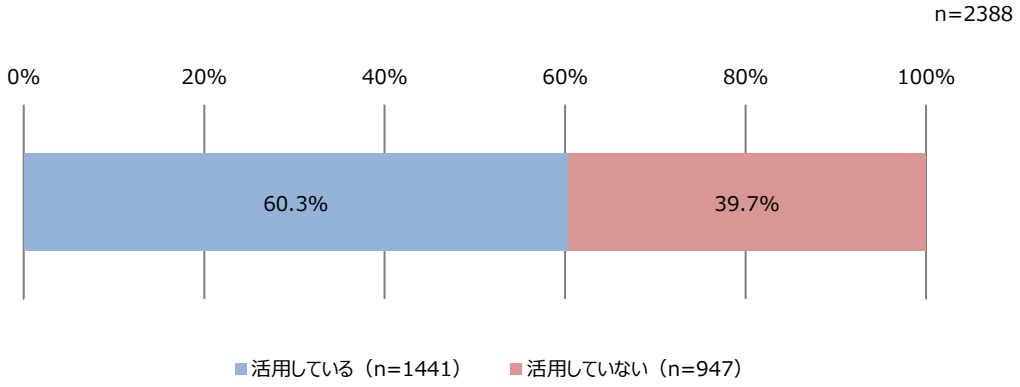
- 地域住民や保護者にも鑑賞を呼びかけ、大勢の観客の前で発表・鑑賞する「本物」の緊張感を演出している。
- 地域の保存会や文化協会と連携し、地元の伝統文化を学ぶ場として活用している。
- 市の文化会館等、音響や設備の整った専門的な施設を会場として利用している。
- 司書や学芸員をゲストティーチャーとして招き、専門的な視点からの解説を仰いでいる。
- 他の学校と情報を共有し、教育効果の高い実践について教員同士で意見交換を行っている。

４）学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業における ICT の活用状況

①　全体

全体でみると、文化芸術活動（学校教育内での文化芸術活動及び芸術教科の授業）行う際、タブレット等の ICT 機器を「活用している」と回答した割合は 60.3%であり、昨年度の 56.3%よりも上昇していた。

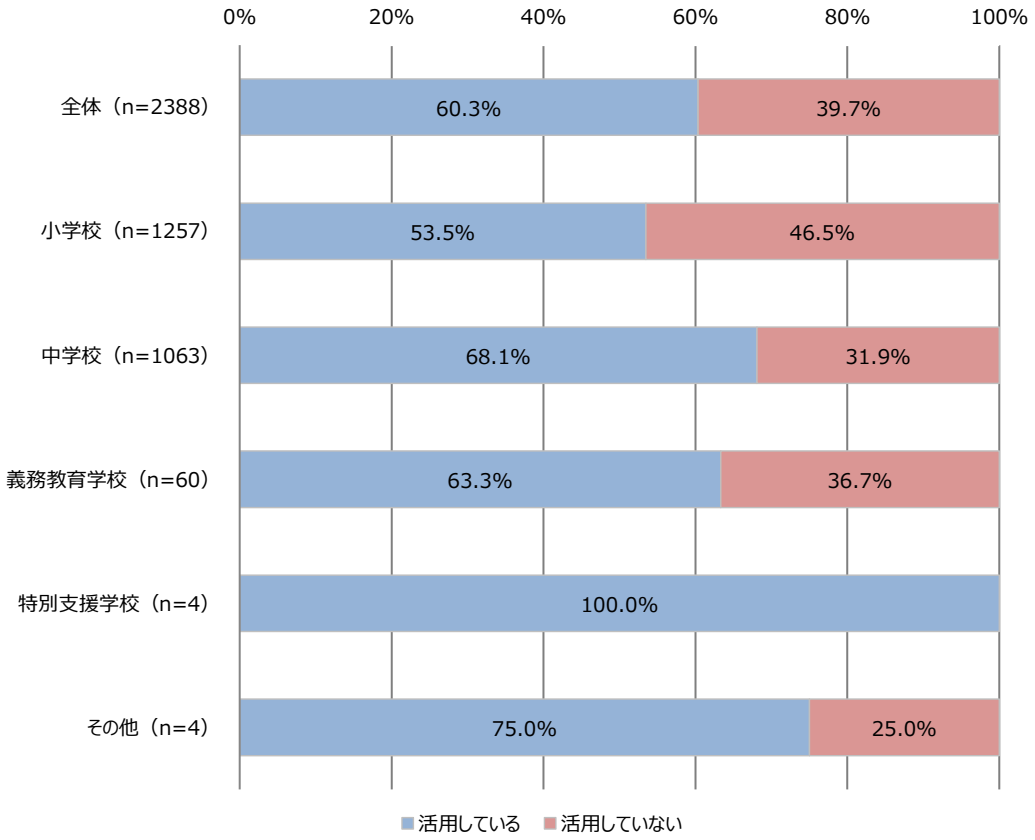
図 2-36　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業における ICT の活用状況（単一回答）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」では「活用している」の割合が 53.5%、「中学校」では 68.1%、「義務教育学校」では 63.3%、「特別支援学校」では 100.0%であった。

図 2-37 学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業における ICT の活用状況 学校種別（単一回答）

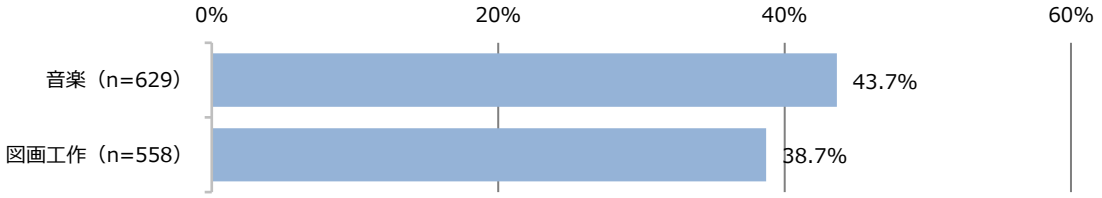


５）ICT を活用した芸術科目

①　小学校

小学校における芸術科目での ICT 活用状況をみると、「音楽」では 43.7%が、「図画工作」では 38.7%が ICT 機器を活用していた。

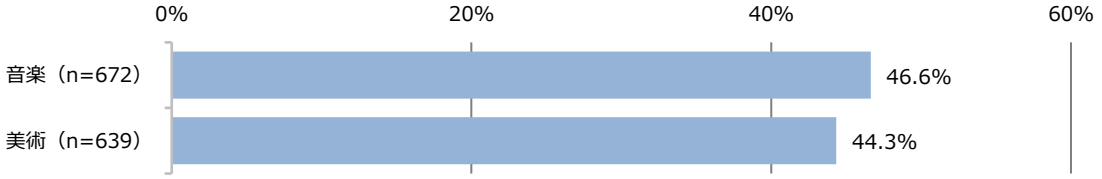
図 2-38　タブレット等の ICT 機器を活用した芸術教科
（複数回答／あてはまるものすべて）



②　中学校

中学校における芸術科目での ICT 活用状況をみると、「音楽」では 46.6%が、「美術」では 44.3%が ICT 機器を活用していた。

図 2-39　タブレット等の ICT 機器を活用した芸術教科
（複数回答／あてはまるものすべて）



６）ICT の具体的な使用方法や取組内容

芸術科目における具体的な使用方法や取組内容については、鑑賞教材や関連情報の調査・検索に関する回答が最も多くみられた。それ以外では、演奏や制作過程の記録と客観的な振り返り、作品の共有と相互鑑賞・意見交流、創作活動といった回答が見受けられた。

自由記述のサマリー

■　鑑賞教材や関連情報の調査・検索

インターネットやデジタル資料を活用し、作品の背景や作者、楽器の知識等を調べる活動が最も多く挙げられた。事前学習として知識を深めることで、鑑賞への意欲や理解を高めるために活用されていた。

- 鑑賞する作品の背景や歴史的背景、作者の意図、使用されている楽器について詳しく調査した
- 実際に見に行くことが難しい遠方の美術品や伝統芸能を、動画サイトや HP で検索して鑑賞した
- 教科書の QR コードを読み取り、関連する動画や音源を視聴して、より深い学びにつなげた
- 世界の民族音楽や伝統工芸について各自でテーマを決め、調べた内容をまとめる学習を行った
- 芸術鑑賞会の前に、出演団体や演目について HP の画像や動画を見せて事前学習を実施した

■　演奏や制作過程の記録と客観的な振り返り

自分たちの演奏や作品の制作過程を写真・動画で記録し、自己評価や改善に役立てる活用が目立つ。自身の動きや音を客観的に確認することで、技能の向上や試行錯誤を促すツールとなっている。

- 合唱やリコーダーの演奏を動画で撮影し、自分の音程やリズムを客観的に確認して練習に生かした
- 図工の制作過程を継続的に写真で記録し、振り返りポートフォリオとして活用している
- 体育のマット運動やダンスのフォームを撮影し、お手本動画と比較して改善点を見つけた
- 納得のいくまで何度も録音・録画を繰り返し、『ベストテイク』を教師に提出させた
- 講師の手元の動きをタブレットで撮影し、大型モニターに映して細かい技術を確認させた

■　作品の共有と相互鑑賞・意見交流

タブレット上で作品を共有し、互いの良さを認め合ったり、感想をリアルタイムで交流したりする活動が多く見られた。他者の視点に触れることで、感性や表現の幅を広げる手段として有効活用されている。

- 制作した図工作品を撮影して共有アプリに登録し、クラス全員で互いの作品を鑑賞し合った
- 鑑賞した曲の感想をオンライン上のカードに記入し、クラスメイトの多様な感じ方を共有した
- 友達の作品や演奏に対して、デジタルワークシート上でアドバイスや賞賛のコメントを送り合った
- 共有ツールを使い、他の児童の制作途中の工夫をいつでも手元で確認できるようにした
- グループで作成したリズムアンサンブルを共有し、お互いに聴き合って評価し合った

■　デジタルツールを用いた創作活動

アプリを活用した作曲やデザイン、プログラミングによる表現等、ICT ならではの創作活動に取り組む事例も多い。従来の手段では難しかった表現を、直感的な操作で実現している。

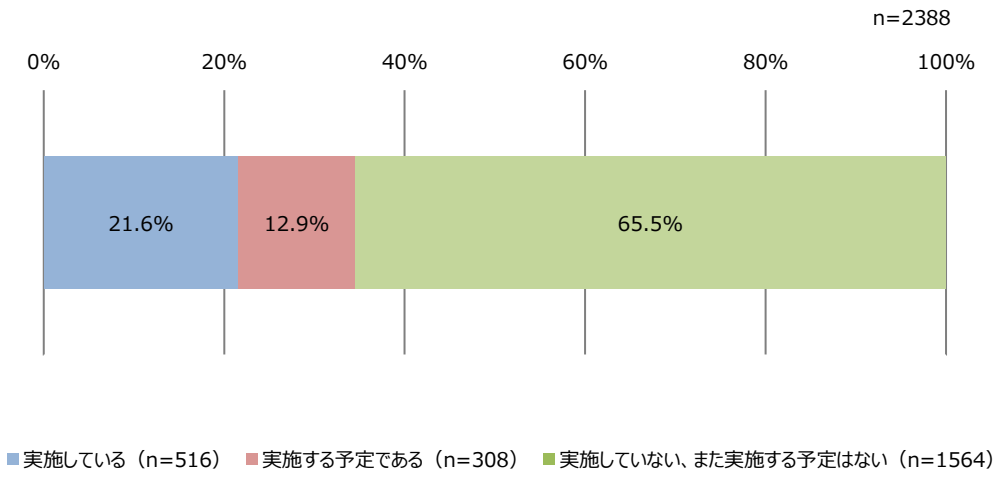
- 作曲アプリやデジタル教科書の機能を使い、自分だけの旋律やリズムアンサンブルを作成した
- 図工で描いた絵を動かすプログラミング学習や、写真をつなげたコマ撮りアニメ制作を行った
- 自分が気に入った風景を写真に撮り、その構図を参考にしながら絵画の下描きや着彩に生かした
- デジタルデータを用いたデザイン画の作成や、お絵描きアプリを使った描画活動に取り組んだ

７）文化芸術活動と芸術以外の教科における「教科横断的な学び」の取組状況

①　全体

文化芸術活動（学校教育内での文化芸術活動及び芸術教科の授業）と芸術教科以外の教科との横断的な学びへの取組状況については、「実施していない、また実施する予定はない」の割合が 65.5%と最も高く、昨年度の 62.8%より上昇した。「実施している」の割合は 21.6%、「実施する予定である」の割合は 12.9%であった。

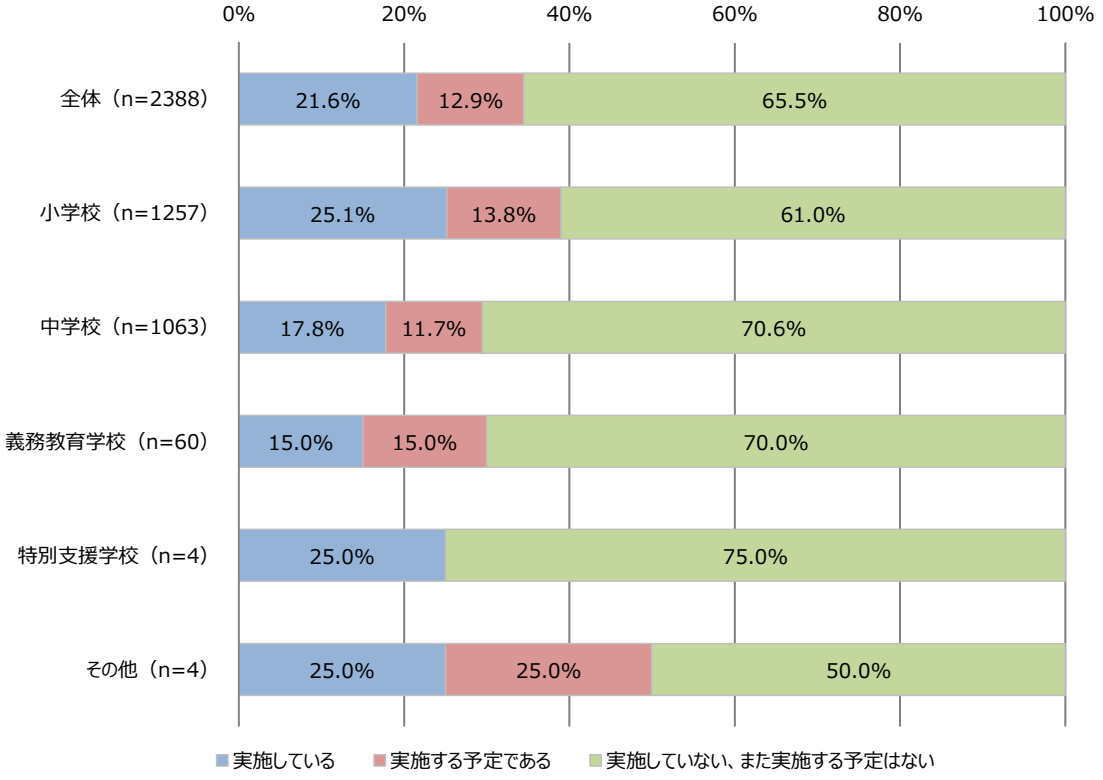
図 2-40　文化芸術活動と芸術以外の教科における「教科横断的な学び」の取組状況（単一回答）



② 学校種別

学校種別でみると、「中学校」と「義務教育学校」において「実施している」の割合が 20%を下回った。「小学校」、「特別支援学校」では「実施している」の割合が約 25%であった。

図 2-41　文化芸術活動と芸術以外の教科における「教科横断的な学び」の取組状況
学校種別（単一回答）

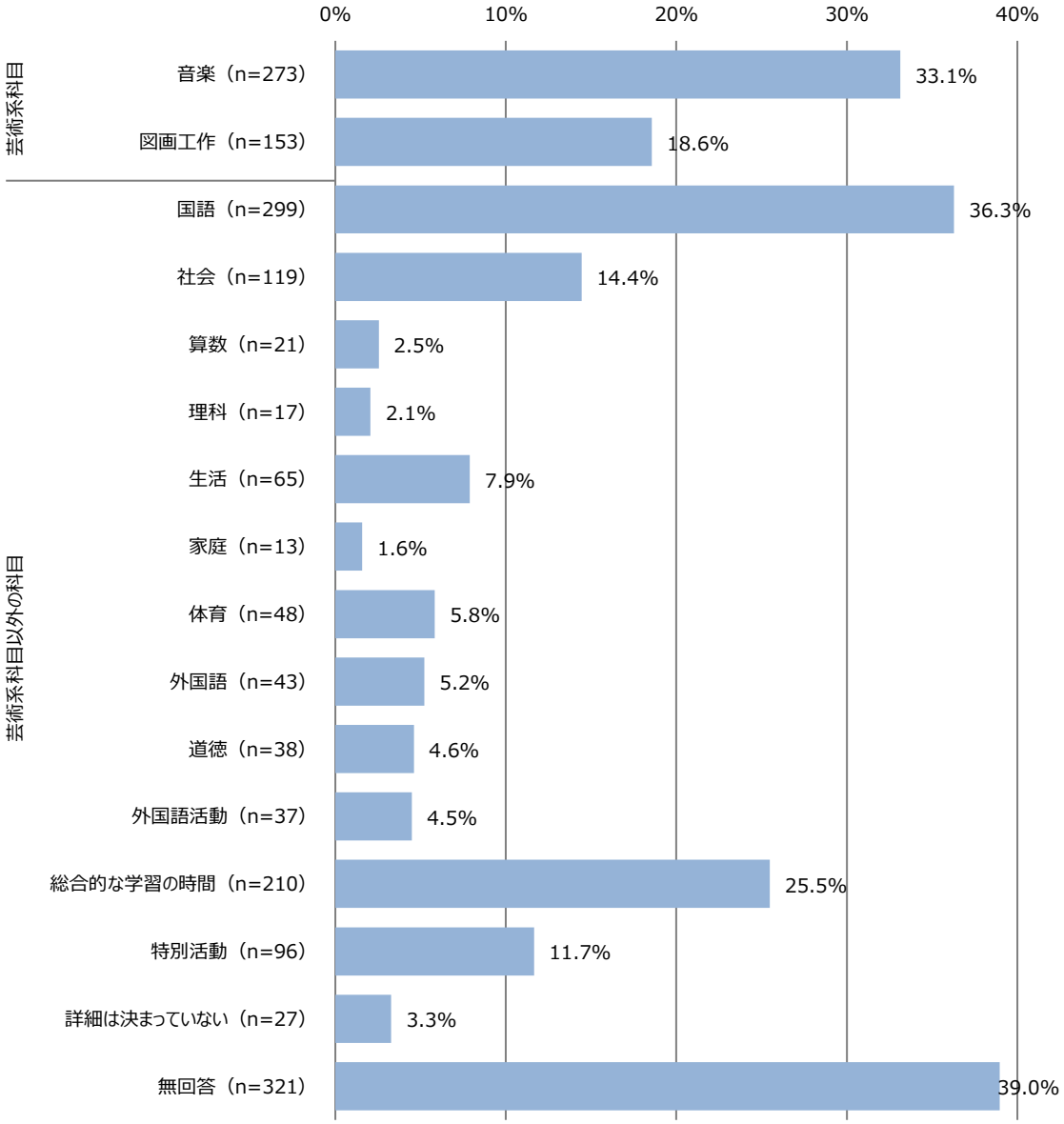


８）「教科横断的な学び」で用いた教科、あるいは用いる予定の教科

①　小学校

小学校における教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科をみると、「国語」と「音楽」が 30%を超えていた。それ以外では、「総合的な学習の時間」、「図画工作」の割合が大きかった。

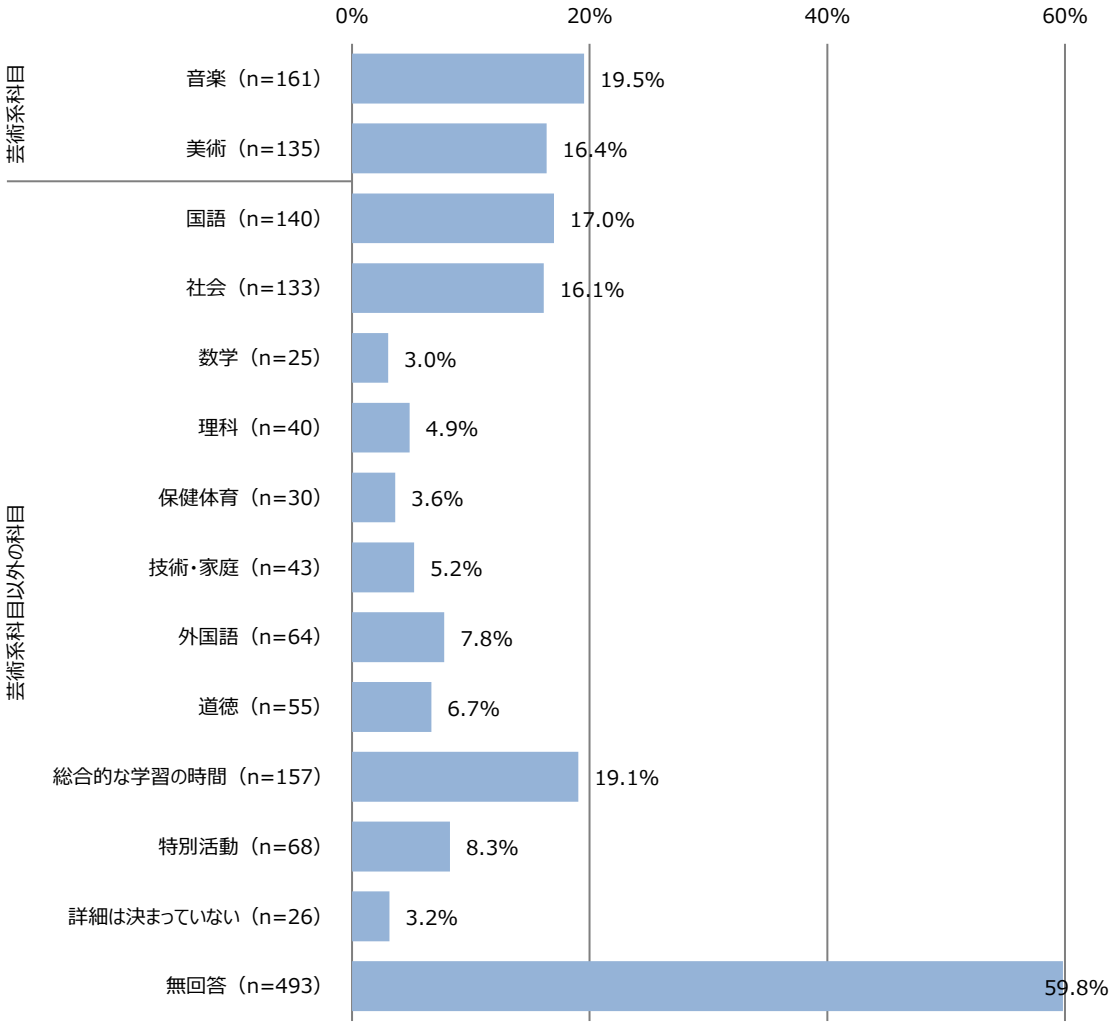
図 2-42　「教科横断的な学び」で用いた教科、あるいは用いる予定の教科（小学校）（複数回答／あてはまるものすべて）



② 中学校

中学校では、「音楽」と「総合的な学習の時間」が約 20%に達していた。それ以外では、「国語」、「美術」、「社会」の割合が比較的大きかった。

図 2-43 「教科横断的な学び」で用いた教科、あるいは用いる予定の教科（中学校）（複数回答／あてはまるものすべて）



９）「教科横断的な学び」の具体的な取組内容

教科横断的な学びの具体的な内容としては、歴史的背景や社会状況との関連付け、言語や表現活動への展開、総合的な学習の時間や地域学習との連携、音楽・図工・体育館の相互連携、異文化理解と国際交流に関する回答がみられた。

自由記述のサマリー

■　歴史的背景や社会状況との関連付け

作品が制作された時代の時代背景や文化、地域性について探究する取組が多く挙げられた。

- 音楽家や画家の生まれた時代の様子や、その地域の歴史を社会科や総合的な学習の時間と関連付けて調べている。
- 狂言や能がいつの時代にどのようないきさつで始まり、受け継がれてきたのかをタブレット端末等を使って調査した。
- 作品の背景にある社会情勢や、国内外の当時の文化・音楽等を調べることで、作品への理解を深めている。
- 琳派や浮世絵等の作風がなぜ生まれたのか、歴史的背景と結びつけて学習した。
- 外国の音楽や芸術について学ぶ際、その国の歴史や気候風土、文化の特色と関連付けて考えさせている。

■　言語活動・表現活動への展開

鑑賞・体験した内容を、国語科の「書くこと」「話すこと」や、物語の読み取り、古典学習と結びつける実践が多く見られた。

- 芸術鑑賞で感じたことや心に残った場面を、作文や手紙、詩、俳句等の文章で表現する学習を行っている。
- 劇団によるプロの演技や発声を学ぶことで、国語の音読や群読の技能向上、物語の登場人物の心情理解に役立てている。
- 「古典芸能の世界」等の単元において、実際に人形浄瑠璃や狂言を鑑賞・体験することで、言葉の意味や表現方法の理解を深めている。
- 鑑賞した演劇の原作本を読んだり、同じ作者の別の作品へ読書活動を広げたりしている。
- 鑑賞後の振り返りとして、新聞づくりやプレゼンテーション資料の作成、お礼の手紙の執筆に取り組んでいる。

■　総合的な学習の時間・地域学習との連携

地域の伝統芸能や文化財、地域の人材を題材に、総合的な学習の時間（探究学習）の中で地域理解や郷土愛を深める活動が挙げられた。

・　地元の獅子舞や祭り、伝統工芸（陶芸や織物等）について、地域の方を講師に招いて体験し、その成り立ちや思いを調査している。
・　修学旅行や校外学習での文化財鑑賞の事前・事後学習として、総合的な学習の時間に調べ学習やまとめの発表を行っている。
・　SDGs や環境問題をテーマにした演劇鑑賞の前に内容を調べ、自分たちの探究課題と結びつけて理解を深めた。
・　地域の魅力発信を目的として、生徒が映画制作やポスター制作を行い、地域へ提案・発信する活動に取り組んでいる。
・　地域の伝統芸能を学び、それを福祉施設での交流活動や地域の行事で披露する実践を行っている。

■　音楽・図工・体育間の相互連携と技能向上

芸術教科同士、あるいは体育科の身体表現と関連付け、表現の工夫やスキルの向上を図る取組が見られた。

・　音楽で学んだリズムや曲のイメージを、図画工作科で絵や立体作品（お面や小道具等）として表現している。
・　体育科の「表現運動」やダンスの領域において、演劇で学んだ体の動きや、伝統的な民謡（ソーラン節等）のステップを取り入れている。
・　国語で学習した物語をもとに、音楽劇やミュージカルを創作し、学習発表会や文化祭で披露している。
・　算数で学ぶ図形の規則性や比（黄金比等）を、美術作品の鑑賞やデザイン制作に活用している。
・　理科で学ぶ「音の性質（振動や波長）」と、音楽科での楽器演奏の仕組みを関連させて学習している。

■　異文化理解と国際交流

外国の芸術や音楽に触れる機会を、外国語活動や外国語科における文化理解、プレゼンテーションの題材としている事例がみられた。

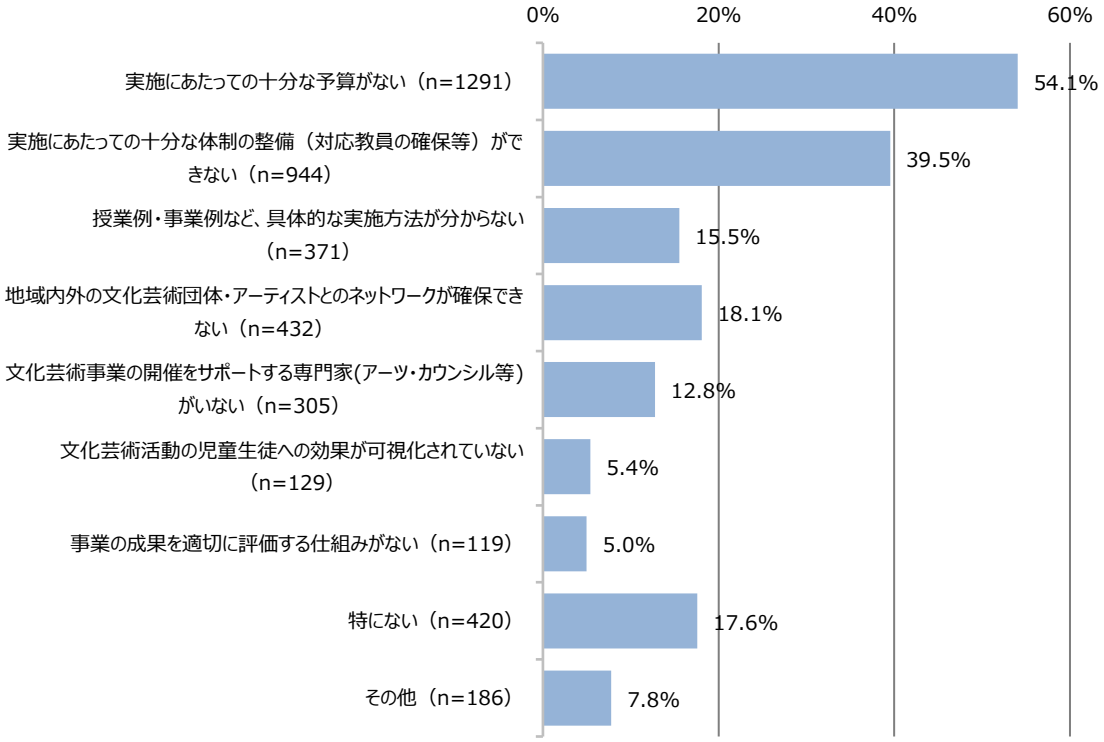
・　外国語の授業で日本の伝統文化（落語や茶道等）を英語で紹介したり、ALT に紹介したりする活動を行っている。
・　海外の音楽（ラテン音楽やジャズ等）の鑑賞を通じて、その国の言葉や文化、生活習慣の違いを比較・学習している。
・　英語劇に取り組んだり、英語の歌詞の解釈を外国語の授業で行ったりすることで、言語と芸術を統合して学んでいる。
・　美術作品の感想を簡単な英語で作文し、共有し合う活動を取り入れている。
・　日本と他国との音楽文化の違いを比較し、多様な価値観に触れる機会としている。

10）学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上にあたっての課題

①　全体

全体でみると、「実施にあたっての十分な予算がない」が 54.1%と最も割合が大きかった。それ以外では、「実施にあたっての十分な体制の整備（対応教員の確保等）ができない」が 39.5%を占めていた。

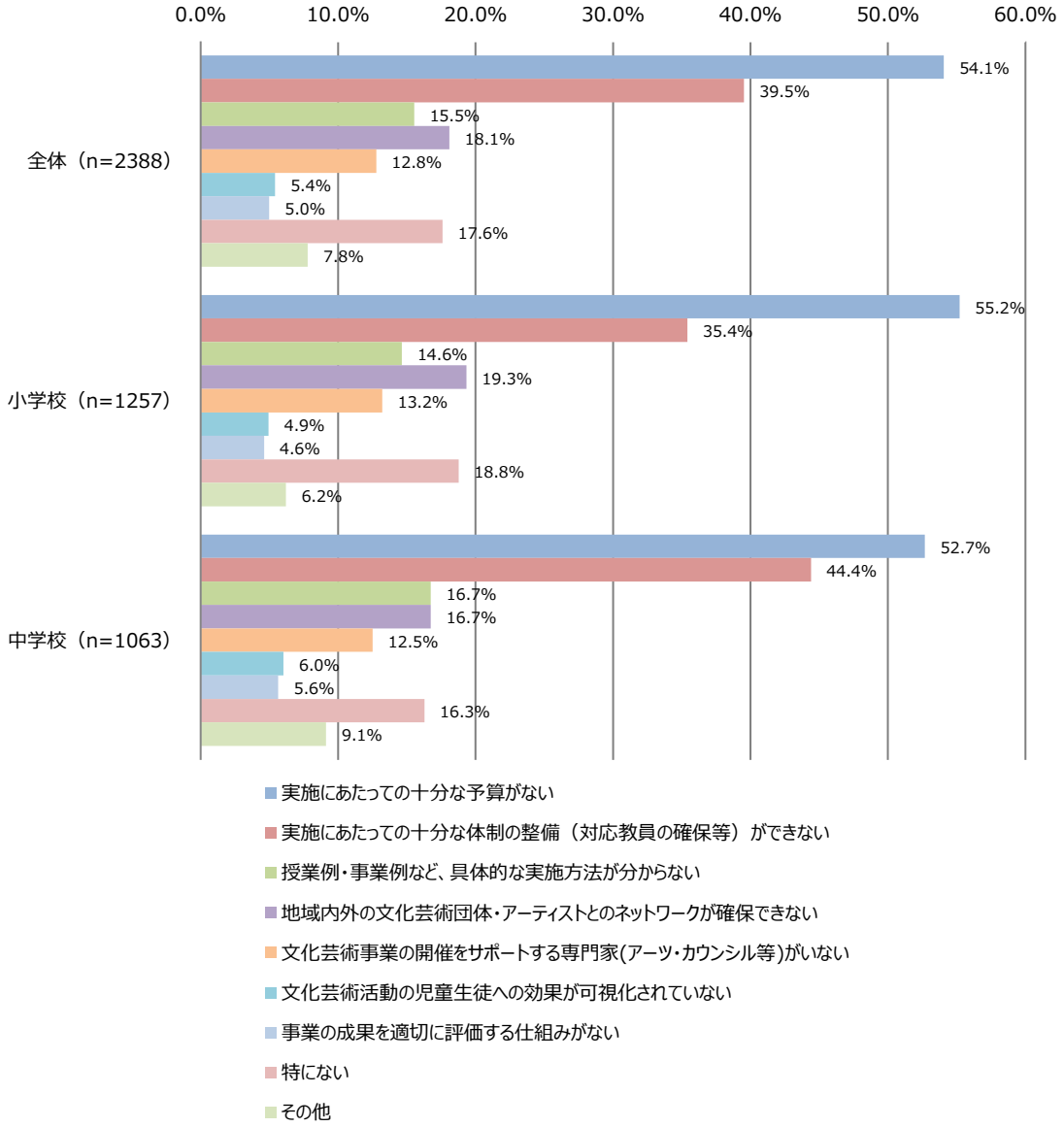
図 2-44　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上にあたっての課題（複数回答／あてはまるものすべて）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」ともに「実施にあたっての十分な予算がない」が 50%を超えていた。また、「実施にあたっての十分な体制の整備（対応教員の確保等）ができない」が２番目に大きな割合を占め、「中学校」では 44.4%、「小学校」では 35.4%と、「中学校」が 9 ポイント高かった。

図 2-45　学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業の質向上にあたっての課題　学校種別（複数回答／あてはまるものすべて）

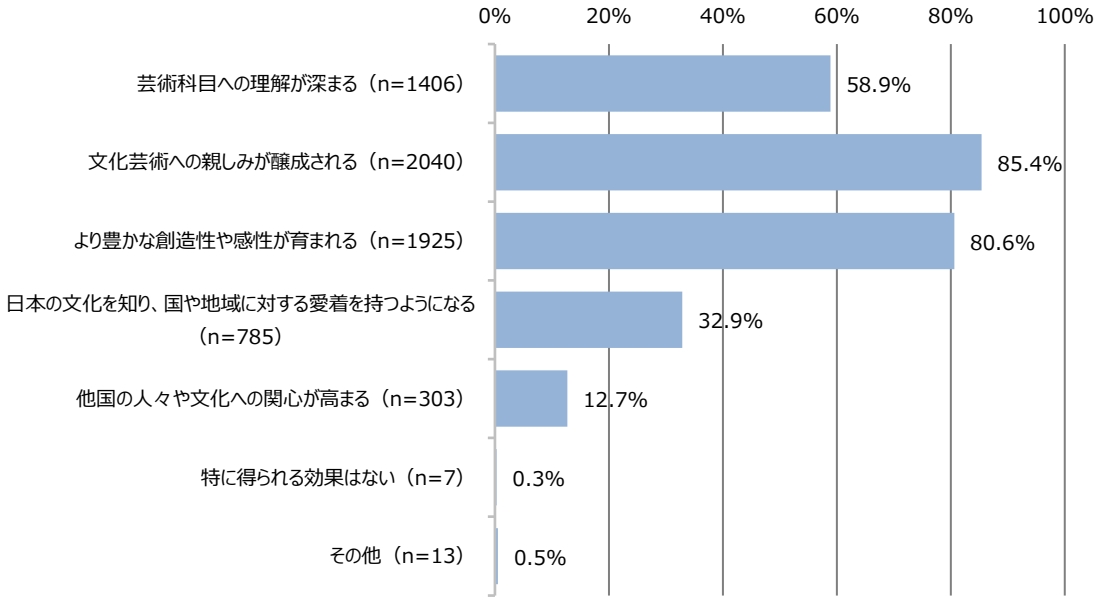


11）学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業を通じて得られる効果①（文化芸術への関心）

①　全体

全体でみると、「文化芸術への親しみが醸成される」、「より豊かな創造性や感性が育まれる」が共に 80%を超えていた。それ以外では、「芸術科目への理解が深まる」が約 60%に達していた。

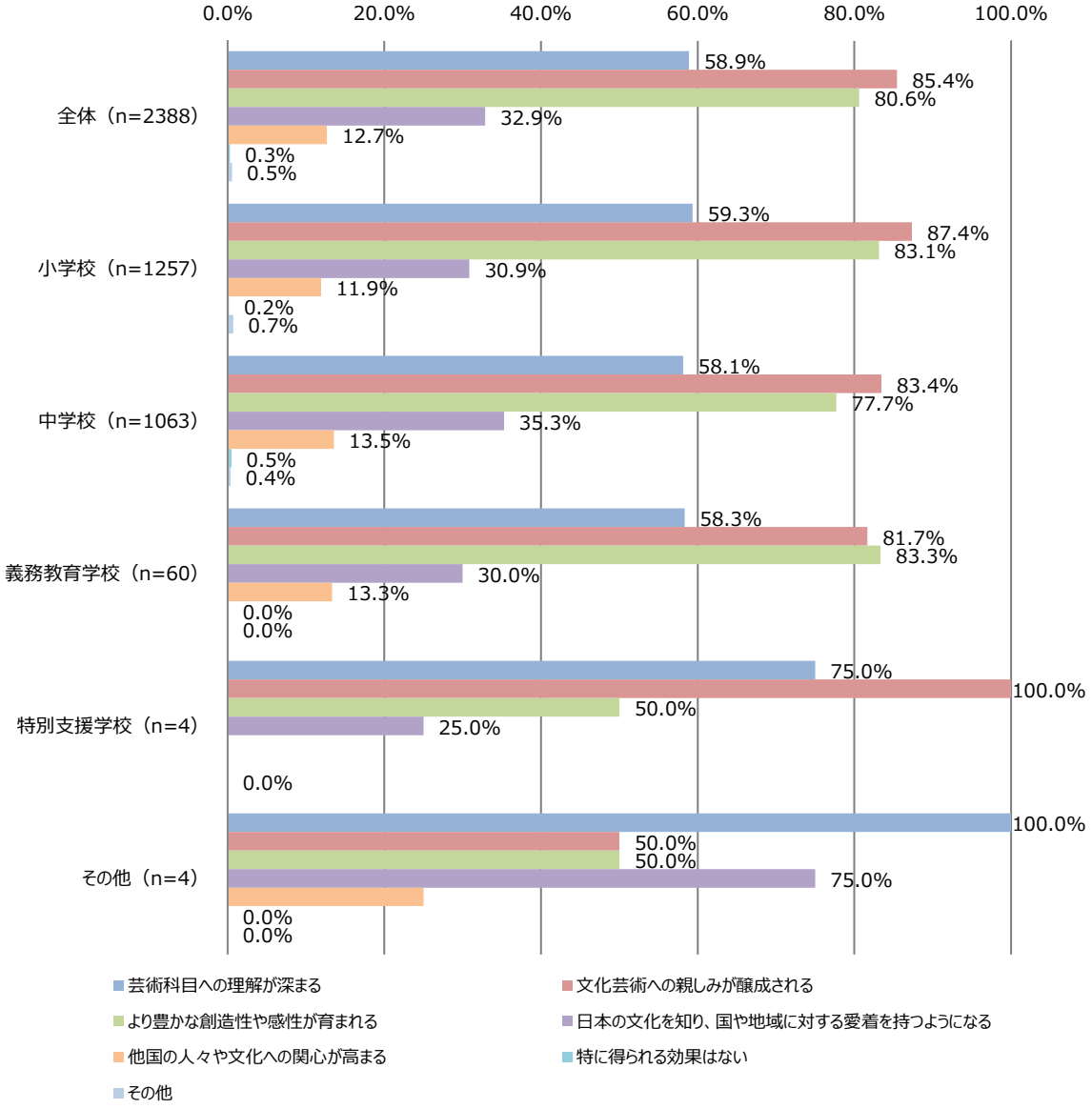
図 2-46　文化芸術活動を通して得られる効果①　（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」、「義務教育学校」では「全体」と概ね同様の分布であった。「特別支援学校」では、「文化芸術への親しみが醸成される」が 100%に達していた。

図 2-47 文化芸術活動を通して得られる効果① 学校種別（複数回答／３つまで）

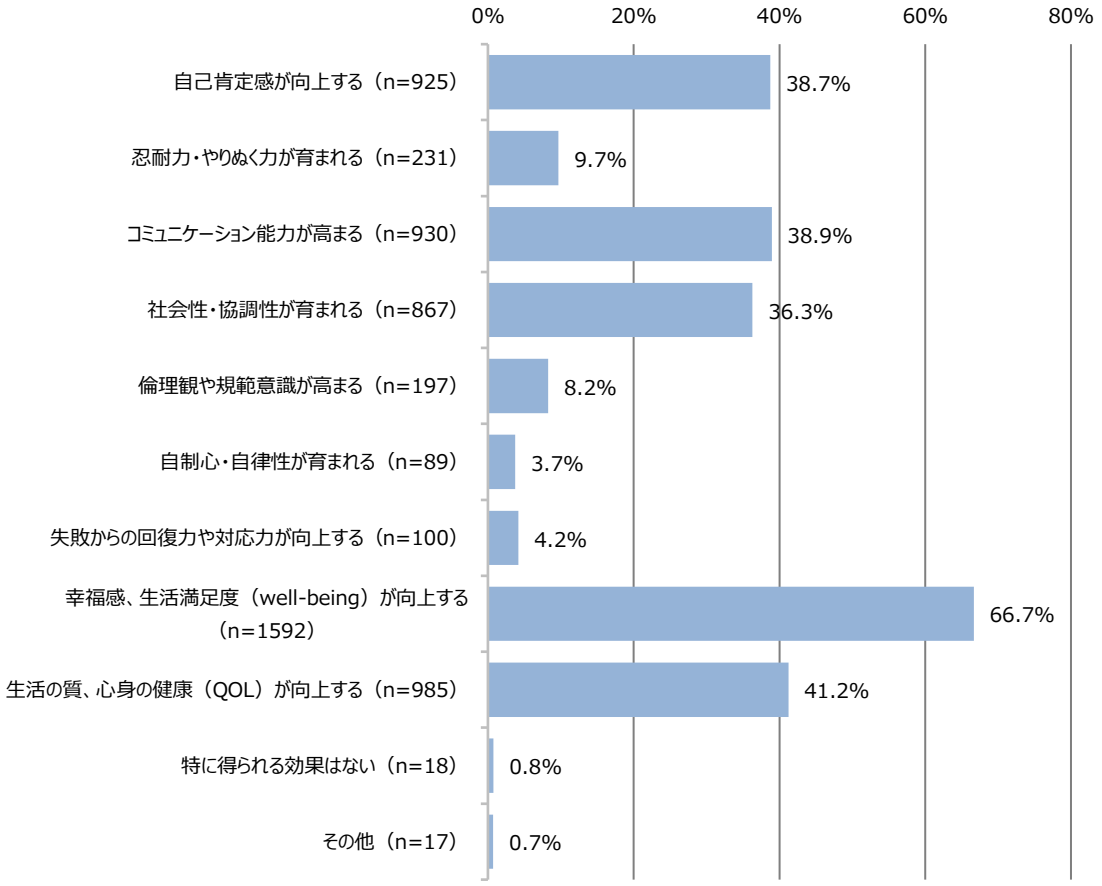


12）学校教育内での文化芸術活動や芸術教科の授業を通じて得られる効果②（非認知能力やQOL、Well-being）

①　全体

全体でみると、「幸福感、生活満足度（Well-being）が向上する」が66.7%と最も割合が大きかった。それ以外では、「自己肯定感が向上する」、「コミュニケーション能力が高まる」、「社会性・協調性が育まれる」、「生活の質、心身の健康（QOL）が向上する」がいずれも約40%に達していた。

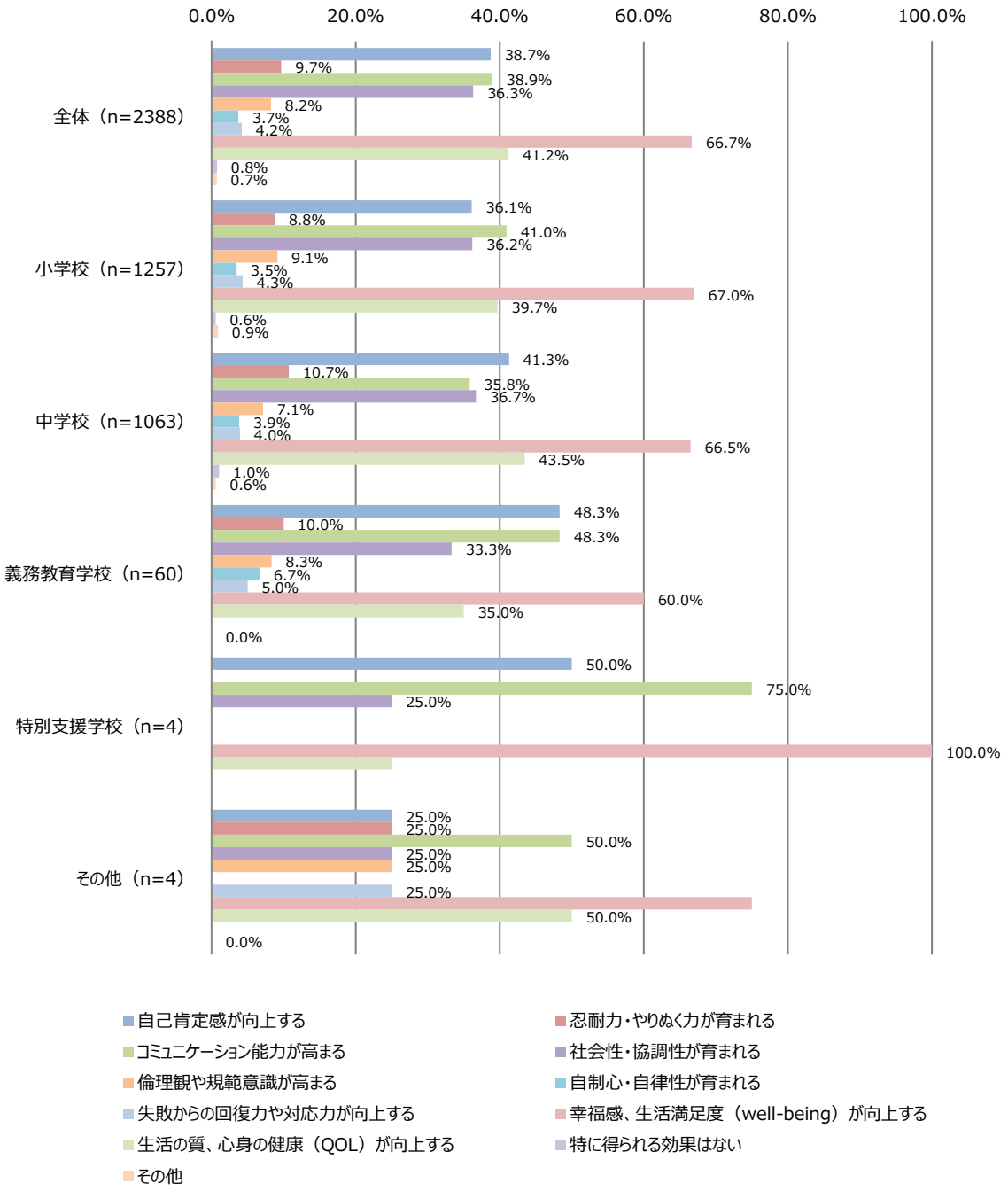
図 2-48　文化芸術活動を通して得られる効果②（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」は「全体」と概ね同様の分布であった。「義務教育学校」では、他の種別と比べて「コミュニケーション能力が高まる」の割合が大きく、「社会性・協調性が育まれる」の割合が小さくなっている。「特別支援学校」では「幸福感、生活満足度（Well-being）が向上する」が 100.0%に達していた。

図 2-49　非認知能力、QOL、Well-being 学校種別（複数回答／３つまで）



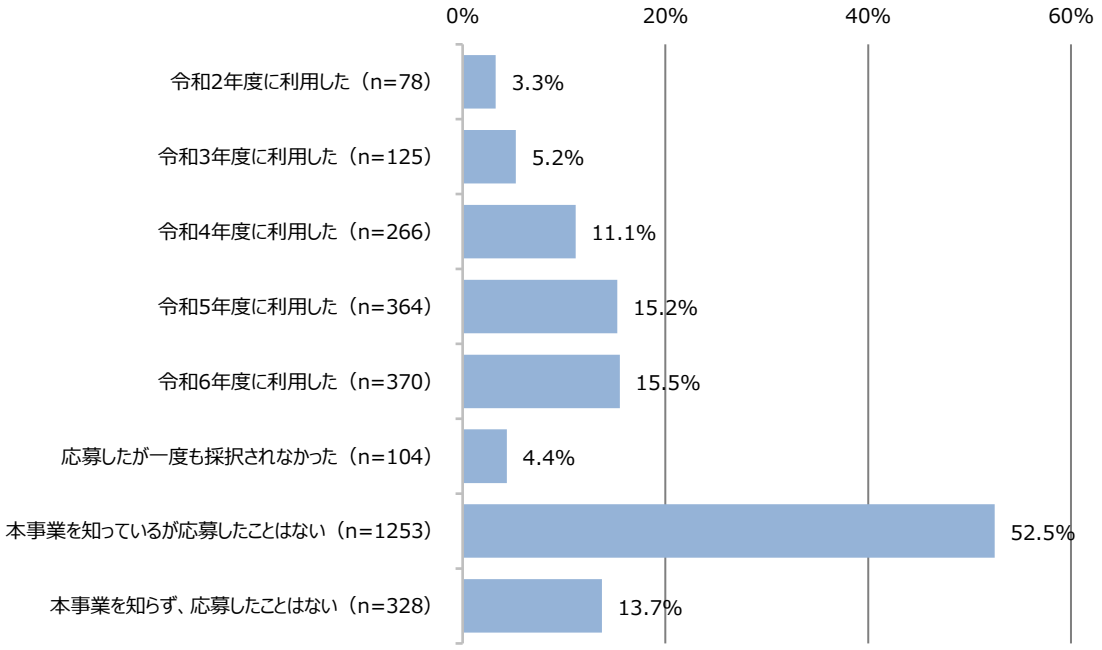
（５）文化庁　巡回公演について

１）巡回公演の応募・利用実績

①　全体

巡回公演の過去５年間（令和２年度～令和６年度）における利用実績については、「本事業を知っているが応募したことはない」が 52.5%と最も高く、昨年度の 52.6%とほぼ同程度であった。「令和５年度に利用した」と「令和６年度に利用した」は大きな差が見られなかった。なお、「本事業を知らず、応募したことはない」の割合は 13.7%であった。

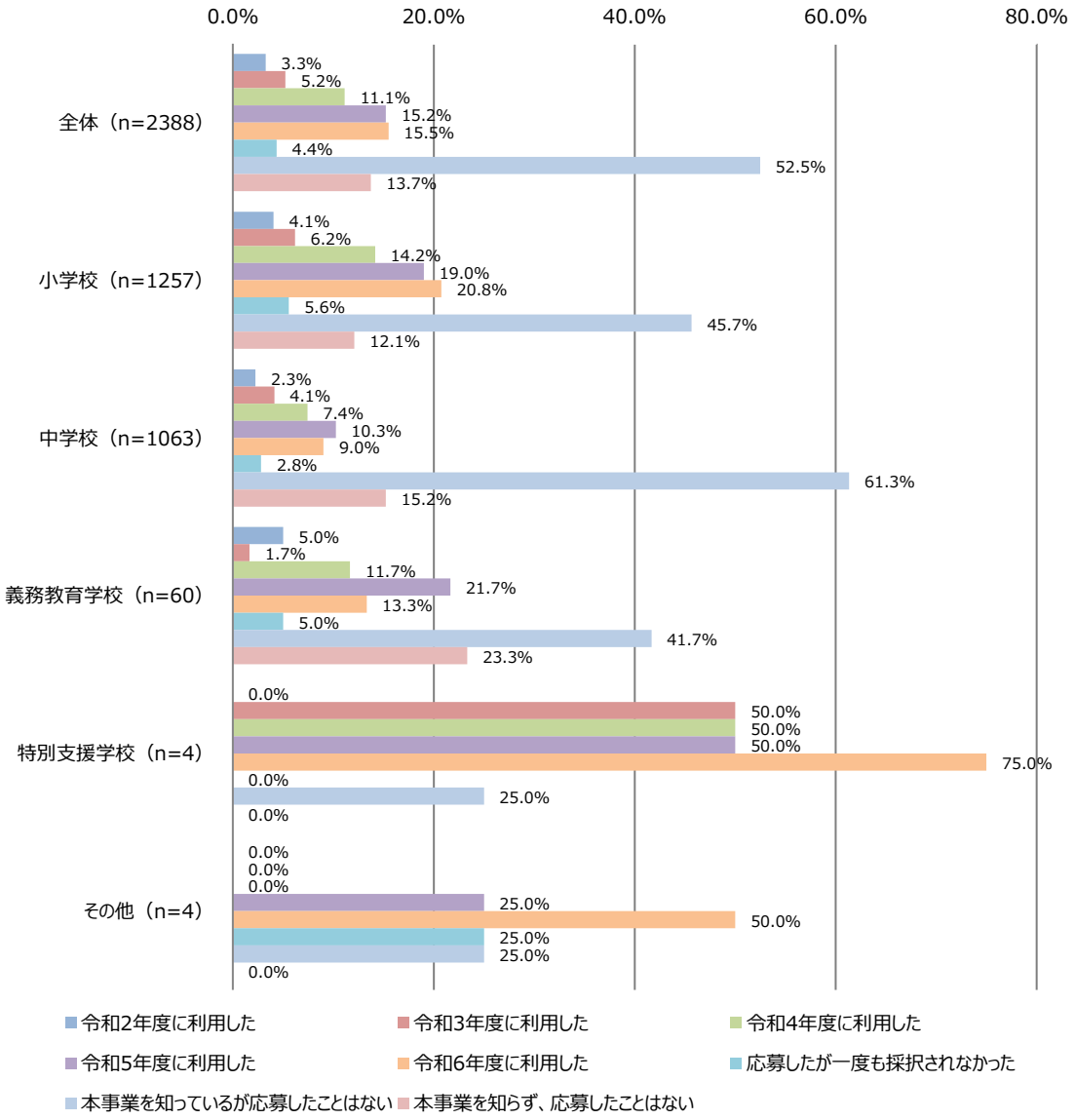
図 2-50　巡回公演の応募・利用実績
（複数回答／あてはまるものすべて）



② 学校種別

学校種別でみると、「中学校」において「本事業を知っているが応募したことはない」の割合が 61.3%に達しており、他の種別と比べて割合が大きかった。また、特別支援学校では、「応募したが一度も採択されなかった」と「本事業を知らず、応募したことはない」がいずれも 0.0%であった。

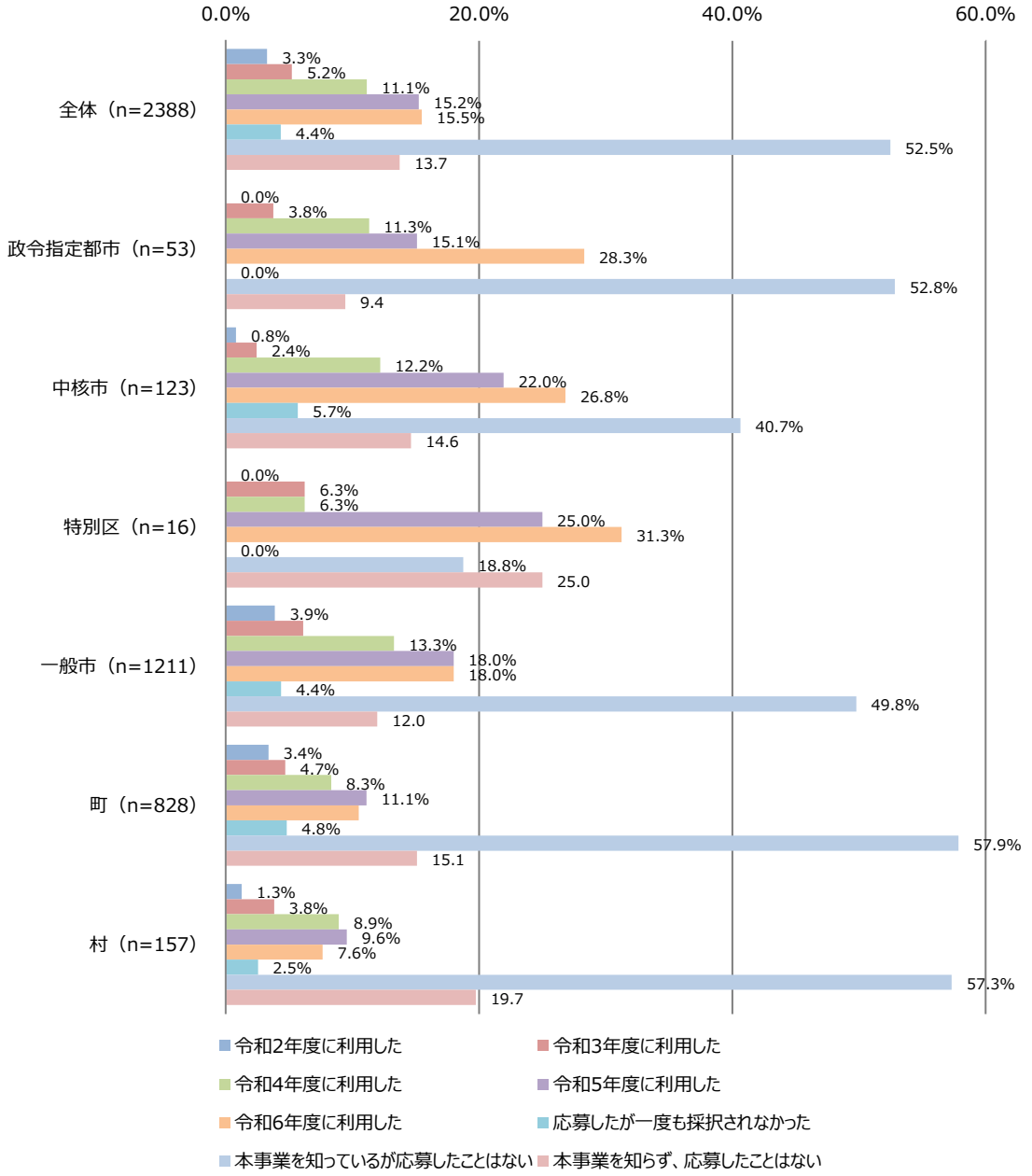
図 2-51　巡回公演の応募・利用実績　学校種別
（複数回答／あてはまるものすべて）



③　自治体種別

自治体種別でみると、「本事業を知っているが応募したことはない」の割合は「町」と「村」において約 60%に達していた。他方、中核市では 40.7%に留まっていた。また、「政令指定都市」、「中核市」、「特別区」においては令和２年度から６年度にかけて事業を利用した割合が上昇していたが、「一般市」、「町」、「村」においては、令和６年度は令和５年度よりも低下、もしくは同等となっていた。

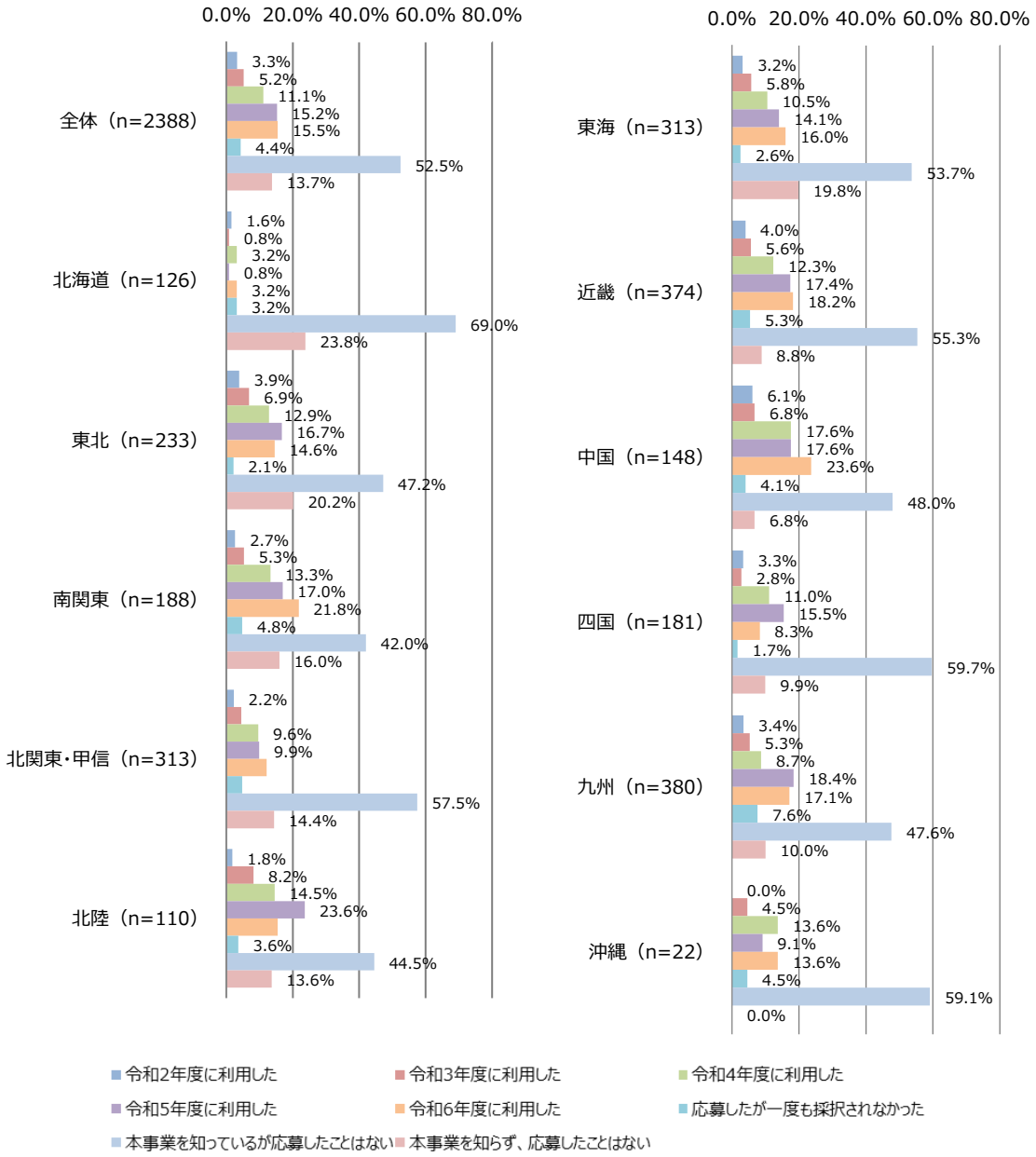
図 2-52　巡回公演の応募・利用実績　自治体種別
（複数回答／あてはまるものすべて）



④　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、「本事業を知っているが応募したことはない」の割合は「北海道」において約 70%に達していた。「北関東・甲信」、「四国」、「沖縄」では約 60%に達し、他の広域ブロックに比べて割合が大きかった。また、「北海道」、「南関東」、「北関東・甲信」、「東海」、「近畿」、「中国」、「沖縄」においては令和５年度から６年度にかけて事業を利用した割合が上昇していたが、「東北」、「北陸」、「四国」、「九州」においては、令和６年度は令和５年度よりも低下していた。

図 2-53　巡回公演の応募・利用実績　広域ブロック別
（複数回答／あてはまるものすべて）

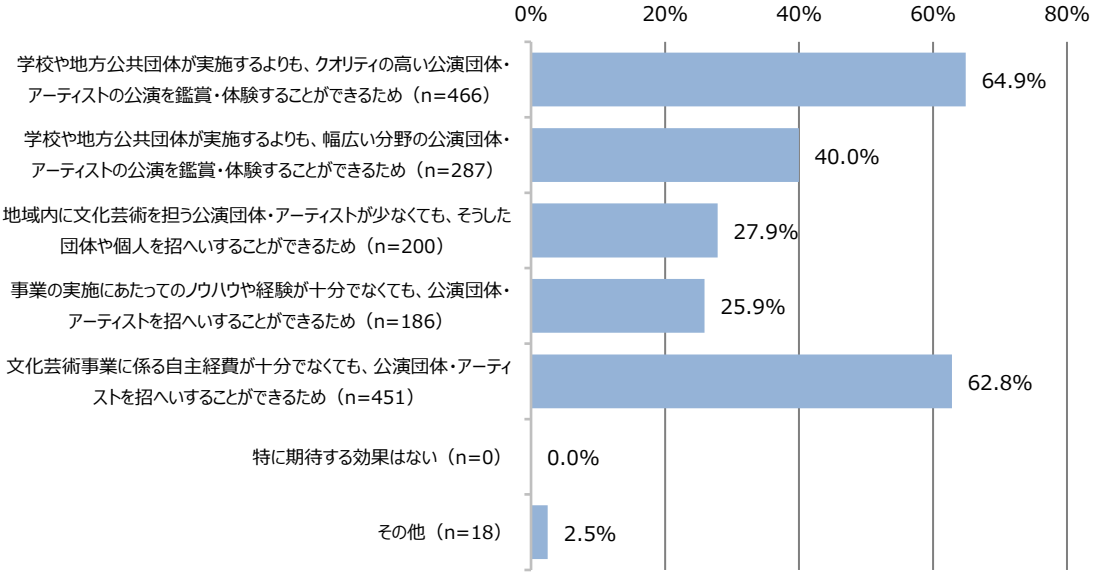


２）巡回公演に応募した理由

①　全体

全体でみると、「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い後援団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができるため」、「文化芸術事業に係る自主経費が十分でなくても、公演団体・アーティストを招へいすることができるため」が共に 60%を超えていた。それ以外では、「学校や地方公共団体が実施するよりも、幅広い分野の公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができるため」が 40.0%と３番目に多かった。

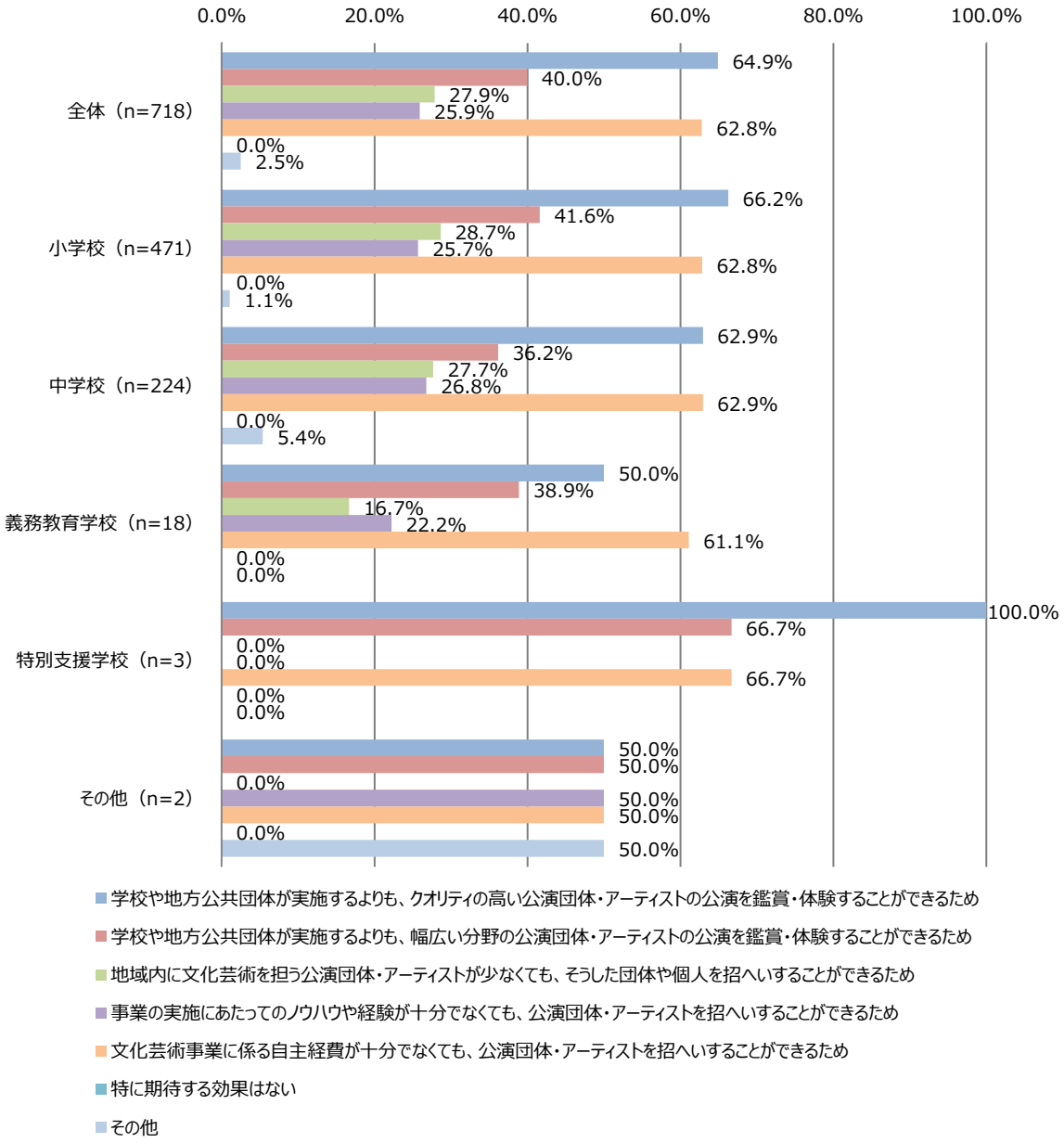
図 2-54　巡回公演に応募した理由（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」は「全体」と概ね同様の分布であった。「義務教育学校」では「文化芸術事業に係る自主経費が十分でなくても、公演団体・アーティストを招へいすることができるため」が最も多かった。「特別支援学校」では、「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い後援団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができるため」が 100.0%に達していた。

図 2-55　巡回公演に応募した理由　学校種別（複数回答／３つまで）

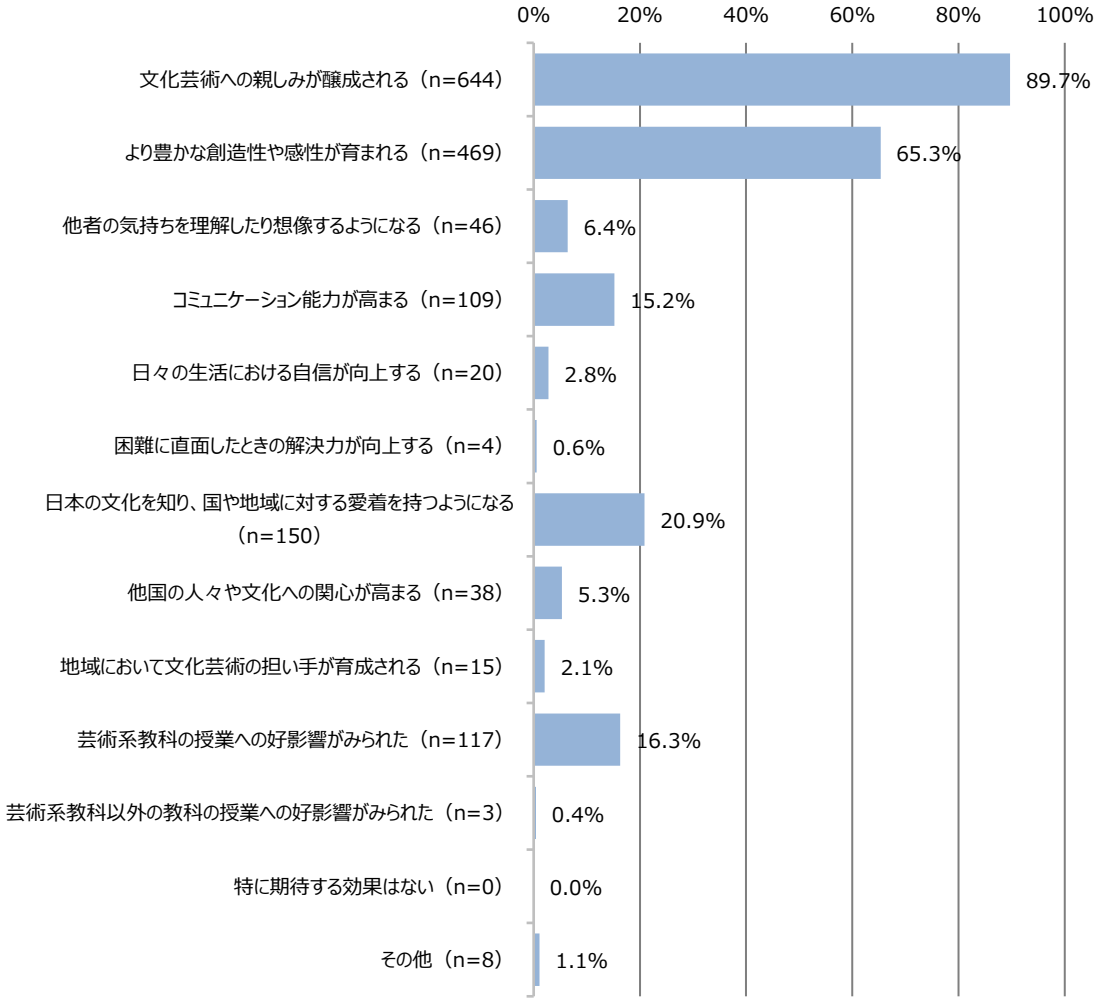


３）巡回公演を利用することで得られる効果

①　全体

全体でみると、「文化芸術への親しみが醸成される」が約 90%に達していた。それ以外では、「より豊かな創造性や感性が育まれる」が 65.3%、「日本の文化を知り、国や地域に対する愛着を持つようになる」が 20.9%と続いていた。

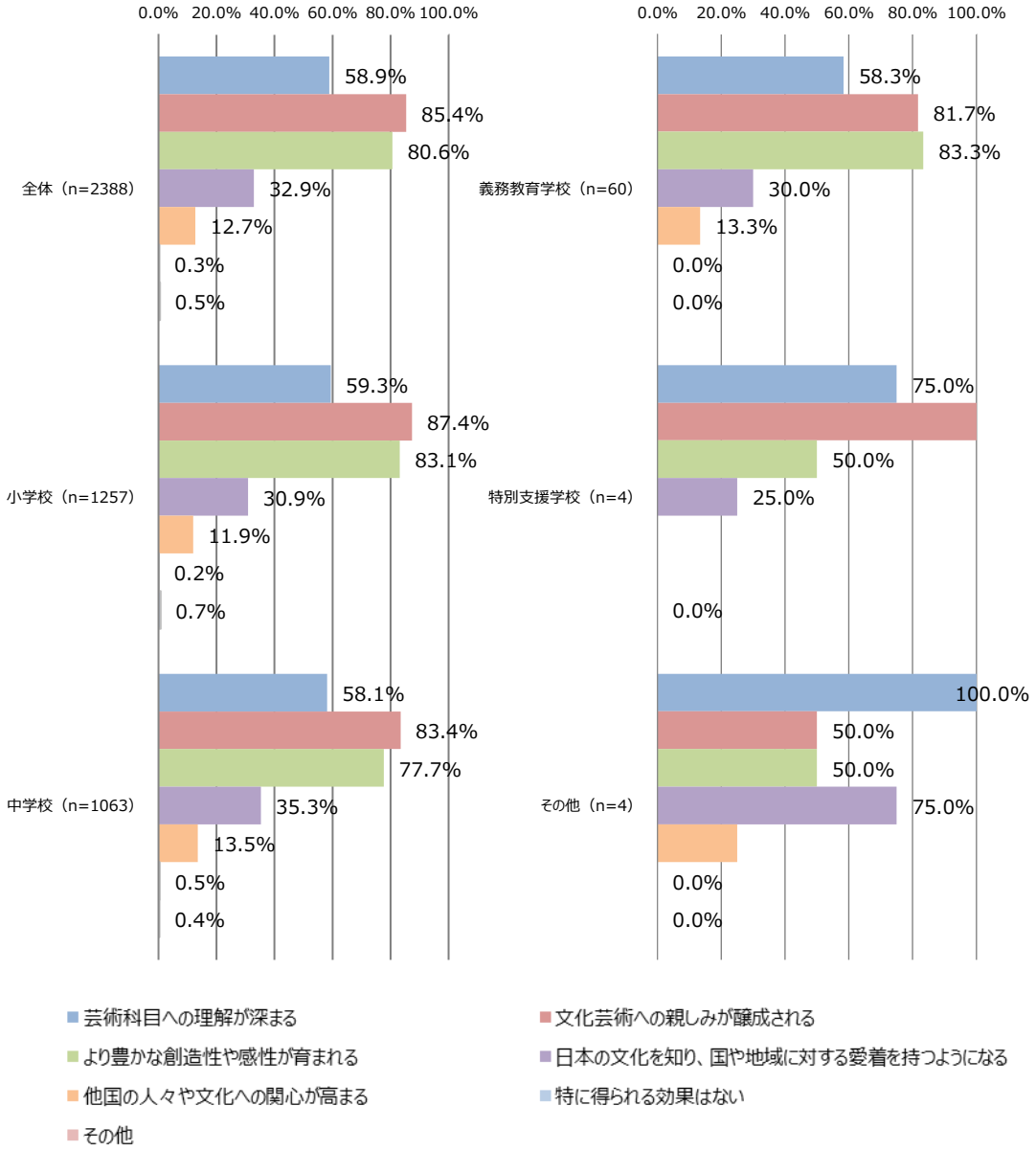
図 2-56　巡回公演に参加することで得られる効果
（複数回答／３つまで）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」は「全体」と概ね同様の分布であった。「義務教育学校」では「より豊かな創造性や感性が育まれる」が 33.3%に留まっていた。「特別支援学校」では「より豊かな創造性や感性が育まれる」が 100.0%に達していた。

図 2-57　巡回公演に参加することで得られる効果　学校種別
（複数回答／３つまで）



４）巡回公演で得られる効果の具体的な事例

巡回公演で得られる効果の具体的な事例としては、「本物への接触と五感への刺激」、「芸術への関心や意欲の向上」、「地理的・経済的環境による機会格差の解消」、「創造性・表現力への波及効果」、「伝統文化・多様なジャンルへの理解と親近感」といった内容が挙げられた。

自由記述のサマリー

■　「本物」への接触と五感への刺激

プロによる生の演奏や演技（本物）を間近で体験することで、五感を刺激し、深い感動や感銘を受けたという意見が最も多く挙げられた。

- プロの演奏を間近で聴くことで、本物の音楽への親しみを感じ、生の実演による五感の刺激が知的好奇心を引き出している。
- CD や動画では伝わらない演者の息遣いや迫力、音圧を肌で感じることで、深い感動を味わうことができた。
- 大きな舞台装置や照明、本格的なセットが体育館に組まれ、日常の場が劇場に変わる体験は、子供たちの目を輝かせた。
- プロの歌声を間近に聴き、その発声やハーモニーの美しさに圧倒され、本物の芸術の奥深さを感じていた。
- 『百聞は一見に如かず』の通り、目の前で展開される生の演技に心奪われ、没頭する体験ができた。

■　芸術への関心や意欲の向上

鑑賞を通じて、それまで興味がなかった分野に対して「おもしろそう」「自分もやってみたい」といった主体的な意欲や憧れが芽生えたという意見が多く見られた。

- プロのダンスやジャグリングを見て、自分もやってみたいという意欲が高まり、実際に習い始めたりクラブを新設したりする児童がいた。
- 演奏体験や指揮者体験を通じて楽器に興味を持ち、進学後に吹奏楽部で音楽に関わり続ける生徒が見られた。
- 『難しそう』という心理的障壁が壊され、自分もあんな風になりたいという将来の夢やキャリアへの意識に繋がった。
- 公演後に楽器の名前を覚えたり、インターネットで関連する曲を自ら検索して聴いたりと、主体的な行動に変化が現れた。
- 初めて触れるオペラやバレエに魅了され、家族とまた観に行きたいという感想が多く寄せられた。

■　地理的・経済的環境による機会格差の解消

山間部や離島、都市部から離れた地域において、質の高い文化芸術に触れる機会が乏し

い中、学校での巡回公演が貴重な教育機会を補完しているという視点での回答があった。

- 京都市内まで数時間かかる環境や家庭環境において、本物体験を求めることが困難な児童にとって、学校での鑑賞は極めて貴重な機会である。
- 地方では接する機会が少ない落語やオーケストラに触れることで、文化的な視野や興味関心を広げることができている。
- 美術館や劇場が身近にない地域柄、プロの迫力を目の当たりにする経験は、生徒の中に大きな価値を生み出している。
- 家庭環境に関わらず、学校という共通の場で質の高い芸術を体験できることは、教育格差を埋める役割を果たしている。
- コロナ禍で経験不足だった生徒たちにとって、プロの公演を鑑賞できたことは、失われた体験を補う素晴らしい行事となった。

■　創造性・表現力への波及効果

プロの表現を目の当たりにしたり直接指導を受けたりしたことで、自分たちの学習発表会や合唱コンクール、日常の授業における表現意欲や質が向上したという回答があった。

- プロの演技や舞台設営を参考に、自分たちの文化祭や送る会での劇において、自信を持って表現できるようになった。
- ワークショップで学んだ発声や所作を意識し、国語の音読や音楽の授業での取り組みに積極性や工夫が見られるようになった。
- 能や狂言、伝統芸能の型を学ぶことで、自分たちの表現の幅が広がり、創造的な思考が養われた。
- プロの妥協のない姿勢に感化され、部活動やコンクールに向けてより高い目標を設定して取り組む姿が見られた。
- 図工や総合的な学習において、自分なりの工夫を凝らしたり、新たな視点で作品作りをしたりする様子が見られた。

■　伝統文化・多様なジャンルへの理解と親近感

古典芸能や馴染みの薄い芸術ジャンルに対し、体験を通じて「難しい」という先入観が消え、理解や親近感が深まったという回答があった。

- 日本の伝統芸能を間近で見る機会が少ない中、能や狂言を体験したことで、古典文学や歴史的背景にも興味を持つようになった。
- 言葉が難しそうという先入観があっても、演者の表情や仕草から『意外と笑える』『かっこいい』という親近感に変わった。
- 和楽器の体験を通じて、三味線の地域による違いや音色の特徴を知り、日本の文化に対する誇りや理解が深まった。

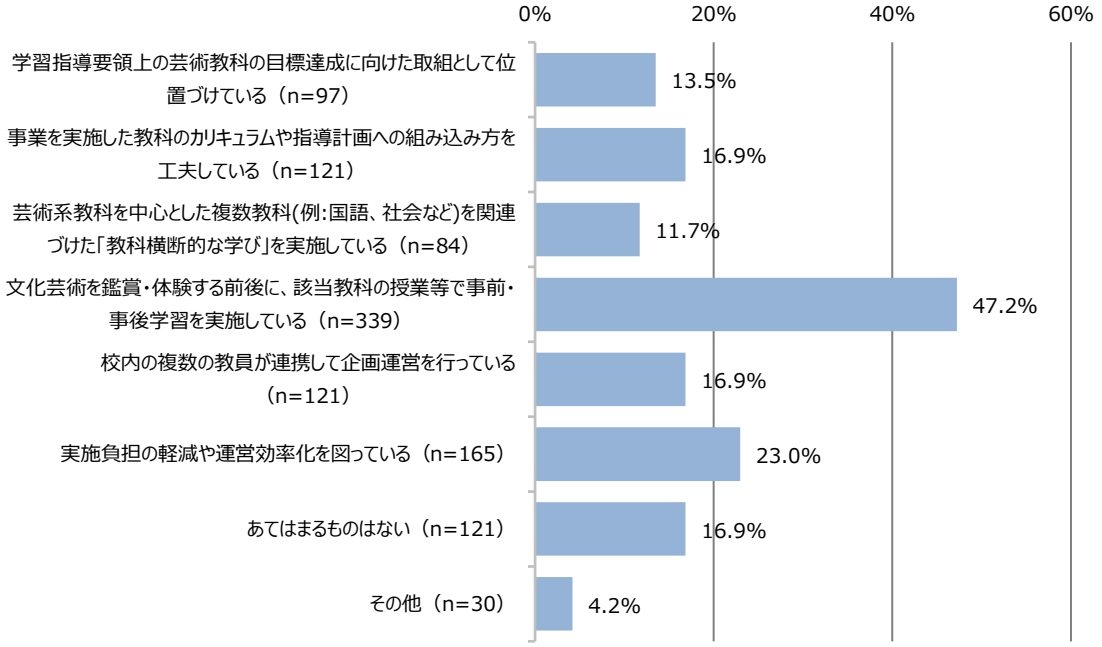
・　雅楽や日本舞踊等、日常生活で触れることのない分野を知ることで、『知らなかったもの』が『知っているもの』へと変化した。 ・　多様な文化（音楽・服装・食生活等）に触れることで、世界や自国の文化に対する多角的な視点を持つことができた。

５）巡回公演を効果的・効率的に実施するために工夫したこと

①　全体

全体でみると、「文化芸術を鑑賞・体験する前後に、該当教科の授業等で事前・事後学習を実施している」が 47.2%と突出して多かった。

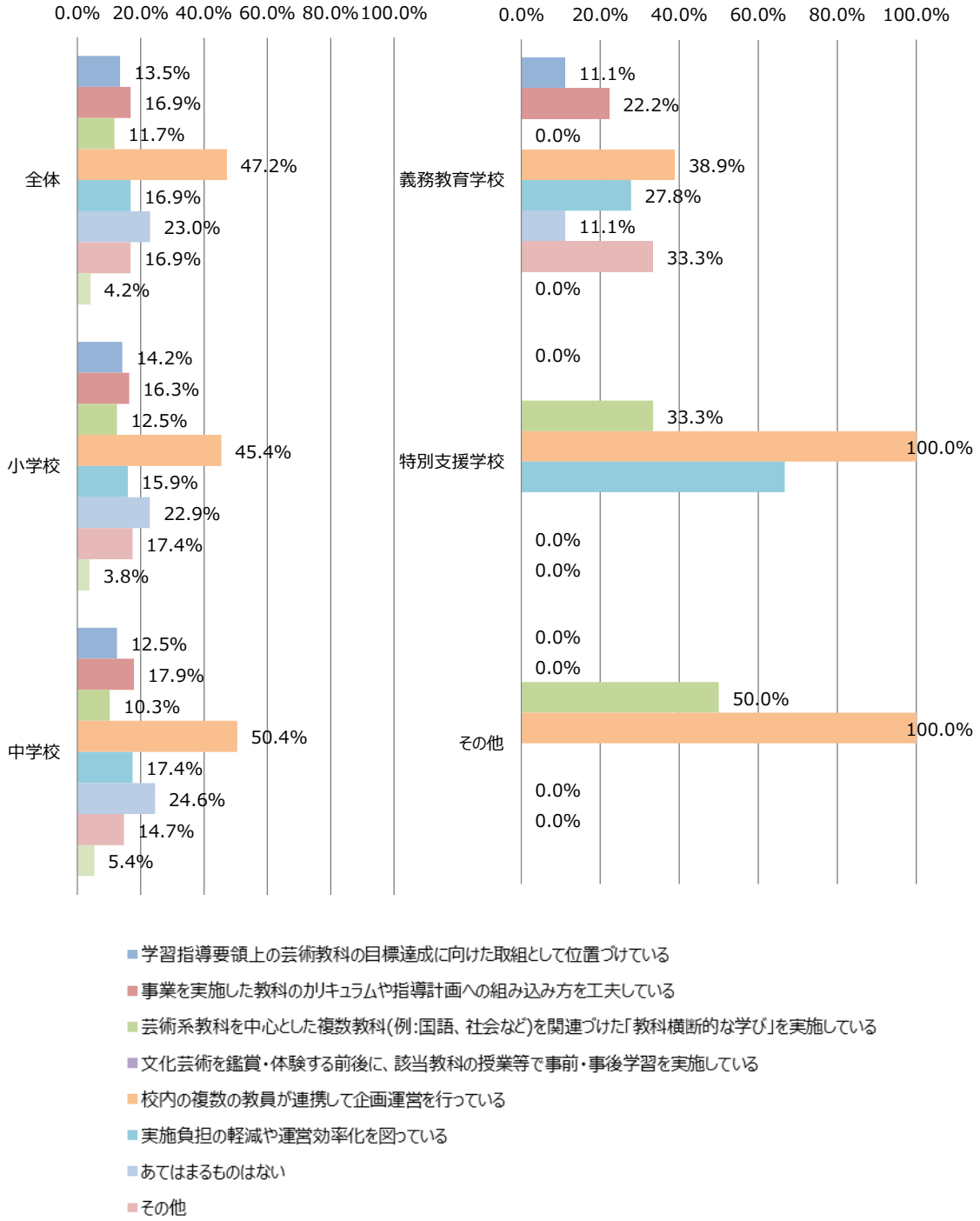
図 2-58　巡回公演を効果的・効率的に実施するために工夫したこと
（複数回答／あてはまるものすべて）



② 学校種別

学校種別でみると、いずれの種別においても「文化芸術を鑑賞・体験する前後に、該当教科の授業等で事前・事後学習を実施している」の割合が最も大きかった。特に、「特別支援学校」においては 100.0%に達していた。

図 2-59 巡回公演を効果的・効率的に実施するために工夫したこと
学校種別（複数回答／あてはまるものすべて）

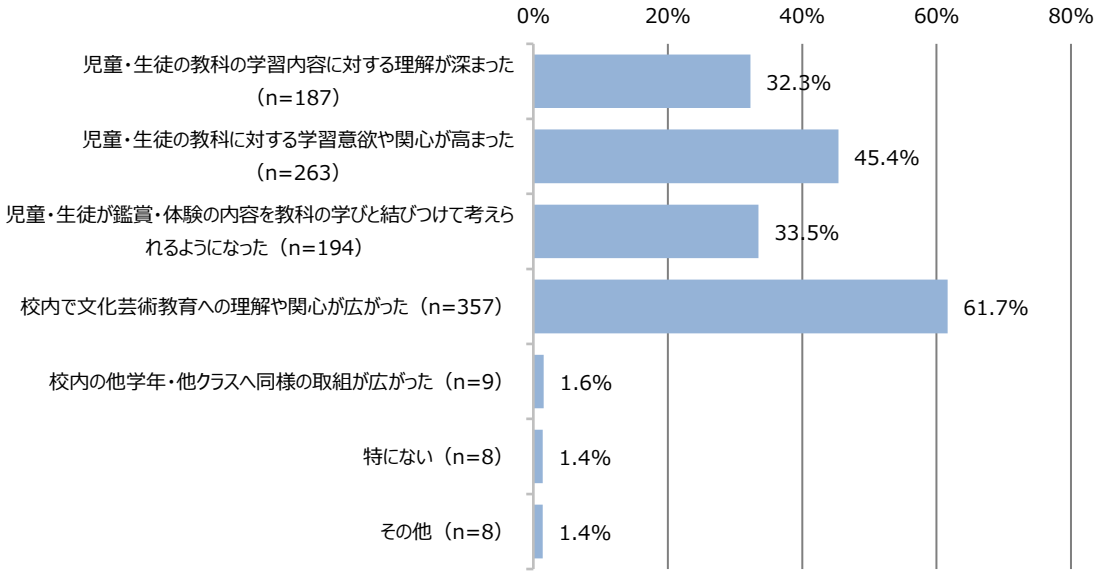


６）巡回公演を学習指導要領と関連させることで得られた効果

①　全体

全体でみると、「校内で文化芸術教育への理解や関心が広がった」が 61.7%と最も割合が大きかった。「児童・生徒の教科に対する学習意欲や関心が高まった」が 45.4%、「児童・生徒が鑑賞・体験の内容を教科の学びと結びつけて考えられるようになった」が 33.5%、「児童・生徒の教科の学習内容に対する理解が深まった」が 32.3%と続いていた。

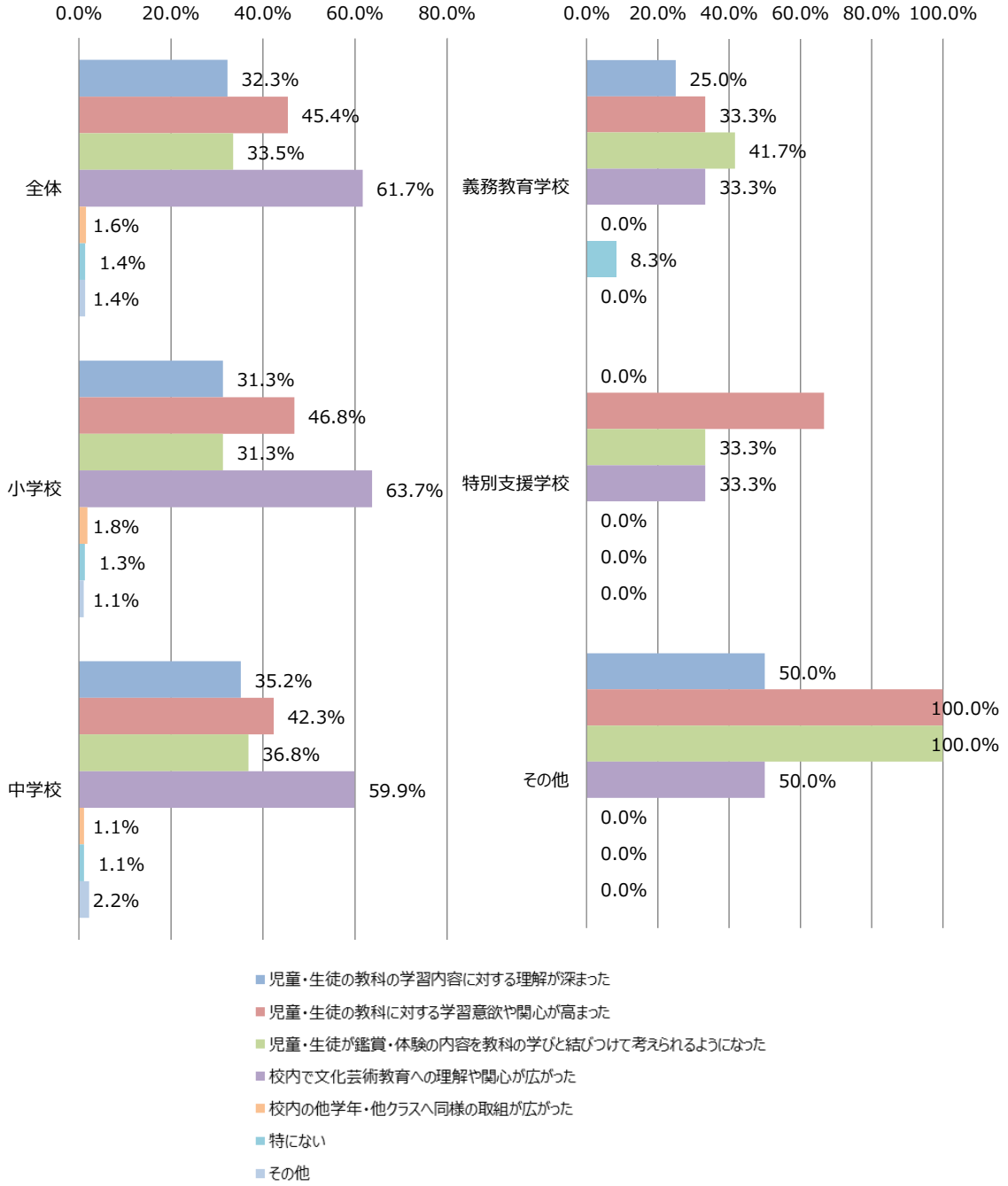
図 2-60　巡回公演を学習指導要領と関連させることで得られた効果
（複数回答／あてはまるものすべて）



② 学校種別

学校種別でみると、「小学校」、「中学校」は「全体」と概ね同様の分布であった。「義務教育学校」では「児童・生徒が鑑賞・体験の内容を教科の学びと結びつけて考えられるようになった」が、「特別支援学校」では「児童・生徒の教科に対する学習意欲や関心が高まった」が最も割合が大きかった。

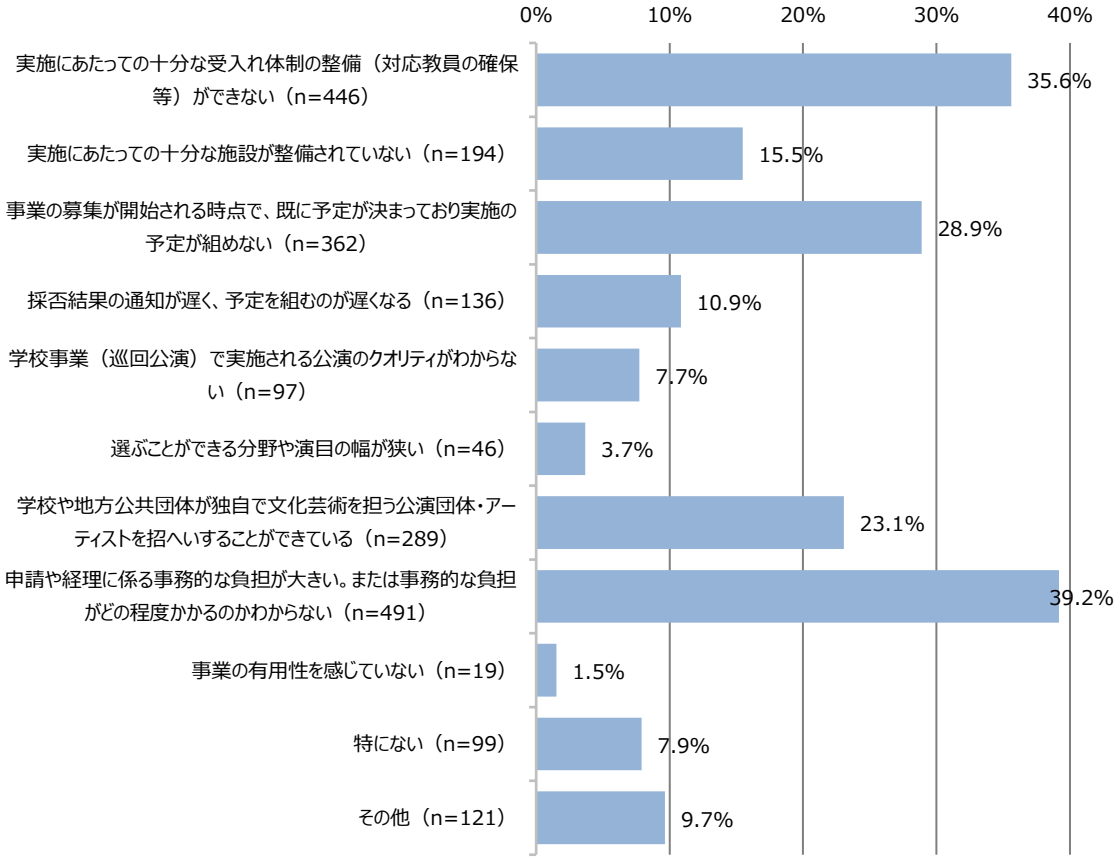
図 2-61　巡回公演を学習指導要領と関連させることで得られた効果
学校種別（複数回答／あてはまるものすべて）



７）巡回公演に応募しなかった理由

「申請や経理に係る事務的な負担が大きい。または事務的な負担がどの程度かかるのかわからない」が 39.2%と最も割合が大きく、「実施にあたっての十分な体制の整備（対応教員の確保等）ができない」が 35.6%、「事業の募集が開始される時点で、既に予定が決まっており実施の予定が組めない」が 28.9%と続いていた。

図 2-62　巡回公演に応募しなかった理由（複数回答／３つまで）



第３章　児童・生徒向けアンケート調査

１．実施概要

（１）実施目的

全国の小・中学校における、学校教育内での文化芸術活動の効果について児童・生徒本人の実感を把握するため、児童・生徒向けアンケート調査を実施した。

アンケートの対象者について、令和４～６年度にかけて巡回公演を実施した学校（以降、「実施校」）のうち、小・中学校は、全 10 の地域ブロックから各 1 校ずつを無作為に抽出し、計 10 校を選定。その学校に通う児童・生徒を対象とした。特別支援学校は、令和４～６年度にかけて巡回公演を実施したことがある学校の中から、ブロック等を考慮し、２校を無作為に抽出・選定し、それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。

また、令和４～６年度（過去３年間）に巡回公演利用しなかった学校（以降、「未実施校」）について、小・中学校は、実施校と同一の市区町村に所在し、令和４～６年度に巡回公演を利用しなかった学校の中から、計 10 校を選定し、それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。なおブロック中に上記を満たす未実施校がない場合は、同ブロック内から３年間のうち２年間実施していない学校を無作為に抽出・選定した。特別支援学校は、実施校と同一の都道府県に所在し、令和４～６年度に巡回公演を利用しなかった学校の中から、２校を無作為に抽出・選定し、それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。

アンケートでは、児童・生徒の文化芸術に関する興味関心の状況や、文化芸術に関する活動の実態について把握したうえで、巡回公演を含む、学校教育内での文化芸術活動の感想及びその時点での文化芸術に対する意識、体験をきっかけとした行動について尋ねた。

（２）調査方法

調査概要は次のとおりである。

表 3-1　調査方法

項目	内容
調査対象数	全体：16 校 〔内訳〕小学校：６校　中学校：８校　特別支援学校：２校 実施校：９校 〔内訳〕小学校：４校　中学校：４校　特別支援学校：１校 未実施校：７校 〔内訳〕小学校：２校　中学校：４校　特別支援学校：１校
有効回答数	全体：1,828 名

項目	内容
	〔内訳〕小学校：287 名　中学校：1,533 名　特別支援学校：８名 実施校：766 名 〔内訳〕小学校：209 名　中学校：550 名　特別支援学校：７名 未実施校：1,062 名 〔内訳〕小学校：78 名　中学校：983 名　特別支援学校：１名
調査方法	・　調査対象校に対して、調査マニュアルを電子データにて送付。 ・　対象校の児童・生徒には対象校の教員より回答 URL が共有され、回答を行った。
調査対象校の選定方法	実施校 ・　小・中学校は、全 10 の地域ブロックから各 1 校ずつを無作為に抽出し、計 10 校を選定。その学校に通う児童・生徒を対象とした。 ・　特別支援学校は、令和４～６年度にかけて巡回公演を実施したことがある学校の中から、ブロック等を考慮し、２校を無作為に抽出・選定。それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。 未実施校 ・　小・中学校は、実施校と同一の市区町村に所在し、令和４～６年度に巡回公演を利用しなかった学校の中から、計 10 校を選定。それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。なおブロック中に上記を満たす未実施校がない場合は、同ブロック内から３年間のうち２年間実施していない学校を無作為に抽出・選定した。 ・　特別支援学校は、実施校と同一の都道府県に所在し、令和４～６年度に巡回公演を利用しなかった学校の中から、２校を無作為に抽出・選定し、それぞれの学校に通う児童・生徒を対象とした。 ※　留意事項 ・　巡回公演の効果の分析について、厳密には実施校／未実施校の比較のほか、実施校における事業の実施前後あるいは経年での調査が効果的であるが、本調査では、調査スケジュールや調査協力校への回答負担を軽減する観点から、実施校（実施後のみ）及び未実施校への調査を実施した。
調査期間	令和７年 12 月 24 日（水）～令和８年１月 30 日（金）
調査項目	**１．回答者基本情報** ・　学校名、学年、組（クラス） ・　好きな文化芸術のジャンル ・　習い事や部活動の実施状況

項目	内容
	２．　文化芸術に関する普段の意識や行動 ・　学校の音楽・美術・図画工作の授業の楽しさ及びその理由 ・　普段の劇場・美術館への訪問状況 **３．学校教育内での文化芸術活動に関する意識や行動の変化** ・　巡回公演を含む、学校における文化芸術活動の意識・行動変容（楽しかったか、足を運んで鑑賞・体験をしたいか、演奏や体験をしたくなったか、音楽・美術・図画工作の授業が楽しみになったか、文化芸術に関する行動を行ったか）の有無 ・　巡回公演を含む、学校における文化芸術活動の感想 **４．学校教育内での文化芸術活動への参加意向** ・　巡回公演を含む、学校における文化芸術活動へ今後も参加したいか
調査結果を見る上での注意事項	・　本文、表、グラフ等に使われる「ｎ」は、各設問に対する回答者数を指す。 ・　百分率（%）の計算は、小数第２位を四捨五入し、小数第１位まで表示している。したがって、四捨五入の影響で、%を足し合わせて 100%にならない場合がある。 ・　本文中の小計は、各項目の値を四捨五入した上で足し合わせている。 ・　本文、表、グラフは、表示の都合上、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。 ・　属性別の傾向をみるためにクロス集計を行っている。クロス集計の属性のうち、「合計」は単純集計の値と一致する。

２．調査結果のサマリー

（１）文化芸術に関する普段の意識や行動

回答した児童・生徒の大半は、学校の音楽や美術・図画工作の授業に肯定的な印象を抱いており（いずれも全体で約 87～88%）、好きな文化芸術のジャンルとしても「音楽」「美術」が上位を占めている。一方、文化芸術に関する習い事や部活動を経験したことのある者は全体で約 40%にとどまり、普段から劇場や美術館に行く習慣のある者は約 10～15%であった。

学校種別では、小学校で習い事や劇場・美術館への来場割合が相対的に高い傾向がみられる。また、巡回公演実施校と未実施校の比較では、音楽の授業への肯定的回答や劇場への来

場割合において実施校がやや上回る項目がある一方、美術・図画工作の授業や美術館への来場割合についてはほとんど差がみられなかった。

調査項目ごとのサマリー

■ **好きな文化芸術のジャンル**

・ 好きな文化芸術のジャンルは、小・中・特別支援学校のいずれにおいても「音楽」と回答した児童・生徒の割合が最も高く、次いで「美術」となっている。

■ **文化芸術に関する習い事や部活動**

・ 文化芸術に関する習い事や部活動について、「したことはない」と回答した児童・生徒の割合が全体で 53.2%と最も多い一方、「今している」または「前にしていた」と回答した者の割合は全体で約 40%となっている。

・ 学校種別では、小学校で「今している」割合が 29.6%と相対的に高く、中学校では「前にしていた」割合が 27.6%と高い傾向がみられる。

■ **音楽の授業は楽しいか／その理由**

・ 学校の音楽の授業を「楽しい」または「どちらかといえば楽しい」と回答した児童・生徒の割合は、全体で 87.6%と高く、肯定的な印象を抱く児童・生徒が多い。

・ 学校種別では、特別支援学校で 100.0%、中学校で 88.2%、小学校で 84.3%となっている。また、巡回公演実施校（88.9%）が未実施校（86.7%）をやや上回っている。

■ **美術・図画工作の授業は楽しいか／その理由**

・ 学校の美術・図画工作の授業を「楽しい」または「どちらかといえば楽しい」と回答した児童・生徒の割合は、全体で 87.2%と音楽の授業と同様に高い水準となっている。

・ 学校種別では、特別支援学校で 100.0%、小学校で 88.6%、中学校で 86.9%となっている。巡回公演実施校（87.1%）と未実施校（87.3%）の間にはほとんど差がみられなかった。

■ **演劇や音楽のコンサートに行くか**

・ 普段、劇場での演劇や音楽のコンサートに「よく行く」または「時々行く」と回答した児童・生徒の割合は全体で 15.9%にとどまり、「行ったことがない」が 37.5%で最も多い。

・ 学校種別では、小学校（23.7%）が中学校（14.3%）を上回り、特別支援学校は 25.0%となっている。巡回公演実施校（17.4%）は未実施校（14.7%）をやや上回っている。

■　**美術館での展覧会に行くか**

・　普段、美術館での展覧会に「よく行く」または「時々行く」と回答した児童・生徒の割合は全体で 12.2%にとどまり、「行ったことがない」が 36.1%で最も多い。

・　学校種別では、小学校（16.0%）が中学校（11.5%）・特別支援学校（12.5%）を上回っている。巡回公演実施校（12.0%）と未実施校（12.3%）の間にはほとんど差がみられなかった。

（２）学校教育内での文化芸術活動に関する意識や行動の変化

学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことが「ある」児童・生徒は全体の約 70%であり、そのうち約 90%が「楽しかった」と肯定的に捉えている。特に巡回公演実施校では、小学校を中心に未実施校を大きく上回る肯定的回答がみられた。

一方、今後も劇場や美術館で文化芸術に触れたいという意欲（全体 63.6%）や、自分でも創作・表現活動をしたくなったという回答（全体 66.7%）は、楽しさの実感と比べるとやや低い水準にとどまっている。

文化芸術活動をきっかけとした行動変容については、約半数の児童・生徒が何らかの行動を経験しており、体験に対する肯定度が高い者ほど行動変容の項目数が多い傾向がみられた。具体的な行動としては「家族や友達と話をした」が突出して多いものの、そこから劇場・美術館への訪問や自発的な創作活動といった具体的行動に至る割合は限定的であり、体験の「楽しさ」を実際の行動につなげていく仕組みが課題といえる。

調査項目ごとのサマリー

■学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことがあるか

・　過去に学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことが「ある」と回答した児童・生徒の割合は、全体で 73.9%だった。

※以降は学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことが「ある」と回答した児童・生徒による回答結果のサマリーである。

■　**文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかった**

・　文化芸術を見たり聞いたりすることが楽しかったかについて、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は全体で 89.1%と高い水準にある。

・　学校種別では、小学校（94.0%）が最も高く、中学校（88.3%）、特別支援学校（85.7%）と続く。

・　巡回公演実施校と未実施校の比較では、小学校において実施校（96.4%）が未実施校（81.3%）を大きく上回っており、中学校でも実施校（91.7%）が未実施校（86.2%）

を上回っている。

■　**今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたい**

・　今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいかについて、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は全体で 63.6%だった。

・　学校種別では、特別支援学校（85.8%）が最も高く、小学校（76.8%）、中学校（61.2%）と続く。

・　巡回公演実施校と未実施校の比較では、小学校において実施校（78.4%）が未実施校（68.7%）を上回っている一方、中学校では未実施校（63.3%）が実施校（58.0%）をやや上回る結果となった。

■　**自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊ったりしたくなった**

・　自分でも創作・表現活動をしたくなったかについて、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は全体で 66.7%だった。

・　学校種別では、特別支援学校（85.7%）が最も高く、小学校（69.7%）、中学校（66.0%）と続く。

・　巡回公演実施校と未実施校の比較では、いずれの学校種においても実施校と未実施校の間に大きな差はみられなかった。

■　**文化芸術を見たり聞いたりしたことで、音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになった**

・　文化芸術活動を通じて音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになったかについて、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は全体で 69.7%だった。

・　学校種別では、特別支援学校（100.0%）が最も高く、小学校（78.8%）、中学校（67.9%）と続く。

・　巡回公演実施校と未実施校の比較では、小学校において実施校（79.6%）が未実施校（75.0%）をやや上回っている一方、中学校では未実施校（70.0%）が実施校（64.7%）をやや上回る結果となった。

■　**行動変容の要因分析**

・　文化芸術活動をきっかけに何らかの行動をしたことが「ある」と回答した児童・生徒の割合は全体で 52.8%であり、約半数が行動変容を経験している。

・　具体的な行動としては、「家族や友達と内容について話をした」（52.8%）が最も多く、「自分で文化芸術に関することを始めた」（17.5%）、「美術館や博物館へ行った」（17.1%）、「興味がわいたので調べた」（16.9%）、「劇場や音楽ホールへ行った」

（15.6%）と続く。

・　文化芸術活動に対する肯定度が高い者ほど行動変容の項目数が多い傾向がみられ、「楽しかった」に「あてはまる」と回答した群は平均 1.68 項目を選択したのに対し、「あてはまらない」群は 0.37 項目にとどまった。また、行動変容の項目間の共起関係をみると、「話をした」は他のあらゆる行動と高い共起率を示す基盤的な行動である一方、「話をする」段階から具体的行動へ至る割合は限定的であった。鑑賞施設への訪問はジャンルを超えて連動しやすく、習い事の開始に至る層は他の行動変容も幅広く経験している活発な層であることが示唆された。

■　学校の授業行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことをきっかけに、行動したことはあるか

・　文化芸術活動をきっかけに何らかの行動をしたことがあるかについて、「はい」と回答した児童・生徒の割合は全体で 52.8%であり、約半数が行動変容を経験している。

・　巡回公演実施校と未実施校の比較では、特別支援学校を除き、実施校が未実施校を上回っており（小学校：実施校 57.8%、未実施校 46.9%、中学校：実施校 54.4%、未実施校 51.0%）、巡回公演の体験が具体的な行動変容を促す効果がうかがえる。

（３）学校教育内での文化芸術活動への参加意向

今後機会があれば参加したいかについて、肯定的な回答をした児童・生徒の割合は全体で 64.6%だった。巡回公演実施校と未実施校の比較では、いずれの学校種においても実施校が未実施校を大きく上回っており（小学校：実施校 78.9%、未実施校 41.3%、中学校：実施校 71.8%、未実施校 43.5%）、巡回公演の体験が今後の参加意欲に強く結びついていることがうかがえる。

３．調査結果からの考察

（１）調査結果から読み取れる現状と課題

１）現状

調査結果から、児童・生徒にとって文化芸術に触れる機会の多くが学校において提供されており、学校が文化芸術鑑賞・体験の重要な機会となっていることが読み取れる。学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことが「ある」と回答した児童・生徒は 73.9%であり、その体験について「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回答した割合は 89.1%と高い水準となっている。

一方で、劇場やコンサートに「よく行く」「時々行く」と回答した割合は 15.9%、美術館

の展覧会では 12.2%にとどまっており、学校外で文化芸術に触れる機会は比較的少ない状況がみられる。

また、巡回公演実施校と未実施校を比較すると、小学校では文化芸術体験が「楽しかった」と回答した割合が実施校 96.4%、未実施校 81.3%となっており、実施校が大きく上回っている。中学校でも実施校 91.7%、未実施校 86.2%となっており、舞台芸術等の実演を伴う体験型の文化芸術プログラムは、児童・生徒の体験満足度に影響している可能性がある。

さらに、文化芸術活動をきっかけに何らかの行動をした児童・生徒は 52.8%であり、約半数が行動変容を経験している。具体的には、「家族や友達と内容について話をした」が 52.8%で最も多く、「自分で文化芸術に関することを始めた」(17.5%)、「美術館や博物館へ行った」(17.1%) 等が続いている。また、文化芸術活動を「楽しかった」と回答した児童・生徒は平均 1.68 項目の文化芸術に関わる行動を経験しているのに対し、「あてはまらない」と回答した群では 0.37 項目にとどまっており、体験に対する肯定度が高いほど行動変容が広がる傾向がみられる。

２）課題

調査結果から、児童・生徒の文化芸術活動に関して、次の２つの課題があると考えられる。

第１に、学校外で文化芸術に触れる機会が比較的少ないことである。学校で文化芸術を見たり聞いたりした経験を持つ児童・生徒は 73.9%に上る一方、劇場やコンサート、美術館等の文化施設に行く割合は 15%前後にとどまっている。このことから、児童・生徒にとって文化芸術に触れる機会は学校に大きく依存している状況がうかがえる。

第２に、文化芸術活動の満足度と、その後の継続的な鑑賞意欲や創作意欲との間に一定の差がみられることである。文化芸術活動について「楽しかった」と回答した割合は 89.1%と高い一方、今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいと回答した割合は 63.6%、自分でも演奏・創作・表現活動をしたくなったと回答した割合は 66.7%となっている。このことから、学校教育内での文化芸術活動は高い満足度を得ているものの、その体験が必ずしも継続的な鑑賞行動や創作活動に十分につながっているとは言えない可能性がある。

（２）政策への示唆

１）学校教育内での文化芸術活動の確保

調査結果では、学校の授業や行事を通じて文化芸術を見たり聞いたりした経験を持つ児童・生徒が 73.9%に上る一方、劇場や美術館に行く割合は 15%前後にとどまっている。

この結果から、学校は児童・生徒が文化芸術に触れる重要な機会となっていると考えられ

る。したがって、学校教育の中で文化芸術鑑賞・体験の機会を継続的に確保していくことが重要である。

２）実演型の文化芸術活動の充実

巡回公演実施校では、文化芸術活動に対する満足度が高い傾向がみられた。舞台芸術等の実演型プログラムを学校に提供する取組は、児童・生徒の文化芸術への関心を高める機会として有効である可能性がある。今後も巡回公演等の取組を通じて、学校教育内での文化芸術活動の充実を図ることが求められる。

３）体験後の継続的な鑑賞・活動につなげる取組

文化芸術活動は高い満足度を示している一方、継続的な鑑賞意欲や創作意欲との間には一定の差がみられた。

こうした状況を踏まえ、学校での文化芸術活動を契機として、劇場・美術館等の文化施設への訪問や創作活動への参加につなげていくための取組が重要である。

４）文化芸術活動後の共有・対話の活用

文化芸術活動後の行動として最も多いのは「家族や友達と内容について話をした」であった。鑑賞後の感想共有や振り返り等の機会を設けることは、文化芸術活動をより深め、その後の行動につなげる上で有効である可能性がある。

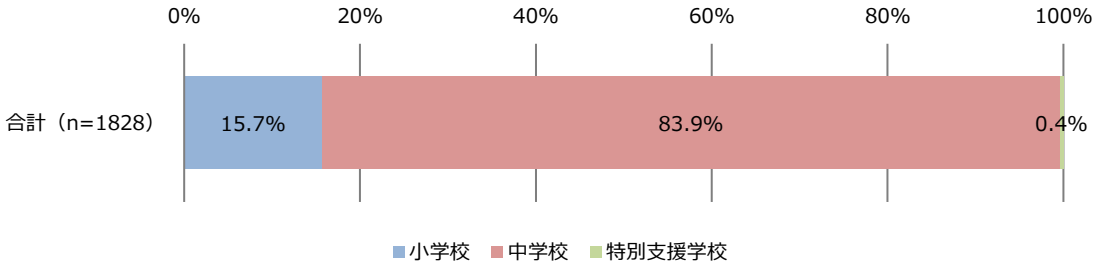
４．調査結果

（１）回答者基本情報

１）学校種別

回答者のうち、「小学生」は 15.7%、「中学生」は 83.9%、「特別支援学生」は 0.4%であった。

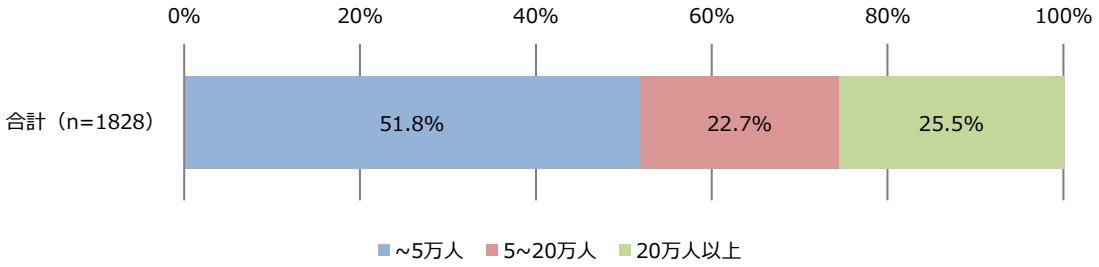
図 3-1　学校種別



２）所在自治体の人口規模

回答者の在籍する学校の所在自治体の人口規模について、「～5 万人」が 51.8%、「5～20 万人」が 22.7%、「20 万人以上（特別区含む）」が 25.5%であった。

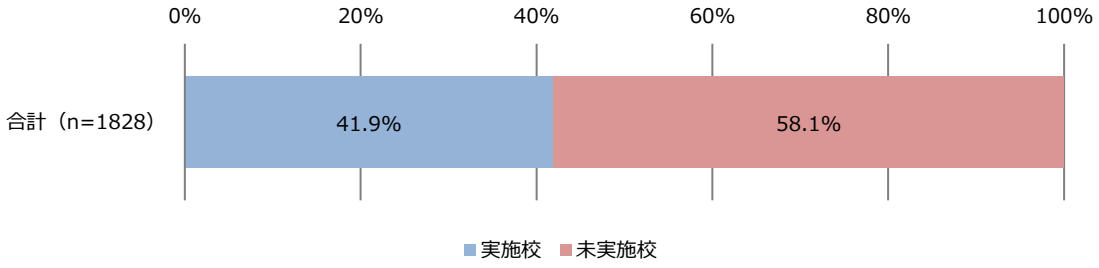
図 3-2　所在自治体の人口規模



３）巡回公演の実施有無

回答者のうち、巡回公演の「実施校の児童・生徒」は 41.9%、「未実施校の児童・生徒」は 58.1%であった。

図 3-3　巡回公演の実施有無

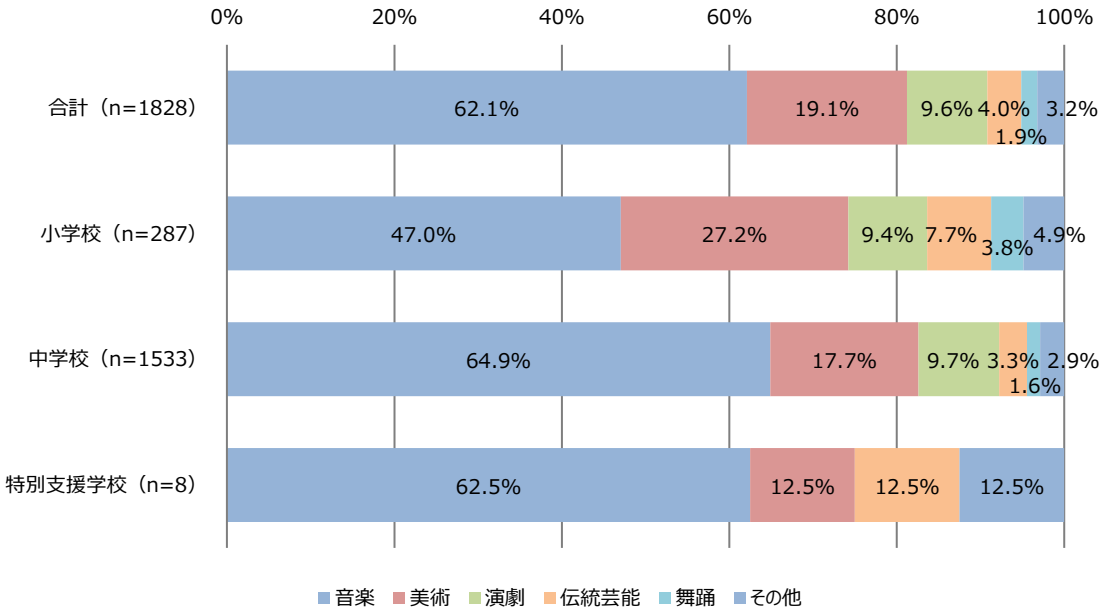


（２）文化芸術に関する普段の意識や行動

１）好きな文化芸術のジャンル

好きな文化芸術のジャンルについて、小・中・特別支援学校でいずれも「音楽」の割合が最も高く、次いで、「美術」となっている。

図 3-4　好きな文化芸術のジャンル

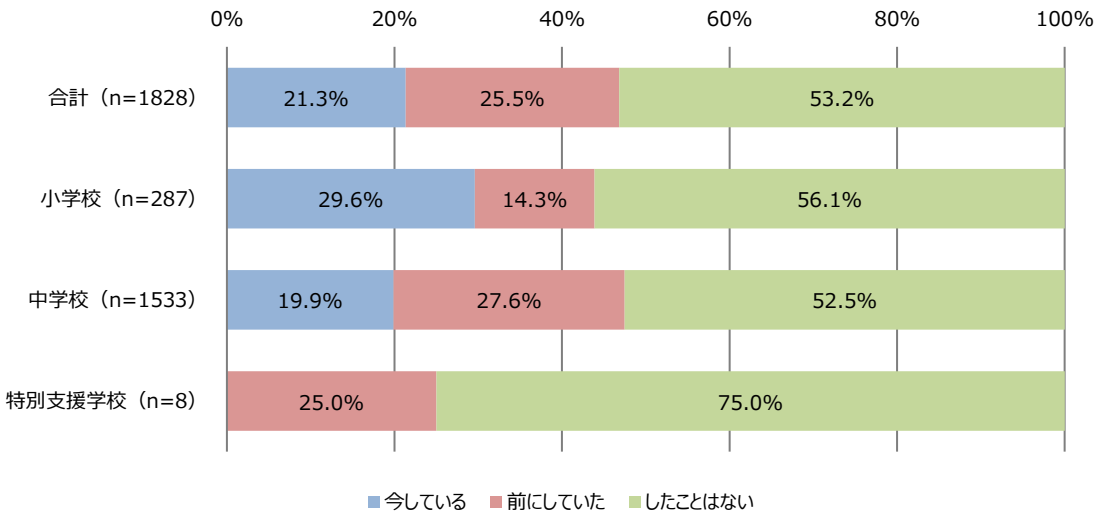


２）文化芸術に関する習い事や部活動

文化芸術に関する習い事や部活動の実施状況を尋ねたところ、「したことはない」と答える児童・生徒が全体で最も多く 53.2%だった。

学校種別で見ると、「今している」は小学校で 29.6%、中学校で 19.9%、「前にしていた」は小学校で 14.3%、中学校で 27.6%、特別支援学校で 25.0%、「したことはない」は小学校で 56.1%、中学校で 52.5%、特別支援学校で 75.0%だった。

図 3-5　文化芸術に関する習い事や部活動



３）音楽の授業は楽しいか

学校の音楽の授業は楽しいか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「楽しい」と「どちらかといえば楽しい」の回答割合の和）は、全体で 87.6%だった。

学校種別で見ると、小学校で 84.3%、中学校で 88.2%、特別支援学校で 100.0%だった。

また巡回公演実施校と未実施校で比較すると、実施校で 88.9%、未実施校で 86.7%だった。

図 3-6　音楽の授業は楽しいか

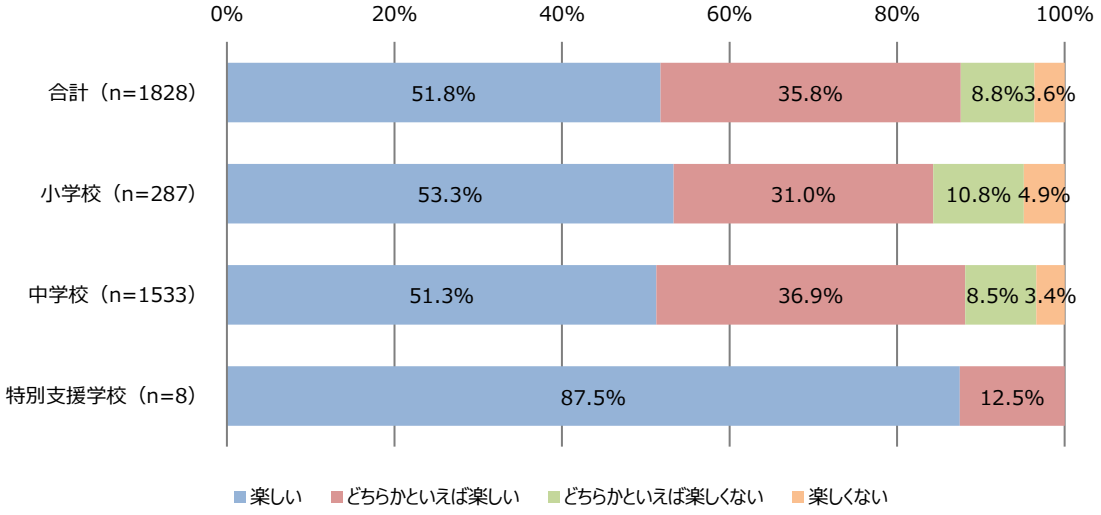
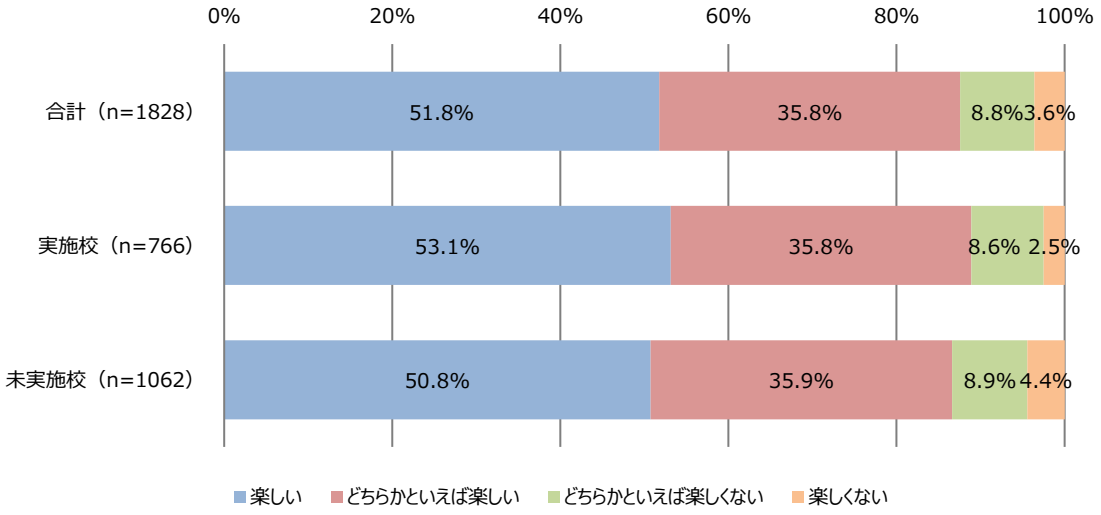


図 3-7　【巡回公演の実施状況別】音楽の授業は楽しいか



４）音楽の授業が楽しい／楽しくない理由

音楽の授業が楽しい理由としては、歌や楽器演奏そのものへの喜び、仲間との一体感、多様な音楽に触れられること等が挙げられた。一方、楽しくない理由としては、歌や演奏の苦手意識、鑑賞・感想記述への抵抗感、選曲や授業形式への不満等が挙げられた。

自由記述のサマリー

【楽しいと回答した理由】

■　歌うこと・楽器演奏が好きで楽しい

歌を歌うことや楽器を演奏すること自体が好き・楽しいという意見が最も多く挙げられた。リコーダー、鍵盤ハーモニカ、琴、ギター等、多様な楽器への言及も多く、音楽に能動的に関わることへの喜びが共通して見られる。

- 歌うのが好きで、授業で歌えるから
- 楽器を演奏したり、自分の声帯を使って思いっきり歌ったりするのがとても楽しく感じられるから
- リコーダーとか音を出すのは難しいけど、できると達成感がすごいから
- 歌を歌うと心のストレスがなくなるし、リコーダーで演奏するのが楽しいから
- お琴等、普段できないことを実際にやれるから

■　音楽を聴くこと・鑑賞が好き

音楽を聴くこと・鑑賞することが好きで楽しいという意見も非常に多く見られた。曲の情景や感情を感じ取ったり、分析したりする楽しさを挙げる声もあった。

- 音楽を聴くと心地よくなるから
- 様々な音楽から情景や感情を感じ取るのが楽しいから
- 音楽鑑賞が好き。歌うのも楽しい
- 曲を聴いて、自分なりに情景をイメージしたり、工夫を読み取るのが面白いから
- 鑑賞で音楽を聴いたりするのは楽しいし、歌うのも好きだから

■　みんなで歌ったり演奏したりする一体感・協力の楽しさ

クラスや友達と一緒に合唱・合奏することで生まれる一体感や協力の喜びを挙げる意見が多く見られた。

- クラス全員で協力し合って合唱ができているから
- みんなでハーモニーを作るのが楽しいから
- 歌ってクラスの仲を深められるから
- 合唱練習では、みんなで協力し合わせることでクラスが一つになるから
- グループで発表することが楽しいし、クラスのみんなで歌い終わったあとの達成感がたまらない

■　多様な音楽・楽器・文化に触れられる

普段接しない音楽ジャンルや、世界各国・歴史的な音楽、さまざまな楽器に触れられることを楽しさの理由として挙げる意見が多かった。

- 触れたことのない音楽等に触れることができて、知っているものもあれば初めて聞くものもあって面白いから
- 様々な国や地域特有の音楽文化を知ることができるから
- 普段ピアノ以外の楽器に親しむことがあまりないので、音楽の授業を通して色々な楽器に触れることが楽しいから
- 歴史ごとに音楽の流行りが変わっていくのを学んだり、演奏したり歌うことが好きだから
- 自分の知らなかった曲や新たな発見を部活動で活かすことができるから

■　先生の授業・雰囲気が良い

先生の教え方が分かりやすく面白い、明るい・優しいといった、先生への肯定的な評価が楽しさの理由として多く挙げられた。

- 先生が面白く授業全体の雰囲気がいいから
- 先生の教え方が上手いし、表現の仕方が天才
- わからないことを先生に聞くと優しく答えてくれるから
- 先生が授業を楽しく盛り上げてくれるから
- 担当の先生が分かりやすく楽しく教えてくれるから自分も音楽の授業が楽しくなってきた

■　できるようになる達成感・自分の成長を感じられる

練習して上手になったときの達成感や、できなかったことができるようになる成長の実感を楽しさの理由として挙げる意見もまとまって見られた。

- 難しいリコーダーが少しできるようになるから
- 最近リコーダーが上手にできるようになったから
- できなかったことができるようになった時の達成感がすごいから
- リコーダーで課題曲が吹けたときの達成感があるから
- みんなと合唱したり、リコーダーを練習して本番で結果を出せたときの達成感がすごいから

【楽しくないと回答した理由】

■　歌うことや楽器演奏が苦手・できない

歌うことやリコーダー等の楽器演奏が苦手・下手であることへの苦痛が、楽しくない理

由として最も多く挙げられた。技術的な難しさへの戸惑いも含まれる。

- 歌を歌ったりするのが得意ではないから。楽器を演奏する機会があまりなくて、つまらないから
- 音楽を自分たちで歌ったり、演奏すると周りとの実力の差が生まれてしまい、自分ってなんで下手なんだろうとイヤになるから
- 楽譜が読めないし普通にできないから
- 声変わりが始まっていて歌を歌うのが恥ずかしいし、リコーダー等の楽器を触る面白みを感じない
- リコーダーで音を出すのが難しく、曲の感想を書くのも難しいから

■　鑑賞・感想記述・音楽記号等の座学が苦手・嫌い

音楽を聴いて感想や知覚・感受を書いたり、音楽記号・楽譜を覚えたりする作業を苦手・嫌いと感じる意見が多く見られた。

- 歌を歌う時は楽しいけど、作曲者の気持ちは分からないから
- 鑑賞で感じたことを感想として書くのが難しいし、うまく歌えないから
- プリント系が多くて、鑑賞の感想を書くのが難しい
- 音楽を聞くのは好きだけど、気持ちを書くのは無理だから

■　授業で扱う音楽の内容・選曲への不満

授業で扱う曲が古い・知らない曲ばかり、自分の好みのジャンルでないといった、教材への不満を理由として挙げる意見がまとまって見られた。

- 好きな音楽のジャンルじゃないから
- 昔のよくわからない知らない洋楽ばかりだから
- 現代の音楽の文化に一切触れないので、学校で取り扱う音楽と普段身近に感じている音楽との間にギャップを感じている
- 歌うことは好きだけど、音楽の授業で出てくる曲が自分の好みの曲ではないから
- 鑑賞の時くらいしかささるような曲が聴けないし、合唱の声がうまく出なくて否定された気分になる

■　先生・授業の進め方への不満

先生の指導法や雰囲気、授業の進め方に対する不満を理由として挙げる意見が見られた。

- 先生自身の見本がなく、何をどうすればいいかわかりにくい
- 自分では頑張ったつもりでも先生からは評価されにくいから
- とにかく練習しているだけで、教えてもらっている感じがあまりないから

■　音楽・授業全般への興味・関心がない

音楽自体に興味がない、必要性を感じない等、音楽という教科への根本的な無関心を理由として挙げる意見も見られた。

・　あまり興味がないし、これからに役立つことなのかわからないから
・　音楽自体が嫌いだから。歌のテストをする必要性がわからない。音楽は聞くだけで十分だから
・　そそられるものがないから、一人で練習することが多く集中力が途切れやすい
・　音楽に興味がないから

■　授業形式・活動内容のマンネリや偏りへの不満

歌やリコーダーばかりで内容が変わらない、練習よりタブレット作業が多い等、授業の形式や活動の偏りへの不満を挙げる意見がまとまって見られた。

・　リコーダーや歌ばかりだから
・　鑑賞が多くて、演奏の練習があまりできないから
・　練習をした方が進むのに、タブレット・まとめる作業が多すぎて練習があまりできないときが多い
・　何回も同じ曲を歌うのがだるい
・　授業内容がいつも同じだから

５）美術・図画工作の授業は楽しいか

学校の美術・図画工作の授業は楽しいか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「楽しい」と「どちらかといえば楽しい」の回答割合の和）は、全体で 87.2%だった。

学校種別で見ると、小学校で 88.6%、中学校で 86.9%、特別支援学校で 100.0%だった。

また巡回公演実施校と未実施校で比較すると、実施校で 87.1%、未実施校で 87.3%だった。

図 3-8　美術・図画工作の授業は楽しいか

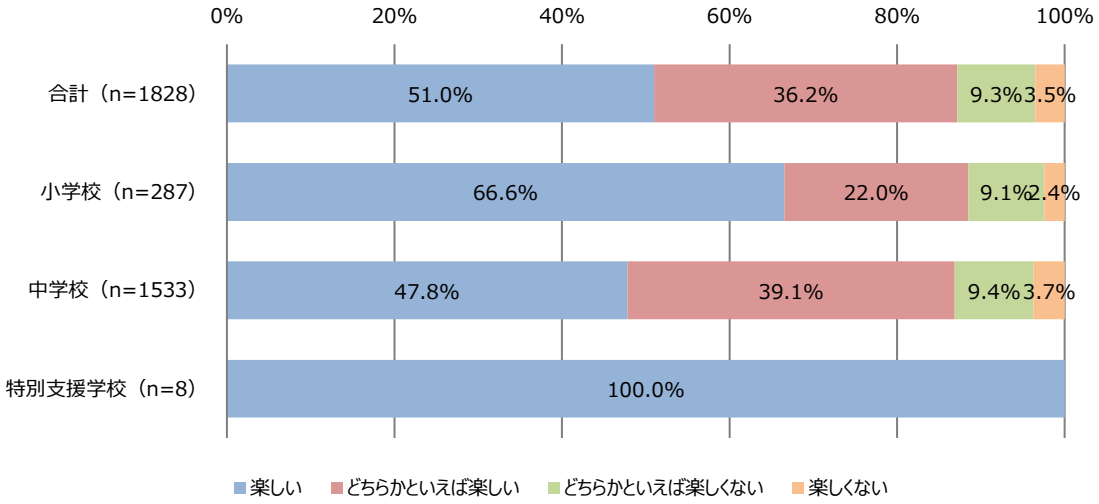
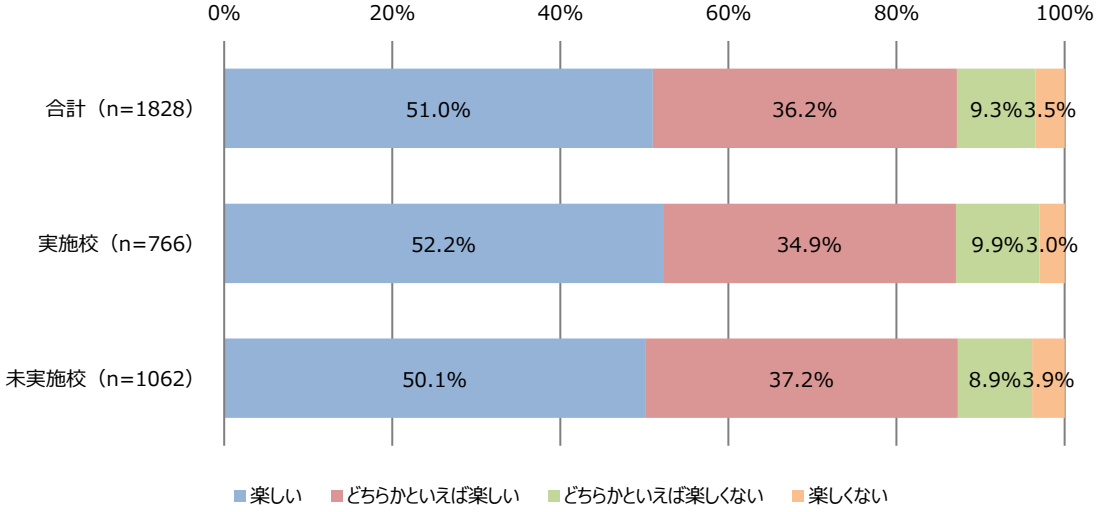


図 3-9　【巡回公演の実施状況別】美術・図画工作の授業は楽しいか



６）美術・図画工作の授業が楽しい／楽しくない理由

美術・図画工作の授業が楽しい理由としては、絵や工作・ものづくりへの好意、自分の発想や個性を自由に表現できること、作品完成時の達成感等が挙げられた。一方、楽しくない理由としては、絵や工作の苦手意識、アイデアが浮かばないことへの困難さ、評価や授業形式への不満等が挙げられた。

自由記述のサマリー

【楽しいと回答した理由】

■　絵を描くこと・工作・ものづくりが好き

絵を描くことや工作・ものづくりが好きだという意見が最も多く挙げられた。もともと趣味として絵を描いていたり、幼い頃からものづくりが好きだったりと、個人的な関心や得意意識が楽しさの根底にある。

- 昔から絵を描くことが大好きで、もっと詳しく絵の書き方を学べるから
- 小さい頃からものづくりが好きで、家でも折り紙を折ったりしているから
- 工作が得意で、ものを作っているうちに自分の技術が上がっているのを感じると楽しいから
- 昔からずっと絵を書いているけれど、授業でさらに詳しく描き方を学べるから

■　自分の発想・個性を自由に表現できる

決まった答えがなく、自分のアイデアや個性を自由に作品に反映できることを楽しさの理由として挙げる意見が非常に多かった。自分だけのオリジナル作品が作れるという点が特に好まれている。

- これを書きなさいと縛られず、自分を自由に表現できるから
- 自分の思ったことや感じたことを絵や物体に表すことが楽しいから
- 自分だけの唯一無二の作品が作れたりするから
- 数学や理科等は答えがあるが、音楽や美術はあまり答えというものがないから
- 自分の想像力をフルに活かして作品を作るのがとても楽しい

■　完成・達成時の喜び・達成感

作品が完成したときや、難しい課題をやり遂げたときの達成感・喜びを楽しさの理由として挙げる意見が多く見られた。

- 最初は難しいなと思うけど、完成した時の達成感があって嬉しいから
- 模写することが苦手だけどできたときの達成感がとても大きいから
- 何も無い状態や身近な材料から、自分の手で一つの作品を完成させることが楽しいから
- 失敗やうまくいかないことも多いけれど、できた時の達成感があるから

■　普段できない体験・多様な道具・技法に触れられる

彫刻刀・絵の具・版画・粘土等、日常では使わない道具や技法、学校ならではの体験ができることを楽しさの理由として挙げる意見もまとまって見られた。

・　彫刻を彫ったり、私生活では絶対にやらないようなことをするから
・　家にはあまりなさそうな材料から作品を作るのが楽しく、人それぞれの考えから創造される作品を見ることもワクワクするから

■　集中して取り組める・没頭できる

座学と違い、手を動かしながら一つのことに集中して取り組める点を楽しさの理由として挙げる意見が見られた。

・　一つのことに集中して取り組み、完成したときの達成感がいいから
・　ものを作ることに夢中になれるから
・　細かい作業に集中していると時間が経つのが早く感じるから

■　先生の指導・友達との交流が良い

先生が丁寧に教えてくれる・褒めて伸ばしてくれるといった指導への満足感や、友達と作品を見せ合ったり意見を共有したりすることを楽しさの理由として挙げる意見も見られた。

・　作業を先生が実際に立ってお手本を見せてくれるのでわかりやすく、褒めて伸ばしてくれるから
・　クラスのみんなとアドバイスを出し合ってより良いものを作ることができるから
・　自分の作りたいデザインを否定せず好評してくださる先生で、休み時間でも話しやすいから

【楽しくないと回答した理由】

■　絵や工作が苦手・下手・不器用

絵を描くことや工作が苦手で思い通りに作れないことへの苦痛が、楽しくない理由として最も多く挙げられた。不器用さや技術的な自信のなさも含まれる。

・　美術や図工が難しくて、いつも失敗してしまうから
・　絵が苦手、不器用だから
・　寸法や長さ、大きさを毎回ミスってだめになるから
・　自分の思うように手が動かないし、表現できないから

■　アイデア・発想が浮かばない・思い通りに作れない

何を作るか考えることや、自分のイメージ通りに作品を仕上げることに難しさを感じ

る意見が多く見られた。

・　何を作るか考えるのが大変で、思い通りにいかないこともあるから
・　自分の想像力で作品を作ることが苦手だから
・　デザイン等が思いつかず、どうしても考えに詰まってしまうから

■　特定の活動（鑑賞・デッサン等）が苦手・嫌い

工作は好きだが絵が苦手、または鑑賞や特定の技法（デッサン・彫刻刀等）が苦手・嫌いという意見がまとまって見られた。

・　粘土等の作るものは楽しいが、絵を書くのが嫌いだし、美術に嫌なイメージがある
・　絵を描くのが苦手だからデッサンの時は楽しくないから
・　工作は好きだが、デッサン等描くのが苦手だから
・　彫刻や、イラストが好きじゃなくて時間がかかってしまうから

■　先生・評価への不満

先生の指導法や評価に対する不満を理由として挙げる意見が見られた。自分では頑張っても評価されにくいという声も複数あった。

・　自分では頑張ったつもりでも先生からは評価されにくいから
・　先生の話が長くて作業する時間が減っているから

■　授業形式・活動内容への不満

個人作業ばかりでグループ活動が少ない、作業時間が足りない、説明が多すぎる等、授業の進め方への不満を理由として挙げる意見が見られた。

・　安全性等の観点から個人作業が多い。もっとグループになって行いたい
・　作品を作るときの作り方等の説明が少ない
・　授業数が少なく、あまり集中できない環境だから
・　小学校のときより制限が増えた気がする
・　限られた時間の中で作品を作るのではなく、自由に時間を使って想像しながら作品を作りたいから

■　興味・関心がない・必要性を感じない

図画工作や美術に対して根本的に興味が持てない、将来に役立つとは思えないという意見も見られた。

・　あまり興味がなく、将来にも役立たないから
・　自分はあまり芸術等には興味がなく、ただただやっている
・　美術とか図画工作とかなにか作るのが嫌いだから

7）演劇や音楽のコンサートに行くか

普段、友達や家族と劇場での演劇や音楽のコンサートにどのくらい行くか尋ねたところ、全体では「行ったことがない」ものが 37.5%で最も多く、「よく行く」「時々行く」ものの回答割合の和は、15.9%だった。

学校種別で見ると、「よく行く」と「時々行く」の回答割合の和は小学校で 23.7%、中学校で 14.3%、特別支援学校 25.0%だった。

また巡回公演実施校と未実施校で比較すると、「よく行く」と「時々行く」の回答割合の和は実施校で 17.4%、未実施校で 14.7%だった。

図 3-10　演劇や音楽のコンサートに行くか

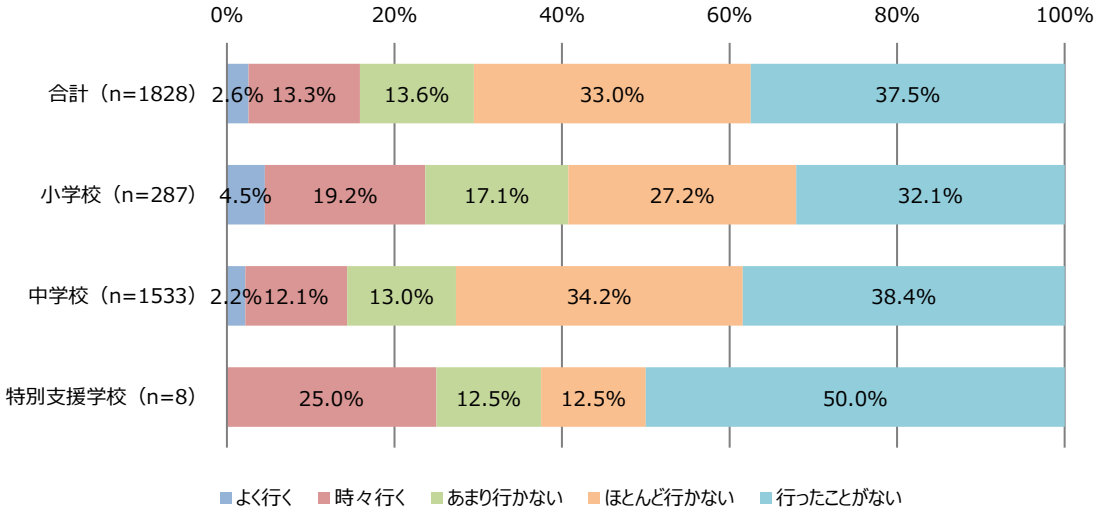
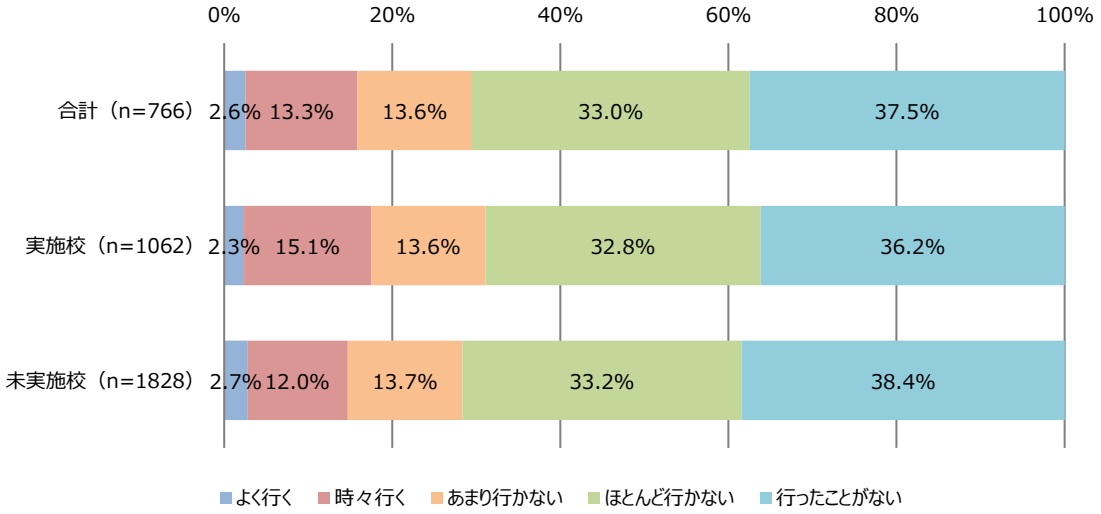


図 3-11　【巡回公演の実施状況別】演劇や音楽のコンサートに行くか



８）美術館での展覧会に行くか

普段、友達や家族と美術館での展覧会にどのくらい行くか尋ねたところ、全体では「行ったことがない」ものが 36.1%で最も多く、「よく行く」「時々行く」ものの回答割合の和は、12.2%だった。

学校種別で見ると、「よく行く」と「時々行く」の回答割合の和は小学校で 16.0%、中学校で 11.5%、特別支援学校 12.5%だった。

また巡回公演実施校と未実施校で比較すると、「よく行く」と「時々行く」の回答割合の和は実施校で 12.0%、未実施校で 12.3%だった。

図 3-12　美術館での展覧会に行くか

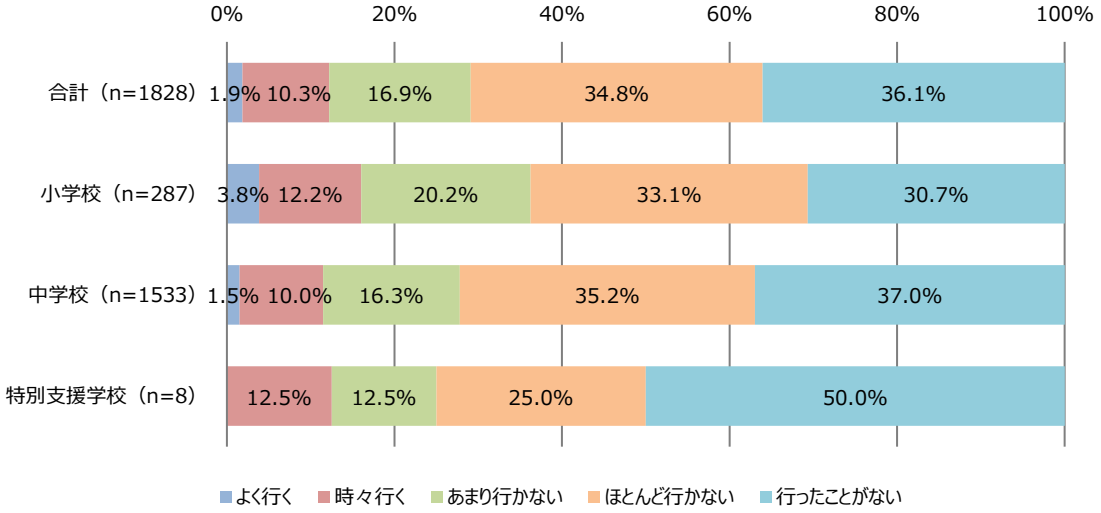
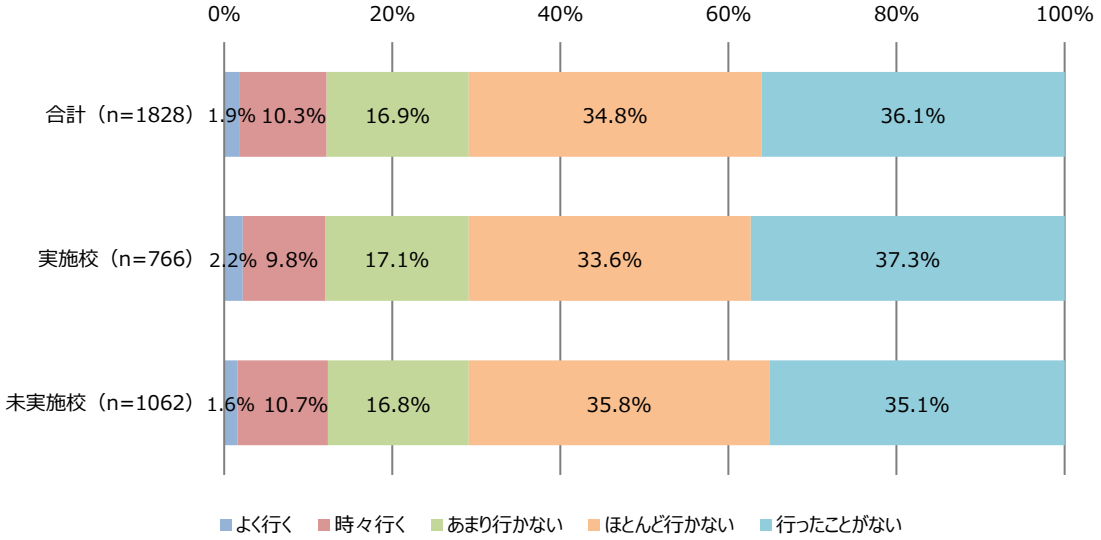


図 3-13　【巡回公演の実施状況別】美術館での展覧会に行くか

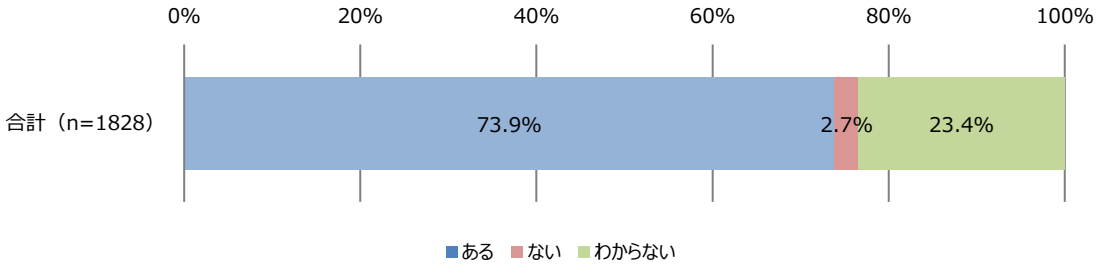


（３）学校教育内での文化芸術活動に関する意識や行動の変化

１）学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことがあるか

過去に（巡回公演の実施校は、今回体験した文化芸術公演よりも前に）、学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことがあるか尋ねたところ、全体で「ある」の割合は73.9%だった。

図 3-14　学校の授業や行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことがあるか

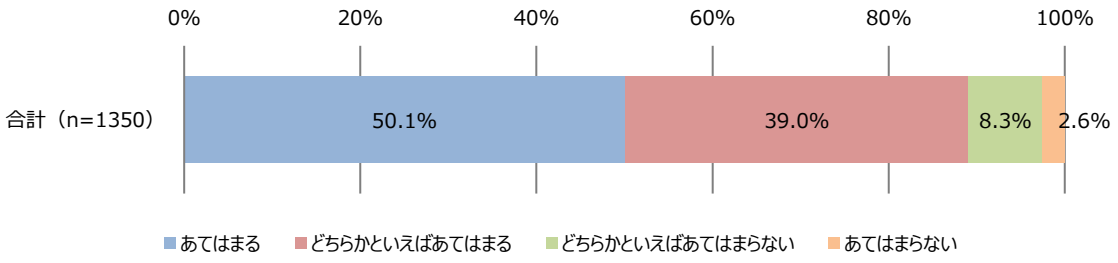


※以降の設問は、１）において文化芸術を見たり聞いたりしたことが「ある」と回答した生徒のみ回答

２）文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかった

文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかったか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、全体で89.1%だった。

図 3-15　文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかった



学校全体で、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校で94.0%、中学校で88.3%、特別支援学校で85.7%だった。

また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校の実施校で96.4%、未実施校で81.3%、中学校の実施校で91.7%、未実施校で86.2%、特別支援学校の実施校で83.4%、未実施校で100.0%だった。

図 3-16　【巡回公演の実施状況別】文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかったか／小学校

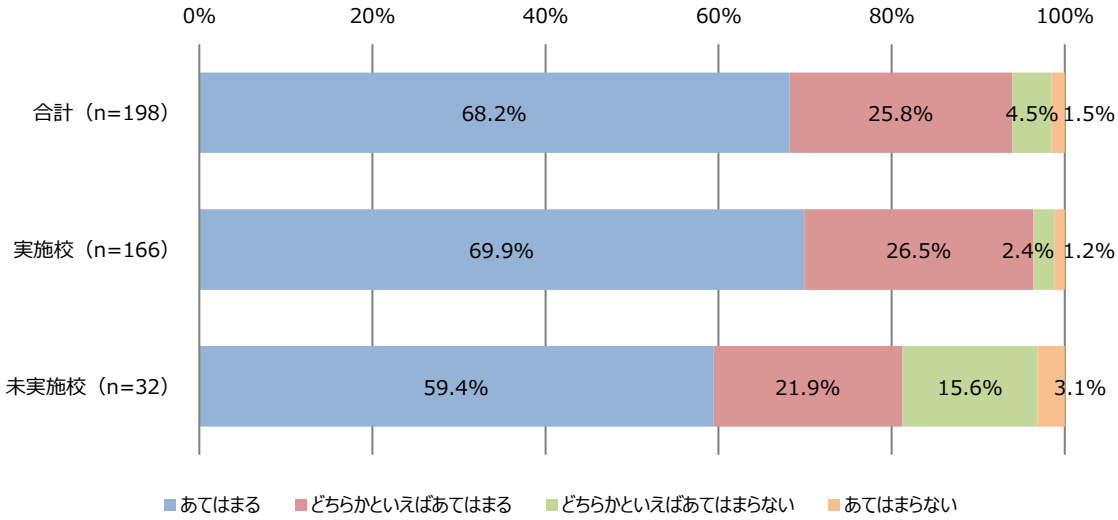


図 3-17　【巡回公演の実施状況別】文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかったか／中学校

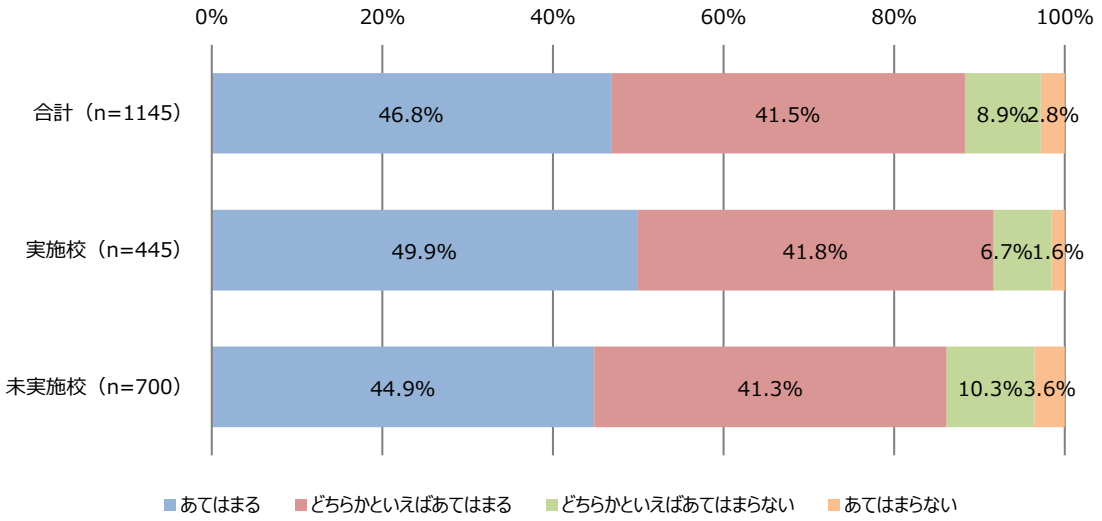
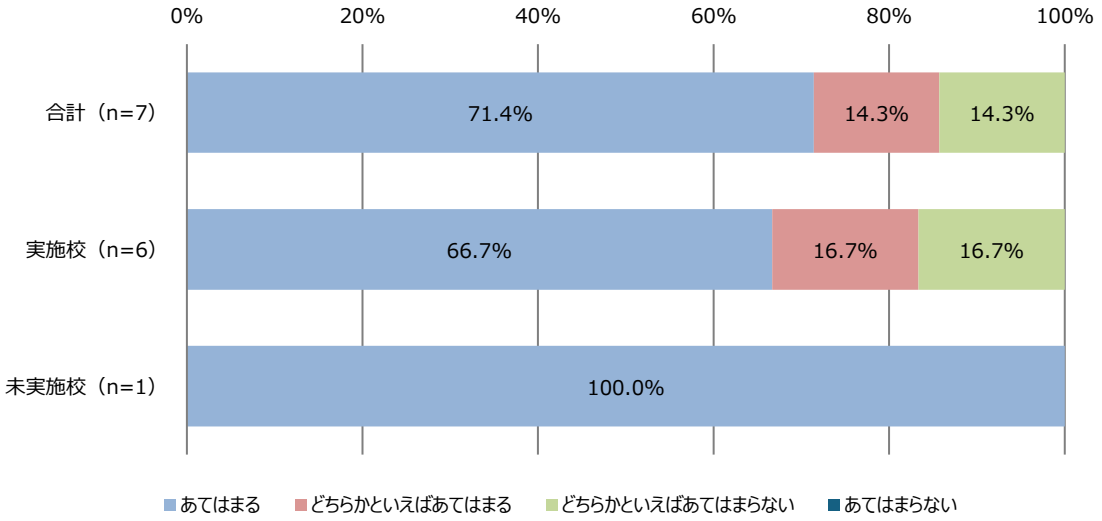


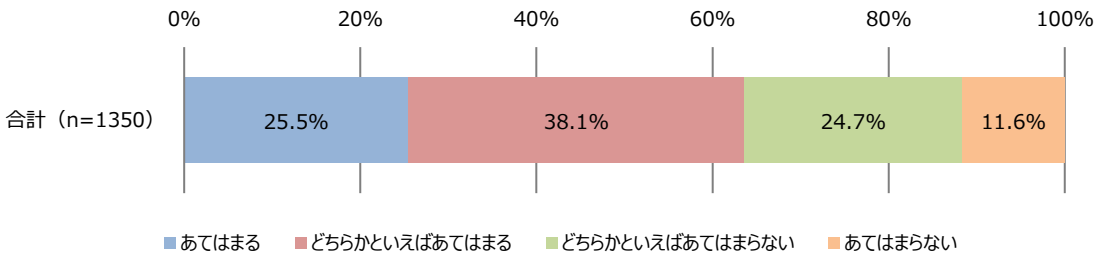
図 3-18　【巡回公演の実施状況別】文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかったか／特特別支援学校



３）今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたい

今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、全体で 63.6%だった。

図 3-19　今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたい



学校全体で、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校で 76.8%、中学校で 61.2%、特別支援学校で 85.8%だった。

また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校の実施校で 78.4%、未実施校で 68.7%、中学校の実施校で 58.0%、未実施校で 63.3%、特別支援学校の実施校で 100.0%、未実施校で 0.0%だった。

図 3-20　【巡回公演の実施状況別】今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいか／小学校

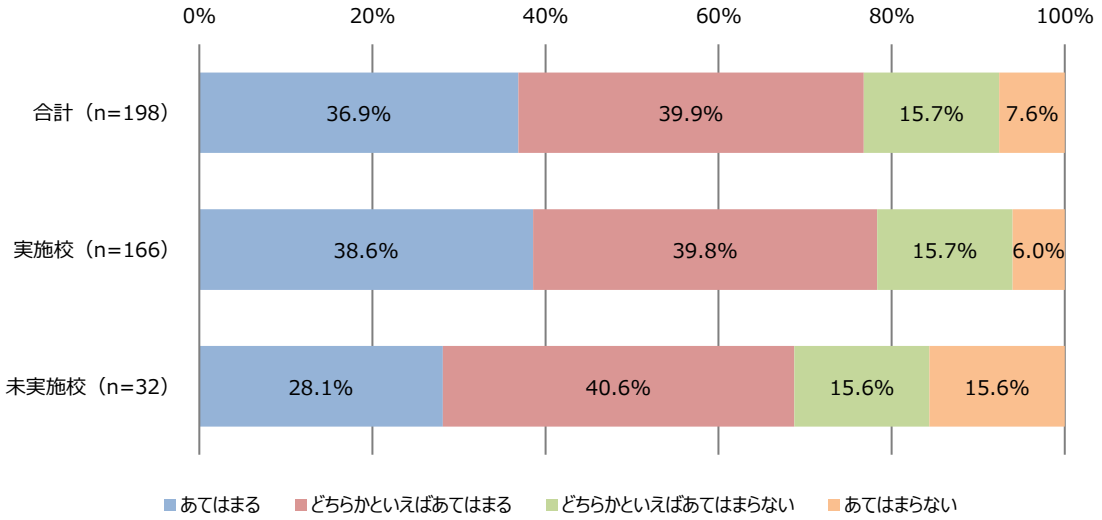


図 3-21　【巡回公演の実施状況別】今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいか／中学校

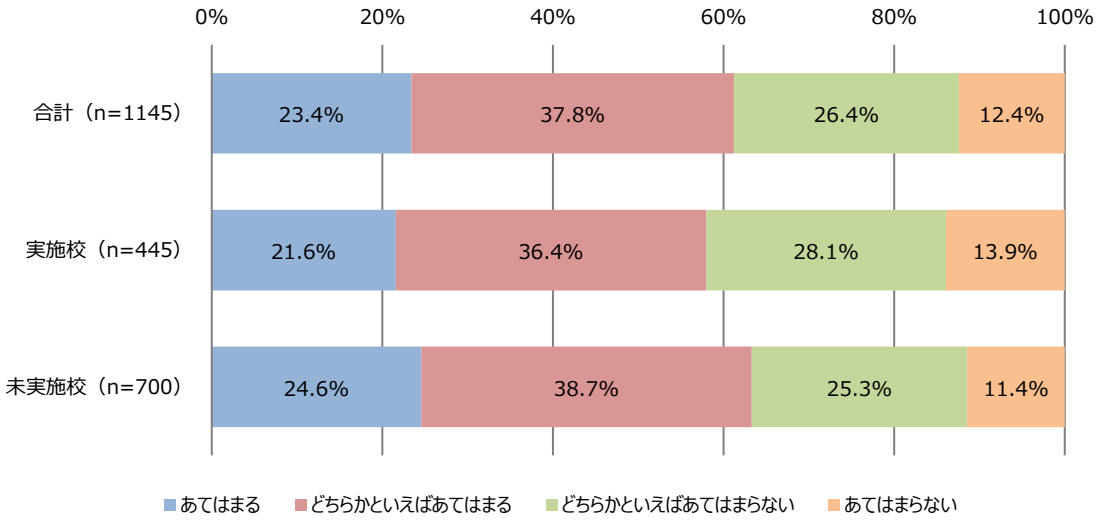
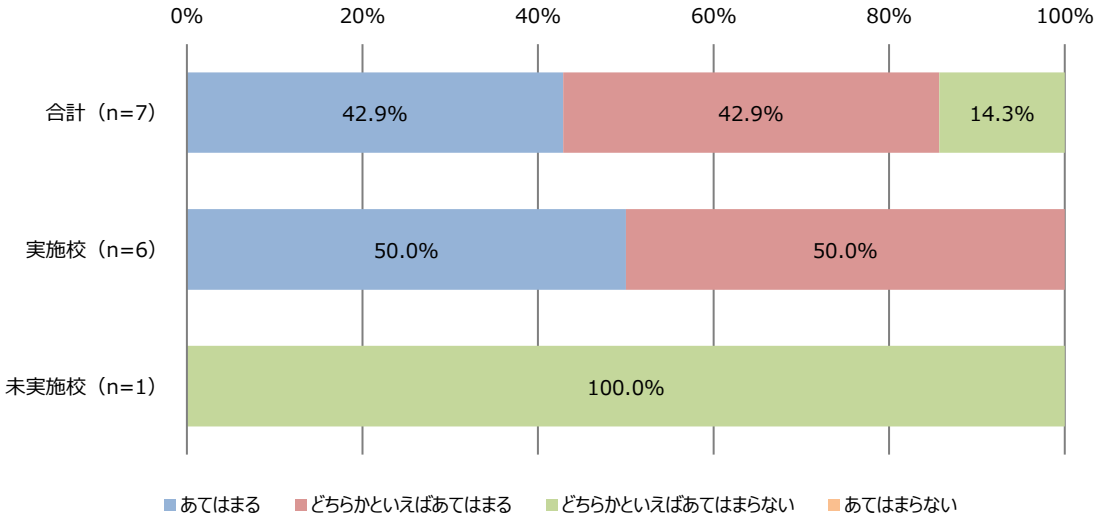


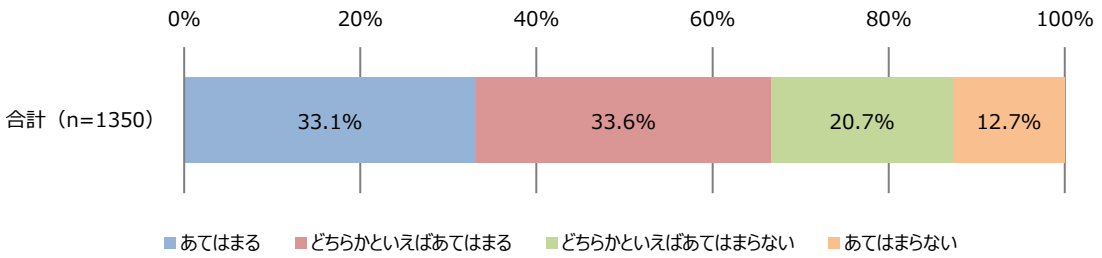
図 3-22　【巡回公演の実施状況別】今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたいか／特別支援学校



４）自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなった

自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなったか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、全体で 66.7%だった。

図 3-23　自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなった



学校全体で、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校で 69.7%、中学校で 66.0%、特別支援学校で 85.7%だった。

また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校の実施校で 69.2%、未実施校で 71.9%、中学校の実施校で 60.7%、未実施校で 69.4%、特別支援学校の実施校で 83.3%、未実施校で 100.0%だった。

図 3-24　【巡回公演の実施状況別】自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなったか／小学校

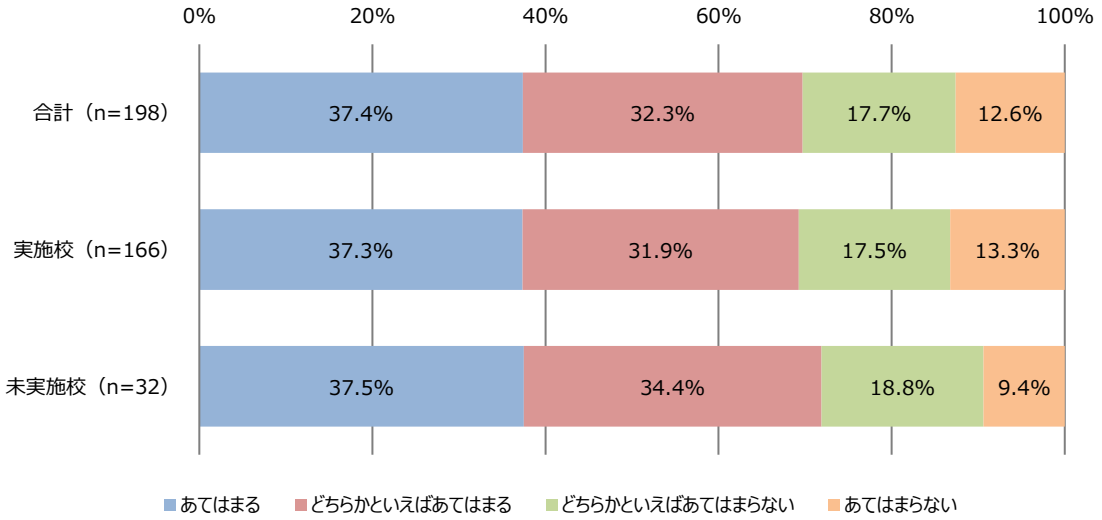


図 3-25　【巡回公演の実施状況別】自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなったか／中学校

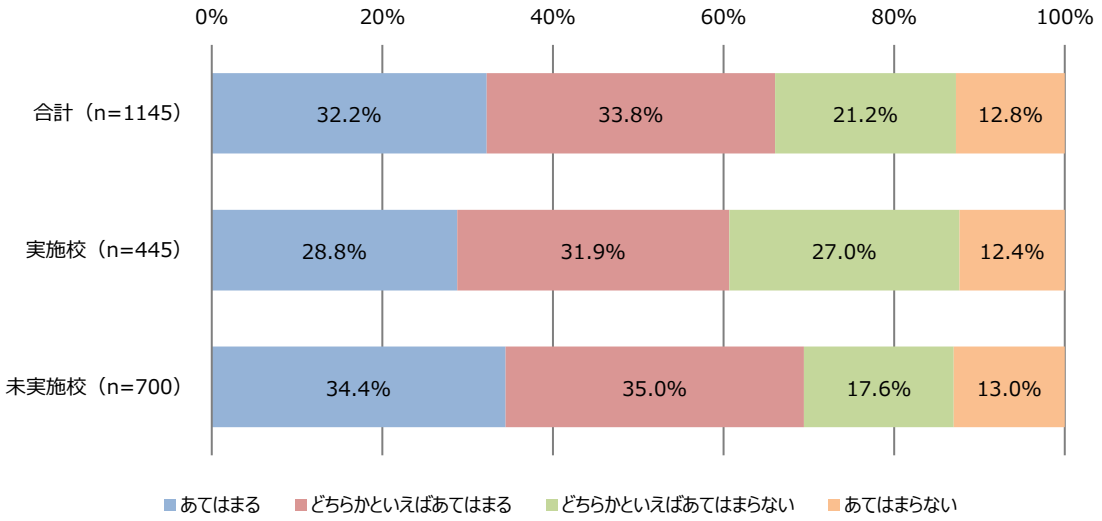
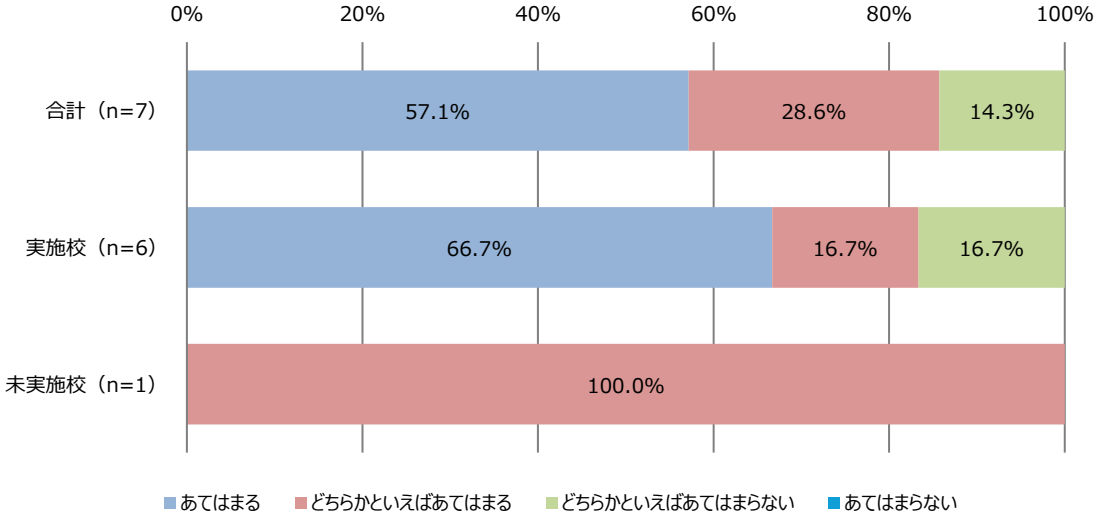


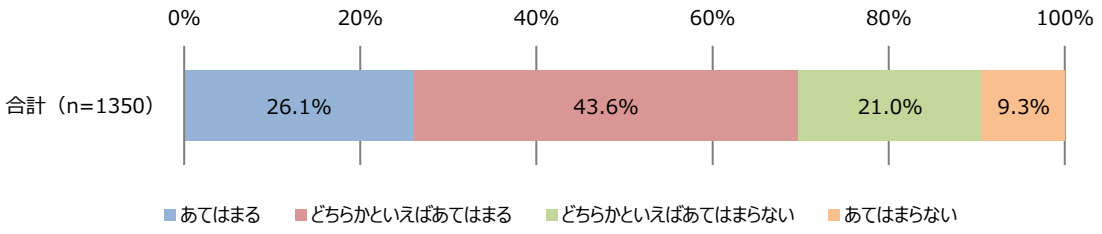
図 3-26　【巡回公演の実施状況別】自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなったか／特別支援学校



５）文化芸術を見たり聞いたりしたことで、音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになった

文化芸術を見たり聞いたりしたことで、音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになったか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、全体で 69.7%だった。

図 3-27　もっとたのしみになった



学校全体で、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校で 78.8%、中学校で 67.9%、特別支援学校で 100.0%だった。

また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、肯定的な回答をした者の割合（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答割合の和）は、小学校の実施校で 79.6%、未実施校で 75.0%、中学校の実施校で 64.7%、未実施校で 70.0%、特別支援学校の実施校で 100.0%、未実施校で 100.0%だった。

図 3-28　【巡回公演の実施状況別】もっとたのしみになったか／小学校

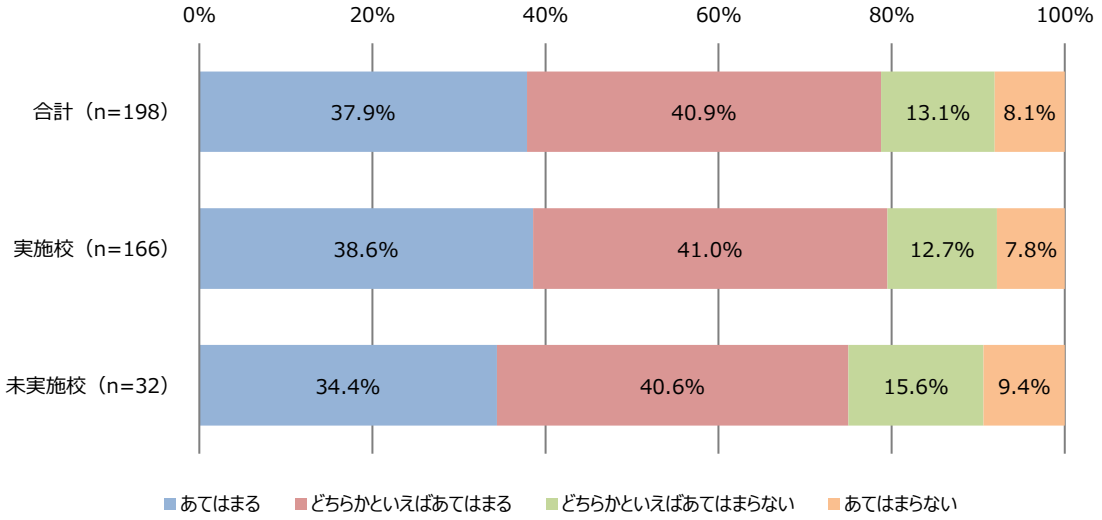


図 3-29　【巡回公演の実施状況別】もっとたのしみになったか／中学校

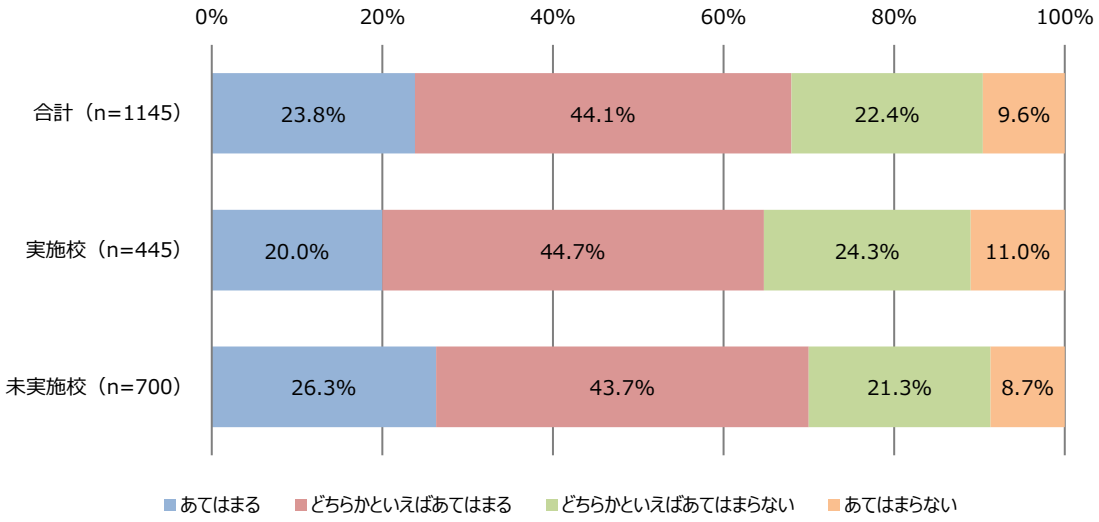
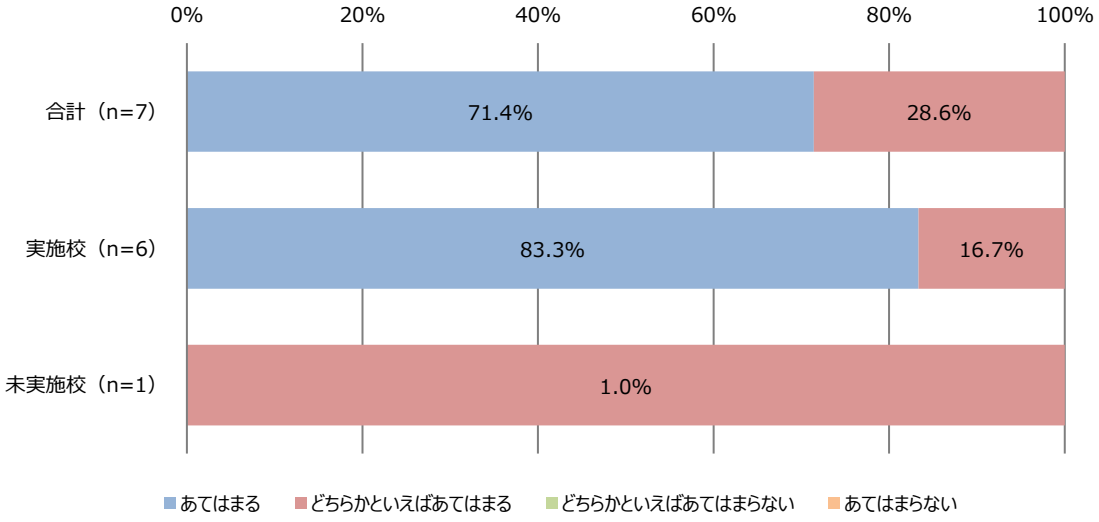


図 3-30　【巡回公演の実施状況別】もっとたのしみになったか／特別支援学校



６）巡回公演を通じて児童・生徒に生じた、意識変容の影響分析

巡回公演を通じて児童・生徒に生じた意識変容が、実際の行動変容に結び付いたかを調査するため、意識変容と行動変容の連関を分析した。

「文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかった」の回答（あてはまる、どちらかといえばあてはまる、どちらかといえばあてはまらない、あてはまらない）別に、「話をした」「調べた」「劇場へ行った」「美術館へ行った」「習い事を始めた」「自分で始めた」という６つの行動変容に繋がったかを分析した（表 3-2）ところ、「あてはまる」と回答した者は平均で 1.68 項目を選択し、「どちらかといえばあてはまる」は 0.97 項目を、「どちらかといえばあてはまらない」は 0.56 項目を、「あてはまらない」は 0.37 項目を選択しており、肯定度が高いほど行動変容の項目数が多い傾向がみられた。

また、行動変容が生じていないことを指す「あてはまるものはない（なし）」の割合は、「あてはまる」群で 16.9%であったのに対し、「あてはまらない」群では 74.3%であった。

表 3-2　文化芸術を見たり聞いたりすることは楽しかった × 行動変容への繋がり

分類	回答	n	行動変容した項目数（平均）	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた	なし
「あてはまる」群	あてはまる	676	1.68	64.2%	24.1%	21.7%	23.1%	10.7%	24.4%	16.9%
	どちらかといえばあてはまる	527	0.97	46.5%	11.2%	9.9%	12.5%	5.3%	11.2%	34.9%
「あてはまらない」群	どちらかといえばあてはまらない	112	0.56	28.6%	5.4%	8.0%	5.4%	1.8%	7.1%	60.7%
	あてはまらない	35	0.37	5.7%	0.0%	8.6%	8.6%	2.9%	11.4%	74.3%
	合計	1,350	1.28	52.8%	16.9%	15.6%	17.1%	7.6%	17.5%	29.0%

同様に表 3-3 に示すように、「今後も自分で劇場や美術館に行って文化芸術を見たり聞いたりしたい」の回答別にみると、「あてはまる」群の平均選択数は 2.07 項目であったのに対し、「あてはまらない」群は 0.42 項目であり、約５倍の差がみられた。

項目別では、「あてはまる」群は「美術館へ行った」（35.5%）や「調べた」（31.4%）の選択率が高く、継続的な鑑賞意欲が具体的な行動に結びついていることがうかがえる。

表 3-3　今後も劇場や美術館で文化芸術を見たり聞いたりしたい × 行動変容への繋がり

分類	回答	n	行動変容した項目数（平均）	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた	なし
「あてはまる」群	あてはまる	344	2.07	68.3%	31.4%	30.2%	35.5%	13.4%	27.9%	10.5%
	どちらかといえばあてはまる	515	1.31	57.9%	17.5%	16.1%	14.8%	7.8%	17.5%	22.3%
「あてはまらない」群	どちらかといえばあてはまらない	334	0.8	42.2%	8.1%	5.7%	7.8%	3.9%	12.6%	41.3%
	あてはまらない	157	0.42	24.8%	1.9%	3.2%	4.5%	2.5%	5.1%	65.6%
	合計	**1,350**	**1.28**	**52.8%**	**16.9%**	**15.6%**	**17.1%**	**7.6%**	**17.5%**	**29.0%**

また表 3-4 に示すように、「自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵をかいたり、演じたり、踊ったりしてみたくなった」の回答別にみると、「あてはまる」群の平均選択数は 2.00 項目、「あてはまらない」群は 0.53 項目であった。

特に「自分で始めた」の選択率は「あてはまる」群で 35.3%であったのに対し、「あてはまらない」群では 3.5%と大きな差がみられ、能動的な創作意欲が実際の行動に直結する傾向が確認された。

表 3-4　自分で楽器を演奏したり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊りたくなった × 行動変容への繋がり

分類	回答	n	行動変容した項目数（平均）	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた	なし
「あてはまる」群	あてはまる	447	2.00	66.4%	27.1%	28.4%	27.5%	15.2%	35.3%	10.3%
	どちらかといえばあてはまる	453	1.12	53.0%	16.1%	12.1%	12.1%	5.7%	13.0%	28.7%
「あてはまらない」群	どちらかといえばあてはまらない	279	0.82	44.4%	9.3%	7.9%	14.0%	1.8%	4.7%	40.9%
	あてはまらない	171	0.53	30.4%	4.7%	4.1%	8.2%	2.3%	3.5%	59.6%
	合計	1,350	1.28	52.8%	16.9%	15.6%	17.1%	7.6%	17.5%	29.0%

そして表 3-5 に示すように、「文化芸術を見たり、聞いたりしたことで学校の音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになった」の回答別にみると、「あてはまる」群の平均選択数は 2.04 項目、「あてはまらない」群は 0.53 項目であった。

「あてはまる」群では「調べた」「自分で始めた」(32.6%)及び「美術館へ行った」(32.9%)の選択率がいずれも 30%を超えており、授業への波及効果を実感した者ほど多面的な行動変容につながっていた。

表 3-5　文化芸術を見たり聞いたりしたことで、音楽や美術・図画工作の授業がもっと楽しみになった × 行動変容への繋がり

分類	回答	n	行動変容した項目数(平均)	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた	なし
「あてはまる」群	あてはまる	353	2.04	66.3%	32.6%	24.9%	32.9%	14.7%	32.6%	11.9%
	どちらかといえばあてはまる	588	1.21	54.8%	14.1%	16.2%	14.5%	6.5%	15.1%	25.0%
「あてはまらない」群	どちらかといえばあてはまらない	283	0.79	42.0%	8.8%	7.1%	7.8%	3.5%	9.5%	44.2%
	あてはまらない	126	0.53	30.2%	4.0%	6.3%	6.3%	2.4%	4.0%	61.9%
	合計	1,350	1.28	52.8%	16.9%	15.6%	17.1%	7.6%	17.5%	29.0%

学校の授業や行事で文化芸術を見たり、聞いたりしたことをきっかけに、どのような行動につながったか尋ねたところ（複数回答）、最も回答率が高かったのは「家族や友達と内容について話をした」（52.8%）であり、次いで「自分で楽器を演奏したり絵をかいたりする等、文化芸術に関することを始めた」（17.5%）、「家族や友達と美術館や博物館へ行った」（17.1%）、「興味がわいたので人にきいたり自分で調べたりした」（16.9%）、「家族や友達と劇場や音楽ホール等へ行った」（15.6%）、「文化芸術に関する習い事を始めた／始める予定である」（7.6%）の順であった。「あてはまるものはない」と回答した者は 29.0%であった。

表 3-6　行動変容の共起度数

	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた	選択者数	選択率
話をした	－	154	143	157	61	149	**713**	**52.8%**
調べた	154	－	61	71	36	81	**228**	**16.9%**
劇場へ行った	143	61	－	97	58	86	**211**	**15.6%**
美術館へ行った	157	71	97	－	34	81	**231**	**17.1%**
習い事を始めた	61	36	58	34	－	50	**103**	**7.6%**
自分で始めた	149	81	86	81	50	－	**236**	**17.5%**

※表の読み方：例えば「調べた」行×「話をした」列の「154」という値は、「「調べた」を選び、かつ「話をした」も選んだものが 154 人いる」ということを示す。

行動変容の項目間の共起関係（発生した行動変容のうち、セットで発生している行動）を調査するために、行動変容として挙げている６つの選択肢に対して、２項目ずつの組み合わせ（全 15 通り）ごとに「両方選んだ人の割合」を算出し、どのペアの行動変容がセットで発生しているかを分析した。分析結果を見ると、いずれの項目においても「話をした」との共起率が最も高く、「調べた」を選択した者の 67.5%、「劇場へ行った」を選択した者の 67.8%、「美術館へ行った」を選択した者の 68.0%が、「話をした」も選択していた。一方、「話をした」を選択した者のうち「調べた」も選択した者は 21.6%、「劇場へ行った」も選択した者は 20.1%にとどまっていた。

このことから、具体的な行動を起こす者は「話をしている」確率は極めて高いが、「話をする」段階から具体的な行動へ至る割合は限定的であったと言える。よって「家族や友達と話をする」ことは、他の行動変容を引き起こすものではないものの、他の行動変容と並行して生じる基盤的な行動であることがうかがえる。

鑑賞施設への訪問に着目すると、「劇場へ行った」を選択した者の 46.0%が「美術館へ行った」も選択しており、「美術館へ行った」を選択した者の 42.0%が「劇場へ行った」も選択していた。双方向ともに 40%を超える高い共起率であり、鑑賞施設への訪問行動は、ジャンルを超えて連動しやすい傾向がみられた。

能動的な文化活動への移行に着目すると、「自分で始めた」を選択した者の 34.3%が「調べた」も選択しており、「調べた」を選択した者の 35.5%が「自分で始めた」も選択していた。同様に、「劇場へ行った」を選択した者の 40.8%、「美術館へ行った」を選択した者の 35.1%が「自分で始めた」も選択しており、鑑賞施設への訪問経験が自発的な文化活動の開始と結びつく傾向がみられた。

「習い事を始めた」については、選択率自体が 7.6%と最も低いものの、選択した者の 56.3%が「劇場へ行った」、48.5%が「自分で始めた」を併せて選択しており、習い事の開始に至る層は他の行動変容も幅広く経験している、行動変容の多い活発な層であることが示唆された。

表 3-7　共起関係（共起度数の条件付き確率）

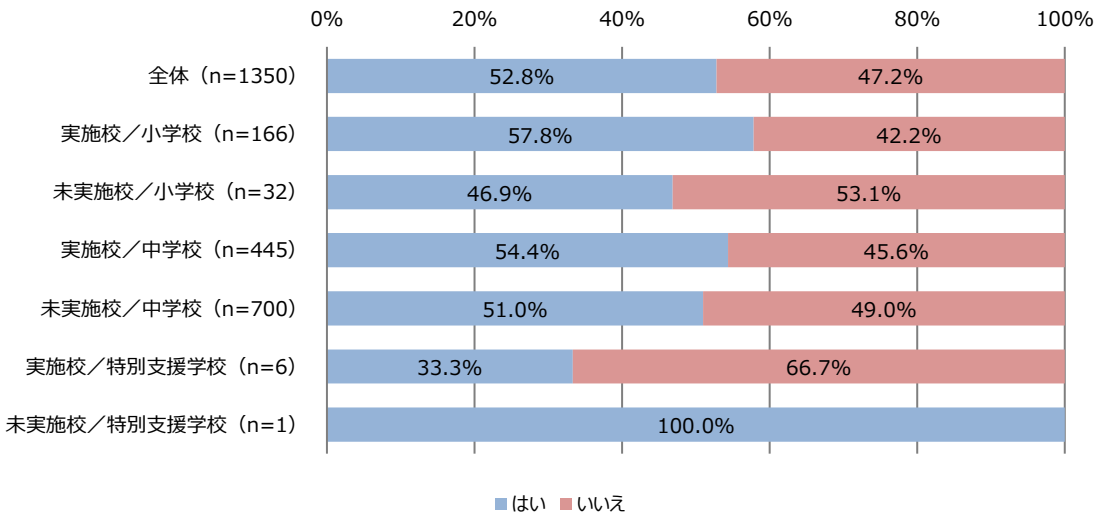
	話をした	調べた	劇場へ行った	美術館へ行った	習い事を始めた	自分で始めた
話をした	－	21.6%	20.1%	22.0%	8.6%	20.9%
調べた	67.5%	－	26.8%	31.1%	15.8%	35.5%
劇場へ行った	67.8%	28.9%	－	46.0%	27.5%	40.8%
美術館へ行った	68.0%	30.7%	42.0%	－	14.7%	35.1%
習い事を始めた	59.2%	35.0%	56.3%	33.0%	－	48.5%
自分で始めた	63.1%	34.3%	36.4%	34.3%	21.2%	－

※表の読み方：例えば「調べた」行×「話をした」列の「67.5%」という割合は、「「調べた」を選んだ人の 67.5%は「話をした」も選んでいる」ということを示す。

学校の授業行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことをきっかけに、行動したことはあるか尋ねたところ、「はい」と答えたものは、全体で 52.8%だった。

また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、「はい」と回答した者の割合は、小学校の実施校で 57.8%、未実施校で 46.9%、中学校の実施校で 54.4%、未実施校で 51.0%、特別支援学校の実施校で 33.3%、未実施校で 100.0%と、特別支援学校を除き、実施校が未実施校よりも行動に繋がったと回答した割合が高かった。

図 3-31　学校の授業行事で文化芸術を見たり聞いたりしたことをきっかけに、行動したことはあるか



７）学校教育内での文化芸術活動についての意見

学校での文化芸術活動に対する自由記述では、本物の芸術に触れた感動や生の迫力への驚き等、肯定的な感想が最も多かった。また、体験の機会や回数を増やしてほしいという要望が非常に多く、見るだけでなく自分で楽器に触れたり演劇に参加したりといった能動的な体験を求める声も目立った。一方、内容のわかりやすさや鑑賞環境の改善を求める意見もみられた。

自由記述のサマリー

■　楽しかった・良い体験だった

文化芸術の鑑賞・体験が楽しかったという肯定的な感想が最も多く寄せられた。普段触れられない本物の芸術に接した感動や、生の迫力に驚く声が目立った。

- 普段は見られないようなものをたくさん見ることができ、初めて知れたこともあったので、とっても楽しかったです。
- 映像で見るのと生で見るのとでは迫力が全然違って、見る前よりも文化芸術に興味が湧きました。
- オーケストラ鑑賞教室が特に印象に残っており、きっとこの先も忘れることのない思い出になると思います。とても貴重な体験になりました。
- オペラの迫力が想像以上にすごくて、聴いていてとても楽しかった。
- いつもの授業と違って、ジャンルが違うものを見ることができて楽しかった。

■　機会・回数を増やしてほしい

学校での文化芸術活動の機会が少ないとして、回数や規模を増やしてほしいという要望が非常に多く見られた。年に複数回の実施や、中学校でも継続してほしいという声も多かった。

- 一度の体験で実際に参加できる人は少ないので、その分機会をもっと増やしてほしいです。
- なかなか自分から演劇や歌等の公演を観に行くことはないし、他の生徒も文化芸術に興味を持つ機会は少ないと思う。学校で行う回数を増やしていってほしい。
- 普段見れないことを学校で見ることができるので楽しい。小学生のころはたくさんあったけど中学生になって文化芸術を見たことがないので、もう少し中学校でも見れたらいいなと思う。
- 年に 2 回くらい来てほしい。あとオーケストラが見たい。
- 学校で文化芸術を見たり聴いたりする機会をもう少し増やすと、より興味を持つことができると思います。

■　実際に体験・参加できる機会がほしい

見るだけでなく、自分で楽器に触れたり、演劇に参加したりと、能動的に体験できる機会を求める声が多かった。

- ほとんどが聞いて、話して、終わりという流れが多いので、楽器に触れてみたり、実際に体験したりすると、もっと興味が湧くと思いました。
- 体験する人がわかりやすいように教えてくれて良かった。体験できるものが増えると嬉しい。
- 演劇を見れる（実際に体験できる）イベントを作ってほしい。
- クラス全員で楽器を使って演奏してみたいなと思った。

■　新しい発見・興味・関心が広がった

文化芸術との出会いを通じて、知らなかった世界を知ったり、今後も学んでみたいという前向きな気づきを述べた意見が多く見られた。

- これをきっかけに、たくさんの知らなかったことに出会うことができました。知っていても詳しく知れたり、いろいろな感情になりました。
- 自分の個性を出していてとてもいいなと思った。自分が体験することでもっとそのことについて知りたくなった。
- 音楽の聞き方や物の見方が変わる等して楽しかった。
- 文化芸術を通して新しい趣味ができました。
- なかなか見れる機会が少ない伝統文化に触れることができ、さらに歴史や文化に興味を持てた。

■　伝統文化・特定ジャンルへの関心

三味線・能・狂言・バレエ・オーケストラ・演劇等、特定の文化芸術ジャンルへの関心や、もっと見たいという具体的なリクエストが多数寄せられた。

- 今まで見たことがある三味線の演奏や神楽、狂言等の伝統的なものを見たり聴いたりするのが面白いと感じたので、もっと沢山のものを見てみたい。
- 日本の伝統的な体験はあるが、近代的な文化芸術活動はあまり目立っていないので、大きな体験ができる機会があるといいと思う。
- 民族舞踊を見てみたい。
- 学校で劇団四季や宝塚歌劇といった舞台演劇を観に行く機会を設けてほしいです。」
- もっと現代的な文化芸術を鑑賞・体験してみたい。

■　先生の指導・友達との交流が良い

先生が丁寧に教えてくれる・褒めて伸ばしてくれるといった指導への満足感や、友達と作品を見せ合ったり意見を共有したりすることを楽しさの理由として挙げる意見も見られた。

・　作業を先生が実際に立ってお手本を見せてくれるのでわかりやすく、褒めて伸ばしてくれるから
・　クラスのみんなとアドバイスを出し合ってより良いものを作ることができるから
・　自分の作りたいデザインを否定せず好評してくださる先生で、休み時間でも話しやすいから

■　内容・環境面への改善要望

内容が難しくてわかりにくい等、鑑賞環境や内容のわかりやすさに関する改善を求める意見も見られた。

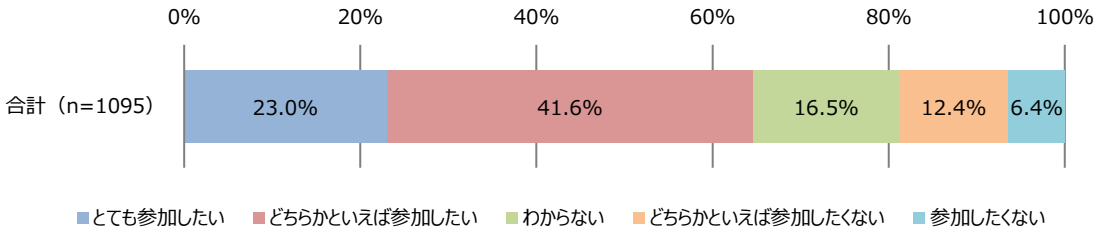
・　学校での文化芸術は、昔の言葉等も使っていてとても難しい。個人的に少し簡単にしてくれないかなと思いました。
・　もっとわかる曲をやってくれると何がどうすごいかがよく分かるから、身近な曲をやってほしい。」
・　もっとその公演に関する情報や、公演の背景、文化芸術の見方を知りたい。
・　文化芸術についてあまり知らない人でも分かりやすい体験をしてほしい。

（４）学校教育内での文化芸術活動への参加意向

１）今後機会があれば参加したいと思うか

今後機会があれば参加したいか尋ねたところ、肯定的な回答をした者の割合（「とても参加したい」と「どちらかといえば参加したい」の回答割合の和）は、全体で 64.6%だった。

図 3-32　今後機会があれば参加したいと思うか



また学校種別ごとの巡回公演実施校と未実施校で比較すると、肯定的な回答をした者の割合（「とても参加したい」と「どちらかといえば参加したい」の回答割合の和）は、小学校の実施校で 78.9%、未実施校で 41.3%、中学校の実施校で 71.8%、未実施校で 43.5%、特別支援学校の実施校で 71.4%だった。

図 3-33　【巡回公演の実施状況別】今後機会があれば参加したいと思うか／小学校

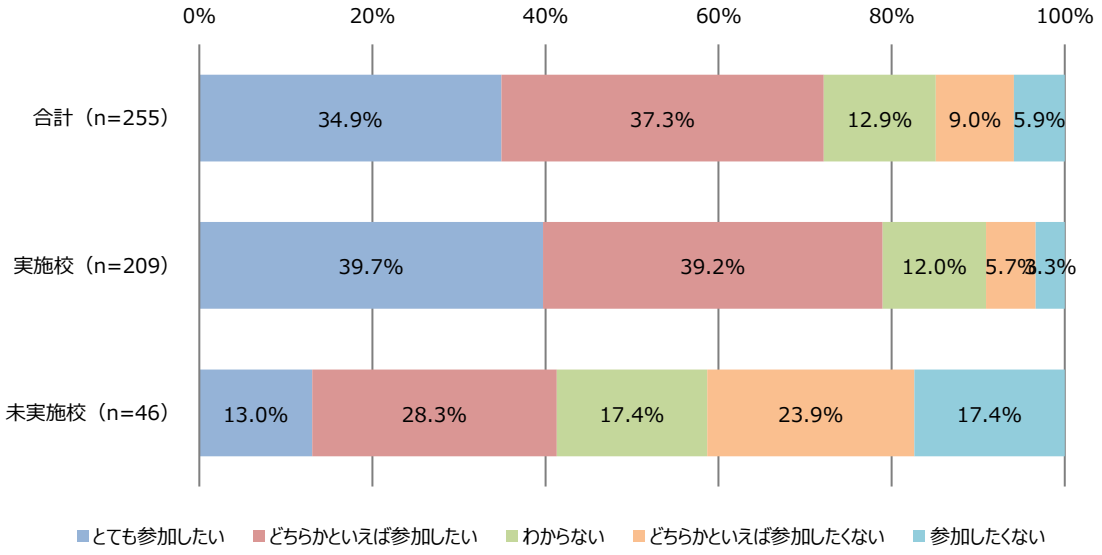


図 3-34　【巡回公演の実施状況別】今後機会があれば参加したいと思うか／中学校

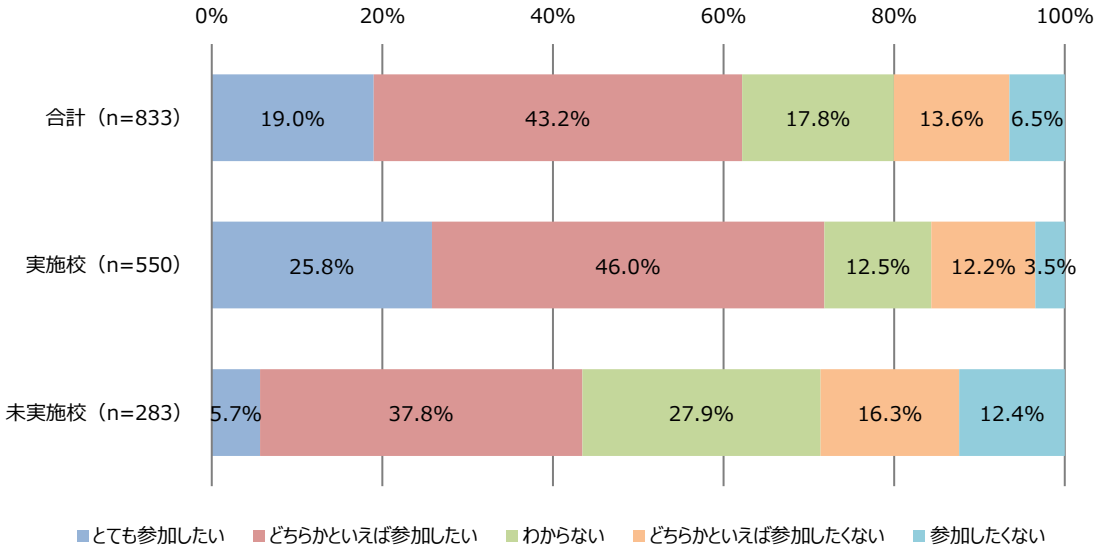
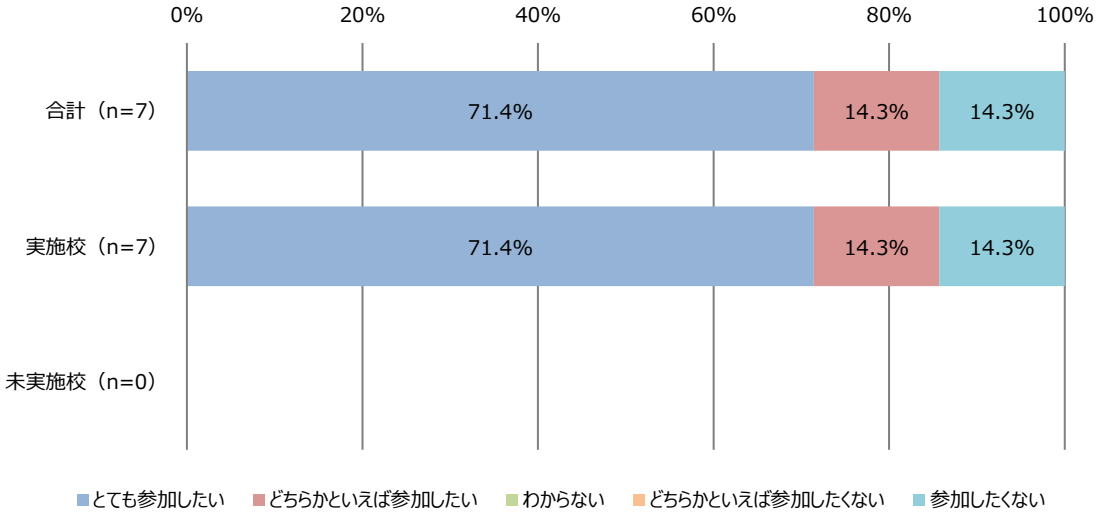


図 3-35　【巡回公演の実施状況別】今後機会があれば参加したいと思うか／特別支援学校



第４章　自治体向けアンケート調査

１．実施概要

（１）実施目的

各自治体が独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる事業の実施状況を把握するため、各自治体の担当者を対象とし、事業概要や実施件数、実施種目等の情報を収集する。

また、各自治体での実践状況を踏まえ、国と各自治体での実施状況の分析や日本全体としての文化芸術活動状況を分析し、地域的バランスやその傾向を把握する。

（２）調査方法

調査方法は以下のとおりである。

表 4-1　調査方法

項目	内容
調査対象数	全体：1,794 件 〔内訳〕都道府県：47 件、政令指定都市：20 件、特別区：23 件、市：772 件、町：743 件、村：189 件[16]
有効回答数 ※回答率＝分類毎の有効回答数(b)/全体の有効回答数(a)×100	全体：708 件（a） 〔内訳〕都道府県：26 件（b）（3.7%） 政令指定都市：14 件（b）（2.0%） 特別区：６件（b）（0.8%） 市：327 件（b）（46.2%） 町：289 件（b）（40.8%） 村：46 件（b）（6.5%）
調査方法	・　本調査は、インターネットアンケートを用いて実施した。
調査票の配布方法	・　調査票は、事務局より都道府県及び政令指定都市に対して直接送付した。市区町村に対しては都道府県を通じて送付した。
調査期間	令和７年 12 月 24 日(水)～令和８年１月 30 日(金)
調査項目	**１．回答団体の属性** ・　自治体区分 ・　所管部局

[16] 令和７年 12 月 24 日時点の自治体数。

項目	内容
	・　所在都道府県 ・　管轄地区の学校数 **２．自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の取組概要** ・　令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の提供有無 ・　学校教育内での文化芸術活動の「事業内容」、「事業実施目的」、「実施スキーム」、「芸術分野・種目」、「実施場所」、「参加学校数」、「参加人数」、 ・　学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由 **３．自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の実績と評価** ・　令和２年度～６年度の過去５年間における「実施事業数」、「参加学校数」、「参加した児童・生徒数」 ・　評価の実施状況 ・　具体的な評価指標 ・　アンケートの対象及びその結果 **４．自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる資金** ・　学校教育内での文化芸術活動の予算確保方法 ・　令和２年度～６年度の実施予算額 **５．自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向と課題** ・　学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向 **６．文化庁への期待・要望** ・　学校教育内での文化芸術活動の提供における課題や検討事項 ・　巡回公演の広報の実施状況 ・　文化庁に対する要望や期待
調査結果を見る上での注意事項	・　本文、表、グラフ等に使われる「n」は、各設問に対する回答者数を示す。 ・　百分率（%）の計算は、基本的には小数第２位を四捨五入し、小数第１位まで表示している。したがって、四捨五入の影響で%を足し合わせて 100%にならない場合がある。なお、平均に関する計算は、小数第３位を四捨五入し、小数第２位まで表示している。 ・　本文中の%の小計は、各項目の値を四捨五入した上で足し合わ

項目	内容
	せている。 ・　本文、表、グラフは、表示の都合上、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。 ・　属性別の傾向を把握するためにクロス集計を行っている。クロス集計の属性のうち、「合計」は単純集計の値と一致する。

２．調査結果のサマリー

（１）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の取組概要

令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の実施状況をみると、「過去に１度も実施したことがない」自治体が最も多い一方で、全体としては半数以上の自治体で何らかの取組が実施されている。実施内容は「文化芸術を鑑賞する事業」が 60%を超えている。実施目的は「創造力・想像力の育成」や「文化芸術に関する知識の習得」が上位となっている。実施スキームは芸術団体等への委託型が最多で、芸術分野では「オーケストラ等」や「演劇」が多い。実施場所は「学校」が半数以上を占めている。参加した学校・参加者は小学校が最も多く、中学校がこれに続き、他校種は限定的である。

事業を提供しなかった理由としては、十分な予算や実施体制の確保が難しいことが挙げられている。

調査項目ごとのサマリー

■　令和６年度の学校教育内での文化芸術活動提供有無

令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の提供有無については、「過去に１度も実施したことがない（36.9%）」が最も高く、次いで「文化芸術鑑賞機会に関する取組を実施した（28.1%）」、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会に関する取組を実施した（19.8%）」である。全体の 50%以上の自治体で何らかの取組を実施している。

■　令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の具体的な内容

＜事業内容＞

事業内容については、「文化芸術を鑑賞する事業（67.8%）」が最も高く、次いで「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業（34.6%）」、「文化芸術を体験する事業（9.5%）」である。

＜実施目的＞

事業内容については、「文化芸術を鑑賞する事業（67.8%）」が最も高く、次いで「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業（34.6%）」、「文化芸術を体験する事業（9.5%）」である。

＜実施スキーム＞

実施スキームについては、「委託型：芸術団体等に委託して事業を実施した（48.4%）」が最も高く、次いで「共催型：芸術団体や学校と共催・協働した（22.2%）」、「補助型：学校や芸術団体に直接補助金を交付した（16.8%）」である。

＜芸術分野・種目＞

芸術分野・種目については、「オーケストラ等（41.1%）」が最も高く、次いで「演劇

（33.0%）」、「ミュージカル（17.8%）」、「邦楽（15.7%）」である。それ以外の分野・種目については、約 10%から 10%以下である。

＜実施場所＞

実施場所については、「学校（55.4%）」が最も高く、次いで「文化施設（43.5%）」、「文化施設以外の社会教育施設（公民館等）（11.6%）」である。

＜事業に参加した学校数＞

事業に参加した学校数については、「小学校」が全体の 75%弱を占め 4,417 校と最も高く、「中学校（1,066 校）」が続いている。それ以外については、100 校以下である。

＜事業に参加した人数＞

事業に参加した人数については、「小学校」が全体の約 70%を占め約 44 万人と最も高く、次いで「中学校（約 15 万人）」、「高等学校（約１万人）」。それ以外については、８千人以下である。

■　令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由

学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由については、「実施にあたっての十分な予算が得られないから（55.6%）」が最も高く、次いで「実施にあたっての十分な体制が得られないから（45.6%）」、「事業の効果的な実施にあたってのノウハウや他地域の事例に関する情報が不足しているから（13.6%）」である。

（２）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の実績と評価

令和２～６年度にかけて、学校教育内での文化芸術活動は実施事業数、参加校数、参加児童・生徒数のいずれも合計、平均ともに増加しており、事業規模が拡大している。一方で、事業評価は「特に評価は行っていない」自治体が多数を占め、評価の実施は限定的である。

評価を行う場合は、満足度や理解度、実施規模や参加実績、児童・生徒の反応や変容、教育課程との適合や教員の学び、運営の妥当性や改善点等を指標とし、教職員、児童・生徒、保護者、地域住民等へのアンケートを通じて効果やニーズを把握している。

調査項目ごとのサマリー

■　令和２～６年度の実施事業数

実施事業数については、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 1.1 個だったが、令和６年度は平均 2.3 個となっており、約２倍である。

■　令和２～６年度に事業に参加した学校数、児童・生徒数

参加した学校数も同様に、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 3.7 校だったが、令和６年度は平均 12.4 校となっており、約 3.4 倍である。

同じく、参加した児童・生徒の数も、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 424 人だったが、令和６年度は平均 1,328 人となっており、約 3.2 倍である。

■　学校教育内での文化芸術活動の評価の実施状況

評価の実施状況については、「特に評価は行っていない（70.0%）」が最も高く、次いで「定量的・定性的な評価を行っている」及び「定性的な評価のみ行っている」が同率で 12.5%、「定量的な評価のみ行っている」は 4.9%である。

■　学校教育内での文化芸術活動の具体的な評価指標

評価指標については、参加者（児童・生徒、教職員等）の満足度・理解度や、実施規模や参加実績、児童・生徒の反応、教育課程との関連や教員の学び、事業の妥当性や次年度へのフィードバック等を用いている。

■　評価を目的としたアンケートを実施している場合の対象及び結果

対象は、先生、児童・生徒、保護者・一般・地域住民等であり、アンケートを通じて満足度の高さや、「本物」に触れる体験の価値、児童・生徒の変容、教員の学びと授業への活用、次年度に向けたニーズ等について把握している。

（３）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる資金

学校教育内での文化芸術活動の予算確保は、自治体の年度予算への計上が 80%を超えている一方、クラウドファンディングの活用は確認されていない。実施予算額は令和２年度から令和６年度にかけて、合計額・平均額ともに上昇傾向にあり、平均額は約 1.9 倍に増加している。

調査項目ごとのサマリー

■　学校教育内での文化芸術活動の予算確保方法

予算の確保方法については、「自治体の年度予算に計上した（83.0%）」が最も高く、次いで「国、都道府県からの補助金や交付金を活用した（15.9%）」、「文化芸術団体、財団等から協賛や寄付を受けた（8.5%）」である。クラウドファンディングの活用については、０%である。

■　令和２年度～６年度の実施予算額

予算額については、合計額、平均額ともに、上昇傾向にある。令和２年度は平均 130 万円だったが令和６年度は平均 250 万円と、約 1.9 倍である。

（４）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向と課題

自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向については、「実施・継続したい半数以上を占めている一方、実施・継続の意向はあるがこのままでは難しい、実施・継続の意向がないという意見も一定ある。

（５）文化庁への期待・要望

児童・生徒への学校教育内での文化芸術活動の提供にあたっては、予算確保の難しさや経費高騰に加え、学校現場の多忙化・教育課程の過密、運営ノウハウや人手不足、施設の老朽化等、実施にあたっての課題が幅広く指摘されている。

巡回公演の広報については「積極的に実施している」が最多である一方、広報を行っていない自治体も一部存在する。

文化庁への要望としては、財政的支援の継続に加え、基準の緩和・採択枠の拡充や地域格差の是正、事務手続きやスケジュール調整の改善、専門的な情報の提供等が挙げられている。

３．調査結果からの考察

（１）調査結果から読み取れる現状と課題

１）現状

自治体向けアンケート調査の結果から、各自治体が独自に実施する学校教育内での文化芸術活動は、一定程度広がりつつあるものの、地域や自治体規模によって実施状況に差がみられることが読み取れる。令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の提供状況を見ると、「過去に１度も実施したことがない」自治体が 36.9%と最も高い一方で、全体では半数以上の自治体が何らかの取組を実施している。

自治体種別では「町」、広域ブロック別では「南関東」、「北陸」、「近畿」、「四国」、「九州」、「沖縄県」で、何らかの取組を実施している自治体の割合が半数を下回っている。特に沖縄県では回答数が少ないものの、約 82%が取組を実施していない。こうした差異には、自治体の財政規模や体制の違いに加え、公演団体や受入施設へのアクセスの違いが影響している可能性があると考えられる。

事業内容については「文化芸術を鑑賞する事業」が 67.8%で最も高く、実施目的は「創造力・想像力の育成」が 51.9%で最も高い。また、実施スキームでは「芸術団体等への委託型」が 48.4%で最も多く、芸術分野では「オーケストラ等」や「演劇」が多く実施されている。自治体独自の文化芸術事業は、創造力・想像力の育成や文化芸術に関する知識の習得を目的としつつ、比較的実施しやすい鑑賞型プログラムを中心に構成されている状況がうかがえる。

実施場所は「学校」が最も多い一方で、自治体種別でみると「政令指定都市」や「区」、広域ブロック別でみると「南関東」、「北陸」、「東海」において、「文化施設」が「学校」を上回っている。これらの地域では文化ホール等の施設が集積しており、交通利便性が相対的に高いことから、施設を活用した事業展開がしやすいことが背景として考えられる。

また、令和２年度から令和６年度にかけて、実施事業数、参加校数、参加児童・生徒数はいずれも合計・平均ともに増加しており、事業規模は拡大傾向にある。予算額も平均 130 万円から 250 万円へと約 1.9 倍に増加しており、自治体独自事業への支出も拡大している。事業継続に関する意向では、すべての自治体種別で「実施・継続したい」が 50%を超えており、学校教育内での文化芸術活動の必要性は広く認識されていると考えられる。

２）課題

調査結果から、自治体が独自に実施する学校教育内での文化芸術活動に関して、主に次の３つの課題があると考えられる。

第１に、地域や自治体規模による実施状況の差である。学校教育内での文化芸術活動を実

施している自治体は半数以上に上るものの、「町」や一部の地域では実施割合が低く、地域や自治体規模によって児童・生徒の文化芸術活動の機会に差が生じている可能性がある。

第２に、事業の実施内容が鑑賞型に偏りやすいことである。自治体独自の学校教育内での文化芸術活動は鑑賞型プログラムが中心となっており、体験型事業は講師や実施場所の確保等、運営上の負担が相対的に大きいため、限られた予算や体制の中では実施しにくい可能性がある。実際に、未実施理由として「十分な予算が得られない」「十分な体制が得られない」が上位となっており、こうした制約が事業内容にも反映されていると考えられる。

第３に、事業の継続性や改善につながる評価体制や財源確保の仕組みが十分に整っていないことである。評価の実施状況では「特に評価は行っていない」が 70.0%で最も高く、「村」では 90%以上、「四国」や「沖縄」では 80%以上が評価を実施していないと回答している。「都道府県」では 68.4%が何らかの評価を実施していることと比較すると、自治体の規模が小さいほど評価体制が整っていない可能性がある。事業は拡大しているものの、効果の可視化や改善の仕組みの構築は限定的であり、事業の継続性の面で課題があると考えられる。

さらに、予算確保の方法については「自治体の年度予算に計上した」が 83.0%で最も高く、国や都道府県の補助金の活用は 15.9%、文化芸術団体や財団等からの協賛・寄付は 8.5%にとどまっている。事業拡大は主として各自治体の自主財源によって支えられており、財政状況や政策優先度の違いが事業の有無や規模に影響しやすい構造となっていると考えられる。

（２）政策への示唆

１）地域差・自治体規模差を踏まえた支援

半数以上の自治体が学校教育内での文化芸術活動を実施している一方で、「町」や一部地域では実施割合が相対的に低く、地域や自治体規模によって児童・生徒の文化芸術活動の機会に差が生じている可能性がある。実施率の低い地域や小規模自治体に対して重点的な支援を行うことが、機会格差の是正に寄与すると考えられる。

２）地域特性に応じた実施形態の整理

事業内容は鑑賞型が多く、実施場所は学校が中心である一方で、都市部では文化施設の活用も多くみられる。地域の特性に応じた実施事例を整理し自治体に示していくことは、自治体独自事業の実施を後押しする上で有効である可能性がある。

３）財政面・運営面での支援

自治体の独自事業は拡大傾向にある一方で、財源は主に自治体予算に依存しており、未実施理由としても予算や体制の不足が上位となっている。また、評価を実施していない自治体も多く、特に小規模自治体ではその傾向が強い。財政的支援に加え、事務負担の軽減方法や実施ノウハウの共有、自治体が活用しやすい評価指標の整備等を行うことが、自治体における事業の継続や新規実施の後押しにつながる可能性がある。

４）巡回公演の活用と周知の促進

巡回公演は、文化施設や公演団体へのアクセスが限られる地域においても児童・生徒に文化芸術活動を届ける手段として有効である可能性がある。一方で、自治体による広報の実施状況には差があり、「村」や「町」、一部地域では広報を行っていない自治体も一定数みられる。巡回公演の継続的な実施に加え、自治体への周知や情報提供を充実させることが、地域格差の補完に寄与すると考えられる。

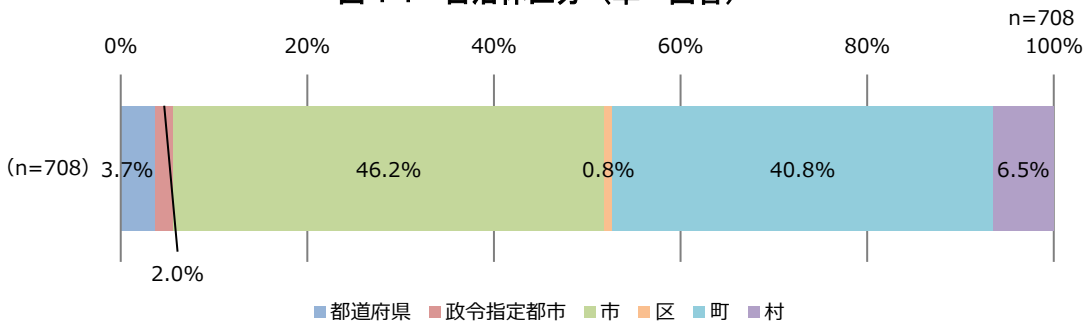
４．調査結果

（１）回答団体の属性

１）自治体区分

「市（46.2%）」で最も多く、続く「町（40.8%）」と合わせると、85%以上を占める。それ以外の区分は、それぞれ 10%以下である。

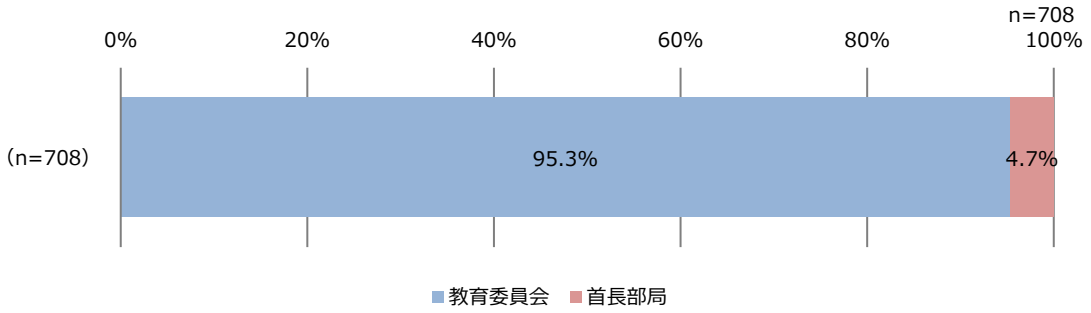
図 4-1　自治体区分（単一回答）



２）部局

「教育委員会」が 95.3%を占め、首長部局は 4.7%である。

図 4-2　部局（単一回答）

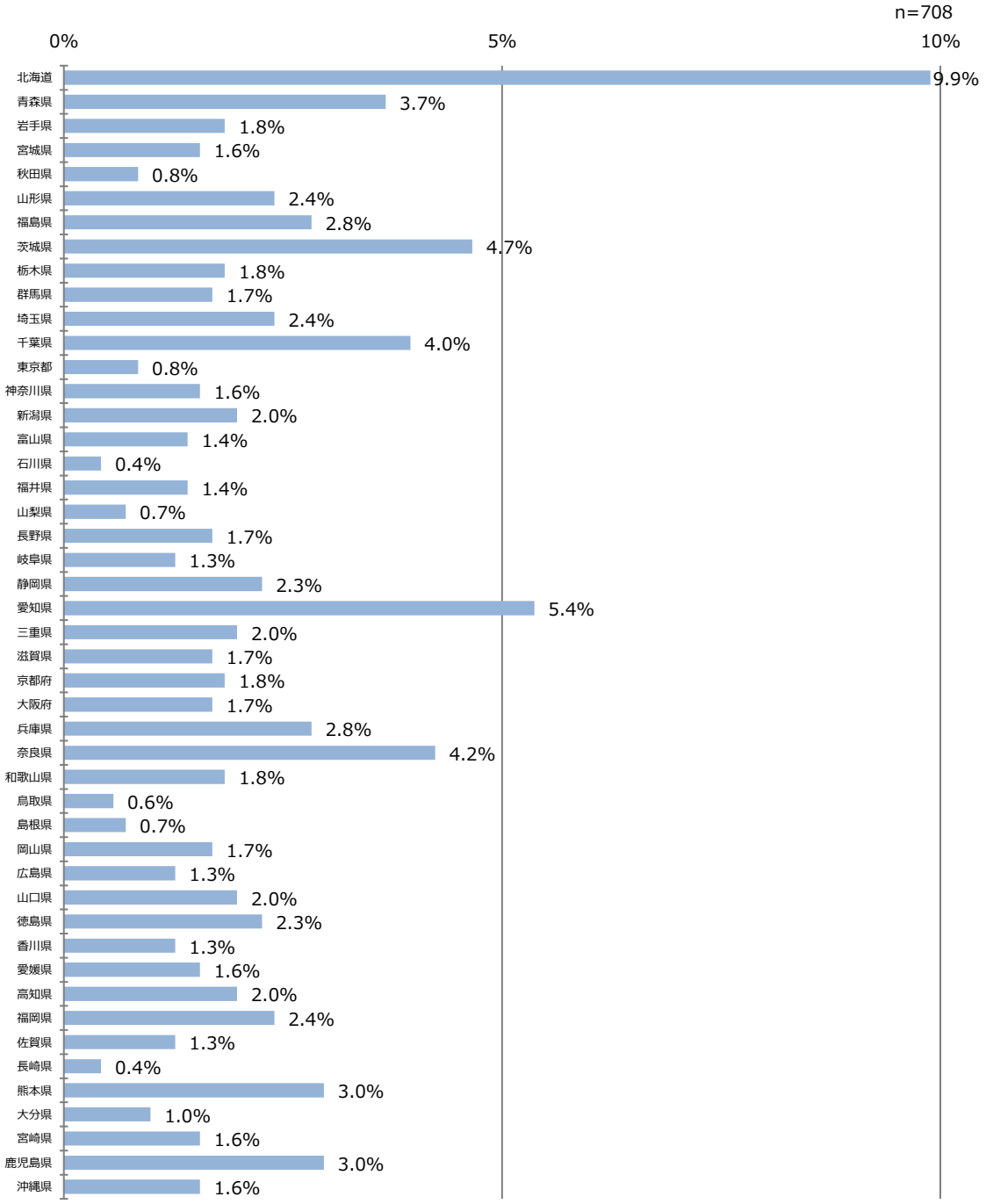


３）所在する都道府県

「北海道（9.9%）」が最も多く、次いで「愛知県（5.4%）」、「茨城県（4.7%）」である。

一方、最も少ないのは「石川県」、「長崎県」（各 0.4%）で、次いで「鳥取県（(0.6%）」である。

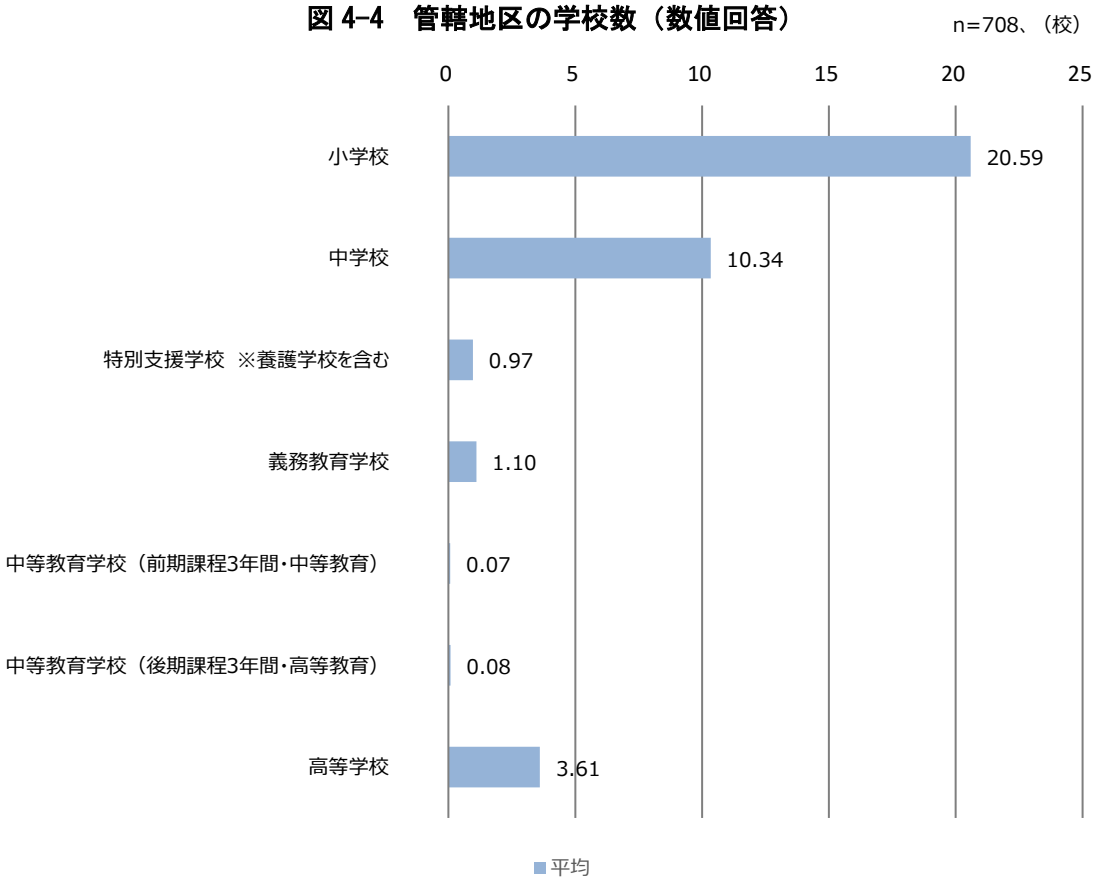
図 4-3　所在する都道府県（単一回答）



４）管轄地区の学校数

「小学校」の平均 20.6 校が最も多く、次いで「中学校」平均 10.3 校、「高等学校」平均 3.6 校である。その他の学校については、限定的である。

図 4-4　管轄地区の学校数（数値回答）



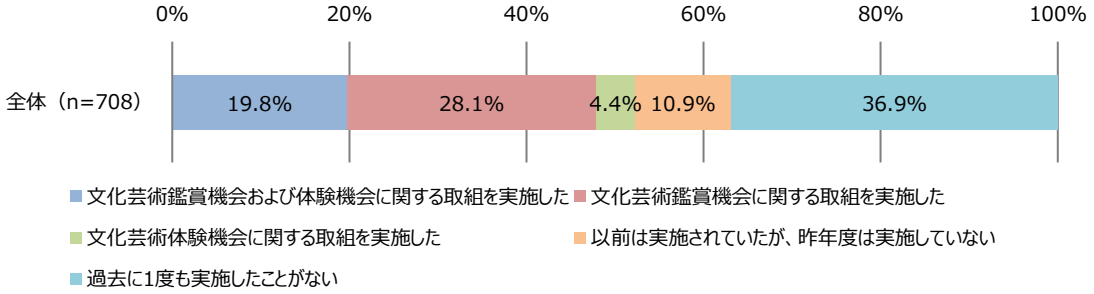
（２）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の取組概要

１）令和６年度の学校教育内での文化芸術活動の提供状況

①　全体

令和６年度の学校教育内での文化芸術活動提供有無については、「過去に１度も実施したことがない（36.9%）」が最も高く、次いで「文化芸術鑑賞機会に関する取組を実施した（28.1%）」、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会に関する取組を実施した（19.8%）」である。全体の 50%以上の自治体で何らかの取組を実施している。

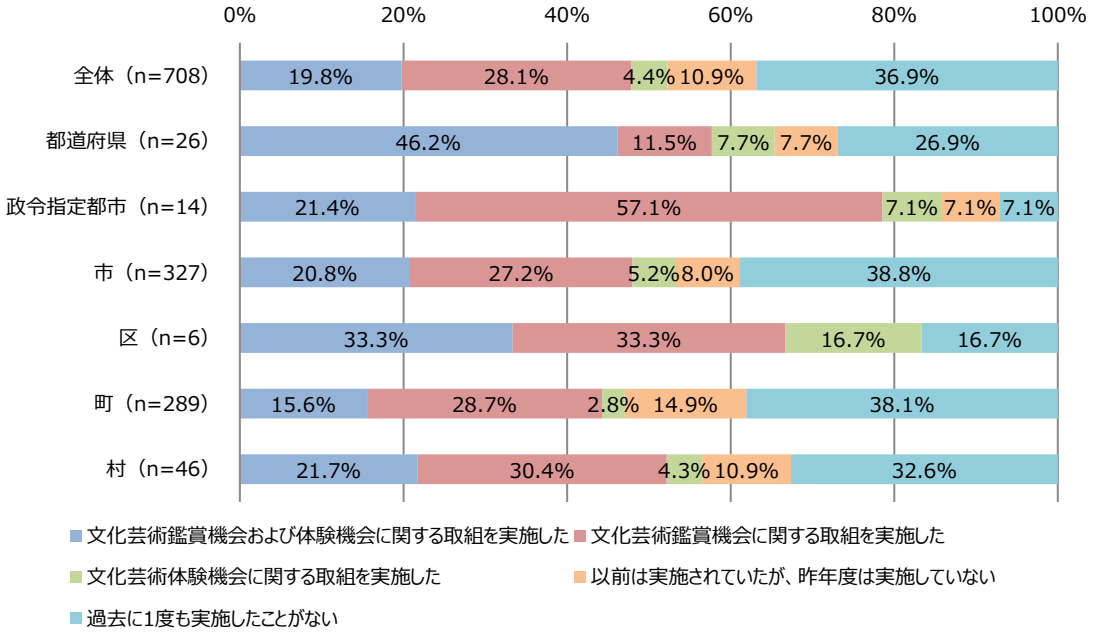
図 4-5　学校教育内での文化芸術活動の提供状況（単一回答）



②　自治体種別

自治体種別でみると、全体傾向と同様に、「町」以外の種別では 50%以上が何らかの取組を実施している一方で、「町」については 47.1%である。

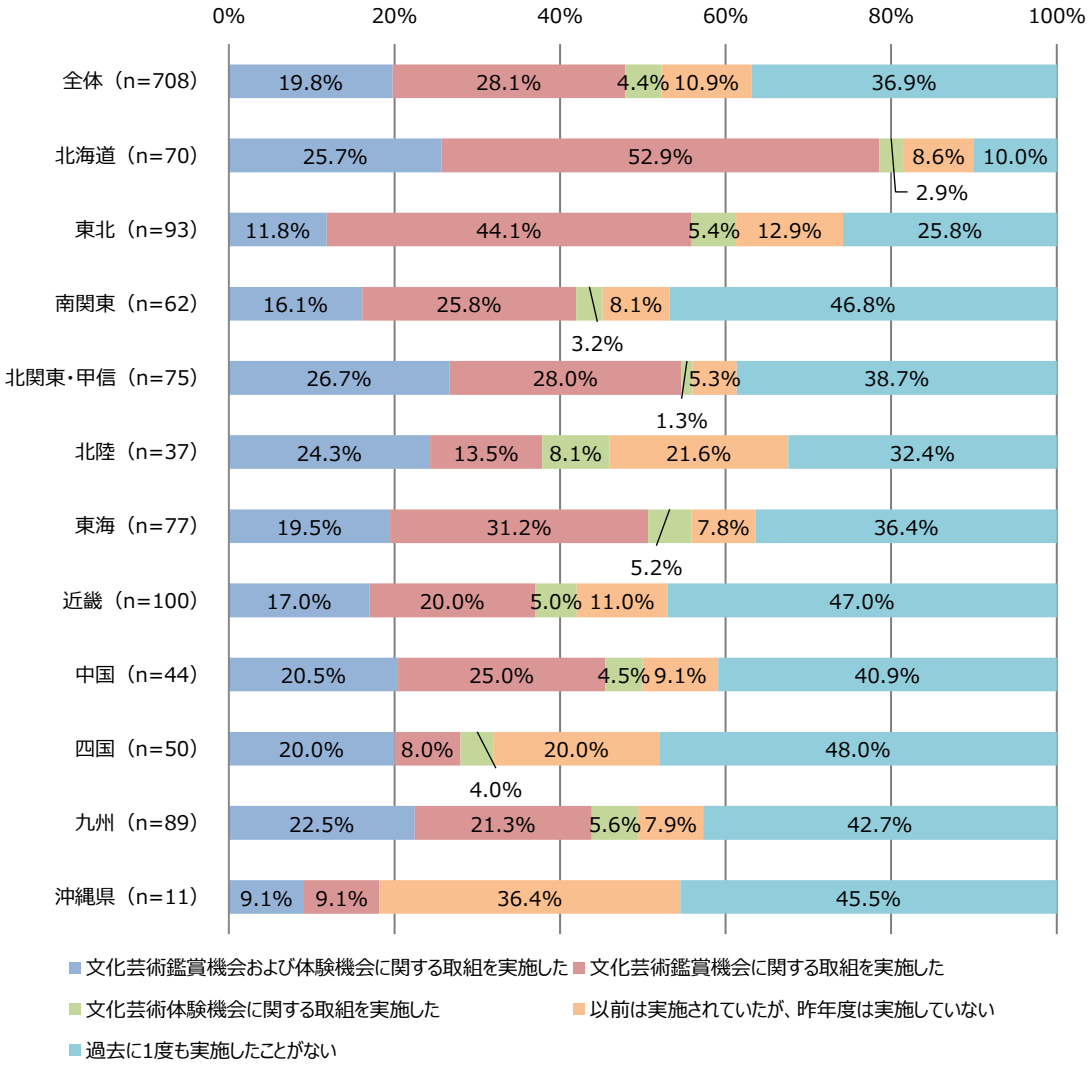
図 4-6　学校教育内での文化芸術活動の提供状況　自治体種別（単一回答）



③　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、「南関東」、「北陸」、「近畿」、「四国」、「九州」、「沖縄県」で何らかの取組を実施しているとの自治体の割合が、50%を下回っている。中でも「沖縄県」は、回答数が少ないものの約 82%が取組を実施していない。

図 4-7　学校教育内での文化芸術活動の提供状況　広域ブロック別（単一回答）

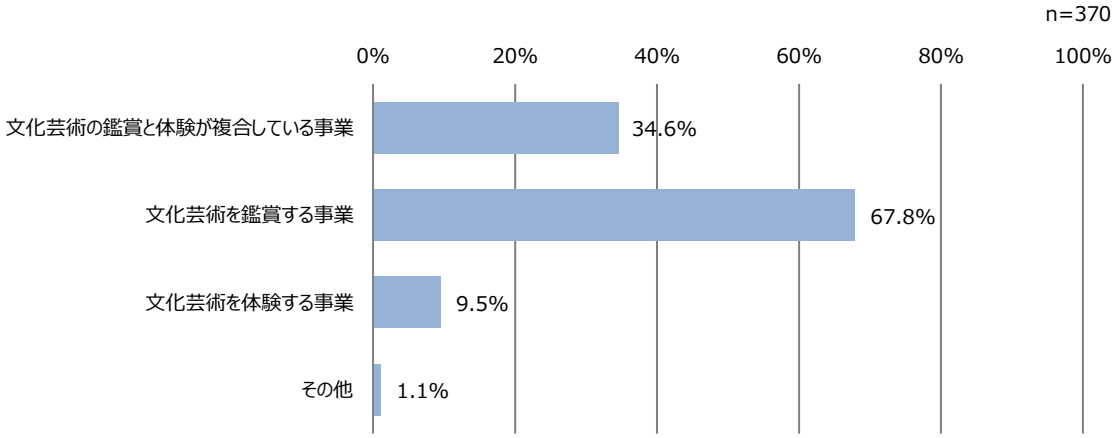


２）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「事業内容」

①　全体

「文化芸術を鑑賞する事業（67.8%）」が最も高く、次いで「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業（34.6%）」、「文化芸術を体験する事業（9.5%）」である。

図 4-8　学校教育内での文化芸術活動の「事業内容」（複数回答／３つまで）

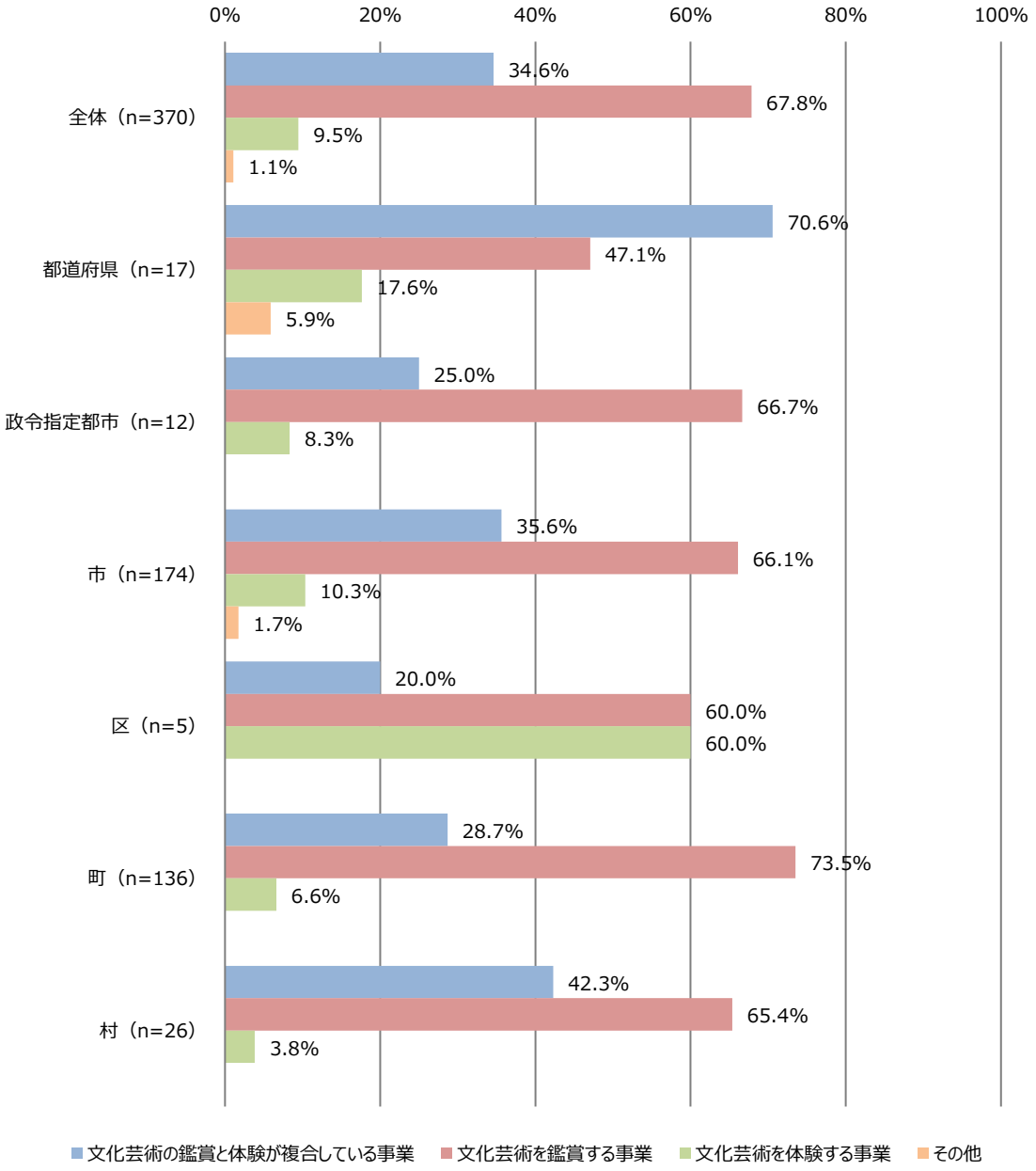


② 自治体種別

自治体種別にみると、「都道府県」のみ全体傾向と異なり、「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業」が最も高く、次いで「文化芸術を鑑賞する事業」、「文化芸術を体験する事業」である。

「区」に関しては、「文化芸術を鑑賞する事業」と「文化芸術を体験する事業」が同率で最も高い。

図 4-9　学校教育内での文化芸術活動の「事業内容」　自治体種別（複数回答／３つまで）

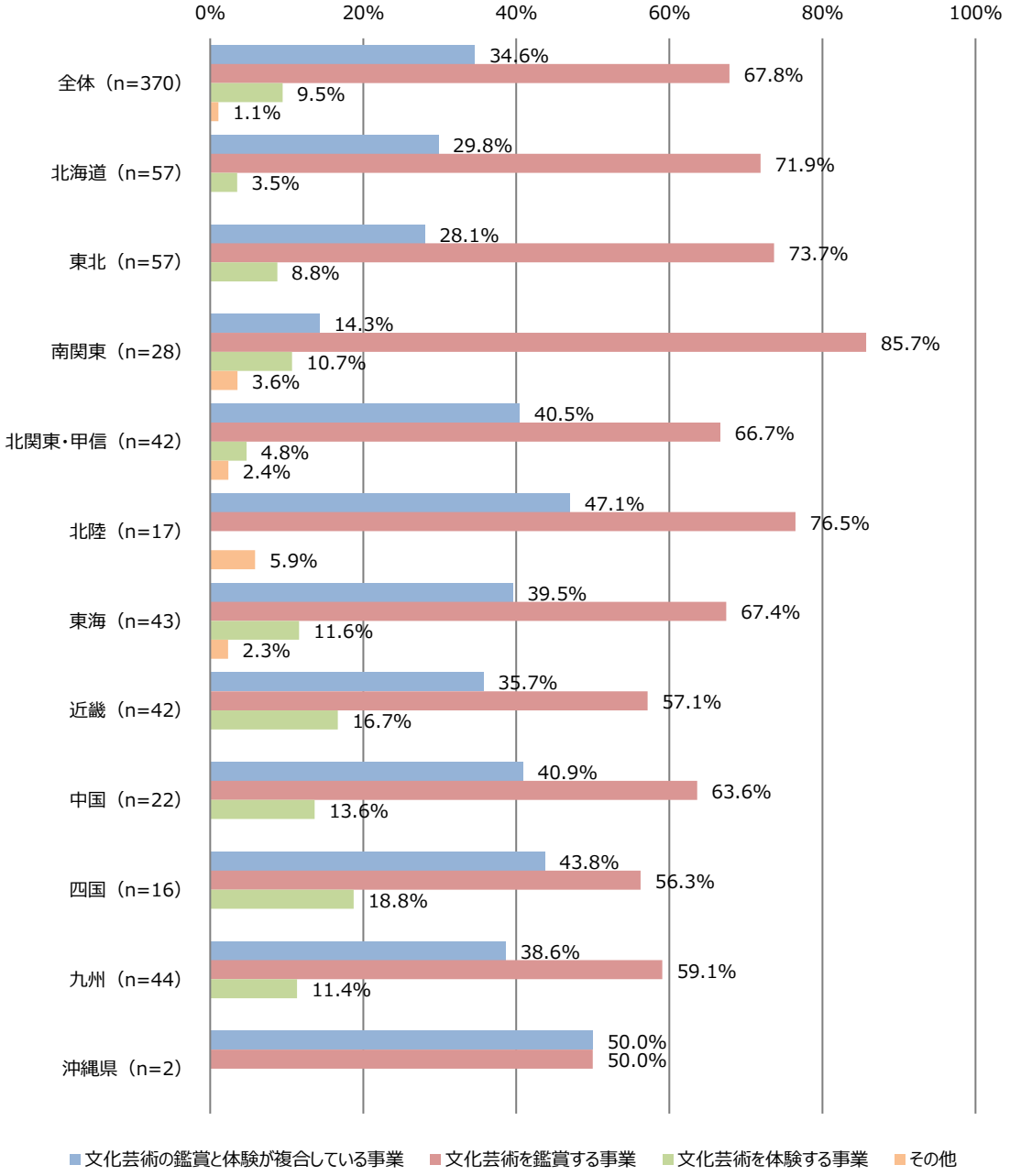


③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると傾向は全体傾向と大きく変わらず、「沖縄」のみ、「文化芸術の鑑賞と体験が複合している事業」と「文化芸術を鑑賞する事業」が同率で最も高い。

「北陸」は、「文化芸術を体験する事業」の回答が０％である。

図 4-10　学校教育内での文化芸術活動の「事業内容」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）



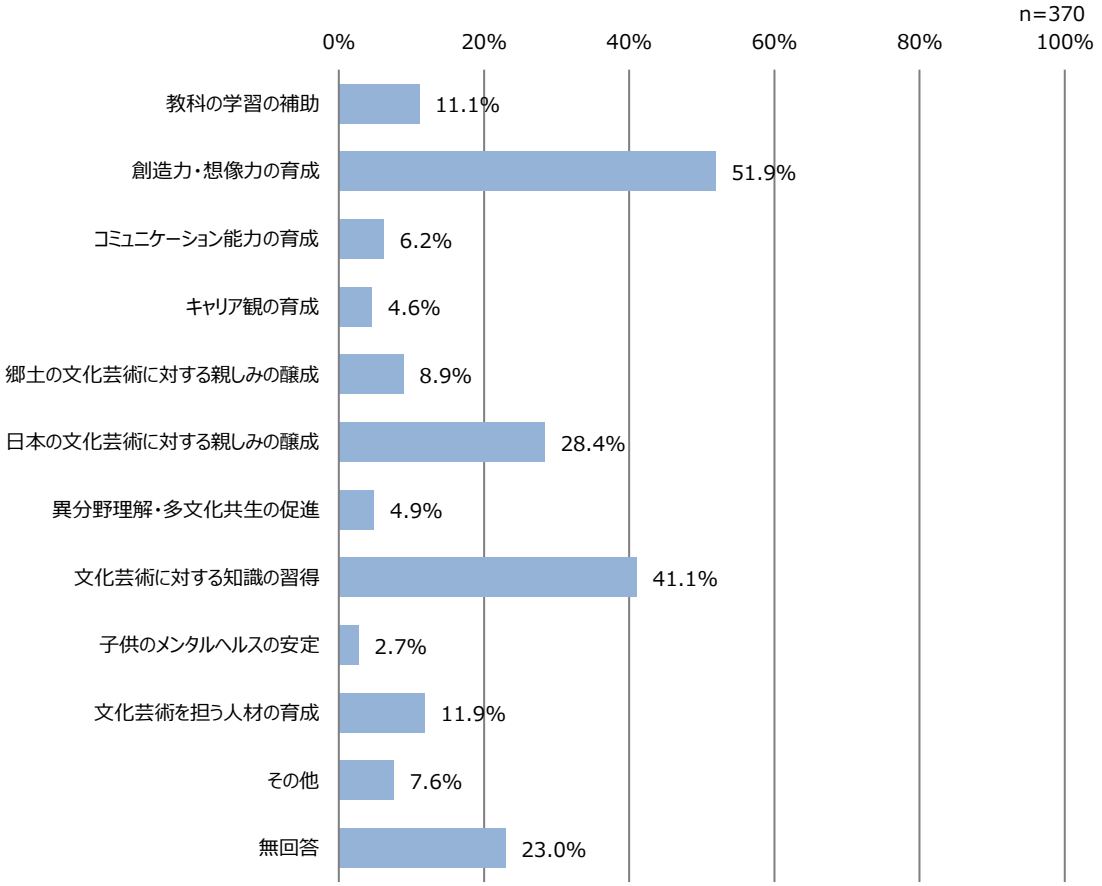
３）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「事業実施目的」

①　全体

「創造力・想像力の育成（51.9%）」が最も高く、次いで「文化芸術に対する知識の習得（41.1%）」、「日本の文化芸術に対する親しみの醸成（28.4%）」である。

なお、アンケートの設計の都合上、本設問では無回答が発生している。

図 4-11　学校教育内での文化芸術活動の「事業実施目的」（複数回答／３つまで）

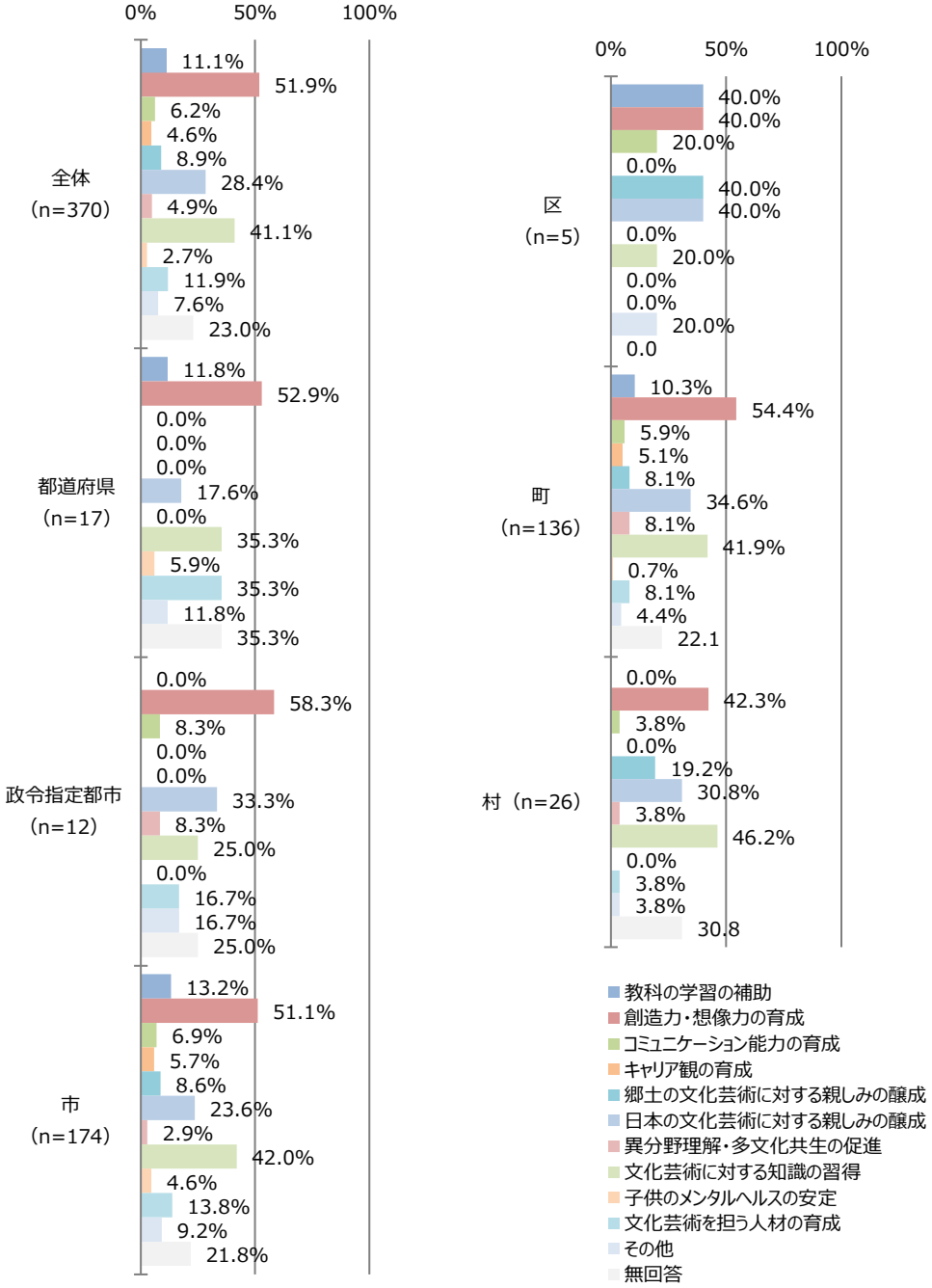


②　自治体種別

自治体種別でみると、全体傾向と類似した傾向が特徴であるが、「村」については、「文化芸術に対する知識の習得」が最も高く、２番目が「創造力・想像力の育成」。

「区」については、「創造力・想像力の育成」、「郷土の文化芸術に対する親しみの醸成」、「日本の文化芸術に対する親しみの醸成」の３つが同率で最も高い。

図 4-12　学校教育内での文化芸術活動の「事業実施目的」
自治体種別（複数回答／３つまで）



③　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、全体傾向と類似した傾向が特徴であるが、「北関東・甲信」は「文化芸術に対する知識の習得」が最も高く、「創造力・想像力の育成」は２番目である。

「南関東」と「沖縄」は、「創造力・想像力の育成」と「文化芸術に対する知識の習得」が同率で最も高い。

図 4-13-1　学校教育内での文化芸術活動の「事業実施目的」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

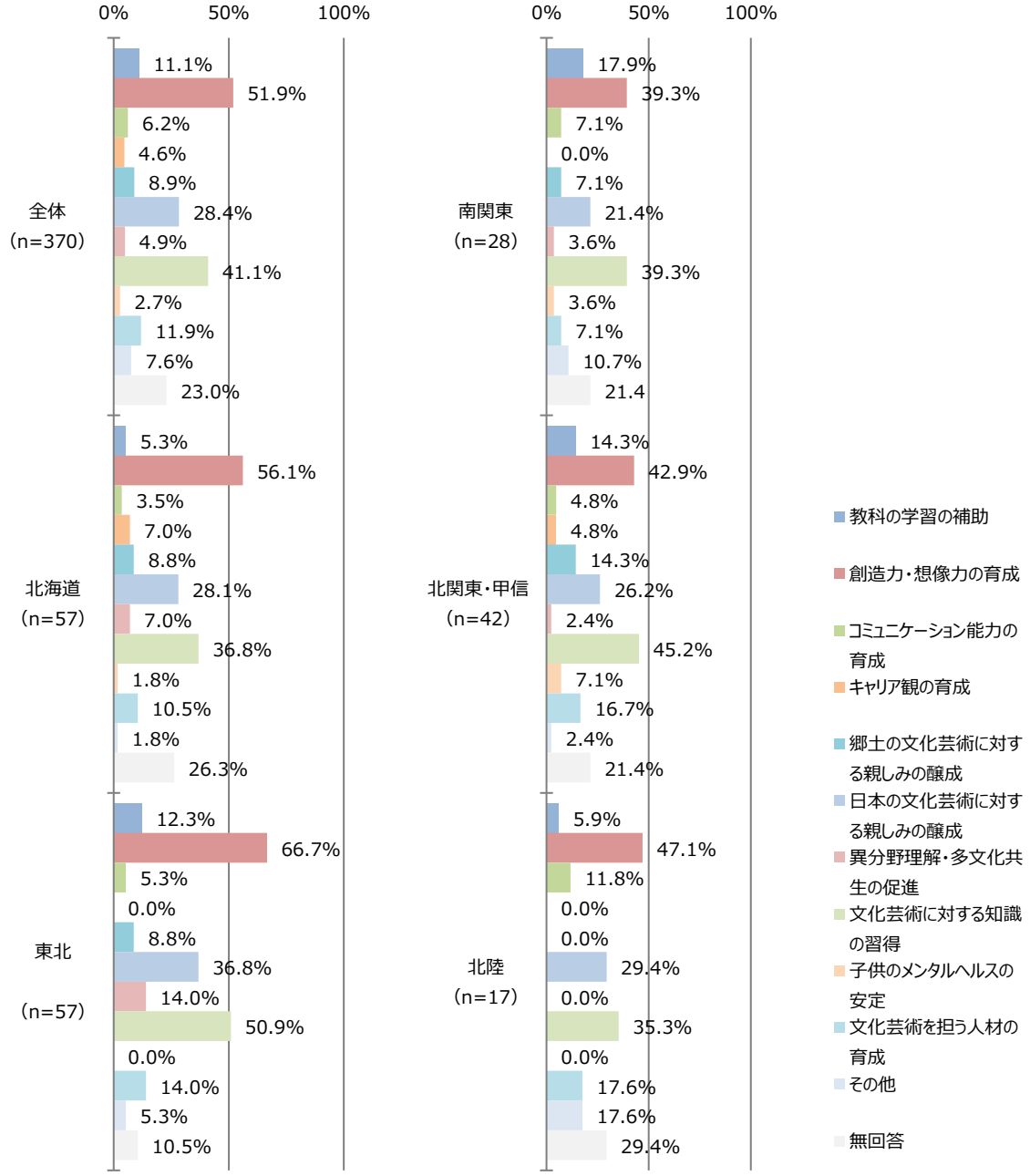
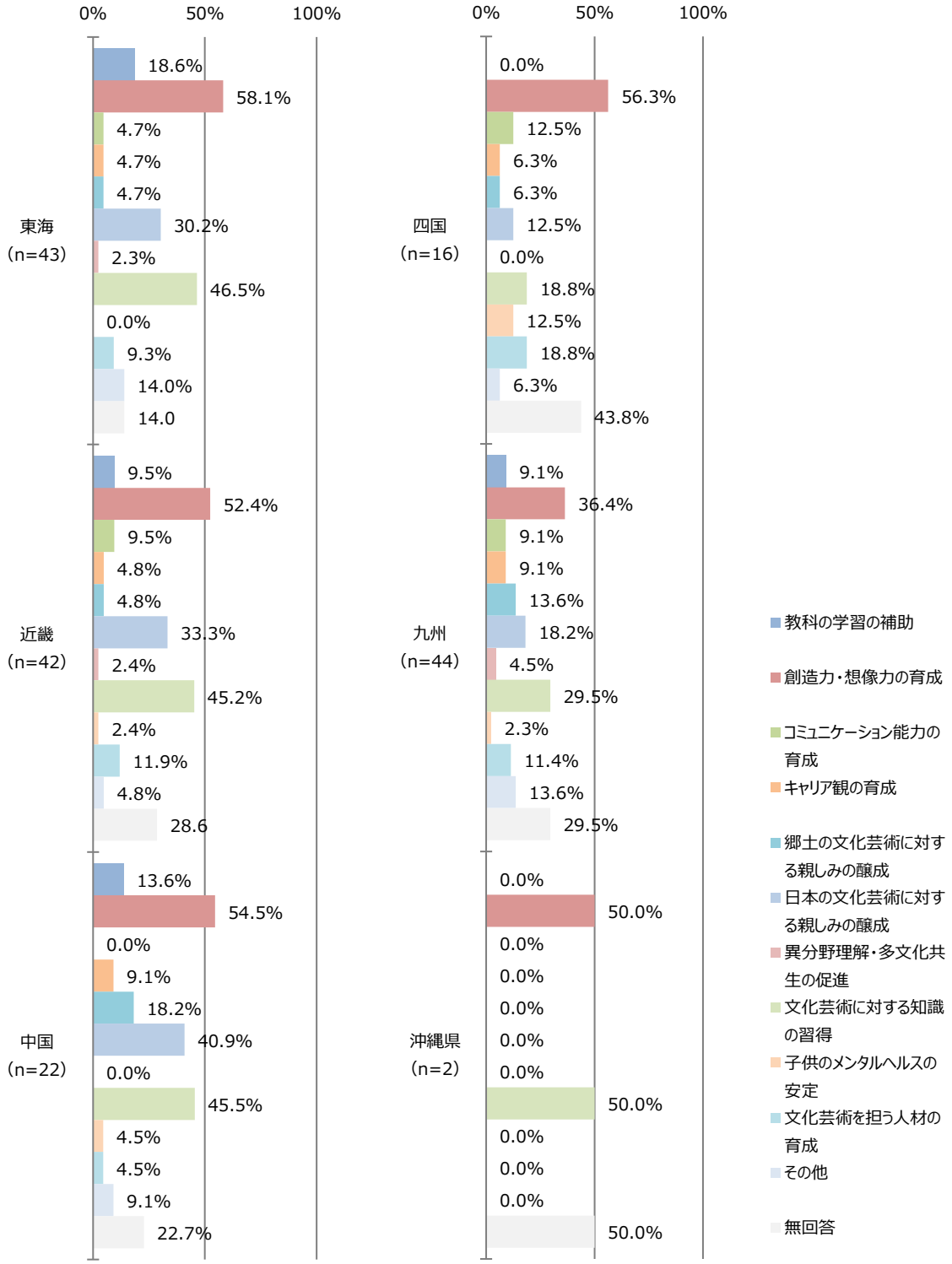


図 4-13-2　学校教育内での文化芸術活動の「事業実施目的」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

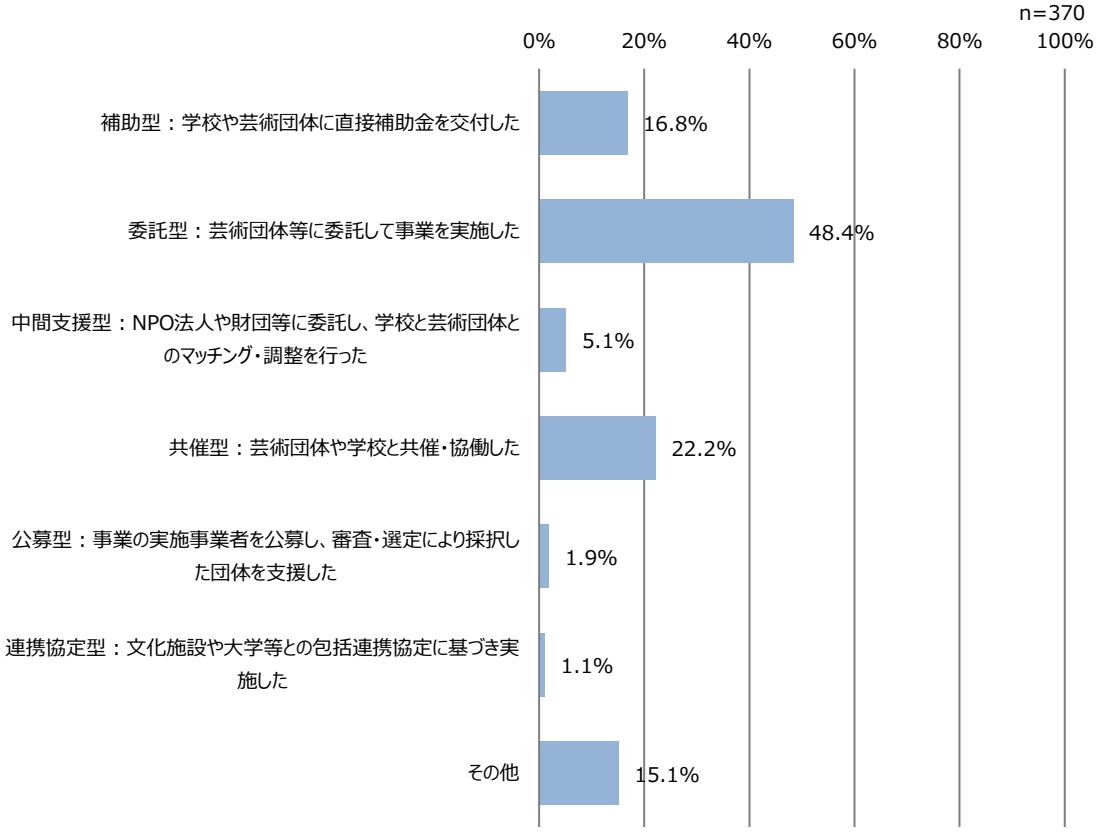


４）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「実施スキーム」

①　全体

「委託型：芸術団体等に委託して事業を実施した（48.4%）」が最も高く、次いで「共催型：芸術団体や学校と共催・協働した（22.2%）」、「補助型：学校や芸術団体に直接補助金を交付した（16.8%）」である。

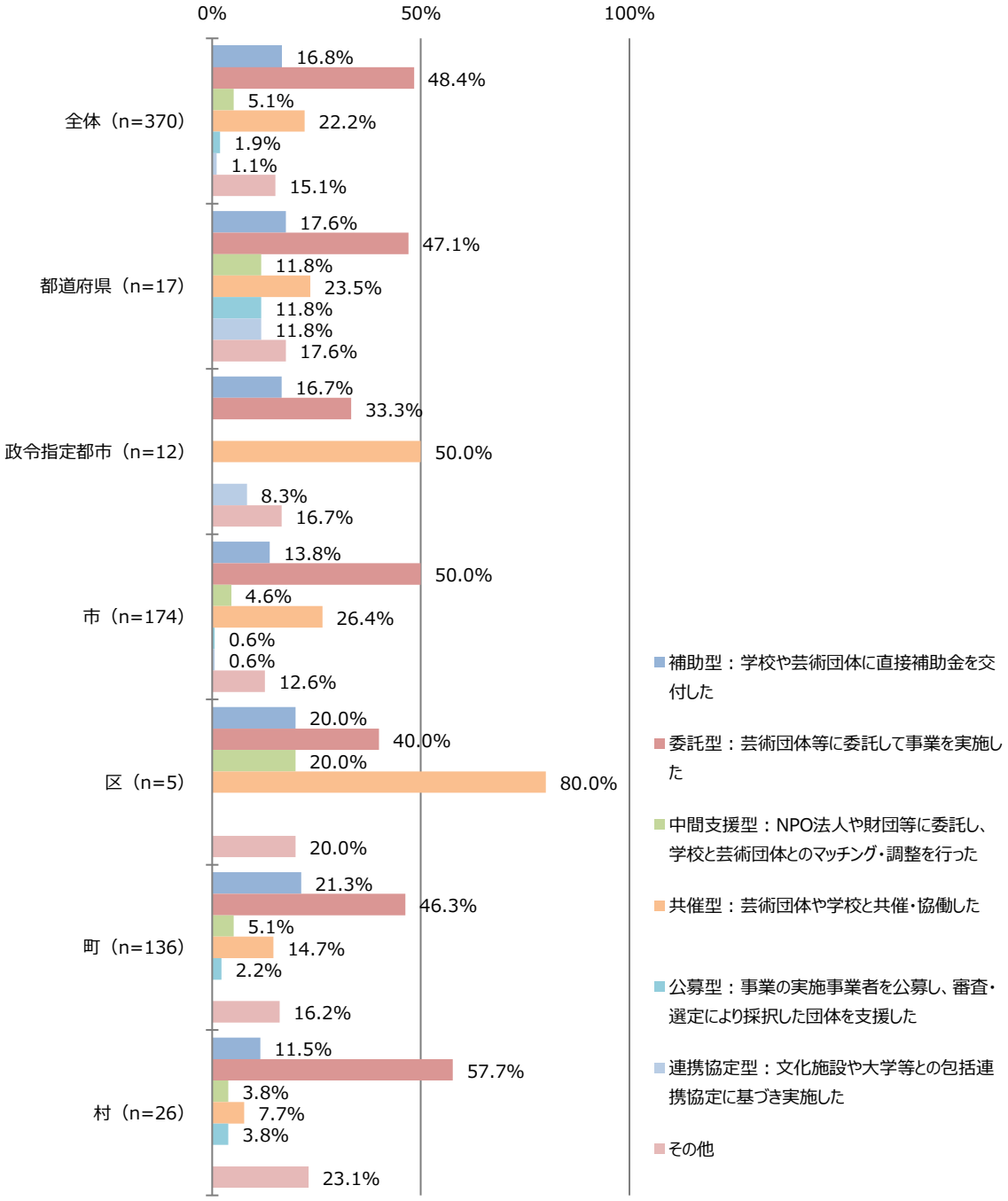
図 4-14　学校教育内での文化芸術活動の「実施スキーム」（複数回答／３つまで）



② 自治体種別

自治体種別でみると、「政令指定都市」と「区」については、全体傾向と異なり「共催型：芸術団体や学校と共催・協働した」が最も高く、「委託型：芸術団体等に委託して事業を実施した」が２番目に高くなっている。

図 4-15　学校教育内での文化芸術活動の「実施スキーム」
自治体種別（複数回答／３つまで）



③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、全ブロックで全体傾向と同様に「委託型：芸術団体等に委託して事業を実施した」が最も高くなっている。また、「公募型：事業の実施事業者を公募し、審査・選定により採択した団体を支援した」、「連携協定型：文化施設や大学等との包括連携協定に基づき実施した」については、過半数を超えるブロックで０％である。

図 4-16-1　学校教育内での文化芸術活動の「実施スキーム」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

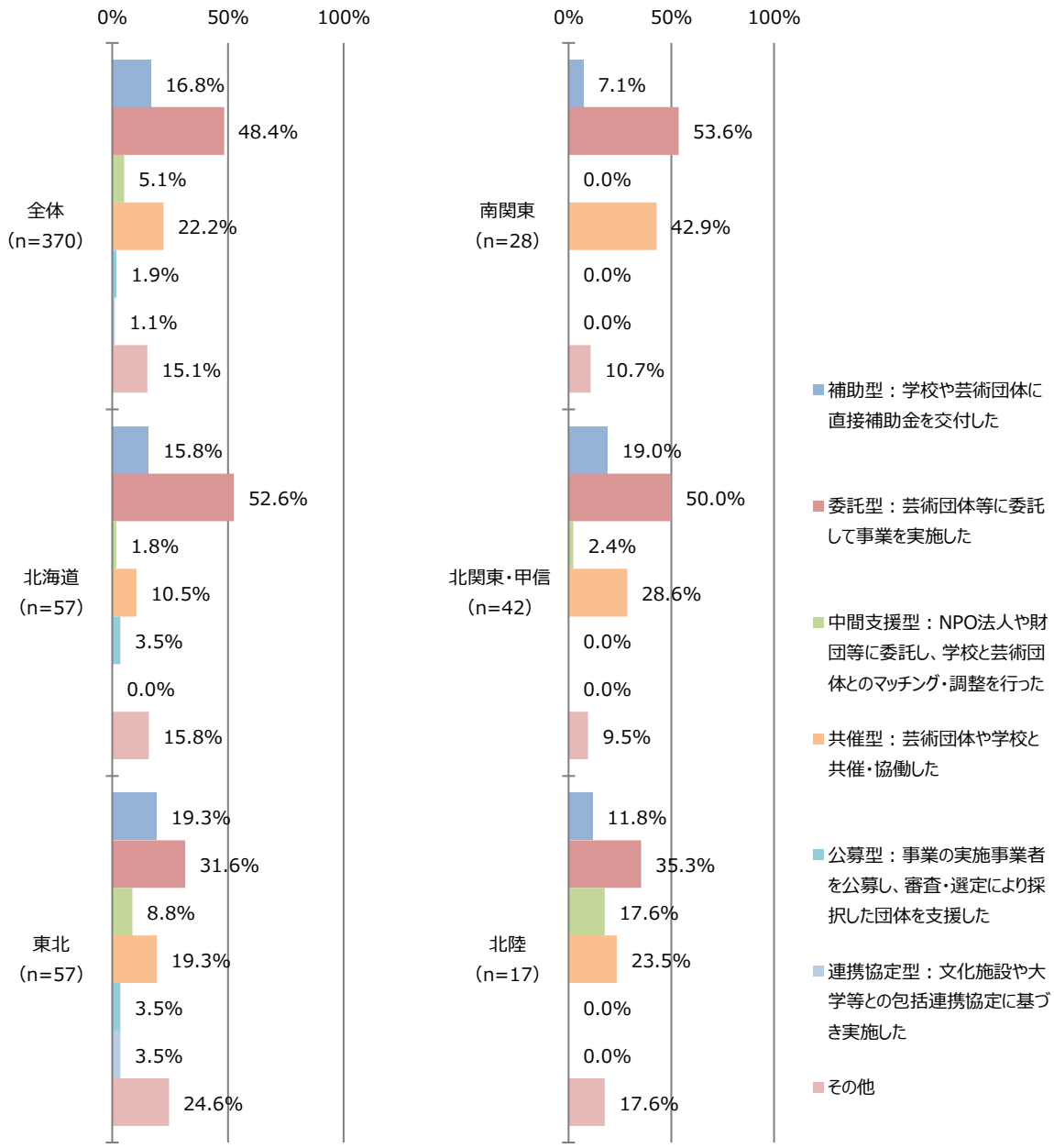
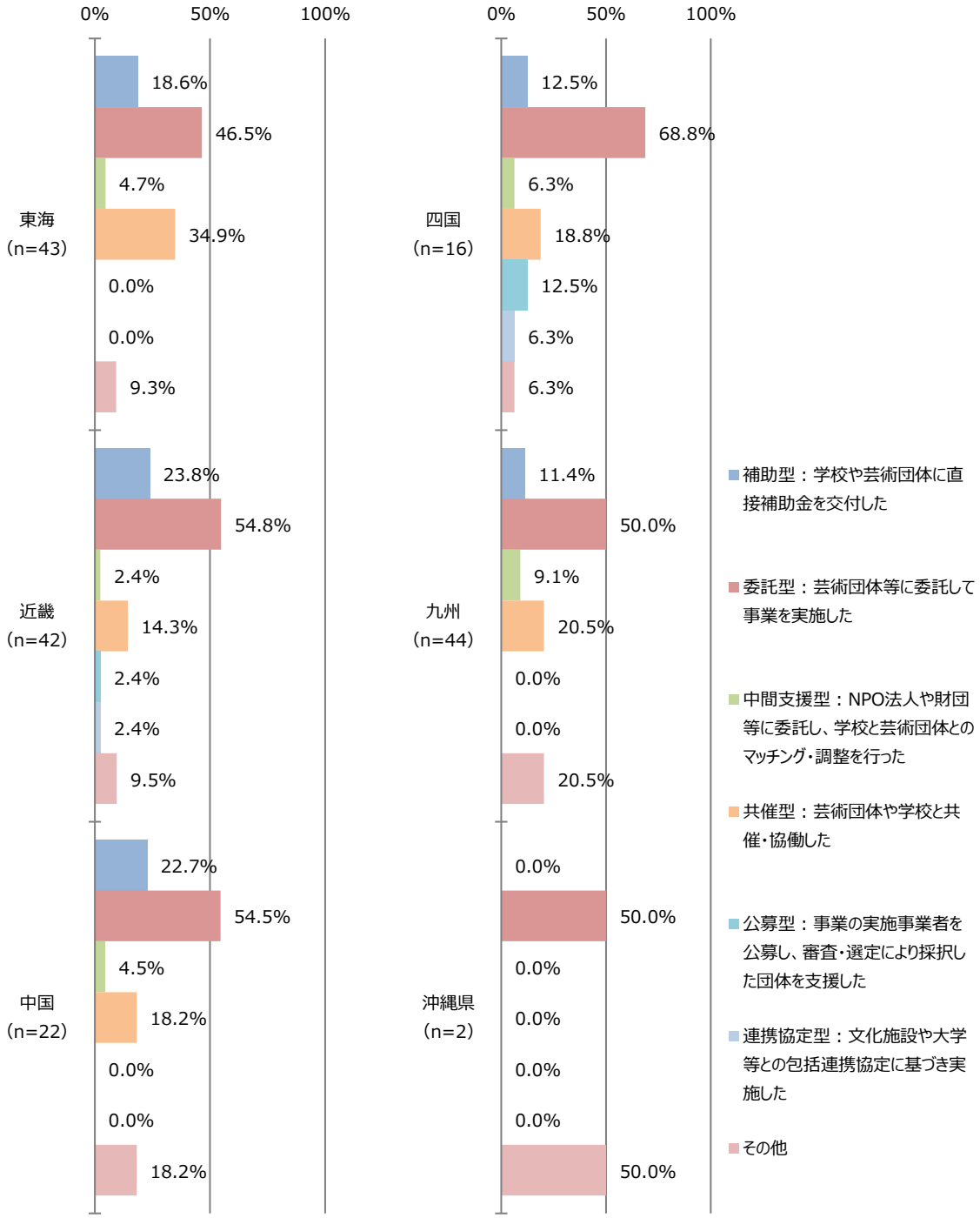


図 4-16-2　学校教育内での文化芸術活動の「実施スキーム」
広域ブロック別（複数回答／3 つまで）

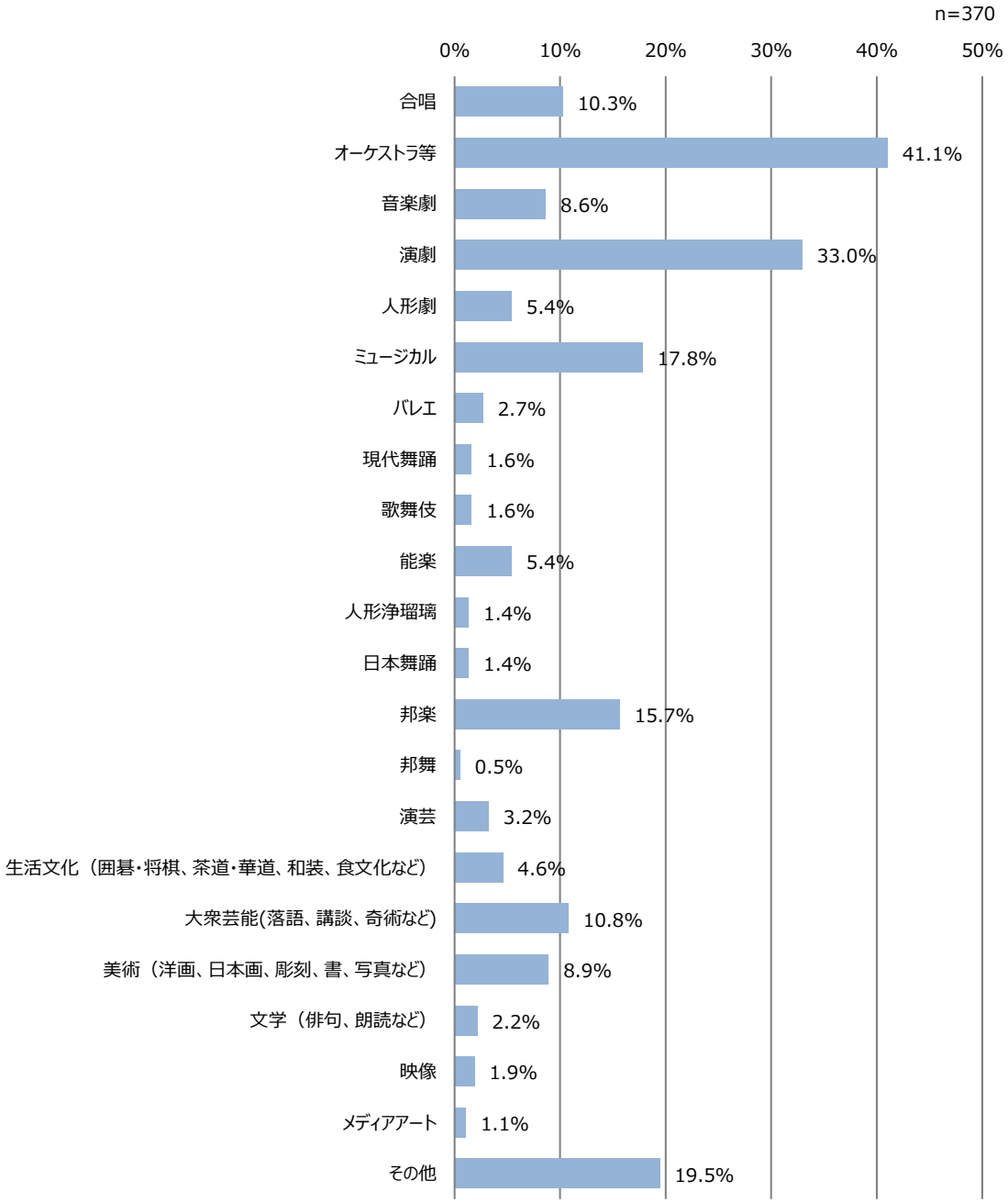


５）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」

①　全体

「オーケストラ等（41.1%）」が最も高く、次いで「演劇（33.0%）」、「ミュージカル（17.8%）」、「邦楽（15.7%）」である。それ以外の分野・種目については、約 10%から 10%以下である。

図 4-17　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」（複数回答／３つまで）



②　自治体種別

自治体種別でみると、「町」及び「村」のみ、全体傾向と異なり、「演劇」が最も高く、「オーケストラ等」が２番目に高くなっている。

図 4-18-1　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」
自治体別（複数回答／３つまで）

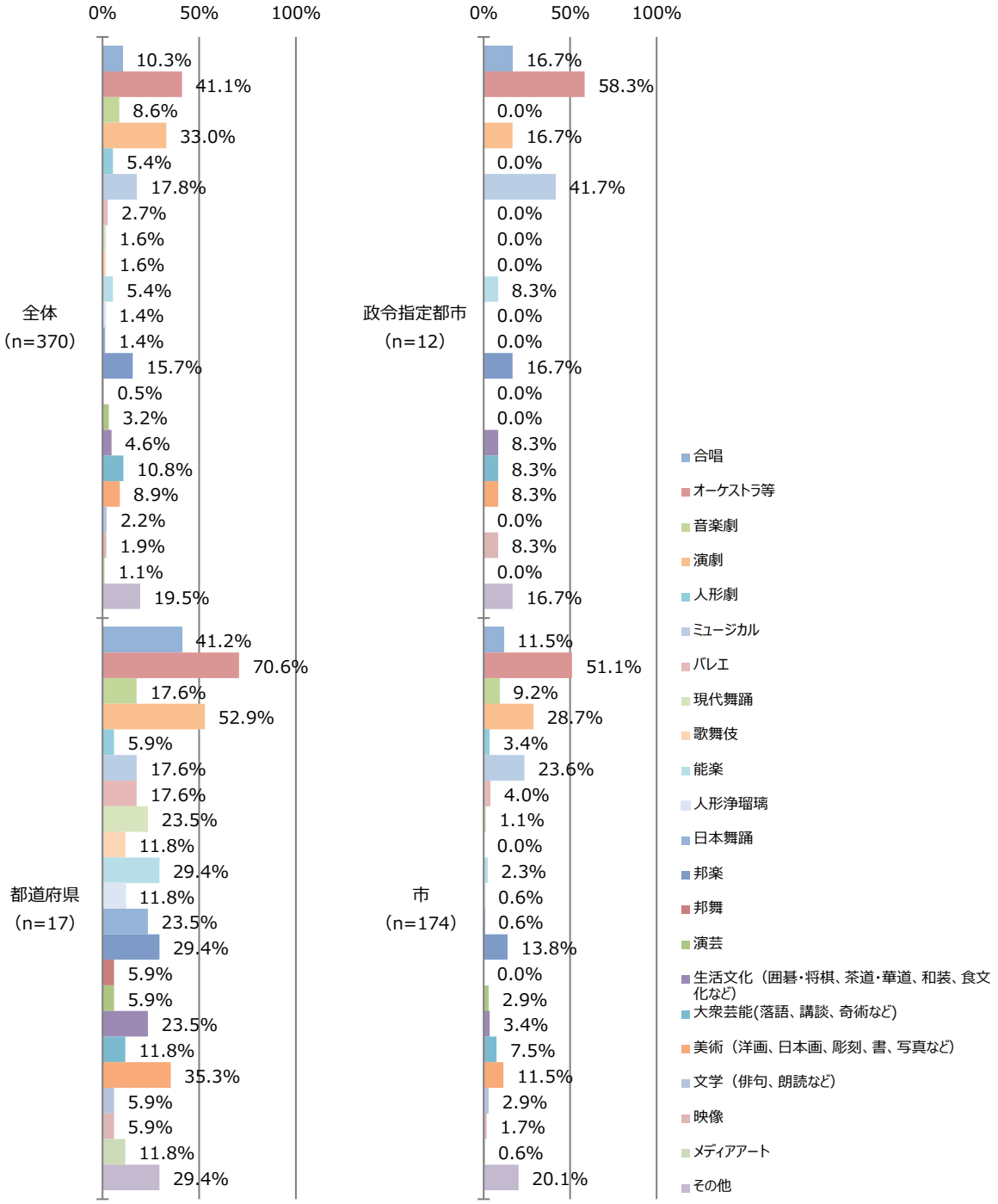
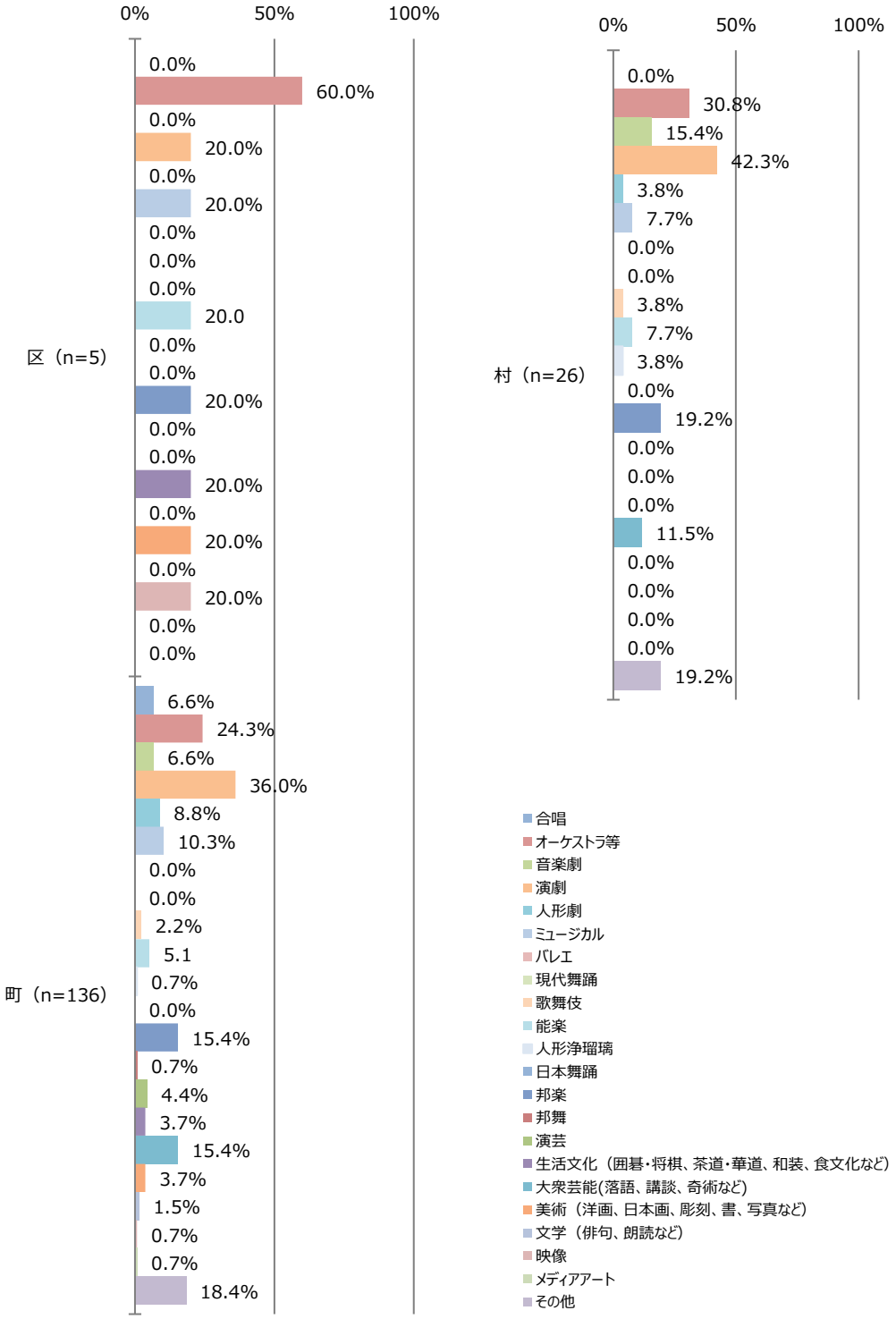


図 4-18-2　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」
自治体別（複数回答／３つまで）



③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、「北海道」、「四国」、「沖縄」については、全体傾向と異なり「演劇」が最も高い。「中国」については、「オーケストラ等」と「演劇」が同率で最も高い。

図 4-19-1　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」

広域ブロック別　（複数回答／３つまで）

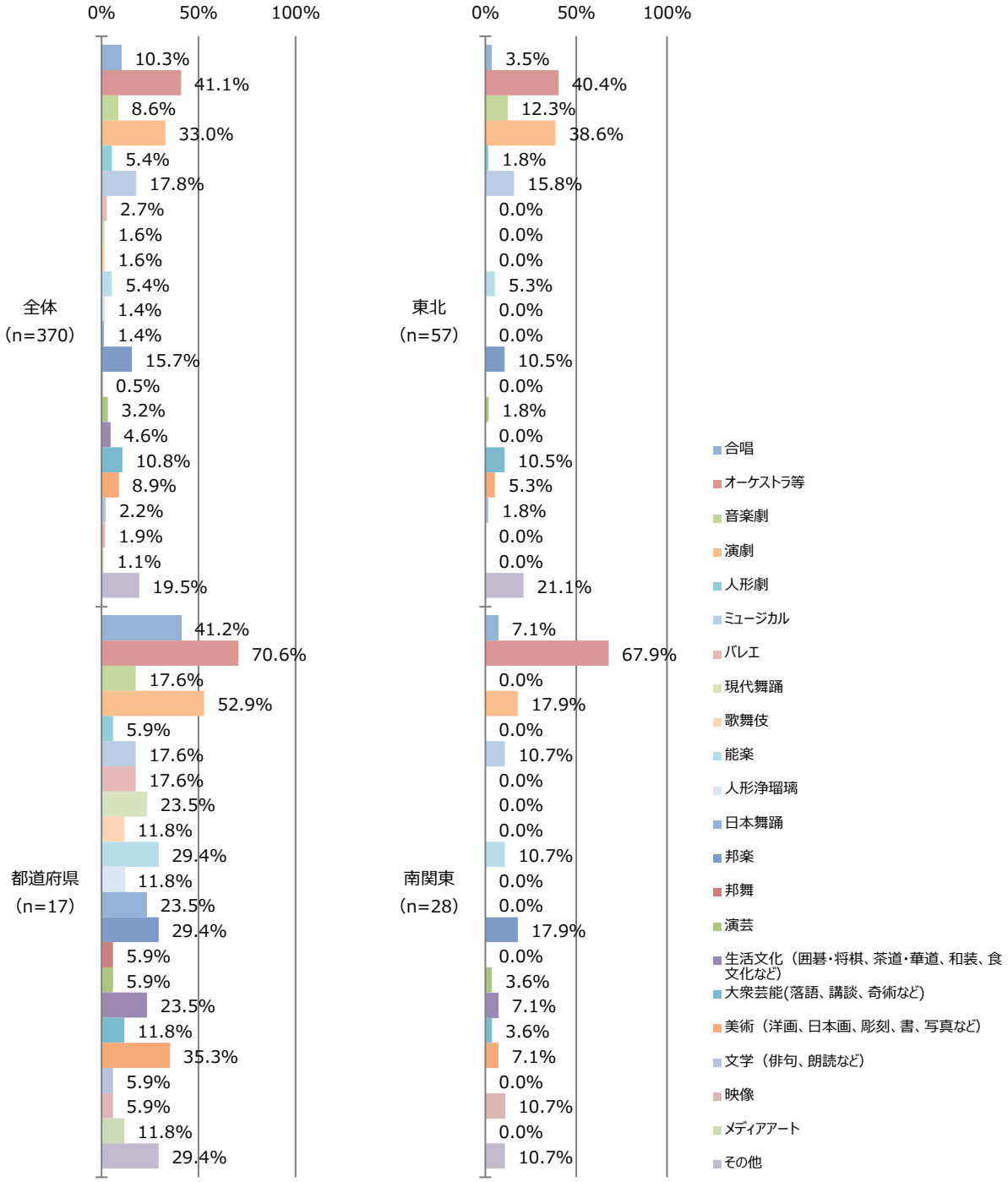


図 4-19-2　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

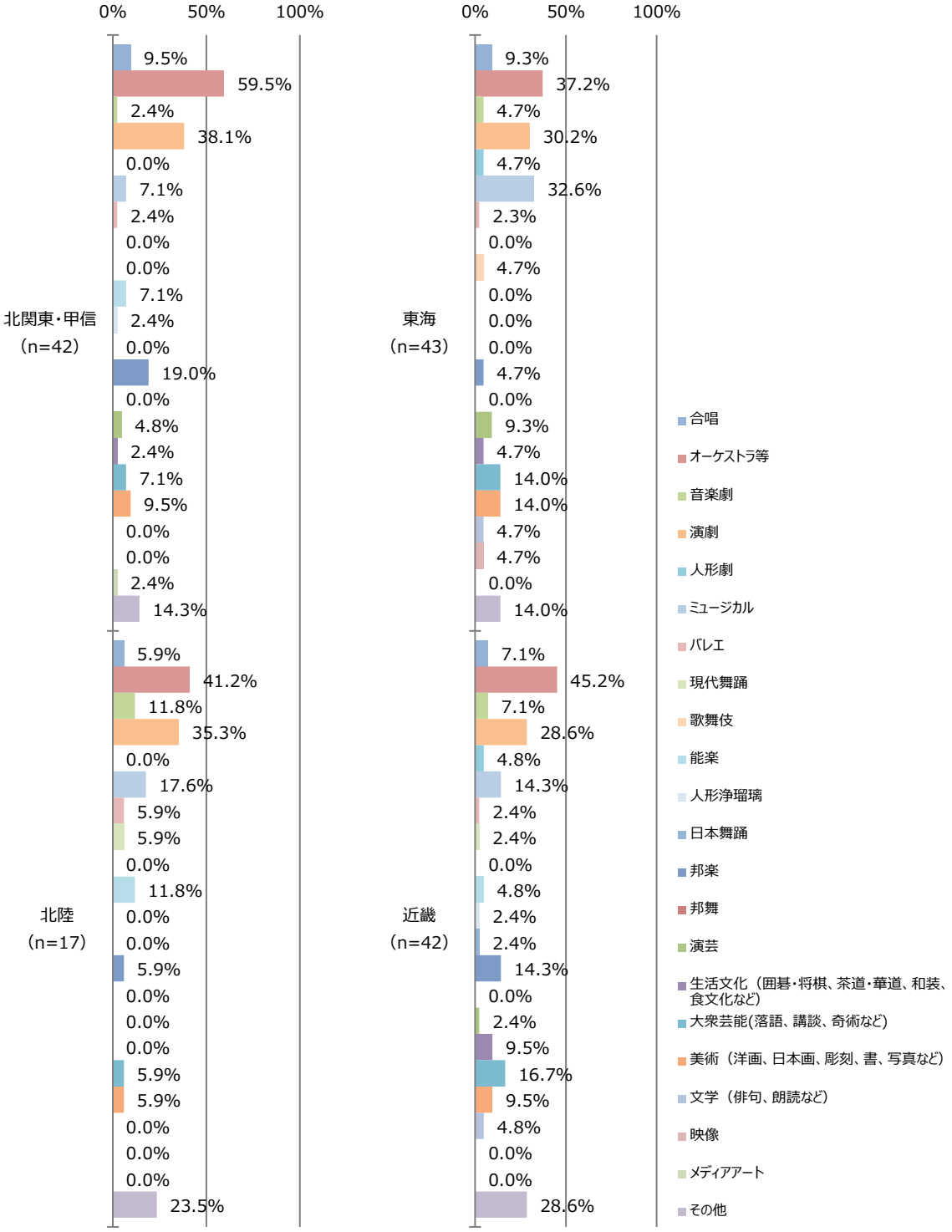
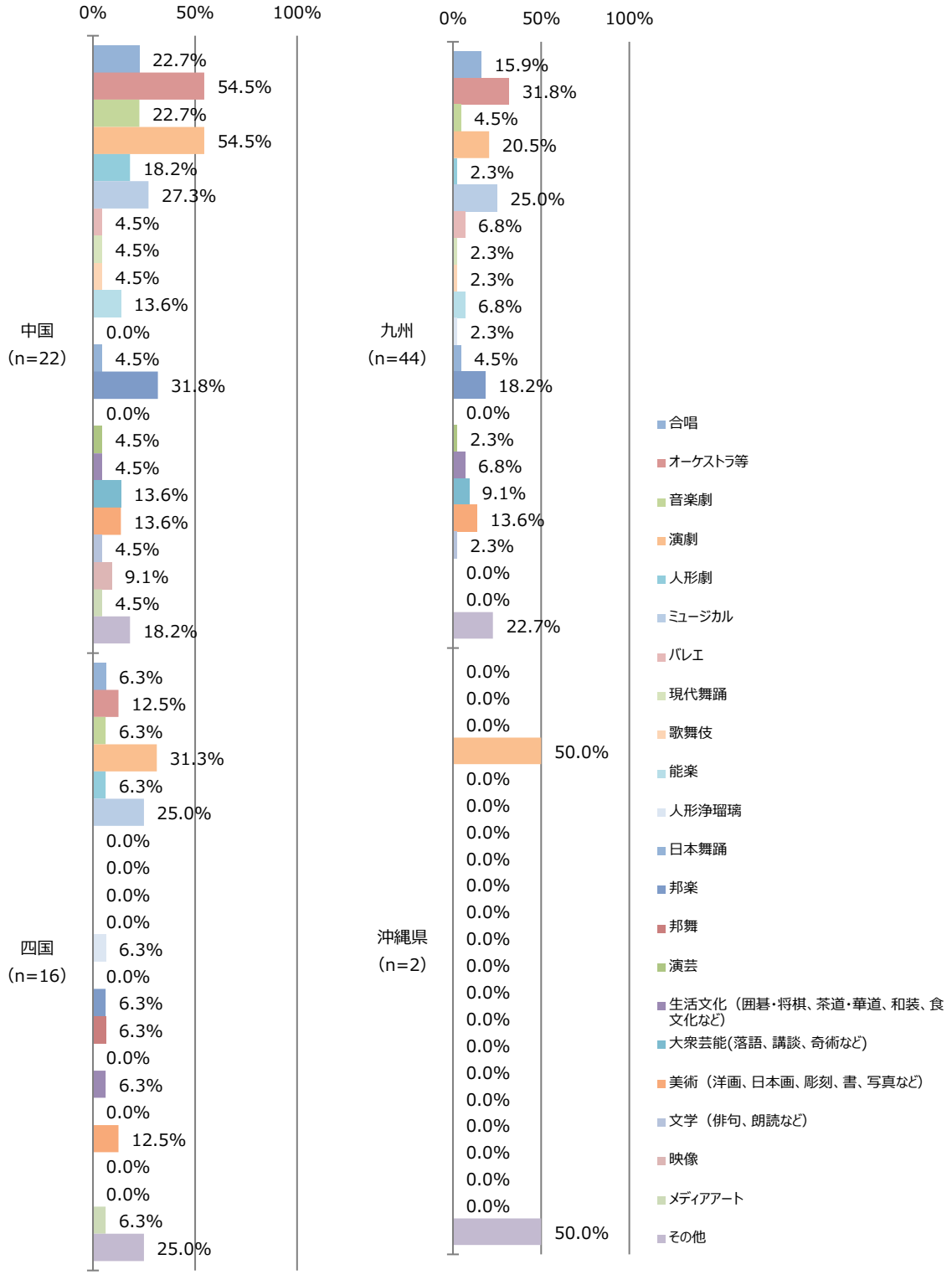


図 4-19-3　学校教育内での文化芸術活動の「芸術分野・種目」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

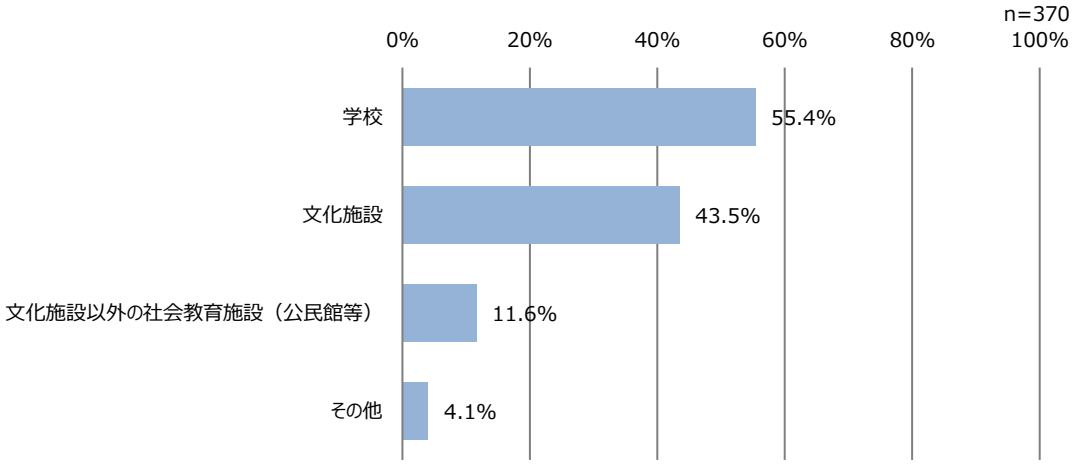


６）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「実施場所」

①　全体

「学校（55.4%）」が最も高く、次いで「文化施設（43.5%）」、「文化施設以外の社会教育施設（公民館等）（11.6%）」である。

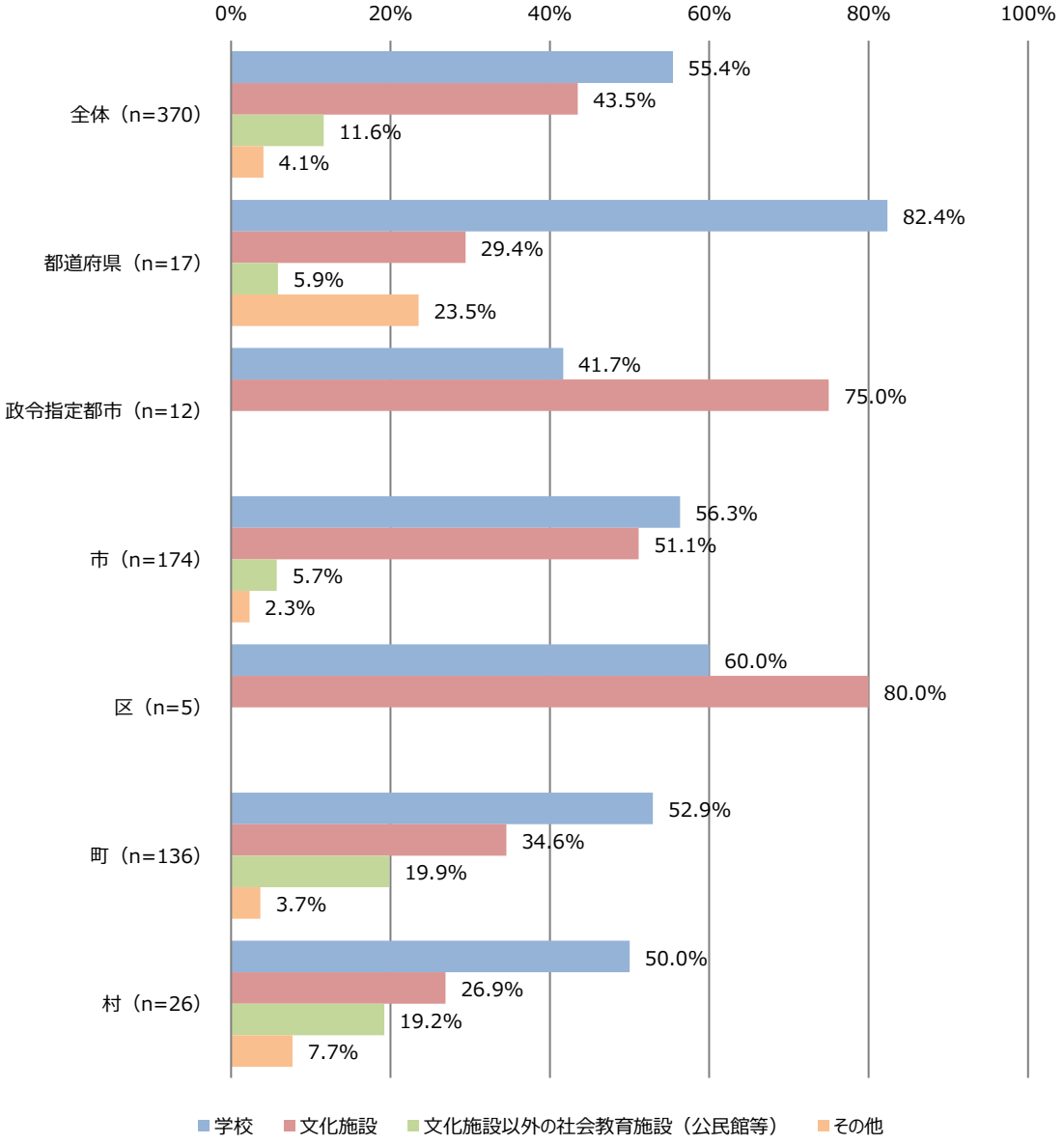
図 4-20　学校教育内での文化芸術活動の「実施場所」（複数回答／３つまで）



②　自治体種別

自治体種別でみると、「政令指定都市」と「区」のみ、全体傾向と異なり「文化施設」が最も高く、「学校」が２番目である。

図 4-21　学校教育内での文化芸術活動の「実施場所」　自治体種別（複数回答／３つまで）

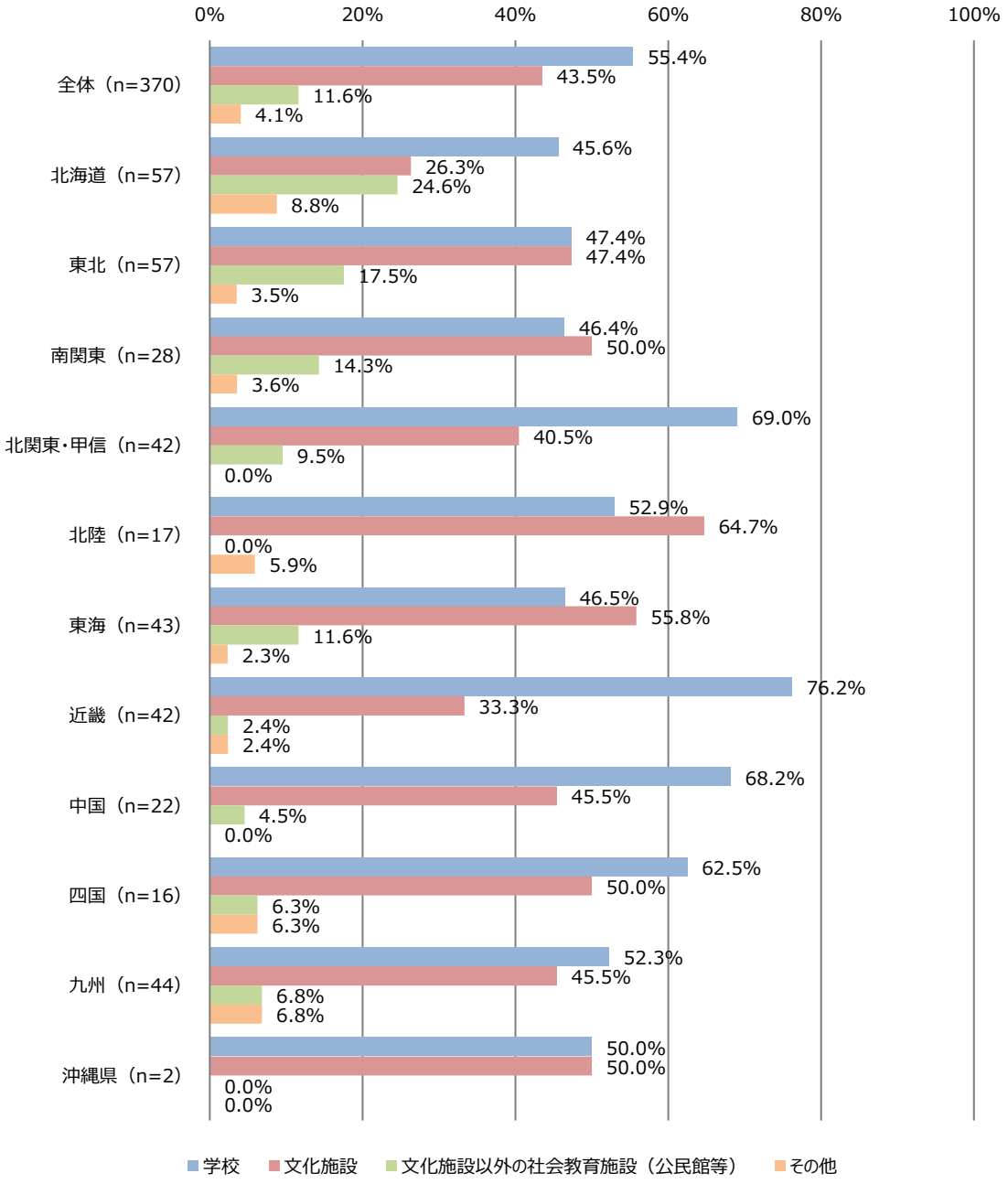


③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、「南関東」、「北陸」、「東海」については、全体傾向と異なり「文化施設」が最も高く、「学校」が２番目である。

「東北」、「沖縄」については、「文化施設」と「学校」が同率で最も高い。

図 4-22　学校教育内での文化芸術活動の「実施場所」
広域ブロック別（複数回答／３つまで）



７）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した学校数」

「小学校」が全体の 75%弱を占め 4,417 校と最も高く、「中学校（1,066 校）」が続いている。それ以外については、100 校以下である。

図 4-23　学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した学校数」（数値回答）

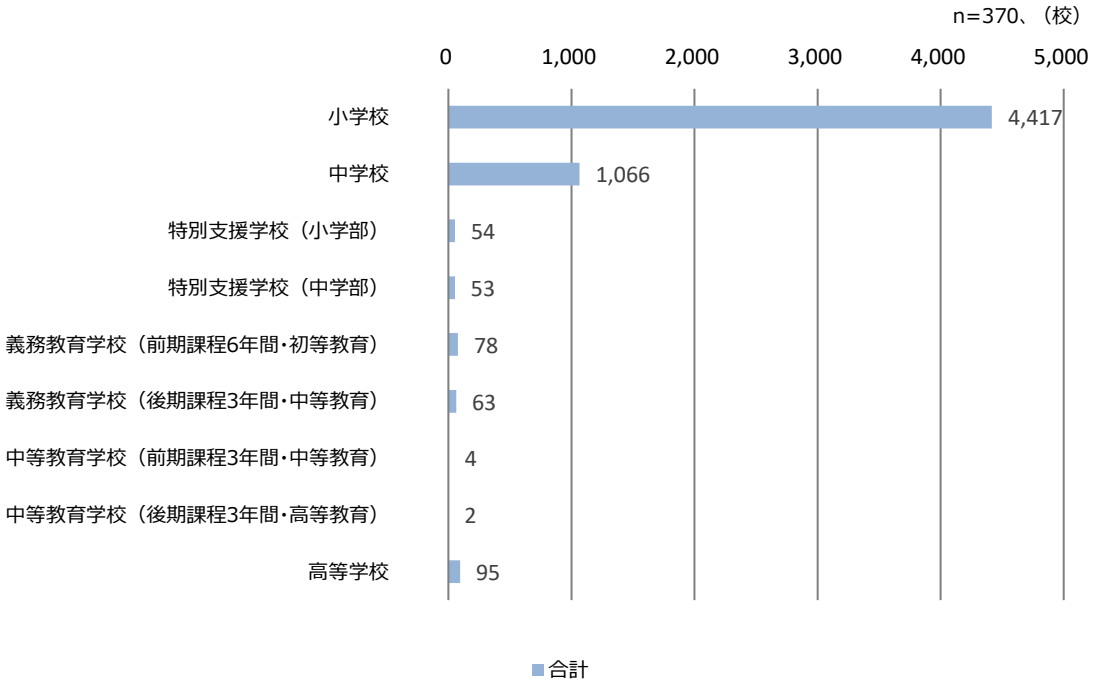


表 4-2　学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した学校数」（数値回答）

区分	合計	平均
全体	5,832	15.76
小学校	4,417	11.94
中学校	1,066	2.88
特別支援学校（小学部）	54	0.15
特別支援学校（中学部）	53	0.14
義務教育学校（前期課程 6 年間･初等教育）	78	0.21
義務教育学校（後期課程 3 年間･中等教育）	63	0.17
中等教育学校（前期課程 3 年間･中等教育）	4	0.01
中等教育学校（後期課程 3 年間･高等教育）	2	0.01
高等学校	95	0.26

８）令和６年度に実施した学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した人数」

「小学校」が全体の約 70%を占め約 44 万人と最も高く、次いで「中学校（約 15 万人）」、「高等学校（約１万人）」。それ以外については、８千人以下である。

図 4-24　学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した人数」（数値回答）

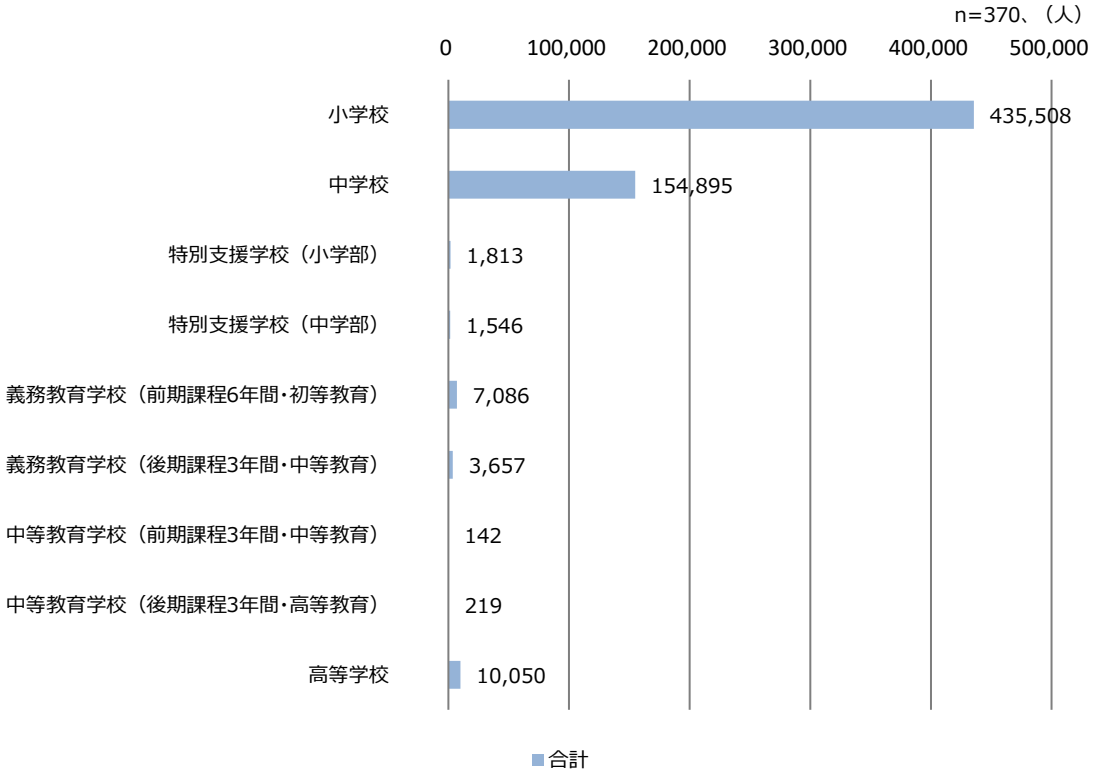


表 4-3　学校教育内での文化芸術活動の「事業に参加した人数」（数値回答）

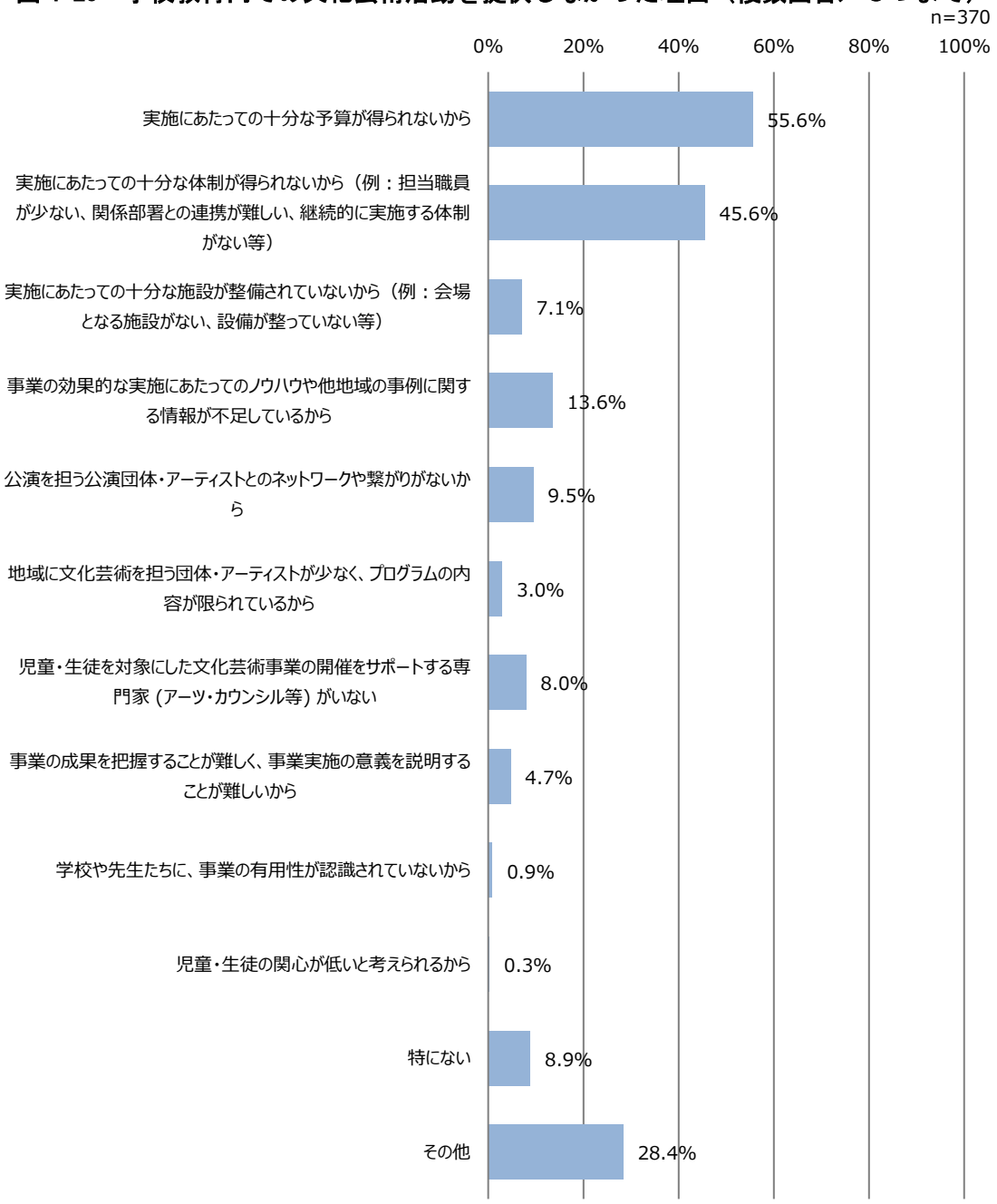
区分	合計	平均
全体	614,916	1,661.94
小学校	435,508	1,177.05
中学校	154,895	418.64
特別支援学校（小学部）	1,813	4.90
特別支援学校（中学部）	1,546	4.18
義務教育学校（前期課程６年間・初等教育）	7,086	19.15
義務教育学校（後期課程３年間・中等教育）	3,657	9.88
中等教育学校（前期課程３年間・中等教育）	142	0.38
中等教育学校（後期課程３年間・高等教育）	219	0.59
高等学校	10,050	27.16

９）令和６年度に学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由

①　全体

「実施にあたっての十分な予算が得られないから（55.6%）」が最も高く、次いで「実施にあたっての十分な体制が得られないから（45.6%）」、「事業の効果的な実施にあたってのノウハウや他地域の事例に関する情報が不足しているから（13.6%）」である。

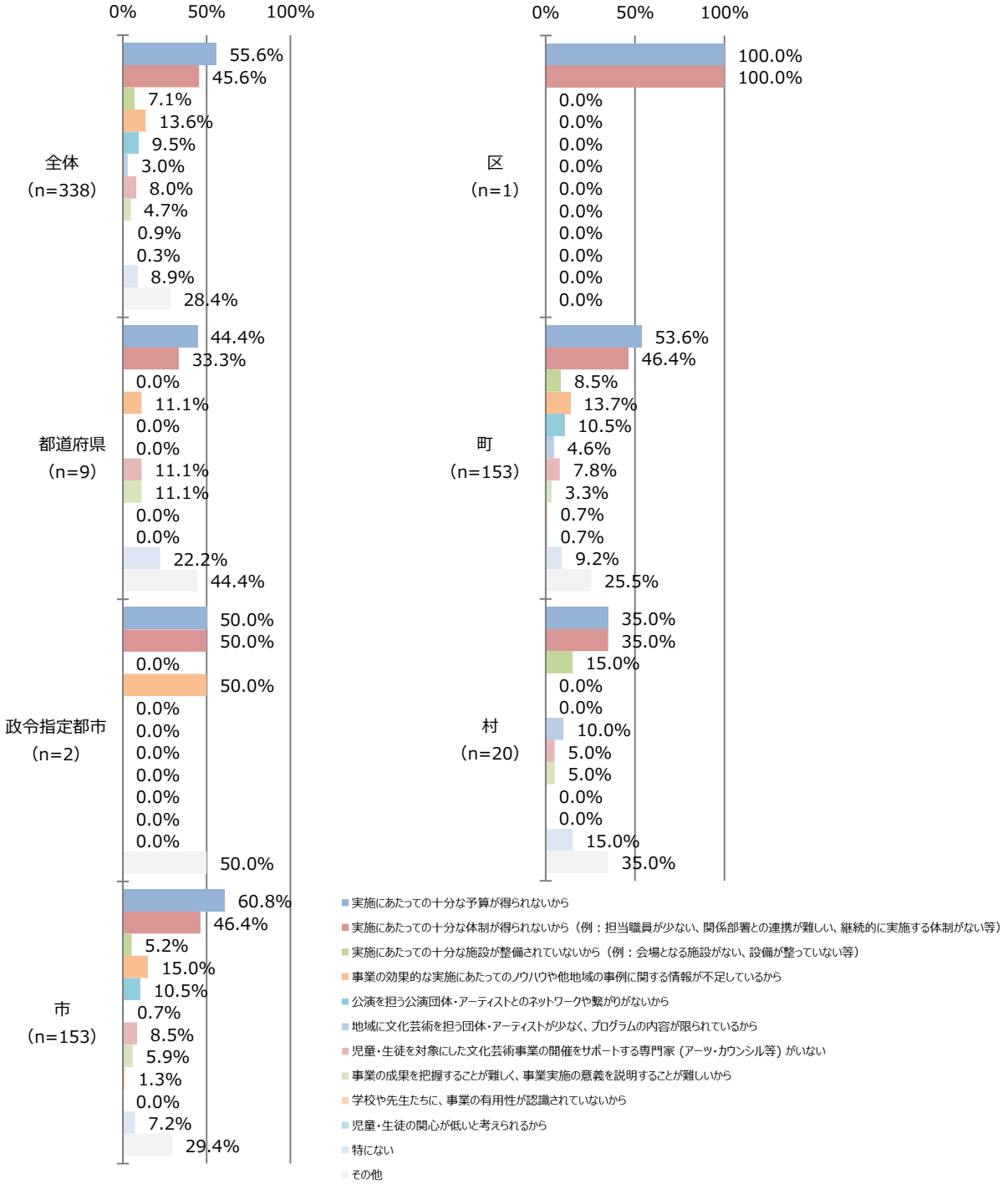
図 4-25　学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由（複数回答／３つまで）



② 自治体種別

自治体種別でみると、「北陸」のみ全体傾向と異なり、「実施にあたっての十分な体制が得られないから」が最も高く、「実施にあたっての十分な予算が得られないから」が続く。

図 4-26　学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由
自治体種別（複数回答／３つまで）



③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、「区」、「村」については、「実施にあたっての十分な予算が得られないから」と「実施にあたっての十分な体制が得られないから」が同率で最も高い。

「政令指定都市」については、「実施にあたっての十分な予算が得られないから」、「実施にあたっての十分な体制が得られないから」、「事業の効果的な実施にあたってのノウハウや他地域の事例に関する情報が不足しているから」の３項目が同率で最も高い。

図 4-27-1　学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由
広域ブロック別（複数回答／３つまで）

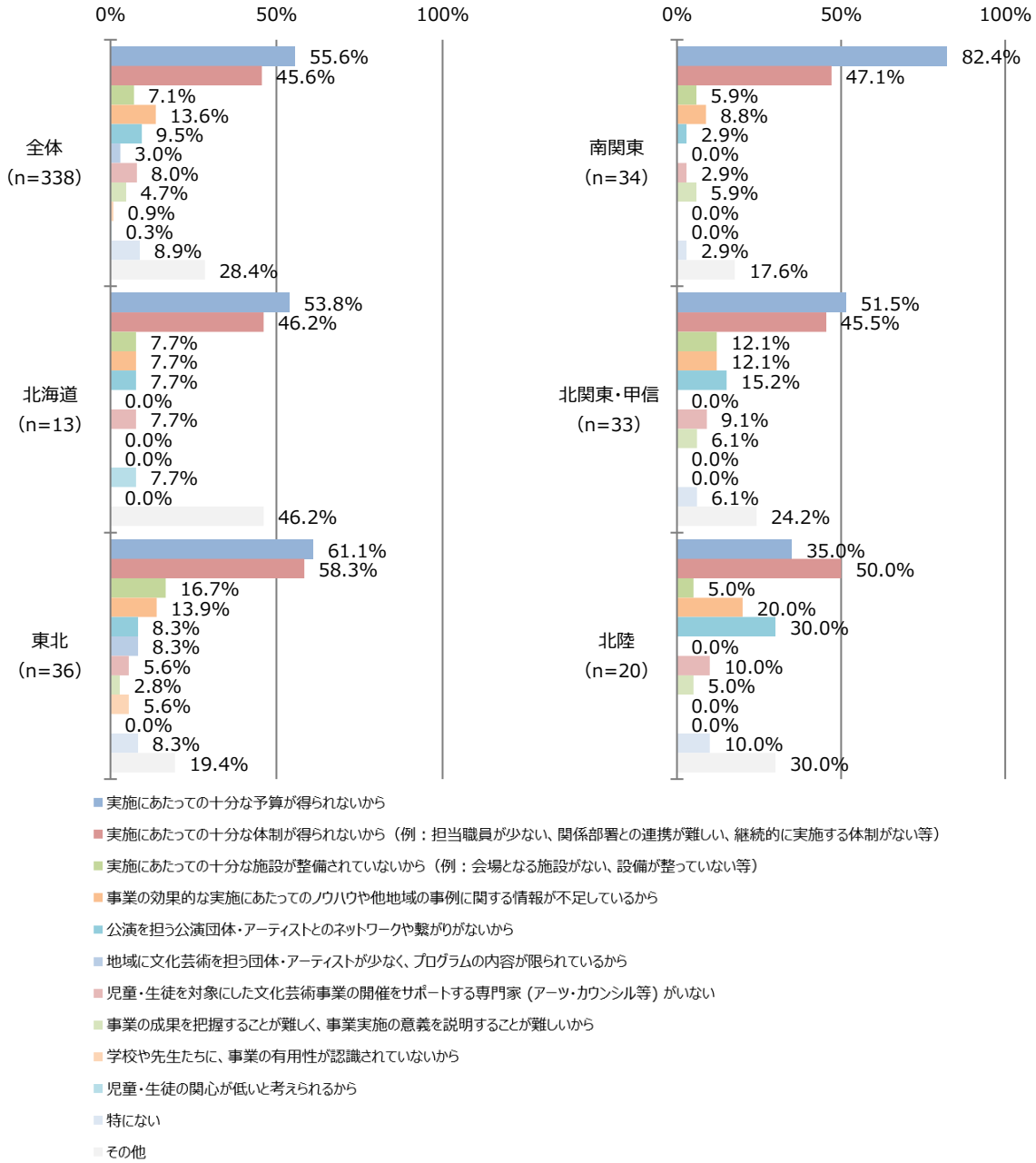
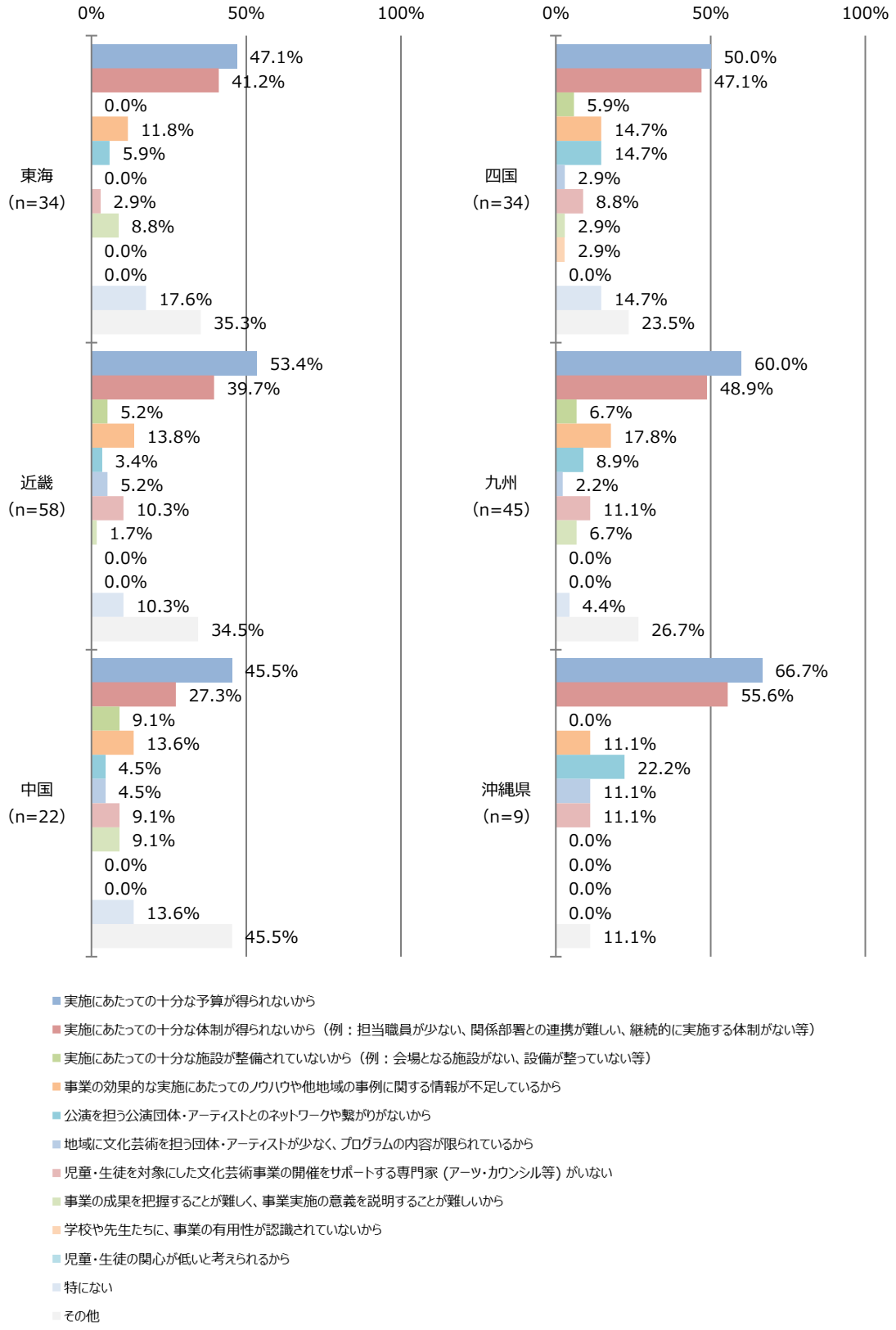


図 4-27-2　学校教育内での文化芸術活動を提供しなかった理由
広域ブロック別（複数回答／３つまで）



（３）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動の実績と評価

１）令和２年度～６年度の実施事業数

実施事業数については、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 1.1 個だったが、令和６年度は平均 2.3 個となっており、約２倍である。

図 4-28　令和２年度～６年度の実施事業数　平均（数値回答）

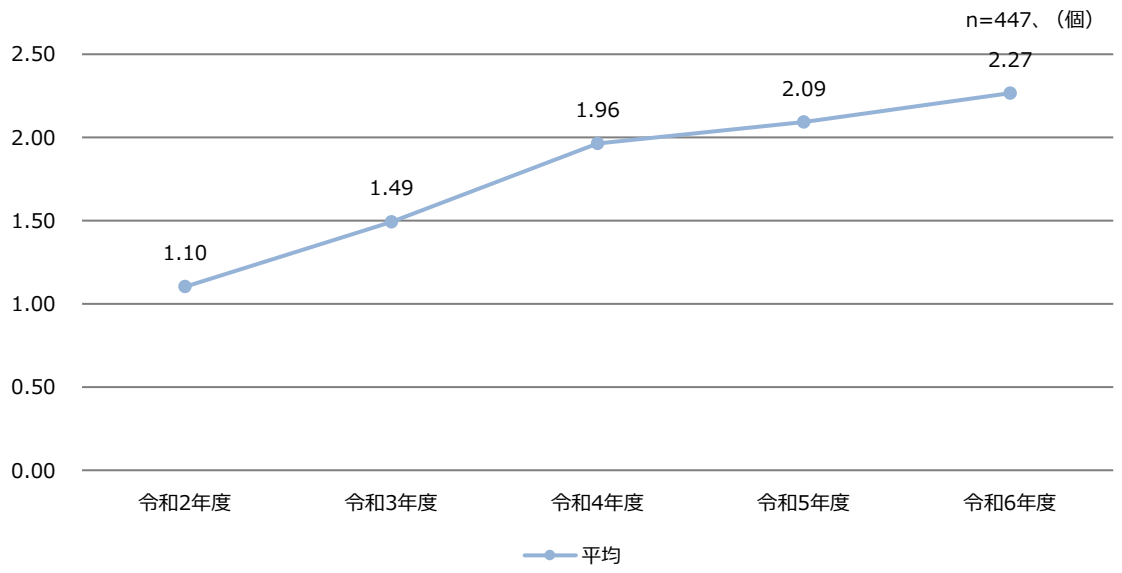


表 4-4　令和２年度～６年度の実施事業数（数値回答、n=447）

実施年度	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和 2 年度	493	1.10	0	80	0
令和 3 年度	667	1.49	0	91	1
令和 4 年度	878	1.96	0	87	1
令和 5 年度	935	2.09	0	79	1
令和 6 年度	1,013	2.27	0	122	1

２）令和２年度～６年度の参加した学校数

参加した学校数も同様に、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 3.7 校だったが、令和６年度は平均 12.4 校となっており、約 3.4 倍である。

図 4-29　令和２年度～６年度の参加した学校数　平均（数値回答）

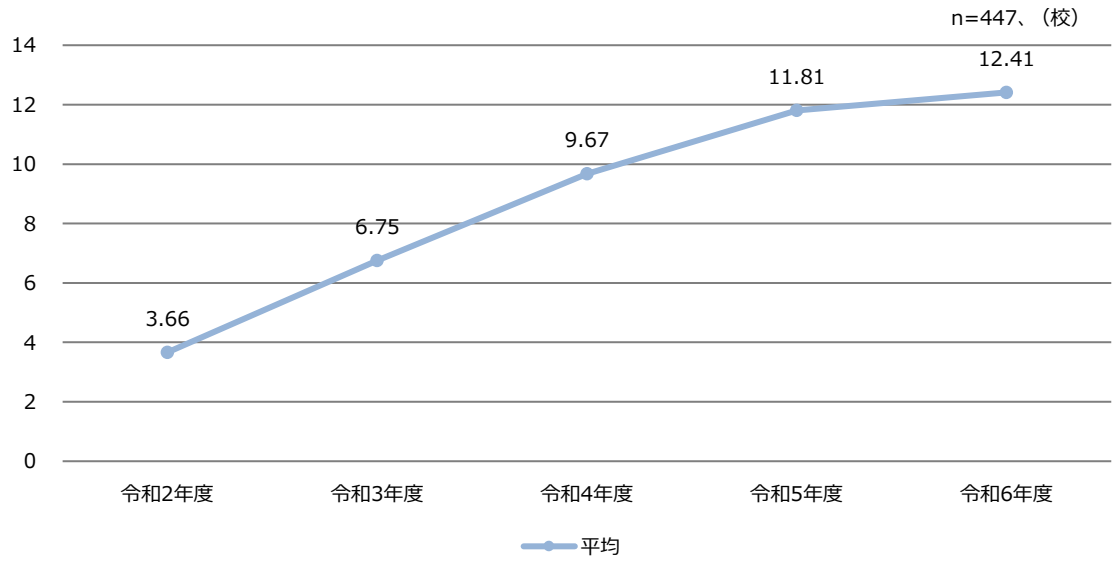


表 4-5　令和２年度～６年度の参加した学校数（数値回答、n=447）

実施年度	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和 2 年度	1,638	3.66	0	126	0
令和 3 年度	3,016	6.75	0	237	0
令和 4 年度	4,321	9.67	0	230	3
令和 5 年度	5,279	11.81	0	267	4
令和 6 年度	5,548	12.41	0	261	4

３）令和２年度～６年度の参加した児童・生徒の数

参加した児童・生徒の数も同様に、合計、平均ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 424 人だったが、令和６年度は平均 1,328 人となっており、約 3.2 倍である。

図 4-30　令和２年度～６年度の参加した児童・生徒の数　平均（数値回答）

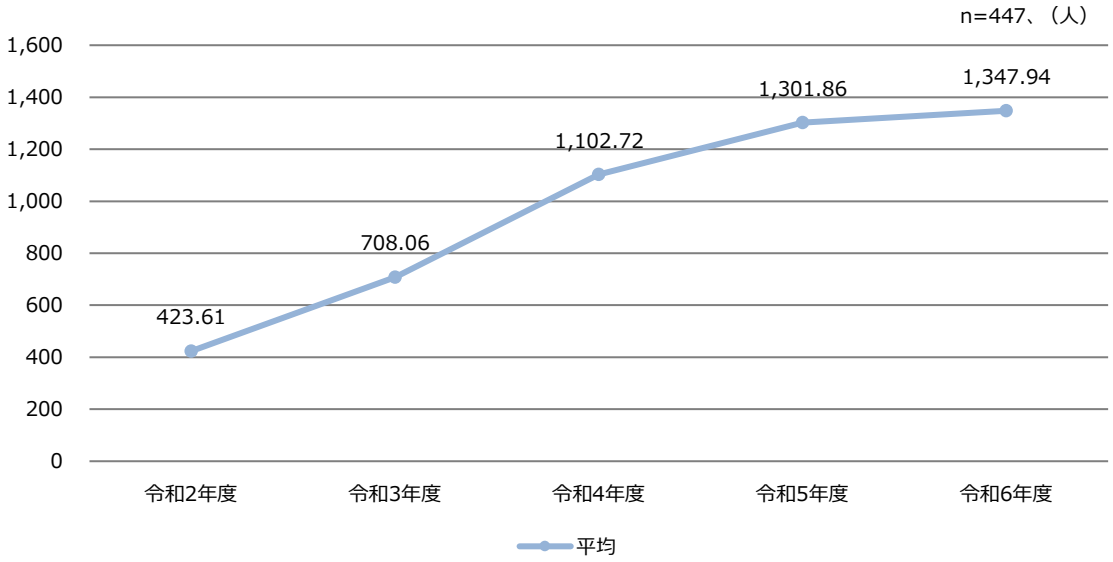


表 4-6　令和２年度～６年度の参加した児童・生徒の数（数値回答、n=447）

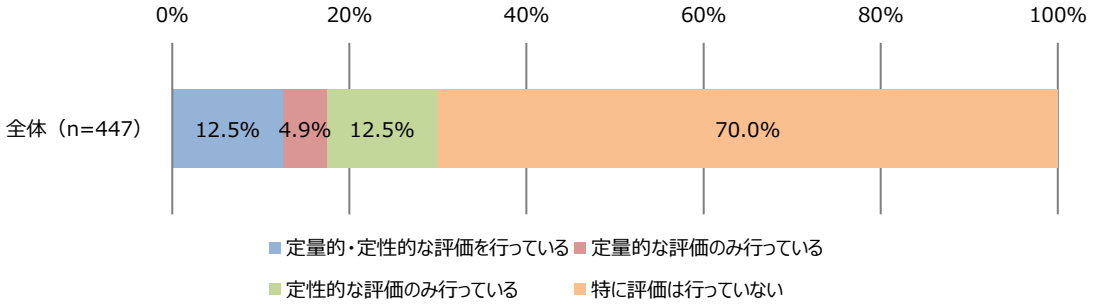
実施年度	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和 2 年度	189,352	423.61	0	17,402	0
令和 3 年度	316,501	708.06	0	17,397	0
令和 4 年度	492,917	1,102.72	0	31,202	200
令和 5 年度	581,932	1,301.86	0	31,214	357
令和 6 年度	602,527	1,347.94	0	22,024	350

４）学校教育内での文化芸術活動の評価の実施状況

①　全体

「特に評価は行っていない（70.0%）」が最も高く、次いで「定量的・定性的な評価を行っている」及び「定性的な評価のみ行っている」が同率で 12.5%、「定量的な評価のみ行っている」は 4.9%である。

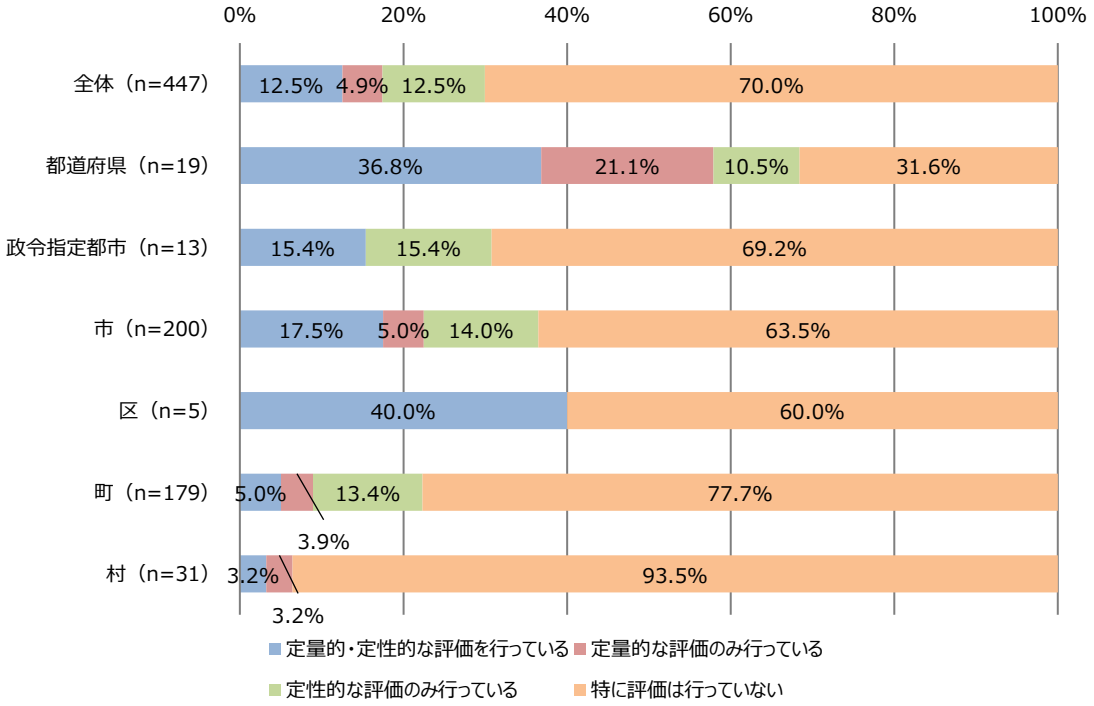
図 4-31　学校教育内での文化芸術活動の評価の実施状況（単一回答）



②　自治体種別

自治体種別でみると、「都道府県」では 68.4%が何らかの評価を実施している。一方、「村」については、90%以上が「特に評価は行っていない」である。

図 4-32　学校教育内での文化芸術活動の評価の実施状況　自治体種別（単一回答）

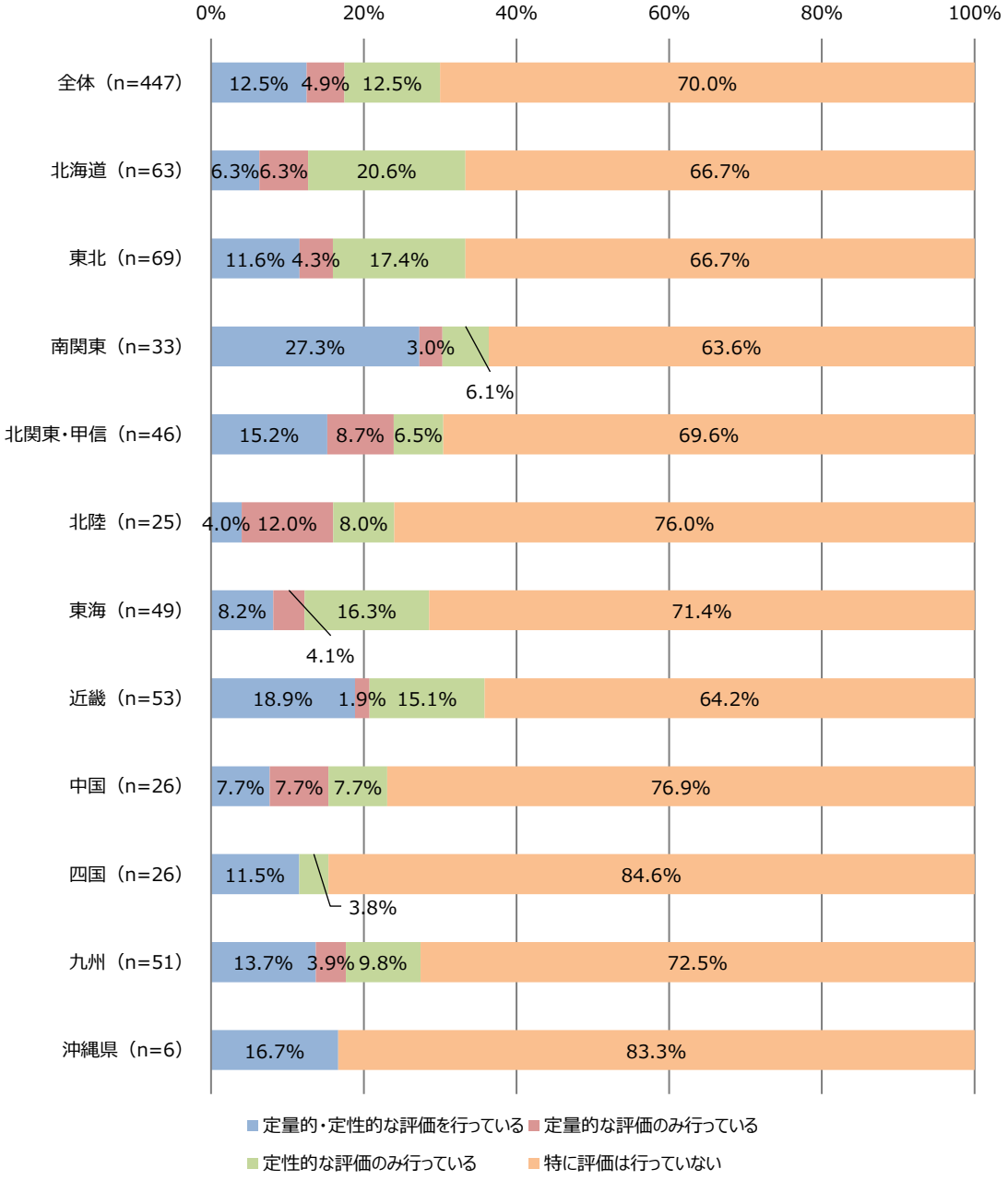


③　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、全体傾向と同様に全ブロックで「特に評価は行っていない」が最も高い。

「四国」、「沖縄」については、80%以上が「特に評価は行っていない」である。

図 4-33　学校教育内での文化芸術活動の評価の実施状況　広域ブロック別（単一回答）



５）学校教育内での文化芸術活動の具体的な評価指標

学校教育内での文化芸術活動の具体的な評価指標を把握するため、評価を行っている自治体に対し自由記述回答を求めたところ、以下のような回答が寄せられた。

自由記述のサマリー

■　参加者の満足度と理解度

児童・生徒や教職員、保護者といった参加者の「満足度」や「理解度」を測る指標が挙げられた。

- 事業参加者（児童・生徒、教職員、保護者、地域住民等）の事業に対する満足度や理解度。
- 推奨度を測るための NPS アンケート。
- 「今年の鑑賞は感動するものだったか（児童・生徒）」、「芸術鑑賞会にふさわしい物であったか（教員）」といった項目での評価。

■　実施規模と参加実績

開催回数や参加者数等、事業の広がりを客観的な数値で計上する項目が挙げられた。

- 事業者の公演回数、アーティストの派遣回数、及び参加校数。
- 児童・生徒、教員、保護者、地域住民等の延べ参加人数。
- 補助金の交付件数、開催された教室・授業の回数。
- コンサートの集客数や、出品者数、来場者数。

■　児童・生徒の反応と具体的な変容

単なる感想にとどまらず、鑑賞中・体験中の子供たちの様子や、その後の意欲の変化に注目する視点が挙げられた。

- 公演中や公演後の児童・生徒の反応、盛り上がり、鑑賞態度の変化。
- 文化芸術に対する学習意欲や、伝統文化に対する興味関心の高まり。
- 児童・生徒の普段とは違う一面を見ることができたか、という教員の気づき。
- 集中力の持続や、拍手・挙手といった自発的な行動、夢や希望、感謝の芽生え。
- 「パフォーマンス中の体験しようとする姿勢の変化」を、事業終了後に担当者間で確認し共有。

■　教育課程との関連と教員の学び

授業のねらいや期待に即しているか、教員にとって学びがあったかという観点で評価する視点が挙げられた。

- 授業のねらいと期待、難易度。
- 専門的な指導を受けることが、先生自身の学びや指導方法への活用につながったか。

・　講座で習った文化を、今後も継続して授業の中で取り上げていきたいかという意向。

■　事業の妥当性と次年度へのフィードバック

事業の妥当性や反省点・改善点を把握する指標が挙げられた。

・　事業の必要性、有効性、効率性。

・　社会情勢・住民ニーズの変化。

・　反省点・改善点。

６）評価を目的としたアンケートを実施している場合の対象及び結果

評価を目的としたアンケートを実施している場合の対象やその結果を把握するため、評価を行っている自治体に対し対象及び結果について自由記述回答を求めたところ、以下のような回答が寄せられた。

自由記述のサマリー

自由記述のサマリー評価を目的としたアンケートを実施している場合の対象

■　教員及び児童・生徒

教員と児童生徒の両方を対象とする回答が最も多く挙げられた。

・　先生、児童・生徒
・　教員、児童・生徒 等

■　先生・教職員

回答者の主体を先生や教職員に限定しているケースも挙げられた。

・　先生
・　教職員
・　学校代表

■　児童・生徒

事業の直接的な受益者である児童・生徒のみを対象に絞っているケースも挙げられた。

・　児童・生徒
・　参加児童・生徒

■　保護者、一般、地域住民を含む広域対象

学校関係者にとどまらず、保護者や地域住民、一般の来場者まで幅広く対象に含めているケースも挙げられた。

・　先生、保護者、地域の方、児童・生徒
・　一般、児童・生徒
・　先生、児童・生徒及び一般参加者
・　参加児童、一般・招待来場者

自由記述のサマリー

評価を目的としたアンケートを実施している場合の結果

■　高い満足度

多くの事業において、児童・生徒、教職員ともに 90%を超える極めて高い満足度が得られている。

・　令和６年度の調査では、鑑賞した児童の 99.0%が「良かった」と回答し、高い満足度を得られた。
・　80%以上文化芸術に対する学習意欲や関心が高まったと回答している。
・　内容が面白く、子供たちは興味を持って観ていた」「学年を超えて楽しめる内容で大満足だった」との声が多い。
・　どの学校も満足度の高い感想が多く、子供たちの心の醸成に本事業が効果的であると認知されている。
・　肯定的・好意的な評価を得ており、今後も継続してほしいとの要望が寄せられている。

■　「本物」に触れる体験の価値

メディアを通じた学習では得られない、生身の表現やプロの技術に触れることの重要性が強調されている。

・　メディアを通しての鑑賞とは大きく違い，その場の雰囲気や演奏者の表情や息遣いまでも肌で感じることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。
・　生の鑑賞でしか得られない体験があると好評、芸術を身近に感じるための貴重な機会である。
・　「普段聞くことのない楽器の音色を聴くことができて面白かった」、「異文化に対する関心が高まった」といった回答が見られた。
・　人形浄瑠璃等の歴史に触れ、郷土の文化を誇らしく思ったり、背景に関心を持ったりすることができた。
・

■　児童・生徒の変容と新たな一面の発見

事業を通じて、児童・生徒の積極性や自己肯定感が高まる等、具体的な行動変容が見られている。

・　普段は消極的な生徒が積極的に参加している姿が見られて驚いた。
・　称賛の言葉やたくさんの拍手をもらう体験により、児童の自己肯定感が高まったと感じる。
・　「対話型鑑賞」を通じて、表現力や思考力、他者への理解といった多角的な能力が育まれている。
・　講師の声かけが児童のやる気を引き出し、自ら動き、話し合い、活動する姿が多く見られた。
・

■　教員の学びと授業への活用

児童・生徒だけでなく、教員にとっても専門的な指導法を学ぶ研修の場として機能している。

・　専門的な指導を受けることは、子供たちだけでなく教員にとっても非常に勉強になった。
・　普段は型にはまった授業が多い中、自由な発想で「どれも正解」と思える活動ができた。
・　指導者として、今後の教科指導への生かし方や教育活動の広がりを感じることができた。
・　芸術家の指導が教員の気づきにつながった。
・

■　次年度に向けた改善要望とニーズの把握

実施時期や対象学年、演目のジャンル設定等、学校現場の実情に合わせた具体的な要望も挙げられている。

・　低学年には理解が難しかった、あるいは集中力が持続しなかった等の意見を、次回のプログラム改善に活かしている。
・　サイエンス等新しい分野の公演を取り入れたことが、学校側からの一定の評価につながった。
・　中学校では部活動等で実施が難しくなっている点が挙げられた。
・　次年度希望する公演の調査結果も得られた。

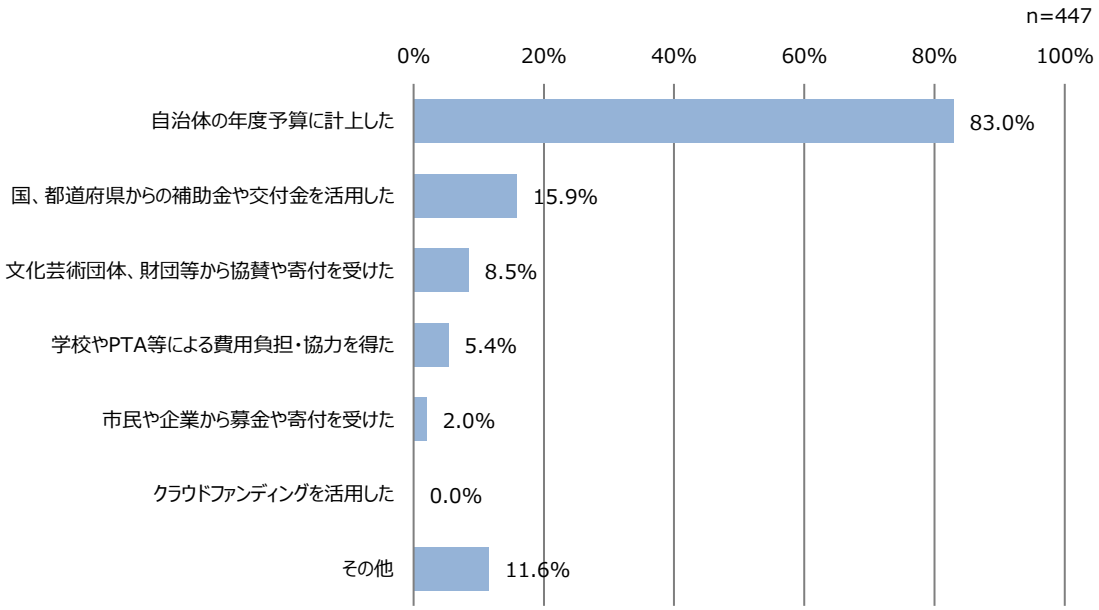
（４）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動にかかる資金

１）学校教育内での文化芸術活動の予算確保の方法

①　全体

「自治体の年度予算に計上した（83.0%）」が最も高く、次いで「国、都道府県からの補助金や交付金を活用した（15.9%）」、「文化芸術団体、財団等から協賛や寄付を受けた（8.5%）」である。「クラウドファンディングの活用」については、０%である。

図 4-34　学校教育内での文化芸術活動の予算確保方法（複数回答／3 つまで）

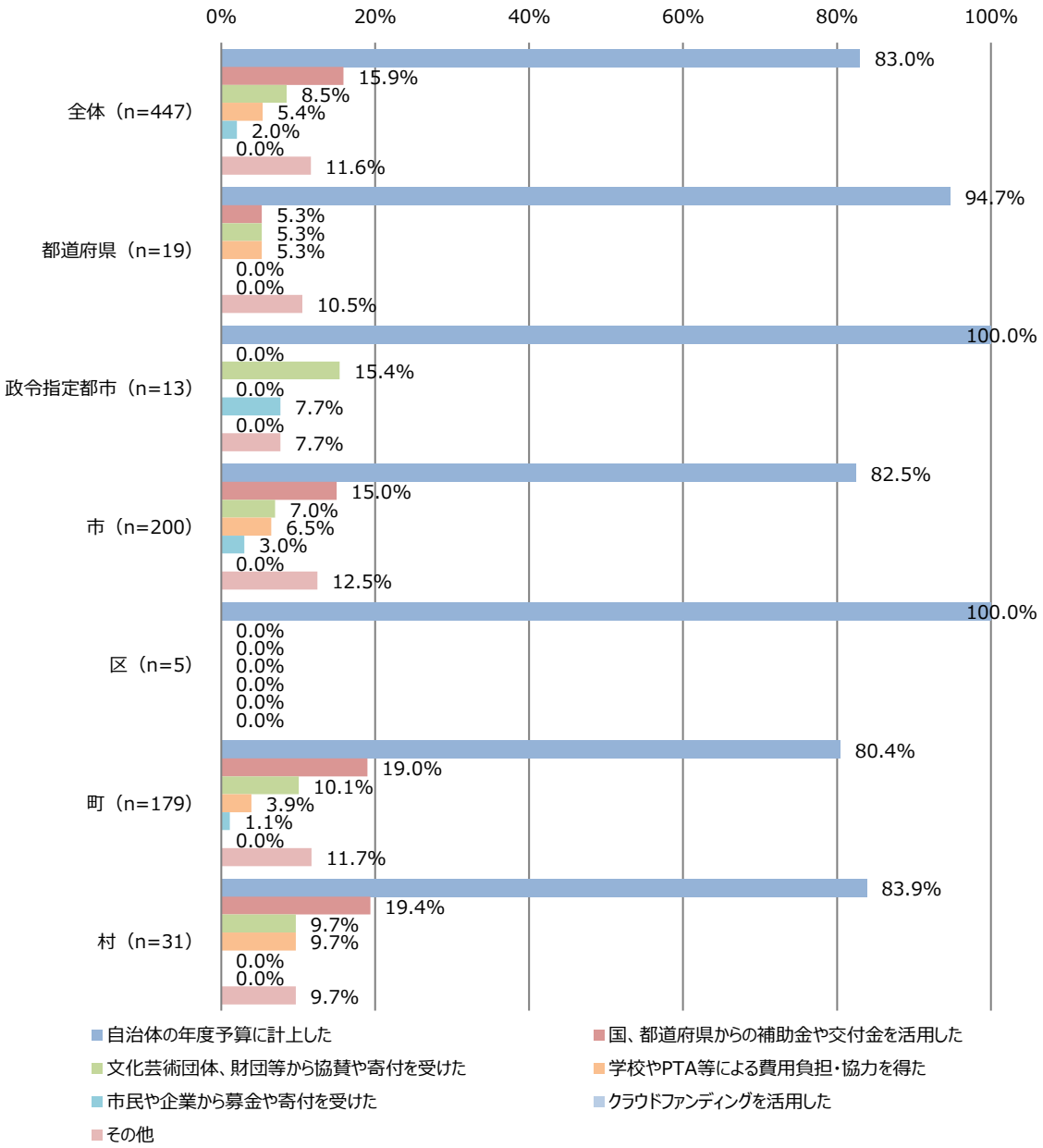


②　自治体種別

自治体種別でみると、全体傾向と同様、全ての自治体で「自治体の年度予算に計上した」が最も高い。

割合として少ないものの「都道府県」、「市」、「村」では、「学校やPTA等による費用負担・協力を得た」が５％以上、「政令指定都市」では、「市民や企業から募金や寄付を受けた」が５％以上である。

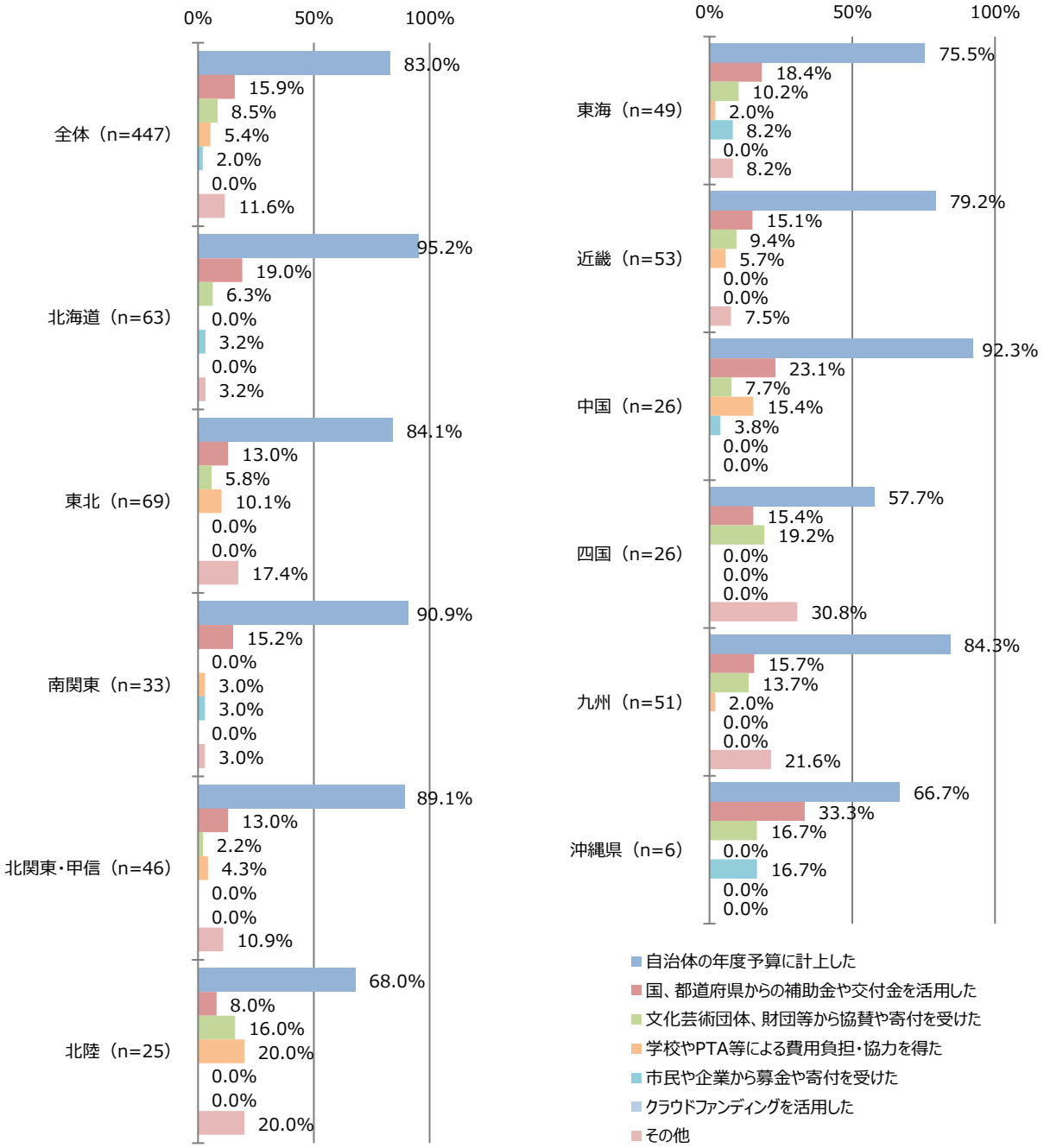
図 4-35　学校教育内での文化芸術活動の予算確保方法　自治体種別（複数回答／3 つまで）



③　広域ブロック別

全体傾向と同様、全てのブロックで「自治体の年度予算に計上した」が最も高い。割合として少ないものの「東北」、「北陸」、中国」では、「学校や PTA 等による費用負担・協力を得た」が 10%以上、「沖縄」では、「市民や企業から募金や寄付を受けた」15%以上である。

図 4-36　学校教育内での文化芸術活動の予算確保方法
広域ブロック別（複数回答／3 つまで）



２）令和２年度～６年度の実施予算額

①　全体

合計額、平均額ともに、上昇傾向にある。令和２年度は、平均 130 万円だったが、令和６年度は平均 250 万円と、約 1.9 倍である。

図 4-37　令和２年度～６年度の予算額　平均（数値回答）

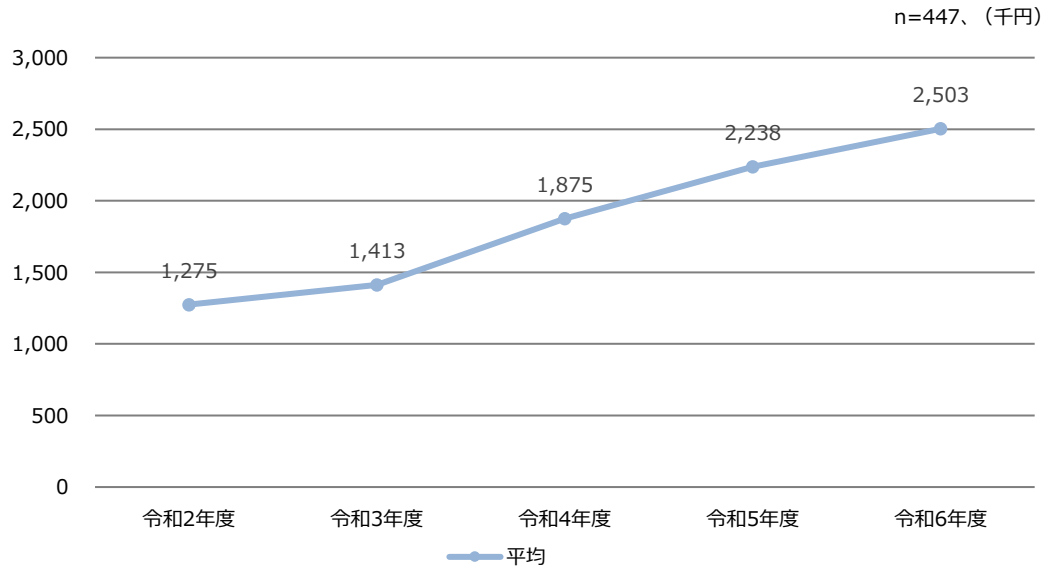


表 4-7　令和２年度～６年度の予算額（数値回答、n=447）

（千円）

	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和２年度	569,819	1,275	0	49,821	0
令和３年度	631,796	1,413	0	50,300	30
令和４年度	838,103	1,875	0	54,100	396
令和５年度	1,000,174	2,238	0	48,344	500
令和６年度	1,118,874	2,503	0	68,937	600

② 自治体種別

自治体種別でみると、令和２年度と６年度を比較して予算額が減った自治体はない。「区」の伸び率が最も高く、約 10.5 倍である。

図 4-38　令和２年度～６年度の実施予算額　平均　自治体種別（数値回答）

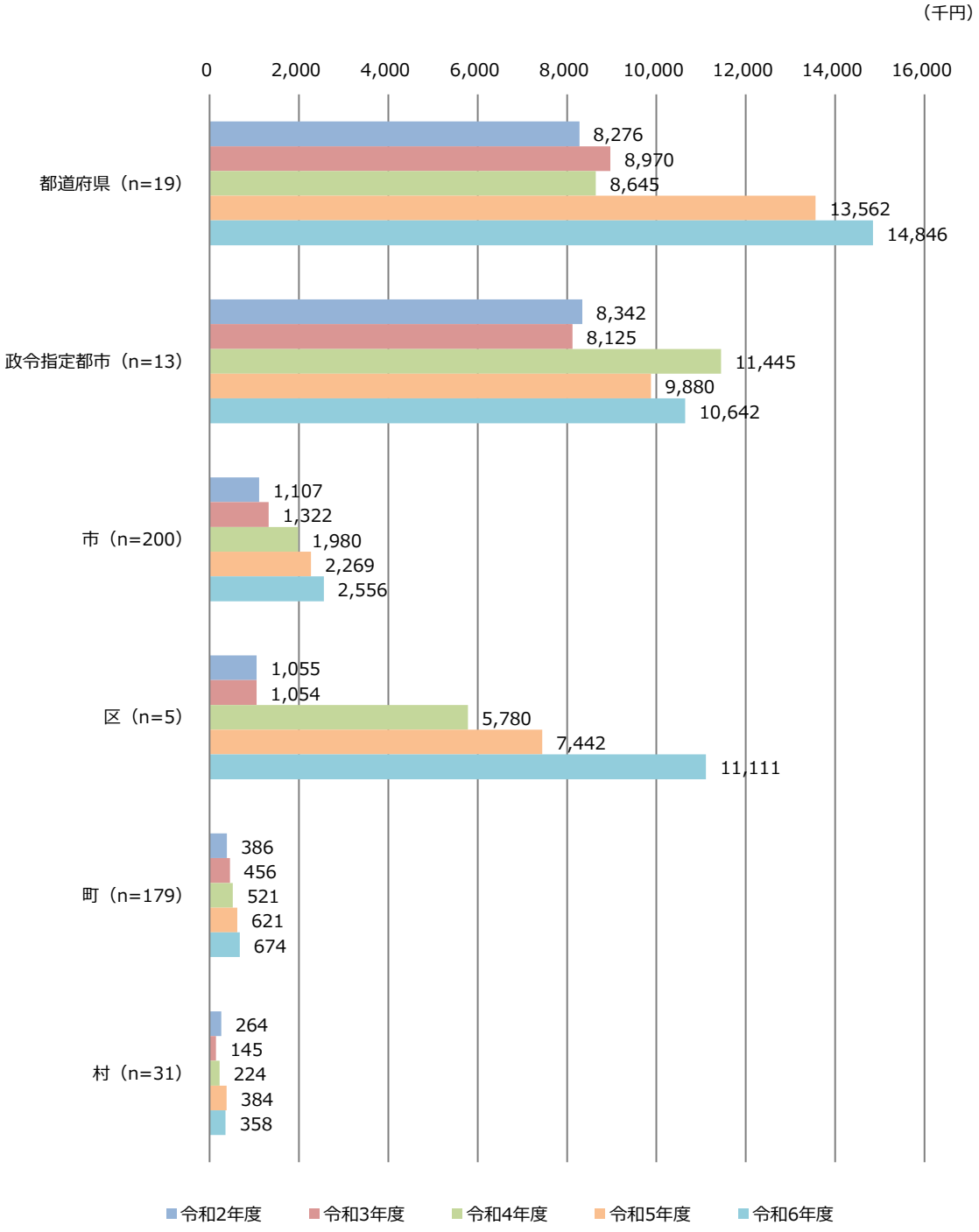


表 4-8　令和２年度～６年度の実施予算額　自治体種別

（千円）

年度	自治体種別	n 数	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和２年度	都道府県	19	157,251	8,276	0	49,821	2,487
	政令指定都市	13	108,448	8,342	0	42,522	500
	市	200	221,500	1,107	0	15,477	0
	区	5	5,273	1,055	0	4,708	0
	町	179	69,159	386	0	17,805	0
	村	31	8,189	264	0	1,877	0
令和３年度	都道府県	19	170,431	8,970	0	50,300	3,750
	政令指定都市	13	105,629	8,125	0	41,200	330
	市	200	264,418	1,322	0	24,871	0
	区	5	5,272	1,054	0	4,707	0
	町	179	81,543	456	0	17,805	0
	村	31	4,503	145	0	752	0
令和４年度	都道府県	19	164,247	8,645	0	47,996	5,391
	政令指定都市	13	148,786	11,445	0	54,100	1,055
	市	200	395,922	1,980	0	39,407	575
	区	5	28,898	5,780	0	18,171	4,707
	町	179	93,301	521	0	18,305	300
	村	31	6,949	224	0	737	150
令和５年度	都道府県	19	257,675	13,562	0	48,344	7,000
	政令指定都市	13	128,443	9,880	0	38,268	1,058
	市	200	453,842	2,269	0	32,354	990
	区	5	37,212	7,442	476	17,779	4,707
	町	179	111,112	621	0	16,605	319
	村	31	11,891	384	0	3,050	150
令和６年度	都道府県	19	282,080	14,846	0	68,937	6,952
	政令指定都市	13	138,349	10,642	0	41,486	1,850
	市	200	511,193	2,556	0	50,000	1,163
	区	5	55,557	11,111	512	21,896	9,195
	町	179	120,582	674	0	16,605	340
	村	31	11,113	358	0	2,927	237

③　広域ブロック別

広域ブロック別にみると、令和２年度と６年度を比較して、「北陸」のみ予算額が減っている。「四国」の伸び率が最も高く、約 9.6 倍である。

図 4-39　令和２年度～６年度の実施予算額　平均　広域ブロック別（数値回答）

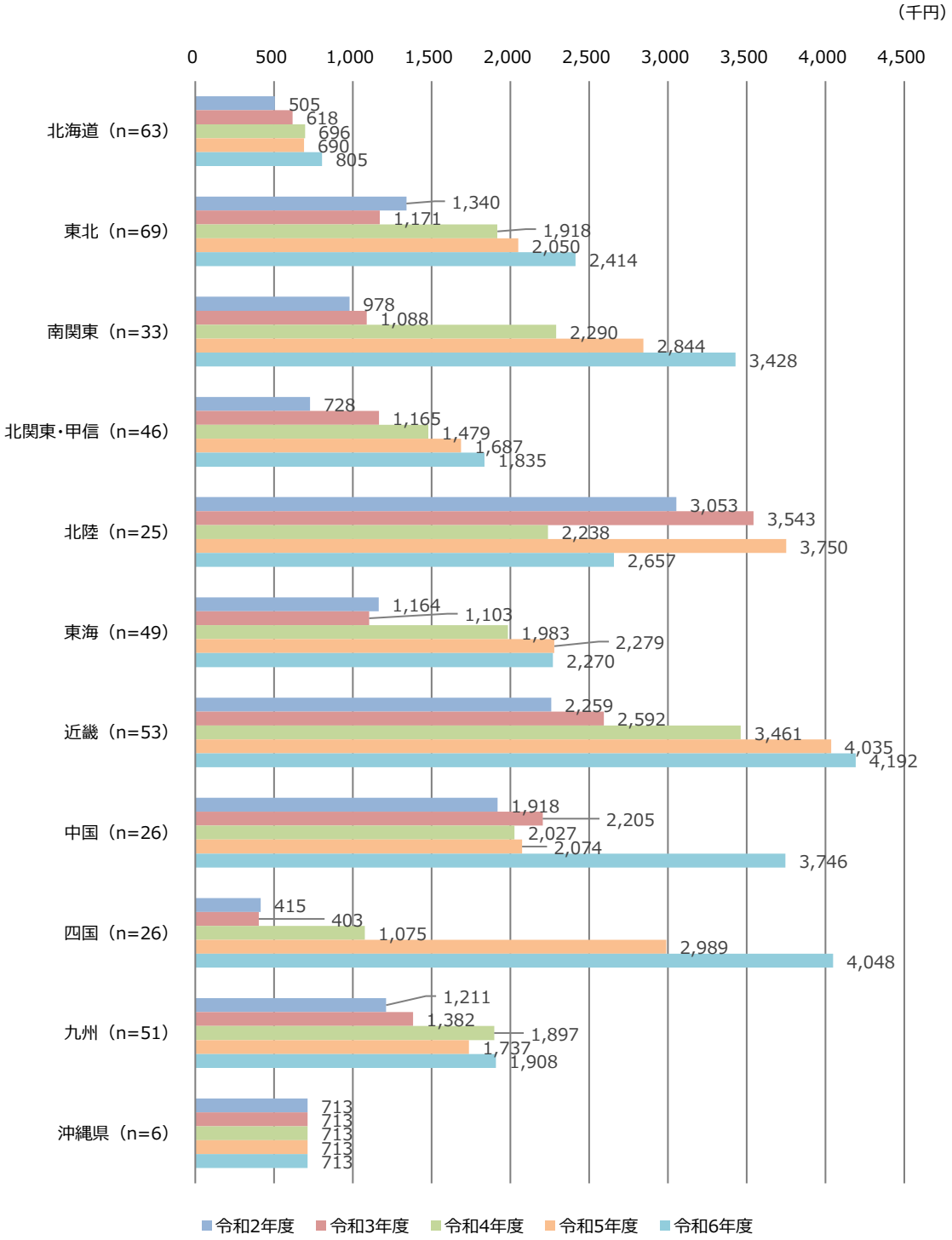


表 4-9　令和２年度～６年度の実施予算額　広域ブロック別

（千円）

年度	エリア	n 数	合計	平均	最小値	最大値	中央値
令和２年度	北海道	63	31,807	505	0	3,755	400
	東北	69	92,459	1,340	0	42,522	0
	南関東	33	32,288	978	0	7,511	0
	北関東･甲信	46	33,491	728	0	8,090	0
	北陸	25	76,317	3,053	0	49,821	0
	東海	49	57,012	1,164	0	17,805	0
	近畿	53	119,726	2,259	0	41,200	0
	中国	26	49,875	1,918	0	9,000	550
	四国	26	10,793	415	0	3,500	0
	九州	51	61,776	1,211	0	15,477	0
	沖縄県	6	4,275	713	0	4,000	0
令和３年度	北海道	63	38,916	618	0	4,257	450
	東北	69	80,776	1,171	0	40,120	0
	南関東	33	35,901	1,088	0	7,752	330
	北関東･甲信	46	53,602	1,165	0	9,863	0
	北陸	25	88,567	3,543	0	50,300	0
	東海	49	54,066	1,103	0	17,805	0
	近畿	53	137,398	2,592	0	41,606	86
	中国	26	57,330	2,205	0	8,400	721
	四国	26	10,471	403	0	3,750	0
	九州	51	70,495	1,382	0	24,871	0
	沖縄県	6	4,275	713	0	4,000	0
令和４年度	北海道	63	43,877	696	0	4,367	500
	東北	69	132,318	1,918	0	37,849	297
	南関東	33	75,577	2,290	0	18,171	650
	北関東･甲信	46	68,046	1,479	0	10,139	473
	北陸	25	55,954	2,238	0	13,437	0
	東海	49	97,190	1,983	0	20,315	260
	近畿	53	183,459	3,461	0	54,100	396
	中国	26	52,693	2,027	0	7,235	1,067
	四国	26	27,956	1,075	0	6,400	0
	九州	51	96,758	1,897	0	39,407	185
	沖縄県	6	4,275	713	0	4,000	0
令和５年度	北海道	63	43,474	690	0	3,922	500
	東北	69	141,449	2,050	0	38,268	403
	南関東	33	93,862	2,844	0	17,779	988
	北関東･甲信	46	77,601	1,687	0	11,952	509
	北陸	25	93,743	3,750	0	41,338	572
	東海	49	111,681	2,279	0	20,315	500
	近畿	53	213,871	4,035	0	48,344	400
	中国	26	53,925	2,074	0	7,235	1,148
	四国	26	77,709	2,989	0	40,173	0
	九州	51	88,585	1,737	0	20,025	350
	沖縄県	6	4,275	713	0	4,000	0
令和６年度	北海道	63	50,721	805	0	4,505	500
	東北	69	166,532	2,414	0	44,685	440
	南関東	33	113,129	3,428	0	21,896	1,065
	北関東･甲信	46	84,420	1,835	0	12,532	780
	北陸	25	66,431	2,657	0	12,835	508
	東海	49	111,232	2,270	0	22,267	550
	近畿	53	222,185	4,192	0	56,726	600

年度	エリア	n 数	合計	平均	最小値	最大値	中央値
	中国	26	97,396	3,746	0	50,000	911
	四国	26	105,249	4,048	0	68,937	0
	九州	51	97,304	1,908	0	14,300	655
	沖縄県	6	4,275	713	0	4,000	0

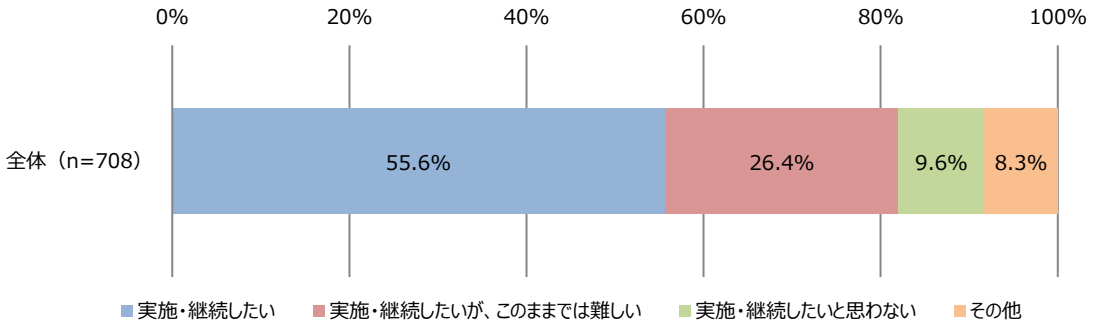
（５）自治体独自で行っている学校教育内での文化芸術活動に関する意向と課題

１）今後児童・生徒を対象とした学校教育内での文化芸術活動を実施、継続したいか

①　全体

「実施・継続したい（55.6%）」と最も高く、次いで「実施・継続したいが、このままでは難しい（26.4%）」、「実施・継続したいと思わない（9.6%）」である。

図 4-40　今後の学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向（単一回答）

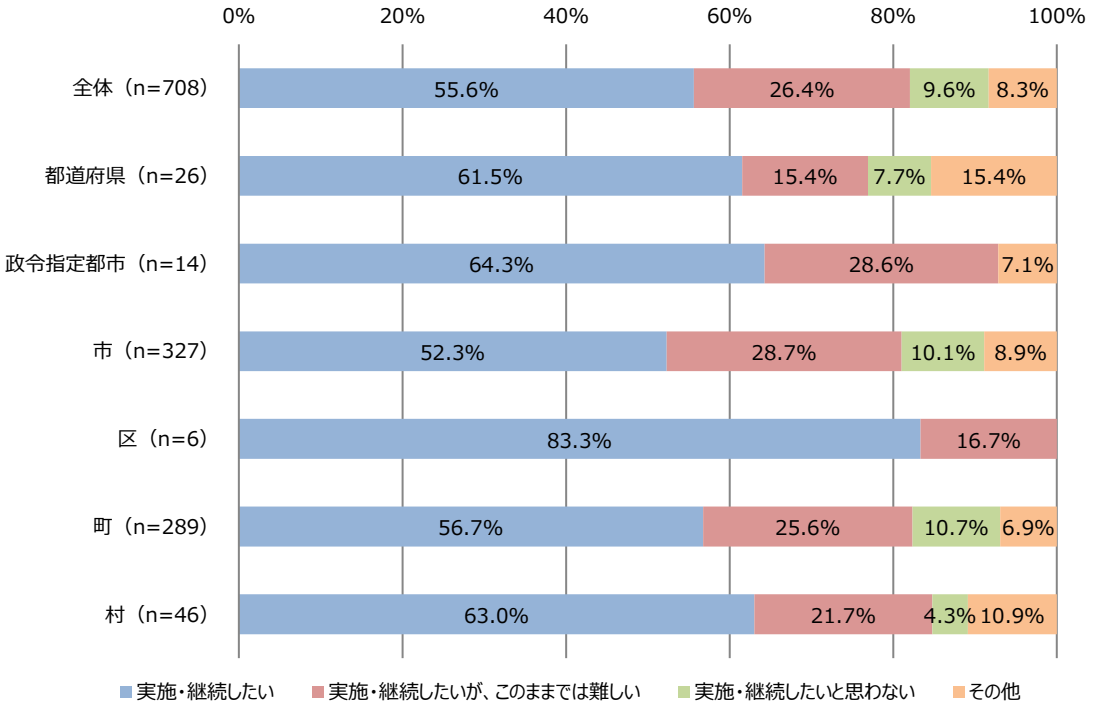


② 自治体種別

自治体種別でみると、全ての種別で「実施・継続したい」が 50%以上である。

全体と比較し、「実施・継続したいが、このままでは難しい」の割合が相対的に高いのは、「政令指定都市」と「市」である。

図 4-41　今後の学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向　自治体種別（単一回答）



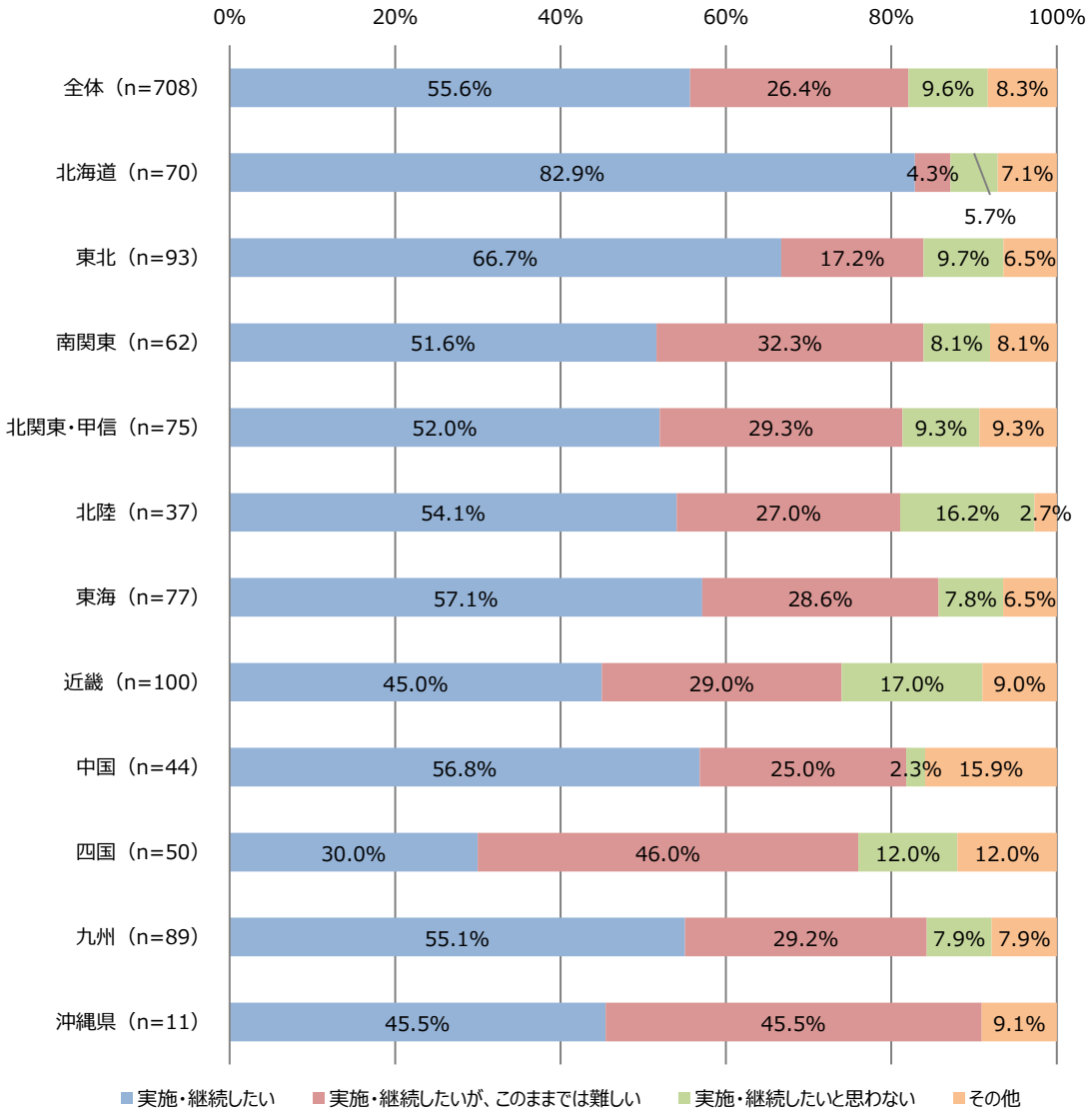
③　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、「四国」のみ、「実施・継続したいが、このままでは難しい」が「実施・継続したい」を上回っている。

「沖縄」は、「実施・継続したい」と「実施・継続したいが、このままでは難しい」が同率である。

「北陸」、「近畿」については、「実施・継続したいと思わない」が 15%を超えている。

図 4-42　今後の学校教育内での文化芸術活動の実施・継続意向　広域ブロック別（単一回答）



（６）文化庁への期待・要望

１）児童・生徒への学校教育内での文化芸術活動における課題や検討事項

児童・生徒への学校教育内での文化芸術活動の提供における課題や検討事項について把握するため自由記述回答を求めたところ、以下のような回答が寄せられた。

自由記述のサマリー

■　財政状況の悪化と予算確保の困難さ

物価高騰や人件費の上昇により、単独予算での事業継続が限界に達している現状が浮き彫りになっている。

- 自治体全体の予算が縮小する中で、新たな課題もあり、事業の精選・重点化が必要となっている。
- 人件費、輸送費の値上がり、物価高等により、委託料の予算確保が難しい。
- 予算確保が難しく、今後さらに予算が減らされれば、事業の質を落とすしかない状況にある。
- 深刻な財政危機により基金が減少しており、新規事業や一部の継続事業の予算化が難しい。

■　離島・地方特有の地理的要因と高騰する経費

離島や山間部等の地方自治体では、アーティストを招聘するための旅費・宿泊費や移動コストが大きな負担となっている。

- 離島のため船の欠航リスクや宿泊施設の不足がある。
- 学校から会場までの移動のための予算（バス代等）がない。
- 遠方の著名なアーティストを呼びたくても旅費・宿泊費の関係で、近隣の限られた選択肢に偏ってしまう。
- 招聘する団体等も経費が増大していることに加え、北海道は交通費等の経費が本州自治体よりもかかるため財源の確保が厳しい。
-

■　学校現場の多忙化と教育課程の過密

働き方改革による教職員の負担軽減や、ICT 学習等の新規課題による「オーバーカリキュラム」が、文化芸術の時間を確保する上での大きな壁となっている。

- 各学校は、通常の学習指導を着実に進めており、学校教育内での文化芸術活動にあてる時間の余裕はない。
- 学校行事の精選や教育課程のスリム化が進む中で、学校に負担感のない提案を行う必要がある。
- 教職員の業務改善を目指す中、外部団体との細かな調整や煩雑な申請書類の作成が

課題である。

・　学校によって先生の意欲に差があり、熱心な先生がいない学校では機会が失われる懸念がある。

■　事業運営のノウハウ不足と担い手の高齢化

自治体職員の専門知識不足や、地域で伝統文化を支える指導者の高齢化等、ソフト面での維持が困難になっている。

・　事務担当職員の文化芸術に関する知識が足りず、児童生徒及び教諭のニーズに合致しているか疑問がある。

・　伝統文化の担い手の高齢化により講師数が減少し、事業の継続が困難になってきている。

・　事業の実施にあたっての組織づくりや運営方法に関する情報が不足しており、推進に至らない。

・　団体のマンパワー不足により、学校からの多くの要望に対応しきれない状況にある。

■　施設・設備の老朽化とハード面の課題

文化ホールの老朽化や閉鎖、あるいは音響設備が整った適切な会場が町内に存在しない等、鑑賞環境の不備が機会の減少に影響している。

・　芸術鑑賞に適した施設がなく、学校の体育館や福祉施設のホール等で実施している。

・　既存の文化会館が老朽化のため使用できなくなり、会場確保に課題がある。

・　閉館や改修工事のための休館で、市内のホールで文化芸術鑑賞を実施することが難しい。

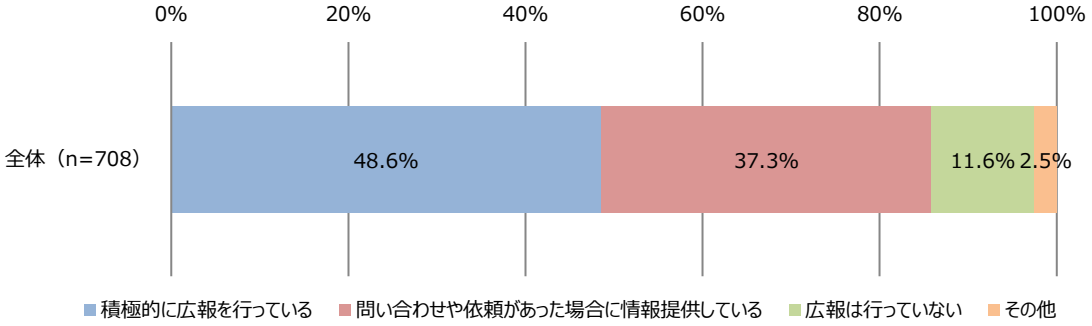
・　文化施設まで徒歩で来場可能な学校の選定が難しい。

２）巡回公演の広報の実施状況

①　全体

「積極的に広報を行っている（48.6%）」が最も高く、次いで「問い合わせや依頼があった場合に情報提供している（37.3%）」、「広報は行っていない（11.6%）」である。

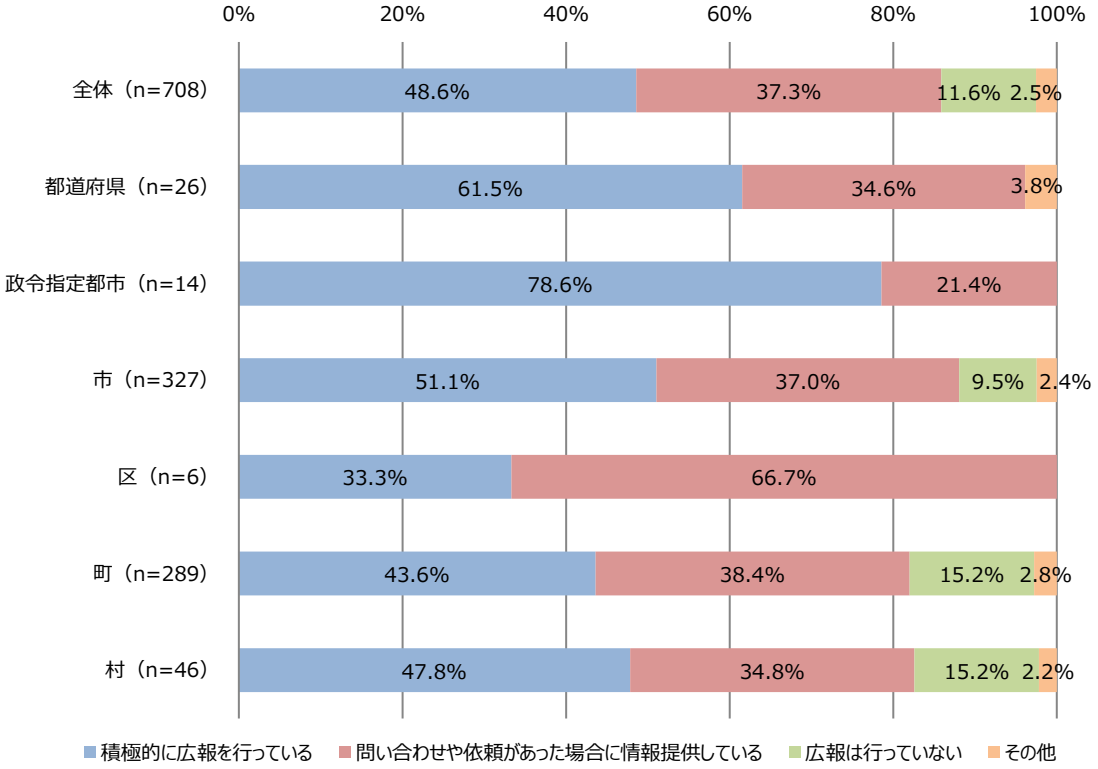
図 4-43　巡回公演の広報の実施状況（単一回答）



② 自治体種別

自治体種別でみると、「区」のみ「問い合わせや依頼があった場合に情報提供している」が最も高く、「積極的に広報を行っている」が２番目に高くなっている。「町」、「村」については、「広報は行っていない」が 15%を超えている。

図 4-44　巡回公演の広報の実施状況　自治体種別（単一回答）

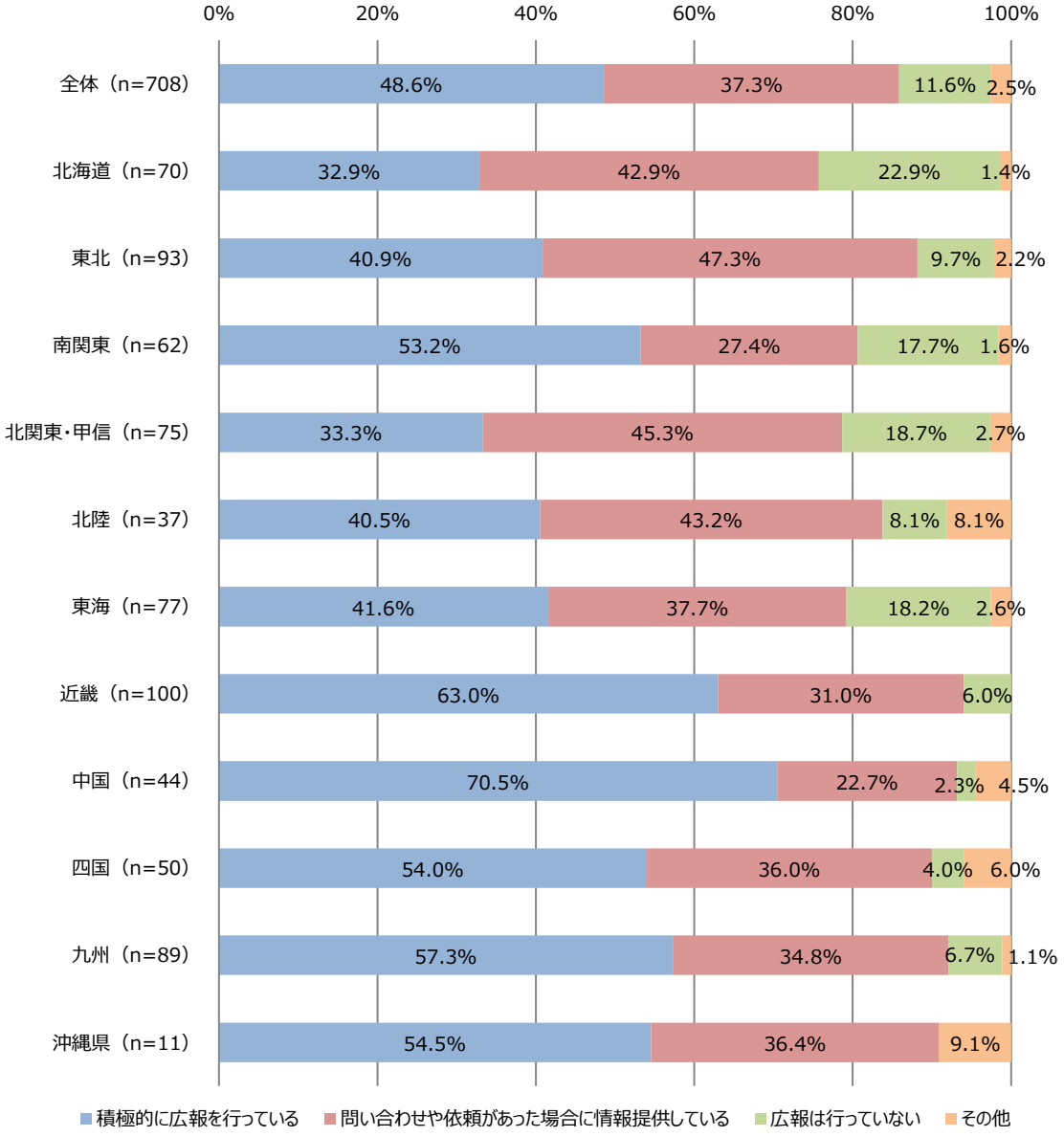


③　広域ブロック別

広域ブロック別でみると、「北海道」、「東北」、「北関東・甲信」、「北陸」については、「問い合わせや依頼があった場合に情報提供している」が最も高く、「積極的に広報を行っている」が２番目に高くなっている。

「北海道」、「南関東」、「北関東・甲信」、「東海」については、「広報は行っていない」が15%を超えており、中でも「北海道」は 20%を超えている。

図 4-45　巡回公演の広報の実施状況　広域ブロック別（単一回答）



３）文化庁に対する要望や期待

文化庁に対する要望や期待を把握するため自由記述回答を求めたところ、以下のような回答が寄せられた。

自由記述のサマリー

■　財政的支援の継続と補助制度の拡充

自治体単独での予算確保が難しくなってきていることから、国による財政措置の継続・拡充を求める声が多数を占めている。

- 地方自治体では予算・体制ともに限界があるため、国庫補助金による財政的な下支えを強く希望する。
- 全国一律の補助率ではなく、地域性も基準に盛り込んでいただきたい。
- 会場費や出演料等、すべて補助していただき、かつ、市の立替なく直接支払っていただける補助金事業があれば、積極的に活用したい。
- 少額の補助であっても、児童数の少ない小規模自治体が活用しやすい補助制度があるとよいと考えます。
-

■　採択基準の緩和・採択枠の拡充と地域格差の是正

採択基準の緩和や採択枠の拡充を求める声に加え、地域間の機会格差の是正に向けた支援強化を求める意見が挙がっている。

- 「直近２年間の採択校は不可」といった制限を緩和し、継続的に申請できる仕組みにしてほしい。
- 都市部から離れた町では芸術に触れる機会が少なく、継続的に子供たちへ機会を提供したいと考えているため、連続して申請できるようにしてほしい。
- 児童・生徒が本物の文化芸術に触れる機会を確保するため、巡回公演における採択枠の拡充をしてほしい。
- 小規模の自治体や地方の自治体では実施が難しい、著名なアーティストや団体による質の高い巡回プロググラムを提供してほしい。
- 離島等への支援も強化を図っていただきたい。
-

■　事務手続きの簡素化とスケジュール調整の改善

申請等の事務負担や、学校現場の年間計画と募集時期のずれが、活用のハードルとなっている。

- 学校申請システムに切り替わって以降、教育委員会側から申請できないため、学校側の操作負担や授業時数の確保等の要因により、実施に至っていない実情がある。
- 報告書やアンケート等、実施後の事務負担を軽減してほしい。
- 文化庁の事業募集および採択内定の時期と、学校の次年度に向けた年間計画の編成

時期が一致していないため、採択内定時期を考慮してほしい。

・

■　**専門的な情報提供とアーティストの紹介**

ニーズに適した公演団体の紹介や、具体的な情報や事例の提供を求めるニーズが高まっている。

・　予算に見合う優良な公演団体等の情報を提供してほしい。

・　バラエティに富んだ講師を紹介してほしい。

・　メニューがいくつもあり、申請時期も違うため、学校も行政担当も違いがわかりにくい。

・　同じ人口規模の他市区町村で実施した事例（事業内容、予算規模、参加人数等）等を共有してほしい。

第５章　事例ヒアリング調査

１．実施概要

（１）実施目的

令和５年度巡回公演または令和６年度巡回公演参加校について、教員に対して事例ヒアリング調査を実施した。公演団体と学校との連携や、教科との接続における創意工夫、事業により得られた成果、今後の接続的な発展に向けた課題等を把握し、巡回公演の更なる発展に向けた論点を抽出することを目的とする。

（２）調査方法

１）調査手法・調査対象

実施にあたっては、令和５年度巡回公演または令和６年度巡回公演参加校を対象とし、学校向けアンケートの回答結果をふまえて調査対象 10 校を抽出し実施した。

調査はオンライン会議によるヒアリング調査で実施した。

２）調査項目

以下の８つの項目を共通の調査項目として設定し、半構造化形式[17]でヒアリング調査を実施した。

図表 5-1　調査項目一覧

１．実施した公演の概要
２．申請のきっかけや目的（ねらい）
３．公演の効果・成果
４．実施に向けた事前準備における工夫
５．実施プロセスにおける課題と乗り越え方
６．実施に向けた学習面での工夫
７．本事業に期待することや要望
８．本事業の周知方法に関するご意見

[17] 半構造化インタビューとは、あらかじめ定めた質問項目を定めておき、回答内容に応じてその回答内容を掘り下げていく調査方法を指す。

２．調査結果のサマリー

本ヒアリングでは、巡回公演を活用した学校における文化芸術活動の効果や実施方法、課題等について把握した。以下に結果のサマリーを記載する。

１）文化芸術活動による教育効果

ヒアリングから、文化芸術活動を通じて児童・生徒の興味関心や意欲の変化が見られる事例が報告された。舞台参加やワークショップ等の体験を通じて、児童・生徒が主体的に表現活動に取り組む様子や、新たな活動に挑戦する姿が見られたほか、出演者の仕事や生き方に触れることが将来の進路や職業を考えるきっかけとなった事例も確認された。

２）教科学習との関連

今回ヒアリングした対象校の大半が、巡回公演を単独の行事として実施するのではなく、教科や学習活動と関連付けて実施していた。国語の教材として扱う狂言や落語等の内容と関連付けて鑑賞を行う事例や、図画工作、体育、音楽等の授業と関連付けて実施する事例が見られた。また、事前に映像資料を用いた説明を行う等、事前学習を実施している学校も確認された。

３）実施方法の工夫

ヒアリングから、学校の状況に応じて実施方法を工夫している事例が確認された。具体的には、同一校で複数年にわたり継続的に事業を活用している事例や、近隣の学校と合同で公演を実施している事例、学校公開日と合わせて公演を実施している事例等が見られた。また、こうした取組を通じて、学校行事や教育活動の中に公演を位置付けて実施している事例も確認された。

４）実施にあたっての課題

ヒアリングでは、申請書類や実施報告書の作成等の事務負担が課題として挙げられたほか、申請手続きや提出書類の項目が多く、担当教員の負担が大きいとの意見が見られた。また、公演内容や準備事項について事前に把握しにくい場合があり、実施に向けた準備や校内調整に時間を要するという指摘もあった。さらに、授業時間や年間計画との調整、体育館等の施設利用の調整等、学校行事や教育課程とのスケジュール調整が必要となることも課題として挙げられた。

３．調査結果からの考察

本調査の結果を踏まえ、巡回公演の今後の活用に向けた主な示唆を以下に整理する。

１）文化芸術活動の教育的価値の明確化

巡回公演は、文化芸術鑑賞の機会の提供にとどまらず、児童・生徒の主体的な学びやキャリア意識の形成にも寄与する教育活動として活用されている可能性がある。今後は、こうした教育的価値をより明確に位置付ける観点から、体験型プログラムの活用事例や教育的効果を整理し、学校現場に共有していくことが考えられる。

２）教育課程の中での活用促進

文化芸術活動を教育活動の中で効果的に活用するためには、教科との関連付けや事前・事後学習の方法を整理し、学校現場に共有していくことが望ましいと考えられる。また、公演団体が提供する教材や映像資料等を活用した事前学習の支援を充実させることにより、授業との連動を図りやすくすることも有効であると考えられる。

３）実施方法の工夫の共有

巡回公演をより多くの学校で活用していくためには、学校の規模や地域の状況に応じた多様な実施方法を整理し、学校現場に共有していくことが重要と考えられる。例えば、同一校での継続的な活用や複数校による合同開催、学校公開日と合わせた実施等の事例を整理・紹介することにより、各学校が自校の状況に応じた実施方法を検討しやすくなることが期待される。

４）学校が活用しやすい制度運用の検討

学校が巡回公演を継続的に活用していくためには、制度運用面での改善も重要である。申請手続きの簡素化や、公演内容を事前に理解しやすくする資料・動画の提供等により、学校側の事務負担や準備負担の軽減を図ることが考えられる。

４．調査結果

（１）いすみ市立太東小学校

所在地：千葉県いすみ市
実施年度：令和６年度
参加学年：小学５年生、６年生
参加児童・生徒数：60 名
公演種目：歌舞伎・能楽（狂言）
活用した教科：国語、道徳

■　申請のきっかけ・目的

- 教育委員会から毎年本事業の募集が届いており、本校の音楽主任が雅楽等日本的な音楽に関心を持っていたことから、以前から応募を検討していた。
- 狂言は６年生の国語の教材として教科書に登場する題材であるため、読み物として学ぶだけでなく「百聞は一見にしかず」で実際の演技を目の前で見せる機会を子供たちに提供したいという意図があった。
- プロの演者による本物の文化芸術を学校で直接体験できる機会であり、無料で実施してもらえる事業であることから、「応募しないわけにはいかない」という思いで歴代の担当者が申請を引き継いできた。

■　公演の成果・効果

＜当日の生徒の様子＞

- 狂言の演目の中で、児童が「キノコの精」の役として舞台に参加する体験があった。プロの演者と間近で関わる経験により、児童は非常に興奮し、生き生きとした表情で取り組んでいた。

＜学習面での効果＞

- ６年生は国語の学習内容と関連付けて鑑賞したことで学習理解が深まった。
- ５年生は上級生と一緒に安心して鑑賞しながら雰囲気を楽しむことができた。公演中もふざける様子はなく、良い雰囲気の中で鑑賞が行われた。

＜地域・保護者への波及＞

- 公演は学校公開日に実施したため、保護者も鑑賞することができたほか、高齢者ふれあい会で案内した地域の高齢者も約 15～16 名来校し、「いいものを見られてよかった」といった声が聞かれた。地域との交流の機会にもなった。

＜公演後の反響＞

- 公演後には、演者がSNSに学校訪問の動画を投稿したことで、児童が「今日いた人たちだ」と喜びながら動画を見て盛り上がる様子が見られ、家庭でも話題になる等、記憶に残る体験となった。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 公演団体が当日スムーズに来校できるよう、学校前の道路から体育館までの動線を動画で撮影し、YouTubeで閲覧できるURLを事前に共有した。
- 体育館脇のスペースを控え室として整備し、児童の集合写真や「ようこそ太東小学校へ」といったメッセージを掲示する等、演者が気持ちよく過ごせる環境づくりを行った。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 公演内容や当日の進行については、実際に見るまで具体的なイメージがつきにくいという難しさがあったが、準備を進める中で必要な作業が明確になり、公演１か月ほど前には見通しが立ち、楽しみに感じられる状態で当日を迎えることができた。
- 本事業では、公演団体や実施内容を決めて学校に呼ぶ段階が最も大変であり、継続的に実施していく上ではその判断や調整が負担になる可能性があると感じている。今回は前任者が申請内容を決めた状態で引き継いだため、準備を比較的スムーズに進めることができた。

■　実施に向けた学習面での工夫

＜教科との関連付け＞

- ６年生の国語教材に狂言が登場することを踏まえ、授業の順序を調整し、既に学習した内容と公演で見る内容を結び付けて理解できるようにする等、学習内容と公演体験が連動するように工夫した。
- ５年生では道徳の授業と関連付け、日本の伝統文化に触れるという内容項目を事前学習として取り上げ、服装や音楽、電気のない時代に行われていた文化等、多様な観点から日本文化を考えながら鑑賞できるよう担任が働きかけた。

＜事前学習・導入の工夫＞

- ワークショップ前には団体から提供された資料を用いて説明を行い、公演内容を事前に紹介することで児童が「見たことがある」と反応する場面もあり、本番への期待感を高めながら鑑賞に臨めるようにした。

（２）栄町立竜角寺台小学校

所在地：千葉県印旛郡栄町
実施年度：令和５年度
参加学年：ワークショップ：小学５年生、６年生、本公演：小学１年生～６年生（全校児童）
参加児童・生徒数：ワークショップ：45 名、本公演：116 名
公演種目：人形浄瑠璃
活用した教科：国語

■　申請のきっかけ・目的

- 地域環境上、子供たちが文化芸術に触れる機会が多くないことから、巡回公演事業を活用して文化芸術の世界観や体験に触れる機会を設けたいと考え申請した。
- 近年は家庭で劇場に足を運んだり文化芸術を鑑賞したりする機会が減っているため、学校で体験の場を設けることで、子供たちが文化芸術に触れる機会を確保したいという目的があった。
- 保護者からも「子供たちに普段触れられない芸術鑑賞の機会を設けてほしい」という要望があり、学校としてもその願いを受けて文化芸術鑑賞の機会を積極的に設けている。

■　公演の成果・効果

- 人形浄瑠璃の公演では、人形が人間のように動く表現を目にしたことをきっかけに、図画工作の授業で「動きのあるもの」を作ろうとする児童が現れ、自分たちで動く仕組みを考えながら制作する等、表現活動の広がりが見られた。
- 人形の角度によって怒りや悲しみ等の感情を表現する浄瑠璃の演技を見たことで、人間が演じる演劇とは異なる表現方法があることを児童が理解し、日本の伝統文化における表現の特徴を知る機会となった。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 公演準備にあたり、窓口となる教頭が中心となって担任の意向を事前に確認し、児童がどのような形で文化芸術に触れると理解しやすいかについて校内で意見を集めた上で、公演団体との打合せを行った。
- 担任が事前に演目内容を理解した上で児童に説明できるよう、歌舞伎等の教科書にも登場する伝統芸能を含め、公演で扱われる演目がどのようなものかを教員があらかじめ確認する機会を設けた。
- インターネット上の映像資料等を活用し、担任が伝統芸能の表現方法を理解した上で、児童に対して「これからこのようなものを見る」という形で簡単に内容を紹介し、事前に親しみを持たせるようにした。

■　**実施プロセスにおける課題と乗り越え方**

- 浄瑠璃等の伝統芸能は、物語の展開や表現方法をある程度理解するための知識がないと児童が楽しみにくい場合があり、どこまで事前に補足説明を行うかという点が難しいと感じた。
- 全校児童で鑑賞するため、特に低学年の児童が内容を理解できるよう、公演前にストーリーの概要を説明し、鑑賞の前提となる理解を補う工夫を行った。

■　**実施に向けた学習面での工夫**

＜教科との関連付け＞

- ワークショップは国語科の「伝統的な言語文化」に関連する内容として位置付け、浄瑠璃を扱う学習内容に近い高学年（５年生～６年生）が参加し、人形の操作等の体験活動を行った。
- 落語等の別年度の公演では、４年生の国語教材「ぞろぞろ」等、教科書で扱う落語の学習内容を想起させる授業を事前に行い、「落語は最後にオチがつく話である」という特徴を確認した上で公演を鑑賞できるようにした。

＜事後学習での振り返り＞

- 公演後には児童が受けた印象や感想を振り返る時間を設け、低学年では口頭で感想を伝え合い、高学年では文章としてまとめる等、学年に応じた方法で学習の整理を行った。

（３）知多市立旭東小学校

所在地：愛知県知多市
実施年度：令和６年度
参加学年：小学１年生～６年生（全校児童）
参加児童・生徒数：109 名
公演種目：演芸（ミラクルイリュージョンサーカス）
活用した教科：体育

■　申請のきっかけ・目的

- 文化芸術を子供たちに体験させたいという校長の意向があり、例年継続して申請している。
- 本物の芸術に触れる機会が限られているため、子供たちに感動や芸術の素晴らしさを実体験として持たせたいと考え、申請した。

■　公演の成果・効果

- サーカスの公演中、空中ブランコの演目等、子供たちがこれまで見たことのないアクロバティックな動きが多く、「今まで見たことがなかったので、こういう芸術があるならやってみたい」と感想に書く児童が見られた。
- また、実際に運動場の器具を使って、「この前の演技を真似してみたい」と言っている子供たちもいて、子供たちにとって挑戦してみたいと思うような環境ができたと感じた。
- 体育では「体をどのように動かすか」、「体をどのように使うか」という点で、影響があった。「自分たちではできないような動きでも、訓練や練習を積み重ねることでできるようになる」という気付きが生まれていた。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 芸術担当の教員を中心に準備を進めた。
- 公演団体とのやり取りは主に電話で行い、内容を細かく確認しながら進めた。
- 校内では、各学級担任とも連携し、事前に鑑賞会の目的や鑑賞の姿勢を子供たちに伝え、当日に向けた心構えについて考えさせる場を設けた。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 申請から事前準備までの過程において、担当教員から大きな負担や困難があったという報告は特になく、全体としてスムーズに準備を進められた。
- 巡回公演の実施時期が比較的早い段階で決定するため、次年度の年間計画にあらかじ

め反映できる点で助かっている。

■　**実施に向けた学習面での工夫**

＜教科横断的な学習としての取組＞

- 教科としては体育と位置づけているが、カリキュラムに位置付ける際には、学級活動や総合的な学習として位置付けている。
- 事前学習のワークショップ参加への心構えや、事後学習の振り返りは、総合的な学習や国語の中で扱う。
- 「将来こういうことをやってみたい」と感じた子供も多かったので、学習指導要領の観点ではキャリア教育に重きを置くことが多い。

＜振り返り・文章表現の指導＞

- 公演後には必ず子供たちに振り返りを書かせている。
- 公演団体に宛てたお礼の手紙を書く活動を行うこともあり、外部の相手に向けた文章の書き方や表現方法について指導している。
- 一部の学年では、「ロイロノート[18]」を活用し、公演では何を考えながら見たのか、今後それをどのように生かしたいのかについて記入し、その内容をもとに話し合いを行った。

＜ICT 機器を活用した事前・事後学習＞

- 学年によっては、サーカスを知らない子供たちが多かったため、タブレット端末を活用し、サーカスの概要が分かる動画を事前に視聴させる取組を行った。
- 公演後の振り返りについても、手書きだけでなくタブレットで入力する方法を取り入れている学年もあった。

[18] ロイロノートは、児童・生徒の主体性を育む協働学習・授業支援プラットフォーム。提出物の管理や、思考力・判断力の育成等に活用できる。【ロイロノート・スクール】１人１台 GIGA スクールに最適な授業支援クラウド

（４）南九州市立九玉小学校

所在地：鹿児島県南九州市
実施年度：令和５年度
参加学年：ワークショップ：小学４年生～６年生、本公演：小学１年生～６年生（全校児童）
参加児童・生徒数：52 名
公演種目：演芸（南京玉すだれ、太鼓のお囃子、寄席、言葉遊び、落語）
活用した教科：国語、音楽

■　申請のきっかけ・目的

- 前校長が事業メニューを検討する中で、児童に体験型の学習をさせることが有意義であると考え申請した。校長自身が文化芸術に高い関心を持っており、本事業の活用以外にも土日に地域の歴史研究を行い、その結果を地域や児童へ共有していた。
- 今ある文化は昔の文化があって成り立っている。教科書に出てくる狂言等も子供たちにはあまり身近ではないため、そうした文化を身近に感じてほしいという思いがあった。
- 寄席をはじめとする伝統文化に触れる機会を設けること、児童が文化を身近に感じられるようにすることを目的としていた。

■　公演の成果・効果

- ワークショップにおいて、４～６年生約 30 名が「あいうえお作文」「南京玉すだれ」「寄席のめくり」等の体験を行い、本公演まで数週間の練習期間を設けたことで、児童が意欲的に練習に参加する様子が見られた。
- 普段あまり目立たない児童が、文化的な活動に挑戦し発表する場面において、自信を持って取り組む様子が見られたほか、教員によるアンケートでは文化芸術への興味が高まっている可能性が確認された。
- 国語で扱う狂言等の学習において児童が親しみを持って取り組むようになったとの声があったほか、南九州市の青少年劇場等の鑑賞機会と比較して本校児童の鑑賞態度が良かったとの意見が教員から聞かれた。文化芸術への興味は高まっているのではないかと感じている。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- ワークショップで使用する道具を教室に置き、児童が休み時間等に練習できるようにする等、日常的に練習できる環境を整えた。

■　**実施プロセスにおける課題と乗り越え方**

- 学校の教育課程の中で時間を確保することが課題であったが、ワークショップ後から本公演までの数週間の期間を活用し、休み時間等も有効に活用して練習を行う時間を捻出した。
- 前校長が申請したため受け入れ時の勝手が分からず苦労した。特に今回の公演は学校側での事前準備事項が多く、団体からの確認事項への対応にも苦労した。やり取りをする中で慣れたが、慣れるまで時間はかかった。

■　**実施に向けた学習面での工夫**

＜教科との関連付けによる学習＞

- 国語の授業で扱う狂言等の伝統文化に関する学習と関連付け、寄席の体験を位置付けることで、教科で学ぶ内容と文化芸術活動を結び付けた学習として実施した。
- 事前事後学習の一環として、国語の授業内で歌舞伎や能の映像を見たクラスもあった。

＜書籍等を活用した学習環境の整備＞

- 授業に留まらず文化を身近に感じるため、書籍を新たに取り入れる等も行った。

（５）四日市市立羽津中学校

所在地：三重県四日市市
実施年度：令和５年度
参加学年：中学１年生～３年生
参加児童・生徒数：490 名（全校生徒）
公演種目：歌舞伎・能楽
活用した教科：音楽

■　申請のきっかけ・目的

- 過去にプロの管弦楽団を招いた際、プロによる生の音を学校で聴く機会の素晴らしさを実感したことから、生徒たちが芸術に興味・関心を持つきっかけ作りとして継続的に申請している。
- 教育委員会からの案内を通じて、オーケストラや合唱等、幅広い分野のプログラムから「クオリティの高い本物の芸術」に触れさせることを期待しており、今回は特に自分から見に行く機会が少ない伝統芸能（能楽）の体験を目的とした。

■　公演の成果・効果

- ワークショップで能楽師から直接「謡（うたい）」を教わり全校生徒で練習したことで、鑑賞するだけでなく全員が参加者として巻き込まれた感覚を持ち、学校全体で喜んで鑑賞することができた。
- 生徒からの「なぜ能楽をやっているのか」という問いに対し、演者が能に出会った経緯を聞くことで「そのような仕事もあるのだ」と興味を持つ等、伝統芸能の理解だけでなくキャリア教育の側面でもポジティブな影響があった。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 音楽科単独での負担を避けるため総合担当の先生と連携し、既に行事が落ち着いていた生徒組織「合唱実行委員会」に司会進行等の役割を依頼することで、スムーズな運営体制を構築した。
- 生徒の選抜においては、ワークショップ中に演者が必要な役割（演技や太鼓等）に合わせて理由を添えて選ぶプロセスを経て、選ばれなかった生徒にも別の役割を用意する等、誰も取り残されない配慮を行った。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 繁忙期に短期間で多くの入力項目をこなす申請作業や実施報告書の作成が非常に大きな事務負担となっており、同僚から「来年は控えようか」という声が出るほどの課題と

なっている。

- 事務作業の多くを一人で担う困難さはあるものの、「生徒のために本物を見せたい」という熱意を原動力にし、地元の弁当手配や体育館へ移動しやすい控室の配置等、細やかな現場調整を積み重ねて本公演を実現させた。

■ **実施に向けた学習面での工夫**

- 能楽が学習指導要領に含まれることを踏まえ、シラバスを調整して公演時期に合わせて授業を前倒しで実施したほか、タブレットで鑑賞動画を提示して事前知識を深められるよう配慮した。
- 音楽の授業内で、社会科（歴史）で学んだ内容との関連性に触れる等、他教科との横断的な繋がりを意識させたほか、特定の生徒には提供された DVD を活用して事前練習を行わせる等の個別指導も取り入れた。

（６）群馬県立館林特別支援学校

所在地：群馬県館林市
実施年度：令和５年度、６年度
参加学年：小学１年生～６年生、中学１年生～３年生（全校児童・生徒）
参加児童・生徒数：小学生 46 名、中学生 21 名
公演種目：ミュージカル
活用した教科：生活単元学習、図工、音楽、国語

■　申請のきっかけ・目的

- 現在の担当教員が着任する以前から実施されており、以前本校に在籍していた教頭が前任校でミュージカルを鑑賞して良かった経験をもとに、本校でも実施したいと考えたことがきっかけと考えられる。
- 令和３年度から継続して同公演を実施しており、児童・生徒が公演の流れを見通しながら取り組めるようになり、自ら舞台に出たい等、主体的な表現につながる活動として活用している。

■　公演の成果・効果

- 暗い体育館や多くの人がいる環境が苦手だった児童・生徒が、継続的な実施を通じて少しずつ慣れ、体育館に入れるようになり、舞台に上がって出演者と一緒に表現することができるようになる等の変化が見られた。
- ワークショップで練習していた歌唱場面では、児童・生徒が流れを理解し、歌の場面になると自分から舞台に上がって一緒に歌い、終わると自分で席に戻る等、流れを把握して判断しながら行動する様子が見られた。
- 新転入生についても、普段一緒に生活している友達や教員が参加している様子を見ることで安心し、落ち着いて鑑賞、参加することができた。

■　実施に向けた事前準備における工夫

＜校内体制の構築＞

- 担当教員を中心に企画運営を行い、職員会議や打ち合わせの場で全教員に対して事業内容を説明し、各クラスの教員から児童生徒の行動特性や配慮事項に関する意見を集め、劇団側へ共有する体制を整えた。

＜劇団との事前調整・情報共有＞

- 前年度の反省を踏まえ、児童生徒が舞台周辺を動き回る可能性を考慮し、本公演前日に教員向けのバックステージツアーを実施して危険箇所や注意点を確認し、劇団スタッ

フと安全面について具体的な共通理解を図った。

- 複数年にわたり同じ公演を実施しているため、児童生徒の様子を踏まえた具体的な打ち合わせを行い、各クラスの教員から「この児童はこのような行動を取る可能性がある」といった情報を集め、劇団にも事前に共有した。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 公演は体育館で実施しているが、体育館が隣接する高等特別支援学校と共用であるため、両校の行事日程との調整が必要となり、日程を確保することが難しい場合があった。
- 体育館には空調設備がないため夏季の実施が難しく、行事日程や施設条件を踏まえながら実施時期を調整する必要があった。
- 安全面の課題については、教員向けバックステージツアーの実施や劇団との打ち合わせを重ねることで、年を追うごとに共通理解が深まり、より安全な環境で実施できるようになった。

■　実施に向けた学習面での工夫

＜教科横断的な学習の位置付け＞

- 公演は生活単元学習として実施しつつ、事前学習として音楽・図画工作・国語等、複数の教科と関連付けて学習を行った。
- 音楽の授業ではミュージカルの歌唱場面で使用される歌を授業計画の中に組み込み、児童生徒が歌の場面に参加できるよう練習を行った。
- 図画工作の授業では、劇の世界観をイメージした制作活動としてバラ等の作品を作り、それを劇団へプレゼントし、舞台装飾の一部として使用してもらう取組を行った。

＜映像を活用した事前学習＞

- 劇団の動画や前年の公演映像を事前学習で視聴し、児童生徒が公演内容を思い出したりイメージしたりできるようにした。

＜公演後の振り返り・事後学習＞

- 公演後には写真や動画を用いて振り返りを行うほか、公演の様子をまとめた模造紙を廊下に掲示し、児童生徒が日常的に活動を振り返ることができるようにしている。
- お礼の手紙を書く活動については、生活単元学習や国語の授業の中で取り組む等、クラスごとに教科と関連付けた事後学習を実施している。

（７）伊賀市立緑ヶ丘中学校

所在地：三重県伊賀市
実施年度：令和６年度
参加学年：中学１年生、３年生
参加児童・生徒数：314 名
公演種目：人形劇
活用した教科：総合的な学習の時間

■　申請のきっかけ・目的

- 家庭環境や背景が厳しく、近隣に文化会館があっても足を運んだことがない生徒が実際にいることから、どのような背景を持つ生徒にも学校内で上質で質の高い演劇に触れる機会を保障することを重視している。
- 前任の校長が始めた取り組みを現校長が教頭時代から一貫して引き継いでおり、単なる鑑賞にとどまらず、子供たちが将来的に自ら演奏会等へ足を運ぶような「芸術への消費行動」を育むことや、教科との連携を図ることを目的としている。

■　公演の成果・効果

- ３年生の卒業時に「学校生活で一番心に残った行事」として巡回公演を挙げる生徒がいるほど定着しており、テレビ等の映像とは異なる「生で見る」体験が、生徒の心に深く刻まれる大きな教育的成果を上げている。
- キャリア教育としての側面も持ち、プロの演奏や演技に触れるだけでなく、好きなことを仕事にして生きる出演者の姿に触れることが、生徒が自身のキャリアや生き方を模索する上での刺激や意識変容につながっている。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 全校生徒約 500 名が一度に集まると密になるため、巡回公演の対象を１年生と３年生に限定し、２年生については学校独自の予算で地元のアウトリーチ（日本舞踊等）を呼ぶという、学年ごとの役割分担と会場調整を行っている。
- 校内では教頭が窓口となり、各学年主任で構成される「企画委員会」が組織的に体育館の使用調整や準備・片付け、運営を担当するほか、舞台にキャストとして出演する生徒に対しては、上演前に１時間ほどのリハーサル時間を設けて練習を行っている。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 申し込み書類が非常に膨大かつ難解なため申請を躊躇する要因となっているほか、メール等で送られる資料が活字中心でイメージが湧きにくいため、QR コードを用いたダ

イジェスト動画の提供等、より関心を持ちやすい案内方法を求めている。

- 選定の可否が判明する時期や確認方法が分かりにくいという課題があり、不採択となった際の代替計画の策定が難しいため、市区町村の校長会等を通じた周知や、システム上の改善が期待されている。

■ **実施に向けた学習面での工夫**

- 音楽科の教材にあるミュージカルやバレエの分野と関連付けて事前・事後学習を行うほか、能を鑑賞する際には国語の教科書の学習内容と時期を合わせる等、各教科のカリキュラムと密接に連動させた学習を実施している。
- 11 月の本公演を見据えて年間の事業計画に位置づけており、演劇に関わる学習時間を「総合的な学習の時間」としてカウントすることで、中長期的な視点での教育課程への落とし込みを図っている。

（８）茨城県立結城特別支援学校

所在地：茨木県結城市
実施年度：令和３～６年度
参加学年：小学１年生～中学３年生（全校生徒）　※一部高校生を含む
参加児童・生徒数：小学生 102 名、中学生 54 名　※一部高校生を含む
公演種目：メディアアート
活用した教科:総合学習、生活科

■　申請のきっかけ・目的

- 以前から巡回公演事業を活用していた。
- 特別支援学校の児童・生徒は、本物の芸術や音楽に触れる機会が少ないため、本物の芸術を体感してほしいと思い、毎年申請している。

■　公演の成果・効果

- デジタルアートに関する公演では、児童・生徒が機材を操作するスタッフのもとに集まり、映像の制作方法に関して具体的な質問を繰り返す姿が見られた。
- 一部の高等部の生徒は、パソコンの操作方法やプログラミングに関して質問をしていた。
- 日本の伝統を題材にした演目であったが、公演後に児童・生徒が日本の伝統についてインターネットで調べる姿が見られた。
- 教職員も毎年公演を楽しみにしており、来年の内容を尋ねる声が上がっている。

■　実施に向けた事前準備における工夫

＜学年を超えた校内連携＞

- 特別支援学校では小学部、中学部、高等部と学級が多いため、採択後は係の教員と早期に話し合い、対象学年を決定した上で各学年の担当教員へ速やかに相談を行った。
- 授業の年間指導計画に公演を組み込むのは難しい場合が多いため、事前に時期や単元、総合的な学習の時間で実施が可能な時間を調整した。
- 小・中学部のみだった昨年度の公演に対し、高等部からも参加希望があったことを踏まえ、今年度は全校の児童・生徒が参加できる形態で申請を進めている。

＜公演団体との調整＞

- 公演団体には体育館のステージの情報等を事前に明確に伝えた。
- 来訪時には控室に簡単な装飾を施す等、少しでも喜んでいただけるような配慮を行った。

■　**実施プロセスにおける課題と乗り越え方**

- 申請システムが新しくなり、分かりやすくなったので、申請手続き自体に大きな負担はなかった。
- 教材や機材の準備については公演団体側で準備いただけたので、事前の準備に関しては校内の取りまとめに注力した。

■　**実施に向けた学習面での工夫**

- 相対的に総合的な学習の時間にやや余裕があるため、総合的な学習の時間を活用して事前学習を行った。事前学習では、公演団体から共有のあった映像資料を学級で見た。
- 高等部からも公演を見たいという声があったので、当日の公演を iPad で撮影し後日生徒向けに配信した。

（９）出水市立上場小学校

所在地：鹿児島県出水市
実施年度：令和６年度
参加学年：小学１～６年生（全校児童）
参加児童・生徒数：73 名（２校合同開催）
公演種目：現代舞踊（ヒップホップダンス）
活用した教科：総合的な学習の時間

■　申請のきっかけ・目的

- 教員のつながりのある芸術家が公演団体に所属していて、本事業の紹介を受けた。
- 子供たちは本物の芸術や舞台芸術に触れる環境が少ないため、プロの芸術を感じることで将来の夢や今後の学び、自分の特技を生かした生き方につなげられるようにと思い、隣の学校と合同で申請した。

■　公演の成果・効果

- 体育の授業でストリートダンス等に取り組み、公演を鑑賞した後に、最終的に学習発表会という形で保護者や地域の方に発表した。
- 今までダンスに興味を持っていなかった子供たちも、公演を通じてダンスに興味を持って取り組むようになった。また、一部の子供たちは、自分たちで何かに取り組もうという意識が向上した。
- 僻地にあるため、本公演は保護者や地域の方にとっても貴重な機会となり、地域の方も喜んでいた。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 隣の学校の体育館を活用した。公演団体による事前調査を行い、準備を進めた。
- 打ち合わせの内容を担当の教職員に伝え、その後、子供や保護者に伝える形で、連絡や調整の仲介役として準備を進めた。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 最初は何も分からない状態であったが、公演団体が丁寧に教えてくれたので、スムーズに進められた。
- 交通費等も文化庁が負担してくださるので、とても助かった。

■　実施に向けた学習面での工夫

- 年間カリキュラムにおいては、学習発表会に向けた意識づけや動機づけとして、総合的

な学習の時間の中に取組を組み込んだ。

- 教科横断的な取組として、音楽や体育におけるダンスや表現活動を活用した。学習発表会に向けて、音楽や体育の時間の中でワークショップで学んだことを繰り返し練習することで、本番に生かした。
- 実際に公演団体の演技を動画で撮影させてもらい、その動画を参考に練習した子供たちもいた。

（10）佐那河内村立佐那河内中学校

所在地：徳島県名東郡佐那河内村
実施年度：令和６年度
参加学年：小学１年生～６年生、中学１年生～３年生（全校児童・生徒） ※小中一体型校舎のため
参加児童・生徒数：小学生 70 名、中学生 43 名
公演種目：音楽劇
活用した教科：特別活動

■　申請のきっかけ・目的

- 以前から教育現場で知られている事業であり、本校でも前年度の教頭が申請していた経緯があったことから、申請を行うという学校内の文化があった。
- 教頭自身が楽器演奏や吹奏楽部の指導経験を持ち、「子供たちに本物の芸術を味わわせたい」という思いがあったことから、文化芸術に直接触れる機会をつくることを目的として申請した。
- 山間部に位置する過疎地域であるため、舞台芸術等の文化に触れる機会が多くないため、「年に一回でも本物に出会う体験ができることはよい経験になる」と考え、本事業の活用を希望した。

■　公演の成果・効果

- 普段はおとなしい生徒が、ワークショップや公演で大きな声を出して表現したり、前に出て踊ったりする姿が見られ、短時間の体験でも子供たちの態度や表情が大きく変化する様子が確認された。
- 文化祭でオリジナル劇の台本を書き、クラスを巻き込んで演劇を行う生徒が、巡回公演を経験したことでさらに表現活動に意欲的に取り組む様子が見られた。
- パントマイムの演目では、テレビや動画ではなく実演で「本当に壁があるように見える」動きを目の前で見ることができ、小学生・中学生ともに強い関心を示していた。
- 公演では希望した生徒が衣装を着て役を演じる形で参加し、学年ごとに役を割り振ることで、小学１年生から中学３年生まで幅広い児童生徒が舞台参加の機会を得た。

■　実施に向けた事前準備における工夫

- 公演を学校行事として位置付けて、体育館を使用する時間割調整等を行った。体育館の使用調整や時間割の調整については、時間割作成を担当する教員と連携し、ワークショップ実施のため体育館を確保する等の校内調整を行った。
- 公演団体から送付されたパンフレットや歌唱用 CD の音源を学校の Teams に共有し、各

学級担任が教室で視聴できるようにして事前準備に活用した。

- 前年度のうちに公演実施が決まっていたことで、4 月の職員会議の段階から「10 月に公演がある」ことを教職員に共有でき、年間行事や授業計画との調整を早期に進めることができた。

■　実施プロセスにおける課題と乗り越え方

- 事前ワークショップが 7 月の暑い時期であったため、体育館での実施に際して熱中症への懸念があったが、学校側で注意を払いながら実施し、大きな問題なく進めることができた。
- 公演当日は午前中に劇団が来校してステージ設営を行うため、その時間帯は体育館を使用できないことから、学校側で体育館利用の調整を行った。
- 控室や着替え場所を準備し、公演団体が到着後すぐに準備に入れるよう環境を整え、午後の公演までスムーズに進行できるようにした。
- 初めて事業を担当した年度は、トラックの搬入動線や電源の位置、児童生徒の動線等、確認事項が多く、担当者が個別に調整を行う必要があり負担が大きかったが、実施経験を積むことで次年度以降は対応の流れが理解できるようになった。
-

■　実施に向けた学習面での工夫

＜学校行事としての位置付け＞

- 本公演は学校行事として実施し、小学校１年生から中学校３年生まで全児童生徒が参加する形とした。

＜教科との連携＞

- 音楽の授業を担当する非常勤講師に依頼し、ミュージカルや舞台芸術に関連する内容を授業に取り入れてもらうことで、公演体験と教科内容を結び付けた。
- カリキュラムの単元の順序を調整し、オペラ等の単元を公演時期に合わせて実施することで、舞台芸術の理解が深まるよう工夫した。

＜事前学習による理解促進＞

- 朝の活動時間を活用して、公演団体のリーフレットを紹介し「こういう人たちが来る」という情報を児童生徒に共有した。

第６章　総括及び今後の取組に向けた示唆

１．本調査から明らかになった主なポイント

本調査では、学校向けアンケート調査、児童・生徒向けアンケート調査、自治体向けアンケート調査及び事例ヒアリング調査を通じて、学校教育内での文化芸術活動の実施状況や課題を把握した。調査結果を総合的に整理すると、主に以下の点が明らかとなった。

第１に、学校教育内での文化芸術活動は、学校・自治体・国の三者の取組によって支えられていることである。学校教育内での文化芸術活動の実施主体としては学校が最も多い一方で、費用負担の面では市区町村や国が大きな割合を占めており、学校単独の取組というよりも、自治体や国の施策と組み合わさる形で実施されている実態が確認された。

第２に、学校教育内での文化芸術活動は多くの学校で実施されているものの、その実施状況には学校や地域による差がみられることである。実施の有無や頻度は、学校の規模や教員体制、地域条件、自治体事業の有無等に影響を受けており、地域によって文化芸術活動の機会に差が生じている可能性が示唆された。

第３に、学校教育内での文化芸術活動は児童・生徒の学びに対して多面的な教育的効果をもたらしている可能性があることである。児童・生徒向けアンケートや学校へのヒアリングからは、文化芸術への関心の向上に加え、豊かな感性や創造性の育成、コミュニケーション能力や自己肯定感の向上等につながる効果が示唆された。また、事前・事後学習や教科との関連付けを通じて、学習活動全体への波及効果が生まれている事例も確認された。

これらの結果から、学校教育内での文化芸術活動は教育的意義の高い取組である一方で、その実施は学校のみで完結するものではなく、学校・自治体・国の取組が組み合わさることで成立している教育機会であると整理することができる。

２．調査結果の総括

本調査の結果を踏まえ、学校教育内での文化芸術活動の実施状況について、以下の観点から整理する。

（１）学校教育内での文化芸術活動の実施主体と費用構造

学校向けアンケート調査によると、学校教育内での文化芸術活動の実施主体としては「学校」が 37.2%と最も多く、次いで「市区町村」が 30.3%、「国」が 12.1%、「都道府県」が 7.6%となっており、学校自らが主体となって実施している取組が一定程度存在していることが確認された。

一方で費用負担の状況をみると、「市区町村負担」が 41.8%と最も大きく、「国負担」が 17.9%、「都道府県負担」が 8.3%となっており、学校教育内での文化芸術活動の実施は学校単独の取組というよりも、自治体や国による財政的支援と組み合わさる形で実施されている実態がうかがえる。

このように、学校教育内での文化芸術活動は、学校、自治体、国の三者がそれぞれの役割を担いながら提供されている取組であると考えられる。

（２）学校における実施状況

学校向けアンケート調査によると、学校教育内での文化芸術活動の実施率は 65.9%となっており、多くの学校において文化芸術活動の機会が提供されていることが確認された。また、70%以上の学校が今後も活動を実施・継続したいと回答しており、文化芸術活動は学校教育の中で一定程度定着しつつある取組であると考えられる。

実施にあたっては、音楽や国語、総合的な学習の時間等の教科と関連付けた取組や、事前・事後学習を組み合わせる等、教育効果を高めるための工夫が行われている事例も確認された。

一方で、予算の確保や教員の業務負担、実施体制の確保等が実施条件として影響している状況もみられ、学校単独の取組だけでは文化芸術活動の機会を十分に確保することが難しい側面があると考えられる。

（３）自治体の役割と地域差

自治体向けアンケート調査によると、自治体独自の学校教育内での文化芸術活動は半数以上の自治体で実施されているものの、自治体の規模や地域によって実施状況には差がみ

られることが確認された。

また、自治体の独自事業では、創造力・想像力の育成等を目的とした鑑賞型のプログラムが中心となっており、事業の実施は主として自治体の年度予算によって支えられている状況がみられた。

実施主体として市区町村及び都道府県を合わせると約 40%を占めるとともに、費用負担についても自治体負担が約半数を占めており、自治体が文化芸術活動の機会確保において重要な役割を担っていることが確認された。

一方で、自治体独自の事業の実施状況には差がみられ、地域によって文化芸術活動の機会に差が生じている可能性が示唆された。

（４）国の役割

学校向けアンケート調査によると、学校教育内での文化芸術活動の実施主体として「国」が関与している割合は 12.1%となっている。また費用負担についても「国負担」は 17.9%となっており、市区町村に次ぐ水準となっている。

こうした結果から、国は学校教育内での文化芸術活動の実施や財政的支援を通じて、学校における文化芸術活動の機会確保に一定の役割を担っていると考えられる。

その具体例として、文化庁の巡回公演が挙げられる。同事業は、学校単独では実施が難しい専門性の高い文化芸術公演を学校に提供する仕組みとして機能しており、地理的・財政的条件に左右されにくい形で文化芸術活動の機会を提供する取組として、学校における文化芸術活動の機会確保に寄与していると考えられる。

（５）文化芸術活動の教育的効果

児童・生徒向けアンケート調査によると、学校の授業や行事を通じて文化芸術を見たり聞いたりした経験を持つ児童・生徒は 73.9%に上り、文化芸術活動の満足度についても約 9 割が「楽しかった」と回答していることが確認された。一方で、劇場や美術館等、学校外で文化芸術に触れる機会は相対的に少なく、児童・生徒にとって文化芸術に触れる機会は学校に大きく依存している状況がうかがえる。

また、学校向けアンケート調査においても、「文化芸術への親しみ」や「豊かな感性の育成」等の効果を実感している学校が 80%以上に上っており、多くの学校において文化芸術活動の教育的価値が認識されている状況が確認された。

さらに、学校へのヒアリング調査からは、文化芸術活動が児童・生徒の主体的な学びやコミュニケーション能力、自己肯定感の向上等にもつながる可能性が示されており、文化芸術活動は学校教育の中で多面的な教育的効果を持つ取組であると考えられる。

３．今後の取組に向けた示唆

本調査の結果を踏まえると、学校教育内での文化芸術活動の機会をより多くの児童・生徒に提供していくためには、学校、自治体、国それぞれの役割を踏まえた取組を進めていくことが重要であると考えられる。以下では、今後の取組の方向性を整理する。

（１）文化芸術活動の役割分担の整理

文化芸術活動は、学校が主体となって実施している取組も一定程度存在する一方で、自治体や国の事業として提供されている場合も多く、費用負担についても自治体や国が大きな役割を担っていることが確認された。こうした状況から、学校における文化芸術活動は、学校、自治体、国の三者がそれぞれの役割を担いながら実施されている取組であると考えられる。

一方で、学校単独では予算や人員、専門性の面で実施が難しい場合も多く、自治体や国の事業が文化芸術活動の機会確保を補完する役割を担っている側面もみられる。こうした実態を踏まえると、今後は学校、自治体、国それぞれの役割や機能を整理しながら、学校教育内での文化芸術活動の機会を安定的かつ継続的に提供していくための仕組みについて検討していくことが重要であると考えられる。

（２）学校における実施環境の整備

文化芸術活動の実施は、学校ごとの予算状況や教員の業務負担、実施体制の確保状況等、学校の置かれている条件に左右される側面がある。本調査においても、文化芸術活動の実施にあたり、予算の確保や教員の業務負担が課題となっている状況が確認された。

このため、学校が文化芸術活動を実施しやすい環境を整える観点から、制度面や運用面における支援のあり方を検討していくことが求められる。例えば、申請手続きの簡素化や、学校が事前に公演内容を把握しやすい資料・動画の提供、事前・事後学習に活用できる教材の整備等により、学校側の準備負担や事務負担の軽減を図ることが考えられる。こうした取組を通じて、学校教育内での文化芸術活動の活用をより一層促進していくことが期待される。

（３）地域における文化芸術活動機会の確保

自治体向けアンケート調査の結果から、自治体独自の学校教育内での文化芸術活動の実施状況には差がみられ、地域や自治体の規模によって文化芸術活動の機会に差が生じている可能性が示唆された。また、事業の実施は自治体の財政状況や政策の優先度によって影響

を受ける側面もあり、地域によって提供される機会の水準が異なる状況もみられる。

こうした状況を踏まえると、今後は自治体が地域の文化資源や文化芸術団体、文化施設等とも連携しながら、地域の実情に応じた文化芸術活動の機会を確保していく取組が重要となる。また、国においては、自治体や学校の取組を補完し、地域による機会の差が過度に拡大しないよう、文化芸術活動の機会を提供する事業を通じて支援を継続していくことが重要であると考えられる。

（４）学校教育における文化芸術活動の位置付け

文化芸術活動は、授業の一環として実施される場合や学校行事として実施される場合等、その位置付けや実施形態は学校ごとに異なっており、学校教育の中での位置付けは必ずしも一様ではない。実際には、音楽や国語等の教科の学習内容と関連付けて実施される取組や、総合的な学習の時間、学校行事等の中で実施される取組等、多様な形で活用されている状況がみられる。

こうした状況を踏まえると、文化芸術活動を単発の行事として実施するだけでなく、児童・生徒の豊かな感性や創造性の育成、主体的な学びの促進といった教育的価値を十分に発揮できるよう、教育課程全体の中でどのように位置付け、どのように活用していくかについて整理していくことが重要である。特に、学習指導要領において重視されているカリキュラム・マネジメントの観点から、各教科や学校行事、総合的な学習の時間等との関連を意識しながら、学校全体の教育活動の中で文化芸術活動を効果的に位置付けていくことが期待される。

また、教科との関連付けや事前・事後学習の方法、外部の文化芸術団体との連携のあり方等、教育活動の中で効果的に活用するための取組や実践事例を整理し、学校現場に共有していくことも重要であると考えられる。

（５）好事例の共有

本調査では、文化芸術活動を教育活動の中で効果的に活用している学校や自治体の事例が確認された。例えば、教科の学習内容と関連付けた取組や、事前・事後学習を通じて鑑賞体験を学びにつなげる工夫、複数の学校による巡回公演の合同開催等、学校や地域の状況に応じた多様な実施方法がみられた。

こうした取組は、文化芸術活動をより効果的に活用するための参考となる可能性がある。このため、これらの事例について実施方法や工夫、実施にあたっての課題等を整理し、他の学校や自治体においても参考となる形で広く共有していくことが重要であると考えられる。

（６）本調査の意義

本調査は、学校教育内での文化芸術活動の実施状況や課題を把握することを目的として、継続的に実施されている調査である。学校教育内での文化芸術活動は、学校の取組だけでなく、自治体や国の施策とも関係しながら実施されており、その実施状況や提供機会は、教育環境や地域条件、施策の動向等によって変化する可能性がある。

こうした状況を踏まえると、学校教育内での文化芸術活動の実施状況を継続的に把握し、その変化や傾向を確認していくことには重要な意義があると考えられる。また、本調査では、学校、自治体、国それぞれの関与状況や費用負担の実態、文化芸術活動の教育的効果、実施上の課題等について多面的な把握を行っており、これらの結果は、今後の施策や取組を検討する上での基礎資料となることが期待される。

今後も継続的に調査を実施し、学校教育内での文化芸術活動の実施状況や課題の変化を把握していくことにより、文化芸術活動の機会の確保や教育的価値の向上に向けた取組の検討に資する知見を蓄積していくことが重要であると考えられる。